



Title	中島久万吉と帝人事件：財界人から精神的指導者へ
Author(s)	村山, 元理
Citation	
Issue Date	2015-02-27
Type	Thesis or Dissertation
Text Version	ETD
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/27291">http://doi.org/10.15057/27291</a>
Right	

学籍番号：CD091005

『中島久万吉と帝人事件  
- 財界人から精神的指導者へ』

一橋大学大学院商学研究科

博士後期課程 経営・マーケティング専攻

村 山 元 理

## 目次

序章 問題設定	1
1. 問題意識－財界の精神的指導者	1
(1) 精神的指導者の定義	2
(2) 財界の定義	3
(3) 財界人としての中島	4
(4) 批判される財界人	4
2. 課題の設定	5
(1) 先行研究にみる中島像	5
1) 財閥の経営者	5
2) 財界リーダー	6
産業合理化に関する研究	8
(2) 課題の設定	10
I. 財界人誕生の解明	10
II. 2つの事件の再考	11
III. 精神的指導者の意義	11
3. 本論文の構成	12

### 第1部 財界人への歩み

第1章 生い立ちから古河入りまで	16
1. はじめに	16
2. 家庭と教育	16
(1) 父中島信行の影響	16
(2) 厳格な家庭教育、生母、漢学教育、禅趣味、土佐の気風	18
(3) 慶応義塾童子寮	21
(4) 明治学院	22
(4)-1 宗教学校	25
(5) 高等商業学校	27
2-1. まとめ－漢籍の素養がバックボーンに	32
3. 実社会での遍歴	33
(1) 実業界での遍歴	33
1) 東京株式取引所	33
2) 三井物産	34
3) 京釜鉄道	35

(2) 政界での活躍—総理大臣秘書官時代	37
1) 中島秘書官の貢献	39
2) まとめ：政・官・財界で知られた存在に	40
4. 小括	41
第2章 古河財閥の経営	45
1. はじめに	45
2. 古河鋳業入り	45
(1) 二代目の古河潤吉の死	45
(2) 中島の入社	46
(3) 古河虎之助の帰還問題と中島の米欧訪問	49
(4) 古河家管事長	56
1) 家憲問題	57
2) 虎之助の人物教育	57
3) 虎之助の結婚問題	58
4) 虎之助の叙勲、受爵	58
5) 社長としての虎之助	58
6) 政党支援金	59
3. 古河財閥の多角化	60
(1) 疎外説の再考	60
(2) 多角化の概要 その1	62
(3) 多角化の概要 その2	66
4. 財閥外での活躍	68
(1) 東洋製鉄の設立	68
(2) 実業界の代表者	69
(3) 日本工業倶楽部設立と中島の関与	70
(4) 財界の大物へ	71
5. 小括—財界人となった背景	72

## 第2部 2つの政治的事件

第3章 足利尊氏問題	76
1. はじめに 昭和恐慌と財界批判	76
2. 商工大臣就任、製鉄合同、政民連携	76
3. 足利尊氏問題で大臣辞任	78
4. 中島の「足利尊氏」論	81

5. 小括	8 2
第4章 帝人事件	8 4
1. はじめに	8 4
2. 『時事新報』の告発記事「番町会を暴く」と武藤山治	8 4
(1) 番町会とは何か	8 5
(2) 「番町会を暴く」の記事	8 8
(3) 小説『人絹』	9 2
(4) 武藤山治の功罪	9 5
3. 帝人事件とは検察による捏造事件	9 6
(1) 資料から見る帝人事件の真相	9 7
4. 帝人事件の全体の概要	9 9
(1) 帝国人絹株の取引から収賄事件へ	9 9
(2) 背任事件から流職（収賄）事件へ—斎藤内閣の倒壊	1 0 1
(3) 議会、右翼系の告発、藤田一派の動き	1 0 3
5. 収監された中島久万吉	1 0 4
(1) 検事局へ	1 0 4
(2) 予審廷での取調	1 0 6
6. 帝人公判と中島の心境	1 1 2
(1) 上申書の作成と公判の開始	1 1 3
(2) 上申書に見える中島の人物像	1 1 4
(3) 永野公判録にみる中島・永野の関係と中島の人物像	1 1 5
(4) 中島公判録—永野への誠意に感激、錯覚地獄へ	1 1 6
(5) 中島公判録—虚偽の告白をした理由とその評価	1 1 8
(6) 中島公判録—行雲流水の心境	1 1 9
(7) 中島公判録—精神的生活の建直しへ	1 2 0
7. 中島公判録余話および判決後のこと	1 2 1
(1) 家族、本人、関係者への影響	1 2 1
(2) 中島公判録余話—中島家の盛衰、家計	1 2 2
(3) 今村力三郎弁護士の中島弁論	1 2 3
(4) 全員無罪の判決後	1 2 4
8. 総括	1 2 4

### 第3部 精神的指導者としての歩み

第5章 仏心の普及	1 2 8
-----------	-------

1. はじめに	1 2 8
2. 帝人事件以前における禅仏教との関わり	1 2 9
(1) 湘煙女史から禅趣味、釈宗演との関係	1 2 9
(2) 禅に関する思索	1 3 1
(3) 永平寺に参詣	1 3 2
(4) 『正法眼蔵』の勉強会	1 3 3
3. 円覚寺での修行生活	1 3 4
(1) 帝人事件をはさんだ前後四年間の修行期	1 3 6
(2) 回心体験の評価	1 3 7
4. 財界の精神的指導	1 3 8
(1) 素修会での提唱・坐禅指導	1 3 8
(2) 素修会の意義	1 4 1
(3) 素修会の復活	1 4 2
5. 在家居士の活動	1 4 6
(1) 高尾山仏舎利奉安塔の建設・落慶式と仏典注釈書の公刊	1 4 6
(2) 仏舎利奉安会と仏教青年会の構想	1 4 8
(3) 世界仏心連盟の設立と青年修養道場の建設へ	1 4 9
(4) 広園寺の青年修養道場の建設計画と中島の死	1 4 9
6. 総括	1 5 0
参考 1 高尾山仏舎利塔の裏面に刻印された由来書	1 5 2
表 5-4 日本青年連盟などにおける中島久万吉の活動年表	1 5 5
第 6 章 社会貢献活動	1 6 5
1. はじめに	1 6 5
2. 戦後経済界への奉仕	1 6 5
1) GHQ との折衝、日本貿易会会長	1 6 5
2) 川島織物への支援	1 6 6
3. 社会貢献活動	1 6 7
a) 世界友の会会長・立川国際カントリー倶楽部	1 6 8
b) 株式会社国連社の設立	1 6 9
c) ライフ・エクステンション倶楽部と永寿病院の設立	1 6 9
d) 黒船祭り、開国記念百年祭記念事業中央委員会委員長	1 7 0
e) 国際電信電話株式会社の設立	1 7 0
f) 日本外政学会	1 7 1
g) 文化放送	1 7 2
h) その他－備忘録の分析	1 7 3

4. 日本青年連盟会長	173
(1) 全国的な講演旅行	176
(2) 「新しい精神文明の建設」	177
(3) 「宗教教育の振興」	178
(4) 「人類最大の課題」	180
5. 中島の逝去	180
(1) 中島久万吉の葬儀	181
6. 総括	182
終章	185
1. 本稿の要約	185
2. 本稿の結論と貢献	188
3. 本稿の限界と今後の課題	190
中島久万吉 略年表	191
データベース	195
参考文献一覧	196
1. 中島久万吉に関連した研究文献	196
2. 中島久万吉の人物像、経歴、紹介記事	197
自伝・回顧録・家族の手記	197
財界人名辞典、財界人評伝、紹介記事、評論、追悼記事	198
3. 中島久万吉の経歴に関連した参考文献・資料	202
4. 中島久万吉の戦前期の著作（経済・企業・労働・政治・地理関係）	209
5. 中島久万吉の戦後の著作（経済・企業・その他）	219
6. 全日本中学校長会の機関誌『中学校』の中島の著作・関連記事	220
7. 日本青年連盟の機関誌『Nippon 青年』の中島の著作・関連記事	220
8. 中島久万吉の著作（漢詩、中国古典、仏典、史論、紀行文など）	225
9. 安岡正篤主宰の『師友』に掲載された中島の著作	228
10. 世界仏心連盟刊行の中島のパンフレット	229
11. 中島久万吉の書簡、中島宛の書簡	229
12. 中島久万吉の肉声テープ（日本工業倶楽部所有）	231
13. 一次資料	231
14. 中島の墨跡	232

## 序章

### 1. 問題意識－財界の精神的指導者

本稿は中島久万吉（1873～1960）<sup>1</sup>という主に政治家<sup>2</sup>・財界人として活躍した人物が、政治・経済的事象ではなく、仏典の素養を通じて経営者たちの精神的指導者となった史実に着目する。

一般的な中島像とは、1934年に起きた足利尊氏問題<sup>3</sup>を通じて失脚した大臣というものである<sup>4</sup>。

しかし中島は帝人事件<sup>5</sup>を契機として宗教的回心<sup>6</sup>をしたことはあまり知られていない。僧院に3年あまり通い続け、参禅修行と大乘經典の注釈に専念した。帝人公判では無罪判決後に、財界サークルに復帰し、日本工業倶楽部の若手実業家の集まりである火曜会の会員から頼まれて、1941年秋頃から精神的な修養を目的とした素修会という仏典講釈会を主宰した<sup>7</sup>。火曜会のメンバーは戦後、経済同友会を構成する主体の一つとなった<sup>8</sup>。いわば、中島は財界の政治・経済的な指導者から精神的な指導者に変容したのである。

---

<sup>1</sup> 本稿では、基本的に「中島久万吉」と表記する。正確には、氏名の表記は、大臣在任期頃までは「中島久萬吉」、ある時期から島に山へんをつけた「中嶋久萬吉」（墓碑銘も）と表記するようになった。ただ文献の引用や、本人の著作の場合に、「中島久萬吉」、「中嶋久萬吉」と表記した箇所がある。また中島の英文表記は、Nakajimaではなく、正確にはNakashimaが正しい。Nakashimaの表記は、明治学院時代の同窓生の手記、井上馨宛てのドイツ・ベルリンからの中島の手紙、『華族画報』（1913年初版）、さらに戦後、海外向けの中島の手紙などに表記されている。中島の父の信行は土佐（高知県）の出身であるためである。ちなみに久万吉の直系の孫にあたる中嶋信光氏（横浜在住、2013年9月逝去）の英文表記はNakajimaである。

<sup>2</sup> 父である中島信行（初代衆議院議長）が亡くなったことで、その長男であった久万吉は男爵となった。そして長く男爵議員（貴族院議員）として選出され、在任期間は、1904-1911、1914-1939であり、最後には公正会の領袖となった。また1932年に商工大臣となった。

<sup>3</sup> 中島が書いた旧稿「足利尊氏」がたまたま雑誌『現代』1934年2月号に掲載され、その論が尊氏賛美だとして、議会で取り上げられ、院外団も騒がしくなり、大臣辞任に至る直接的な契機となった事件。「中島商相失脚問題」『国史大辞典 第十巻』（吉川弘文館、1989年）参照。

<sup>4</sup> 「日本史三五六日 二月八日 中島久万、足利尊氏賛美で辞職 昭和九年」『歴史と旅』11(2)、131号、1984年1月、秋田書店、p.84。『週刊 日本の100人 No.20 足利尊氏』ディアスゴーニ、2006年、p.23において中島は「尊氏を褒めたばかりに大臣を首になった政治家」という題名のコラムで紹介されている。NHKの「BS歴史館 疾走！足利尊氏 南北朝の扉を開く！？」（2014年放映）において、清水克行は中島が足利尊氏問題で、商工大臣を辞職したことを言及している。

<sup>5</sup> 帝人事件とは帝国人絹株式会社の株取引をめぐる背任・流職・偽証を問われて、元大臣・大蔵省の高官・企業関係者らが被告となった疑獄事件である。詳しくは第4章で述べる。

<sup>6</sup> 回心 (conversion) の類型論にたてば、中島の回心は信仰の強化に相当する。Rambo(1987)参照。第5章で述べる。

<sup>7</sup> 由井 (2006) p.9

<sup>8</sup> 菅山 (1996)。火曜会の会員について第5章で分析する。



このように政治・経済を動かす財界人というよりも、財界の中枢である工業倶楽部の会員である実業家たちの精神的リーダーとなった中島久万吉の役割に本稿は注目した。なぜ彼は精神的リーダーとなれたのか。素修会は戦時下の非常時に続いたが、なぜ多忙な実業家たちを集めることができたのか。その会の意義とは何なのか。ここに本稿の問題意識がある。

中島は学識が非常に高く、スピリチュアル・リーダーシップを発揮した財界人としては稀有な存在であった。本論文で中島久万吉を取り上げる大きな理由はここにある。

中島が「戦中戦後の財界の精神的指導者となった」と由井常彦は、すでにその論文で記載している<sup>9</sup>。しかし精神的指導者の意味は必ずしも明らかではない。また由井は昭和初期に活躍した日本工業倶楽部の財界人たちが大乘仏教のエートスをもっていることを一様に描いているが、本稿では特に中島が他の財界人と比べても精神性の側面が強かったことに注目をした。

#### (1) 精神的指導者の定義

財界の精神的指導者となった中島に本稿では注目したが、精神的指導者とは何かについて考察する。

まず精神的指導者は倫理的指導者とどのように異なるのだろうか。精神的 (spiritual) と倫理的 (ethical) の違いについては、アメリカ経営学会の中でも研究されており、スピリチュアリティ・宗教をキーワードとした研究集団やジャーナルもある<sup>10</sup>。そこで一般的に語られていることに従えば、倫理 (ethics) が善悪に関する世俗的な理論であるなら、精神性 (spirituality) とは、宇宙を支配する実在への信念を基盤として、あらゆる実在が相互関連し、善意が支配しているという信念であり、ケア・希望・優しさ・愛・楽観主義と直結する<sup>11</sup>。また精神性はドグマや組織としての宗教とは対比されるが、宗教的価値観と深く結びつく。

本稿においても、このような意味で精神性 (ないし霊性)、精神的 (spiritual) という用語を利用する。中島は仏教のテキストを利用して、在家居士として、特定宗派ではなく、広い意味での仏教の真髓を伝えようとした。すなわち中島は、普遍的なある種の宗教原理に基づいて、後進の経営者の心を指導したという意味で、精神的指導者 (spiritual leader) であった。

MSR研究ではスピリチュアル・リーダーシップが中心的テーマとなっている<sup>12</sup>。中島は決して組織の精神的リーダーではなく、財界サークルの中にいる組織の統率者である現役

---

<sup>9</sup> 由井 (2006) p.9

<sup>10</sup> アメリカ経営学会 (AOM) の研究グループである MSR(Management, Spirituality and Religion)は 2001 年から正式に活動し、現在 580 名 (11/17/2014) の会員を擁している。

<sup>11</sup> Mitroff and Denton (1999) p.22

<sup>12</sup> Spiritual leadership とは「天職やメンバーシップによって精神的健康の感覚を持つよう、自他を必然的に内的に動機づけるような価値、態度、行動」と定義される。Fry(2008) p.109

の経営者たちを指導した。そして彼らからとても慕われていたと言う。

スピリチュアル・リーダーシップに関連した用語としてサーバント・リーダーシップがある<sup>13</sup>。

## (2) 財界の定義

財界リーダーであった中島を研究するにあたり、財界という用語についての本稿の定義を明らかにする。

原朗によれば、「財界」とは「金融界」「実業界」「経済界」と同義か、又は経済状態を示す語としても利用される<sup>14</sup>。語源的にもこの意味で当初から利用されてきた。しかし現代的にはこの意味で利用されることはむしろ少ない。本稿では、このような経済界ないし客観的なモノや数値という経済状況という意味ではなく、経済界に影響を行使する人間集団の意味で「財界」という用語を使う<sup>15</sup>。

宮本又郎も財界を以下のように定義している。

「ビジネスマンの共通の利害を代表し、あるいはその間の利害の対立を調整し、国の経済政策や対外政策等に意見を開陳する経済界のリーダーの集団」<sup>16</sup>

経済界のリーダーたちは経済団体を組織した。そして経済界の最初の代表者となった渋沢栄一以来、その財力や信用度の高さから、政治に影響力を行使するだけでなく、教育や文化、福祉などの諸々の社会的貢献活動も果たしてきた。この社会貢献活動も定義に入れるべきであろう。

経済界は抽象的な含意があるので、経済界とは民間企業を中心としたビジネス界（ないし実業界）と言い換える。またビジネス界とは主として影響力の大きい大企業の集まりを想定するが、必ずしも大資本ばかりを含意しない。

以上の観点から財界を下記のように定義した。

「経済団体などを通じて民間のビジネス界を代表して、その利害を調整するだけでなく、政治・外交に影響を及ぼし、社会的貢献活動も期待されているビジネス・リーダーの集団」

ここでいう経済団体とは業界団体というよりも広くビジネス界の共通の利害を代表する総合経済団体を意味する。中小企業の利害を代表した日本商工会議所、金融界の利害を代表した銀行倶楽部、大規模製造業の利害を代表した日本工業倶楽部<sup>17</sup>などは総合経済団体と呼ぶにふさわしい。ただし、経済団体のトップ層に属さずにパワーを行使する財界実力派

---

<sup>13</sup> グリーンリーフ (2008)

<sup>14</sup> 原 (2012)

<sup>15</sup> 島田晋作は「財界」とは「人を中心とした、しかも相当レベルの高い、また一種の政治性をもった実業家の集合体」と定義しており、この当時、「財界」を「経済界」とは異なる人的要素の濃厚なものと捉えていたことがわかる。島田(1942)p.1-2 同様に宮本又次も「財界とはつまり人物である」と端的に述べている。宮本(1976)p.351

<sup>16</sup> 宮本 (1980) p. 29 参照

<sup>17</sup> 本稿では日本工業倶楽部を単に工業倶楽部と略して表現することもある。

と呼ばれる財界人もいる<sup>18</sup>。

財界を構成する財界人とは「経済団体などを通じて民間のビジネス界を代表して、その利害を調整するだけでなく、政治・外交に影響を及ぼし、社会的貢献活動も期待されているビジネス・リーダー」である。財界人は財界リーダーとも言える。

### (3) 財界人としての中島

三井・三菱などの財閥や大企業の経営者などによって成立した日本工業倶楽部<sup>19</sup>の専務理事を長くつとめた中島はやがて大物の財界人の一人となった。中島は日本工業倶楽部の創設メンバーの中心的人物の一人であり、日本工業倶楽部による政策提言のほぼ全てに関わった。一時期退任した時期もあるが、晩年は日本工業倶楽部の評議会会長となり、亡くなるまで工業倶楽部に在籍した。財界人として表舞台に登場していない時期や業界団体である日本貿易会の初代会長の時期もあるが、財界長老として存在感を示したので、そのような期間も含めて、本稿では中島を財界人とみなす。

渋沢栄一は日本資本主義の設計者として、また経済道徳合一説の唱道者として大変尊敬された財界の指導者であった。渋沢から次世代の財界リーダーの一人として託されたのが渋沢二世と言われた和田豊治、財界の大御所と呼ばれるようになった郷誠之助、そして中島らである。彼らは等しく日本工業倶楽部の専務理事であった。

### (4) 批判される財界人

上記のように財界人とはビジネス界を組織化して政界に影響力を行使するビジネス界のパワーエリート層を意味し、メディアの注目を集める一種の公的な存在である。

企業家の研究が蓄積されている中で、日本の財界人の研究は、日本で最初の財界人となった渋沢栄一を除いてはあまりない<sup>20</sup>。昭和恐慌期において、ポスト渋沢世代の財界人たちや財閥トップ層は政党とともに社会から厳しく批判された。中島も番町会のメンバーとして、さらに帝人事件を通じて、右翼やマスコミから厳しい指弾を受けた。

このようにマスコミから厳しい批判を受けたのは、第一次世界大戦後の長引く不況とい

---

<sup>18</sup> 「財界影の総理」と呼ばれた小林中がその代表者である。鈴木(1965)p.177 小林中は若手の実業家として帝人事件にも連座した。

<sup>19</sup> 日本工業倶楽部は第一次世界大戦の好況下に近代的な工業家の意見を集約する財界団体として1917年に設立され、財界の中心勢力となった。

<sup>20</sup> 島田昌和は既存の渋沢栄一研究を総括し、渋沢が「政府ときわめて近い存在として位置付け」されていることを明かにした。公的存在としての渋沢は、財界の取りまとめ役(本稿でいう財界人)、政府の保護を引き出しながら近代産業の育成や経済倫理観の普及に果たした役割に焦点が向きがちであったとする。そういった公的存在としての渋沢のイメージとは裏腹な渋沢のビジネスマンとしての実像、すなわち資本家経営者としての渋沢像を明らかにした点で島田の研究はすぐれている。島田(2007)参照。

最新の渋沢研究として橘川・島田・田中編著(2013)、橘川・フリデンソン編著(2014)が立て続けに刊行されている。

う経済的な時代背景もあったが、財界人に対するイメージが利己主義と直結していたことも大きかった。果たして、彼ら財界人は真に利己的であったのかが問われる。

## 2. 課題の設定

### (1) 先行研究にみる中島像

先述したように中島は「足利尊氏問題」で辞任した大臣として政治的に著名であるが、その他の事跡についてほとんど知られてない。

自伝『政界財界五十年』(1951)はあるものの、本格的な評伝は無い。従来ほとんど研究されて来なかった人物である。しかし言及が全く無かったわけではなく、随所にその人物名の言及は見られる。本節では、研究史的に断片的に中島が扱われ、正面切った研究が無く、一面的に理解されている状況を明確にする。

中島については、1) 財閥の経営者、2) 財界リーダーの2側面から主に断片的にその名前が言及されてきた。以下その概要をまとめたい。

#### 1) 財閥の経営者

古河財閥のトップ・マネジメントの一員としての中島については、経営史の視点から2人の論者を取り上げる。その中でも森川英正が最も詳しい。

森川の立論は、同じ産銅業から出発した古河財閥<sup>21</sup>と住友財閥の比較経営史という大局的な視座にたって、各財閥の企業者活動を詳細に分析した。その中で両財閥において大きな格差が生まれた要因として、古河財閥におけるトップ・マネジメントの乱れについて複数の事例を挙げながら指摘した。初代当主である古河市兵衛の亡きあと、二代目の古河潤吉も早々に亡くなってしまふ。その後、トップ・マネジメントには統一感がなかったとされる。トップ・マネジメントの中では功臣、生え抜き、技術者、親族などがいた。その中で陸奥系<sup>22</sup>の「生き残り」となった中島について森川は詳細に説明した。そして森川は以下のように中島を位置づけている。

「大正初年、原敬が古河を離れ、井上馨が死亡したころから、中島の主たる活動分野は

---

<sup>21</sup> 三井・三菱・住友の三大財閥が総合財閥であるのに対して、古河財閥は鉱業財閥ないし産業財閥と類型化されている。本稿では山崎広明の定義に従い、財閥を「中心的産業の複数部門における寡占企業を傘下に有する、家族を頂点とした多角的事業形態」の意味で用いる。古河財閥は古河家をオーナーとして、産銅業を中核事業としてやがて事業の多角化を行い、電線製造業やゴム事業など少数の事業で寡占的な地位を築いた。そして財閥の形態を整えていったが、総合財閥化には至らず、二流財閥の地位に甘んじた。日本経営史学会編(2004)など参照。

<sup>22</sup> 古河家二代目の古河潤吉は、外務大臣として著名な陸奥宗光の次男であり、古河家の養子となった。陸奥宗光の妹の初穂と父信行が結婚したので、陸奥は中島の叔父にあたる。陸奥宗光の従兄弟にあたる岡崎邦輔、潤吉の兄の陸奥広吉、陸奥の部下だった原敬などが古河のトップ・マネジメント入りした。さらに原・陸奥広吉の勧誘で井上馨も後見役となった。彼らを総称して、陸奥系と森川は呼称している。

古河財閥から日本工業倶楽部（大正六年三月創立）専務理事その他の「財界」に移っていた事情に注意する必要がある。古河内部における中島の疎外は、その因でもあり、果でもあった。以上、理由はさまざまであるが、中島の疎外<sup>23</sup>とそれに対する中島の不満は、古河財閥トップ・マネジメントの意思統一にとって大きな妨げになった<sup>24</sup>。

中島は古河財閥の最高指導者というよりも参謀格として役割を主に果たしており、その面も含めて、中島自身の貢献を評価する際には森川の立論は物足りない。森川は中島の財界人としての側面に注目しているものの、中島の精神的指導者としての側面には焦点を当てていない。

次に、古河系の富士電機の創立過程に関する渡辺尚の詳細な分析の中で、中島が部分的に登場する。古河電工社長の中島は、ドイツのジーメンスとの合弁企業である富士電機の創立について「一番心配していた」<sup>25</sup>。そして日本の代表的な財界人による英米訪問実業団で訪英したあと、1922年1月に欧州にわたり、ベルリンに二か月滞在した。その際、同社の創設に関して、ジーメンス社のフォン・ジーメンスと交渉し、企業合弁の大綱（第二覚書）を協定した<sup>26</sup>。中島には「俺がその金をだして、そして作った仕事」という自負があった<sup>27</sup>。しかし最終的には、古河家親族の中川末吉が中島の頭越しに機関決定の撤回を可能にし、交渉の主導権を握った<sup>28</sup>。

古河電工社長の中島は富士電機に一株も出資しておらず、その社史にも全く言及されていない<sup>29</sup>。経営交渉の重要なプロセスではドイツに二か月も滞在した貢献は『富士電機社史』では忘却されている。

以上、財閥の経営者として貢献は先行研究からは断片的に分かるが、財閥経営に関する中島の貢献の全体像を明かす視点からは不十分である。

## 2) 財界リーダー

財界リーダーであった中島の貢献として第一に経済団体史の視点を概観する。

中島の財界活動の総括が『日本工業倶楽部五十年史』（1972）にやや詳しく書かれている。同書において「中島評議員会会長の逝去」の項目があり、中島の多く業績の中でも、1921年の英米訪問実業団の設営と1934年の日本製鉄株式会社の設立が特に顕著であると評価され、「日本工業倶楽部の歴史を編むに当たり、中島久万吉氏は逸することのできない中心人

<sup>23</sup> 森川が形容する「疎外」という表現はやや強烈であり、中島の古河における貢献を過小評価させる危険性がある。

<sup>24</sup> 森川（1980）p. 149-150

<sup>25</sup> 「中島精一談」, 中川末吉翁記念刊行物編纂会（1965）p. 423

<sup>26</sup> 中嶋（1951）p. 181、渡辺（1990）p. 273

<sup>27</sup> 「中島精一談」, 中川末吉翁記念刊行物編纂会（1965）p. 423. ジーメンス社との交渉の際に、ジーメンス社から饗応があり、駐独大使の本多熊太郎や中島が何人か部下をつれていった。「岡田完二郎談」中川末吉翁記念刊行物編纂会（1965）p. 555-556.

<sup>28</sup> 渡辺（1990）p. 275

<sup>29</sup> 富士電機製造株式会社編（1957）

物の一人あることを銘記したい」と記述されている<sup>30</sup>。経営史学者の由井常彦にも英米訪問実業団の研究がある<sup>31</sup>。由井は中島が製鉄合同・八幡の民営化という難事業を大臣として実現させたことを経営史的に高く評価している<sup>32</sup>。

また『五十年史』の巻頭にある「歴代主要役員」の写真集において、歴代理事長の写真を前にして、劈頭に和田豊治と中島久万吉の2名の専務理事の写真が掲載されていることは暗示的である。

既に『日本工業倶楽部二十五年史』(1943)は中島が編集委員長をつとめ、その「はしがき」をみずから書いた。中島は「専務理事としてほとんどすべての委員会の議事に関係し、その議決に関わる内外の陳情書なり稟議書の重要なものは多く私が文案起草した」と証言している<sup>33</sup>。このように彼の才覚、文筆力が財界活動で生かされただけでなく、諸々の社団の活動に「苦心」し、晩年大変慕われていたことが『日本工業倶楽部五十年史』に書かれている。本稿の課題からは、同書で書かれた次の一節が重要である。

「中島氏の学殖の深さ、枯淡の風流心、その人柄から心ある文人、哲人でその徳を慕う人が多かった。」<sup>34</sup>

本稿では、「文人・哲人」としての中島の側面に特に注目した。

しかし同書は中島の自伝である『政界財界五十年』をもとに経歴などの概略が書かれているだけである。『日本工業倶楽部五十年史』には中島の数ある財界活動の中で、より重要である協調会の設立に関わる労資問題への関与や昭和初年の産業合理化への貢献については何故か触れられていない。

第二に、経営史の視点から財界人としての中島の功績について述べる。

工業倶楽部を舞台とした中島たち財界人による財界活動やその経営観・労働観については経営史学者の由井常彦や島田昌和の一連の研究があり、その中で中島が断片的に言及されている。その代表的なものを紹介する。

工業倶楽部の中にできた資本労働調査委員会の委員長に中島がなり、信愛協会答申案の作成に中心的に関わった。当時の労資協調問題に対して、中島が労資一体論をもっていたことを島田は明らかにした<sup>35</sup>。そして協調会の設立として現われた協調主義の形成に中島ら財界人が果たした役割の大きさが明らかにされた。

協調会の副会長ともなった中島の労働問題への関与は深いが、彼はむしろ国民教育の問題として労働問題を捉え、その講演や著述を行った。このような思想面からも探究されるべきである<sup>36</sup>。

---

<sup>30</sup> 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会 (1972) p. 598

<sup>31</sup> 由井 (2003)

<sup>32</sup> 由井 (2006)

<sup>33</sup> 中嶋 (1951) p. 144-145

<sup>34</sup> 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会 (1972) p. 597

<sup>35</sup> 島田 (1989)

<sup>36</sup> 中島 (1919) など参照。

由井は「中島久万吉も、これからもっと研究されるべき人です」<sup>37</sup>と森川との対談で述べているように、研究者の中ではもっとも正面から財界リーダーとしての中島について論じ、中島が大乗仏教と関わっている側面を明らかにした。「問題意識」の項でも述べたように、由井は、6名の日本工業倶楽部のリーダーを取り上げ、日本的経営の理念の基盤について歴史的な解明に資するスケッチを行い、大乗仏教のエートスがあることを解明している<sup>38</sup>。この中で由井は何度も中島に言及した。その中で中島が工業倶楽部内で素修会を主宰し、「後進の実業家財界人の精神、人格の形成を指導」したことを明らかにした。ただ由井は中島が財界トップを目指した野心的な人物とみなしているが<sup>39</sup>、本当に政治的野心のある人物であったかは、本稿のなかで明らかにする。

### 産業合理化に関する研究

さて財界人中島がもっとも華々しく活躍したのは商工大臣になる直前の産業合理化運動に関わっていた時期である<sup>40</sup>。産業合理化運動に果たした中島の功績を研究することは、経済史・経営史の視点からも重要であろう。

第三に、経済史的には、高橋衛は産業合理化政策導入の契機について論じるなかで、金解禁との関連で論じられることが多い合理化について、「合理化政策の財界指導者中島久万吉（産業合理局顧問）はなお『合理化は金解禁の後始末に非ず』<sup>41</sup>と、そのたんなる不況対策への展化を警戒したほどであった」と論じているに過ぎない<sup>42</sup>。産業合理化の論者として中島が引用されるが、合理局常務顧問として、民間側の代表にたった彼の活躍については全く言及されていない。

第四に、経営学説史的に小林俊治は、日本経営学会の第6回大会（1931年開催）が「産業合理化と失業」という統一テーマで開催された意義について検討している<sup>43</sup>。この大会の統一テーマに2名の学者が講演し、実務家代表として中島は「産業合理化の諸問題」というテーマで講演していることが分かる。中島は国際経済に関する広範な知識にたって、原価経済や国家による意義ある経済事象への介入の必要性などを議論し、我国の経済政策を正当化した。中島は経営学者たちを前にその深い学識を披露したものであり、その点に関する評価は小林論文からは伺えない。

産業合理化関連の中島の論考の中でも（1）厚生主義の経済、（2）原価経済、（3）公

---

<sup>37</sup> 森川・由井（1983）p.39

<sup>38</sup> 由井（2006）

<sup>39</sup> 2014年9月21日の由井常彦氏の講演会より。「財界のモラルの崩壊と再生」と題して、第98回紫紺倶楽部（明治大学にて）にて。由井（2015）p.71 参照

<sup>40</sup> 「産業合理化運動」、中嶋（1951）p.186-192. 自慢することに謙虚な中島は、産業界を代表して1930-31年の産業合理化運動を指導したことを「平生の誇りとして居る」と回顧した。

<sup>41</sup> 中島（1930）

<sup>42</sup> 高橋（1975）

<sup>43</sup> 小林（1980）

私経済に対する国家の干渉という3テーマからなる「産業合理化に於る三大基調」（1931）という論文が最も有名である<sup>44</sup>。森川はこの「中島久万吉の論文はわが国合理化運動の展開すべき基調を明らかにしたものであるが、合理化運動推進者の視野の所在を示してくれる。」と解説している<sup>45</sup>。修正資本主義、ケインズの視点（中島はケーンズと表記）など最新の経済学説に通じていた中島について更に研究されるべきであろう。

第五に、経営史的視点から宮島英昭は、1930年代日本における独占政策思想を分析する中で、中島の「国家一行制度」論や先によく引用される「基調」論文を引用しながら、中島が経済界出身でありながら、政府側（産業合理局顧問と商工大臣）にたつて組織化の進展に寄与したことを評価した<sup>46</sup>。これも中島の経済思想を断片的に評価しただけであり、その背後にある精神的な部面に関する言及はもとよりない。

以上、産業合理化における中島の活躍に関連して、中島には著作物があることが垣間見られたが、『消費経済論』や『ソ連の五カ年計画論』など中島には経済学説に通じた論考・「講演録」が多く、政治経済に関するオピニオンリーダーの一人であったと言って良いであろう。

第六に、政治学的視点を取り上げる。政治学者として政治経済史の分野を開拓した松浦正孝は、政治経済システムの枠組みから財界人を分析した。松浦は郷誠之助、井上準之助、池田成彬ら大物の財界人を取り上げながら、中島についても同じ頻度で取り上げている<sup>47</sup>。しかし「小粒の財界人」という評価を政治史的に下した。

「暴かれた財界権力」という論文において帝人事件を分析した松浦は、中島が「当時彼ら財界が経済内部の合理化・組織化を行っていたのと同じような手法で政治にまで手を出し、それによって失脚するに至ったのである。」と論じた。

松浦の分析は、あくまで政治史的な枠組みのもと、財界権力の暴露という当時のマスコミの論法をなぞった視点にたつ。さらに財界が中島を政界に送ったというように財界の意図が論じられ、中島がその一駒に扱われる。政治経済システムの説明の道具として中島が扱われた。

政治的願望が元来無かった中島に政治的野心があるように描かれたが、本稿ではこのような偏った視点にたった中島像の修正を行う。松浦論文が利用しなかった帝人公判録を利用することで、中島の素顔の人間像を明らかにする。

以上の先行研究からは、中島が財閥経営者あるいは財界人として断片的にまた政治史的な枠組みから把握されてきたことが分かる。しかし中島の人物像はもっと別のところにある。政治的にも野心があると誤解されてきたが、そうした中島像を本稿では乗り越えたい

---

<sup>44</sup> 中川・由井（1970）参照。

<sup>45</sup> 森川（1965）

<sup>46</sup> 宮島（1988）

<sup>47</sup> 松浦（2002）



と思う。

筆者は、すでに中島の代表的著作物である『核心之問題』（1923）を分析しながら、企業者の思想研究の意義を問い、財界の大物であった中島をビジネスの精神性の視点から評価すべきであることを問うた<sup>48</sup>。財界人としては学識が非常に深く、文明史的視点とグローバルマインドをもっていた側面が明らかにされた。

さらに筆者は、財界大物であった中島と仏教との関わりを歴史的に解明し、素修会の活動のほか、最晩年の中島が仏教興隆と青年団教育とを結合させていた史実などを明らかにし、宗教的経済人の範疇の確立を掲げた<sup>49</sup>。このように中島には宗教性があり、さらに実業界を超えて広く社会貢献活動に熱心に取り組んだことがもっと明らかにされるべきである。

本稿では、以上のように中島の財界人としては異色性をもっていた側面の解明に照準を当てたい。そのような人物が生まれた背景や、さらに遡って、中島が財界人となれた理由なども合わせて、財界の精神的指導者が誕生した遠因、近因、その意義、精神的指導者となって以降の晩年の功績とは何かを解明したい。

## （2）課題の設定

上記の問題意識や先行研究の問題点から、本稿では財界の精神的リーダーとなった中島久万吉の体系的な研究を目指し、時系列的に以下の3つの課題を立てた。

- I. 財界人誕生の解明：どのようにして中島久万吉は財界人となることが出来たのか。
- II. 2つの事件の再考：中島の政治的生命を奪った足利尊氏問題とは何か。さらに財界の精神的指導者となる直接的な契機としての帝人事件とは何であり、中島にどのような影響を与えたのか。
- III. 精神的指導者の意義：精神的指導者となった意義とその活動の影響は何であり、その後の人生をどのように歩んだのか。

### I. 財界人誕生の解明

財界キャリアの一つの頂点として商工大臣となり、足利尊氏問題や帝人事件が起きたのは1934年で中島が数えて62歳の時であった。そこに至るまでの前史として、中島の生い立ちや経歴などから財界人となれた要因について、第一に明らかにされねばならない。

そもそも財界人という政界と財界を結ぶ人々の数は、原朗が述べているように限られている。一種のエリート的存在である財界人に中島はどうしてなることが出来たのかが問われる。これが第1の問いである。1917年に日本工業倶楽部という工業家たちの大資本による本格的な経済団体が設立されたとき、中島は専務理事4人の一人となった。工業倶楽部

---

<sup>48</sup> 村山（2011）

<sup>49</sup> 村山（2014）

は民間団体とはいえ、やがて強力な影響力を持ち、中島自身も財界有力者として政財界において独自の立場を占めるようになった。

財界人となるにあたり、何よりもビジネス界において実業家として成功したキャリアが必要である<sup>50</sup>。中島は古河財閥の最高幹部の一人として財閥の多角化に骨を折った史実とは何か、解明されねばならない。

その生い立ちから、古河入りまで、古河での実業家としての活躍、さらに工業倶楽部設立時までの歩みを系統だって探求しながら、なぜ財界入りを果たすことが出来たのかを問うことを第1の課題とする。その中で、財界の精神的指導者となる素地が若くして醸成されていたことを明らかにしたい。

## II. 2つの事件の再考

第2の問いは、中島にとって人生の一大転機となった足利尊氏問題と帝人事件が中島に与えたインパクトとは何であったのかを問うことである。前者を通じて政治的生命を絶たれ、後者により深く反省して修行に入った中島は精神的指導者となる直接的な契機を得た。

帝人事件は実業家だけでなく、政治家・大蔵省の幹部まで政官財の中心人物が被告になるという昭和初期の最大の疑獄事件であったが、公判の結果、全員無罪になるという奇々怪々な事件であった。最終判決によれば、証拠不十分どころか事件そのものが虚構であったことが判明した。事件そのものが検察によって捏造された。むしろ検察の不祥事という異例な事件であった。正義の番人であるべき検察官がなぜ事件を捏造したのかが問われる不思議な事件である。

中島はこの事件により政治家としての社会的生命を絶たれた。被告人の中からは後に2名の大臣や財界指導者、衆議院議員などが誕生しているが、そのような有能な人材に濡れ衣がかけられ、それが乾くのにはかなりの時間を要したことが真実である。この事件は現代的に見ても、改めて検察の在り方を反省する上でも重大な意義がある。

中島はなぜ、マスコミから激しく攻撃されたのだろうか。今一度最終判決に耳を傾けるべきであろう。事件の導火線となったマスコミの功罪も論じなければならない。

本稿では、従来十分に利用されなかった中島公判録を利用して、裁判官の前で中島が自身の心境を素直に反省している姿を浮かび上がらせることで、中島が精神的リーダーとなる直接的な契機が実は帝人事件であったことを明らかにしたい。

## III. 精神的指導者の意義

第3の課題は、通常のビジネス・政治的な方面での財界の指導者というよりも、財界の精神的指導者となった中島の意義を問うことである。

先に述べた通り中島は工業倶楽部内の素修会を通じて、碧巖録を提唱し、その他の大乘

---

<sup>50</sup> ただし財界団体が成立した後には、植村甲午郎のように実業体験のない財界人も登場した。鈴木(1965) p.18-19

経典の講釈を行った。いわゆる実業家のための精神的修養を目的とした精神的指導を行った。この点は本稿がもっとも注目した史実である。なぜ中島はある種の精神的指導者になることができたのかが問われる。なぜ多忙な実業家たちは中島のもとで修養に励んだのか。彼らにどのような影響を与えたのか。

さらに精神的指導者となって以降の人生をどのように歩んだのだろうか。高齢の中島は、戦後の平和な時代にあって貿易会会長として実業界の表舞台に立ち、各種の社会貢献活動に情熱を注いだ。なぜ中島は社会貢献活動をすることになったのか。最晩年は社会教育に情熱を注ぎ、精神的指導者として若者たちにも訓育していった実像を追う。学識高い財界の長老の中島は、その他各方面のリーダーとして懇望されていた側面を明らかにする。

事件後の上記のような晩年の中島の実像を明らかにすることでインプリケーションを導きたい。

### 3. 本論文の構成

本稿は、3部6章構成である。

第1部は「財界人への歩み」と題して、第1章で中島久万吉の生い立ちから古河財閥入りまでを検討し、家庭環境や受けた教育について詳細に検討する。第2章では古河入り後、番頭としてまた顧問格として経営トップ層の一人として尽力したことを分析する。財閥経営者として活躍しながら財閥外の活動にも関与し、さらに財界首脳陣の一角にはいった理由を明らかにする。合わせて、財界での活躍の概要も若干検討する。

第2部は「2つの政治的事件」と題して、第3章で商工大臣辞任の背景となった足利尊氏問題を分析する。足利尊氏問題は斎藤内閣崩壊の直接的要因となった帝人事件の前触的な事件であった。中島久万吉の名をある意味で高めているこの有名な事件の意義を再考する。その際、議会の背後で右翼系の熱心な辞任活動があったことを明らかにする。

第4章は帝人事件を扱い、なぜ事件が起きたのかをまず分析する。『時事新報』による告発によって、事件化されたわけだが、なぜ中島は批判されたのかを考察する。事件の概要を詳細に分析し、特に公判において中島がどのように証言したのかを明らかにする。第4章は本稿全体でも最も力点をおいた章であり、この事件がむしろ中島の精神的な糧となった側面を明らかにしたい。

第3部は「精神的指導者としての歩み」と題して、第5章で「仏心の普及」と題して第1に素修会の活動などを明らかにすることで、薫陶を受けた財界人たちが戦後の日本経済を支えたことを明かす。実業家には精神的修養が重要であることを誰よりも強く意識し、自ら精神的な指導を行った稀有な財界人であったことを明らかにする。そして素修会が中島の死後も復活したことを明らかにする。第2に高尾山仏舎利塔の建設に力をつくし、在家居士として仏教文化の普及に尽くした側面を明らかにし、どのようにして逝去したのかを明かす。第6章で「社会貢献活動」と題して、主に戦後におけるその活動の概要を明らかにする。

終章において本稿の要約をし、中島から薫陶を受けた後進の財界人が戦後の日本の経済界で活躍したことの意義やその他のインプリケーションを導き、本論文の限界を論じる。

巻末の参考文献一覧には、中島に関する研究論考、中島の経歴・人物像にふれた文献、中島の履歴に関係する文献のほかに、中島が書き残した著作物を年代順にジャンルごと、雑誌別などに分け、さらに一次資料も掲載した。

#### 参考文献

Fry, L.W., 2008. Spiritual leadership: state-of-the art and future directions for theory, research, and practice. In: J. Biberman and L. Thschler, eds. *Spirituality in Business*. New York: Palgrave Macmillan, p.106-124.

Mitroff, I.I. and Denton, E.A. 1999. *Spiritual Audit of Corporate America*, Jossey-Bass.

橘川武郎・島田昌和・田中一弘編著 (2013) 『渋沢栄一と人づくり』有斐閣

橘川武郎・フリデンソン編著 (2014) 『グローバル資本主義の中の渋沢栄一』東洋経済新報社

ロバート・K・グリーンリーフ, 金井壽宏 (監修), 金井真弓訳 (2008) 『サーバント・リーダーシップ』英治出版

小林俊治 (1980) 「産業合理化」と経営学-『経営学論集』(第6輯)を中心として-『早稲田商学』285号, 早稲田商学同攻会, p.389-404

島田晋作 (1942) 『過渡期の日本財界: 新旧型財界人の型を中心に』中山経済研究所

島田昌和 (1989) 「協調会の設立と経営者の労働観: 日本工業倶楽部信愛協会案をめぐって」『経営史学』24巻3号, p.27-57

島田昌和 (2007) 『渋沢栄一の企業者活動の研究』日本経済評論社

正田英三郎小伝刊行委員会編 (1990) 『正田英三郎小伝』非売品、日清製粉株式会社発行

菅山真次 (1996) 「第1章 経済復興と市場経済への移行 1 企業民主化」, 岡崎哲二・菅山真次・西沢保・米倉誠一郎『戦後日本経済と経済同友会』岩波書店, p.1-71.

鈴木幸夫 (1965) 『政治を動かす経営者-財界の思想と行動 日経新書 26』日本経済新聞社

高橋衛 (1975) 「昭和初年における産業合理化政策導入の契機」『政経論叢』24(6), 広島大学政経学会, p.75-106

中川末吉翁記念刊行物編纂会 (1965) 『中川末吉翁』中川末吉翁記念刊行物編纂会

中島久萬吉 (1919) 「職工教育に関する道徳的意義」 [演説筆記]

中島久萬吉 (1930) 「「合理化」は「金解禁」の後始末に非ず-世界的不景気の根本的事情・第2の産業革命に就て」『サラリーマン』第3巻第9号, p.17-31.

中島久萬吉 (1931) 「産業合理化に於る三大基調」『産業合理化』第2号

中嶋久萬吉 (1951) 『政界財界五十年』大日本雄辯會講談社。

中川敬一郎・由非常彦 編集・解説 (1970) 「中嶋久万吉編」『財界人思想全集-第2巻-経営哲

- 学・経営理念（昭和編）』ダイヤモンド社, p.125-158
- 日本経営史学会編・山崎広明編集代表（2004）『日本経営史の基礎知識』有斐閣
- 日本工業倶楽部（1943）『日本工業倶楽部二十五年史 下巻』日本工業倶楽部
- 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会編集（1972）『日本工業倶楽部五十年史』東京:日本工業倶楽部（『五十年史』と略称）
- 原朗（2012）「財界」, 中村隆英・伊藤隆編『近代日本研究入門』東京大学出版会
- 富士電機製造株式会社編（1957）『富士電機社史 1923-1956』
- 松浦正孝（2002）『財界の政治経済史-井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代-』東京大学出版会
- 宮島英昭（1988）「1930年代日本における独占政策思想—商工官僚と「財界世話人」—」, 逆井孝仁教授還暦記念会編『日本近代化の思想と展開』文献出版, p.377-395
- 宮本又郎（1980）『「財界」の萌芽—商法会議所の成立と活動』『経済セミナー』第308号, p.29-34
- 宮本又次（1976）『関西財界外史（戦前編）』社団法人関西経済連合会
- 村山元理（2011）「財界人の歴史観—男爵中島久万吉の第一次世界大戦後の世界像」『経営史学』第26巻第3号, 韓国経営史学会, p.257-282.
- 村山元理（2014）「財界リーダー中島久万吉と仏教的精神—精神的指導者への道」, 住原則也編『経営と宗教—メタ理念の諸相』, 東方出版, p.60-83.
- 森川英正（1965）[解説], 中島久万吉「産業合理化における三大基調」『別冊中央公論, 経営問題』4(1), 1965年3月, 中央公論社
- 森川英正(1980)『財閥の経営史的研究』東洋経済新報社
- 森川英正・由井常彦（1983）「近代日本の「産業の将帥」たち」『歴史と人物』第13年第12号, 10月号, p.32-43
- 由井常彦（2003）「団琢磨の民間経済外交—英米訪問団（1921-22年）の活動と意義について—」『三井文庫論叢』第37号
- 由井常彦（2006）「財界人と日本的経営の理念—日本工業倶楽部のリーダーにみる経営一体観の進化—」『経営論集』第16巻第1号
- 由井常彦（2015）「昭和の財界人—日本経済のために人生を掛けた人々」『PHP 松下幸之助塾』1-2号, Vol.21, p.70-75
- 和田日出吉（1935）『人絹』, 第一書房
- 渡辺尚（1981）「富士電機成立過程の試論的分析」, 土屋守章・森川英正編『企業者活動の史的研究-中川敬一郎先生還暦記念』日本経済新聞社, p.212-232
- 渡辺尚（1990）「富士電機の創立過程-第二・三段階を中心に-」, 中川敬一郎編『企業経営の歴史的研究-脇村義太郎先生卒寿記念』岩波書店, p.263-283

## 第1部 財界人への歩み

## 第1章 生い立ちから古河入りまで

### 1. はじめに

本章では中島久万吉が「財界の精神的指導者」となった背景として、財界人となるまでの経歴とは何かを問う。財界人となるには概ね実業界での活躍が必要な条件と考えられる。中島の本格的な実業界入りは、古河鋳業への入社まで待たねばならないが、そこに至るまでの経歴や人間形成のあり方とは何かを本章の主題とする。第2節では、中島の生育環境、受けた教育を通じていかなる人間形成がされたかを分析する。第3節では、実社会での歩みにおいて、実業界だけではなく、少壮の一官僚として国政に関与した史実を辿る。その中で、「財界の精神的指導者」となる下地がこの時期にある程度形成されたことを明らかにする。

### 2. 家庭と教育

#### (1) 父中島信行の影響

『政界財界五十年』（1951）<sup>51</sup>では、中島久万吉の父中島信行について、彼が青春時代を送った幕末から明治維新时期における活躍が僅かに記述されている。信行は土佐藩から脱藩し、海援隊に入り、坂本龍馬の片腕として活躍した勤皇の志士であった。信行の草莽期の活動から見えてくることは常に死と隣合わせであったことである。信行の先生に当る間崎哲馬の切腹、従兄の中嶋與市の切腹、坂本龍馬の横死などを体験した。だが、彼は決して命を粗末にすることなく、修羅場を通り抜け、いわゆる国事に奔走した。

信行は明治維新後、新政府で高級官僚の道を歩みはじめた。1868（明治元）年に兵庫県判事、徴士外国官権判事となり、伊藤博文・陸奥宗光と信行のトリオで外務省的な仕事をした。翌年、通商正として大阪に転任した時期に陸奥宗光の妹初穂と信行は結婚した。陸奥宗光を叔父としたことは中島久万吉の人生に大きな影響を与える。

信行は廃藩置県後、大蔵省に出仕し、1870-72（明治 3-5）年には貨幣鑄造の任務で欧米に渡航した。太政官札を国立銀行紙幣に刷新する事業を担い、アメリカのグリーンバックを見本として携えて帰朝した。そしてイタリア人技師を招聘して新紙幣を流通させた。大蔵省出仕権少輔の渋沢栄一とは同僚であった<sup>52</sup>。

信行が横浜運上所長官であった1873（明治6）年7月24日に、横浜で長男の久万吉（以下、社会人となる前までの中島久万吉を久万吉と呼称する。）が生誕した。翌年の1874（明治7）年1月15日には信行は神奈川県令となった。『政界財界五十年』では父が「神奈川県

---

<sup>51</sup> 『政界財界五十年』は客観的な記述に富む中島の自伝であり、その生涯を知る基本的文献である。本稿ではこの書物に限定されずに、深く資料を渉猟して、中島の人物像を探求する。

<sup>52</sup> 『渋沢栄一伝記資料』には、渋沢の大蔵省出仕時代に中島信行との往復書簡が数多く残されている。

令の時」に横浜で生まれたというのは正確ではない。また紳士録などに高知県生まれと記載されているのも誤りである。

1877（明治10）年8月20日に妻の初穂が久万吉・多嘉吉・邦彦の三人を残して死亡した<sup>53</sup>。生母の死後、子供たちは「おしかばあさん」と呼ばれた乳母に育てられた。継母が中島家に入ったあともこの乳母によって育てられた。父は重責を担って多忙な日々を送り、久万吉らは寂しい子供時代を送ったのではないかと久万吉の孫にあたる信光氏は想像している。

多忙であった信行は子供たちの面倒を見るのが余りなく、生母の死後、何時の間に継母が家に入り込んだとの思いが強かった。そのため父には内面で「わが父程われわれを愛し玉はぬはあらじとおもひ定むるこそ憐れなり。」と継母の湘煙女史が嘆いているような心情を久万吉らは抱いていた。湘煙女史によれば、信行は子供たちの将来を思うことは「類ひ稀なり」というほど深くおもっていた。そのように「思ひ続け玉ひし事」を子供たちは夢にも感じていないと湘煙女史は亡くなる直前に書いた<sup>54</sup>。

信行は1880（明治13）年10月5日、元老院議員を依頼免官となった。この時、久万吉は7歳である。信行の官僚辞任は木戸孝允がすでに亡くなり、民権派議員として政府改革を推し進めた最大の盟友であった陸奥宗光が入獄したことが原因であった。政府部内で、地方分権と人材登用に関する建白書を盟友の陸奥宗光と提出したこともあった。

藩閥政府から下野した信行は板垣退助らの自由民権運動に合流し、その中で女性弁士・女性民権家の岸田俊子<sup>55</sup>と出会った。俊子は久万吉の継母となる。俊子は久万吉の精神形成に大きな影響を与えた。また、少年時代に土佐（高知県、父の実家）で過ごした久万吉が、自由党副総理の長男として自由民権運動の盛んな土地柄から深く影響を受けたのは言うまでもない。

信行は相馬黒光によれば、「政界稀に見る謹厳清廉の人格者」であった<sup>56</sup>。また「元来性恬淡にして名誉利達を超越し、心は常に動かざること山の如く、静なること湖水の如く、それに生来の無口で、自ら好んで他と語を交へること」をしなかった<sup>57</sup>。

このような信行の政治観はほとんど究明されてこなかったが、横澤清子（2006）の研究によれば、以下のようなことが明らかにされている。

信行の政治行動の指針は、坂本龍馬の公議世論による立憲国家の樹立と、「貿易立国」による国権の堅守・繁栄である<sup>58</sup>。

---

<sup>53</sup> 信行は妻のために墓標を明治10年に立てた。その墓標は中嶋家の墓（東京谷中霊園・寛永寺墓地）に移されている。初穂は「養老育幼」と書かれたように父の看護と育児に献身して若くして亡くなった。墓標の解説は横澤（2006）p.215-220に詳しい。

<sup>54</sup> 『湘煙日記 明治34年4月27日』より。岸田（1986）p.265

<sup>55</sup> 俊子の雅号は湘煙女史で、久万吉は継母を女史と書いている。

<sup>56</sup> 相馬（1985）p.62

<sup>57</sup> 同

<sup>58</sup> 横澤（2006）p.422



このような強いナショナリズムは明治期に生きた日本人に共有する思想的バックボーンであり、息子の久万吉に大きな影響を与えたことは間違いない。後に久万吉に高等商業学校に進学することを中島俊子（湘煙女史）だけでなく信行も認めた背景には、「貿易立国」の政治信条もあったからであろう。

信行が神奈川県令の時代には、立憲制実現のステップとして他県に先駆けて民主的な町村会（仮）規則を定めた。信行は政府部内では過激派とみなされ、陸奥が逮捕された後には、官を辞し、自由民権運動に合流した。しかし過激な民権派の活動家からは、逆に着実論、実際論、中庸正義として批判されていた<sup>59</sup>。このとき、キリスト教の説く、自立・勤儉・自由平等の精神が彼の心の拠り所となった<sup>60</sup>。キリスト教の洗礼を俊子と共に受けたのは、1886（明治 19）年である。1890（明治 23）年、第一回衆議院選挙に神奈川県五区から立候補して当選し、同年 11 月に初代衆議院議長となった。1892（明治 25）年に政界を引退し、自由党から離脱した。同年にイタリア全権公使となった。しかし結核を患い帰国し、療養につとめた。1896（明治 29）年に男爵を授けられ、1899（明治 32）年 3 月に亡くなった。同年 4 月に長男の久万吉は 23 歳にして男爵を授かった。

民権運動の中では「清廉孤高の風が余りあって、群雄駕御の才がなかった」と評されている<sup>61</sup>。目覚しいリーダーシップを発揮したり、対立抗争を裁く政治手腕を発揮するようなことはなかった。信行の官・民・官の転換は、思想の変節ではない。ある時、俊子に向かって、「一体私は朝に在りても、野にありても、ただ民智が進歩して国権が堅固なればいいと思ふのだ」と語っている<sup>62</sup>。

信行は民衆の啓蒙活動のために図書館の設置や結社活動、教育機関への援助などを行った。これらは「将来に向けて種を蒔く」姿勢を示したもので、信行の言動を通して見るかぎり、常に一貫したものであったと評されている<sup>63</sup>。新党の党首に担がれる動きもあったが、彼は乗らなかった。

信行の無口な面は全く久万吉には見られないが、自由民権家・中島信行の DNA は間違いなく、久万吉に影響している。目立ったことはしないが、国家への犠牲的奉仕の強さ、「清廉孤高」、恬淡で名誉を求めない。すべて父から久万吉が受け継いだ人間性である。

## (2) 厳格な家庭教育、生母、漢学教育、禅趣味、土佐の気風

久万吉が明治学院を中退後、家でぶらぶらしていた 18 歳頃、父は衆議院議長で、議会の多数の院外団と気焰を上げていた時のエピソードが印象的である。父が突然部屋に入るなり、障子に「親が苦勞で子が樂すぎて孫がお蔭で苦勞する」と大書し、面目丸つぶれとな

---

<sup>59</sup> 同 p.423

<sup>60</sup> 同

<sup>61</sup> 同 p.424

<sup>62</sup> 同 p.425

<sup>63</sup> 同 p.426

った<sup>64</sup>。『政界財界五十年』では、寡黙であった父中島信行からの教育指導はこの箇所だけであるが、次の紹介記事が家庭での教育に関して最も詳しい。

「幼時より頗る厳格なる両親によって育てられた。殊に父信行男から始終、忠孝の本義を諭し聞かされ、何事も国家社会の爲めにならぬ事はしてはならぬと戒められたとか、それに生母は紀州藩士遠藤二郎宗広のむすめ、すなわち陸奥宗光の実妹初穂刀自で、怪傑陸奥は彼の叔父にあたっている。そんな訳で常に規律を重んじ、苟くも両親より叱りを受けるやうな事はなかった、従って学校の成績も衆童に超越し、かつて一番の席を他に取りられた事はなかったいふ、中学に入っても、級ごとに二番とは下らぬ優等の成績でやり通し、明治二十六年には東京商業学校に入学し<sup>65</sup>、卒業する迄模範学生と唄はれたものであった。」<sup>66</sup>

ここでは父だけでなく生母の初穂についても書かれていることも重要である。母親の兄は陸奥宗光であり、彼女は伊達宗広の娘であった。母親の父伊達宗広（伊達自得）は紀州藩の藩政で枢機にあたったが、藩内の政争に敗れて幽閉されるなど憂き目を見た。晩年には東京深川に和歌禅堂という庵をいとなみ、禅道に通じ歌集を編み学問を楽しんだ。宗広の娘の初穂も書史や和歌に親しんでおり、良妻賢母としての短い人生を全うした伝統的日本人女性であった<sup>67</sup>。久万吉の禅や文学的関心の深さは母方からも血統的に遺伝していることが想定される<sup>68</sup>。

生母の初穂は久万吉が4歳の時に亡くなり、乳母である「おしかばあさん」によって残された3兄弟は育てられた<sup>69</sup>。この「主張のある婆さん」から、武芸百般を一通りやらされ、久万吉は小さいながらも水泳、弓に相当自信をもつほどの健康体となった<sup>70</sup>。

1880（明治13）年に、7歳の久万吉は弟の多嘉吉と父の郷里の土佐（高知県）に送られた。これは同年に父が元老院議員を免官となり、自由民権運動に本腰を入れるためであったらう。土佐では伯母の世話になった。義理の叔父は久家種平<sup>71</sup>であり、この翁から『論

---

<sup>64</sup> 中嶋（1951）p.25

<sup>65</sup> 正確には明治二十五年に高等商業学校予科に入学した。

<sup>66</sup> 岩崎（1934）p.384

<sup>67</sup> 横澤（2006）p.218-219

<sup>68</sup> 素水生（1913）も外祖父の伊達自得が「有名な居士禅の泰斗」であり、「国語漢籍の造詣深く、一生を通じて主義あり、節操あり」、その「流風遺韻が彼（久万吉）にも伝わったものか、彼もまた一種の人生観を有し、或は参禅をしたり、人を聘して伝習録の講義を聴き、或いは韓非子を研究し・・・」と記述している。

<sup>69</sup> 中島は1956年9月に「私達には古くからいたおしかばあさんというのがついていて・・・」（昭和女子大学近代文学研究室，1957，p.65）と回想している。

<sup>70</sup> 子供時代はお世話になった「ばあさんから、武芸百般をやらされ、水泳、弓道は相当の自信があった。実業之日本（1917）p.13参照。

<sup>71</sup> 久家種平は漢学者であり、種平の妻、峰が信行の姉であり、久万吉の伯母にあたる。父の中島信行も久家種平から漢学を教授されており、親子2代にわたってお世話になった。久家種平が発行した和歌集として『猴冠集』（明治12年）がある。久家種平の長男は白石家の養子となった白石直治（土木技術者/関西鉄道社長、衆議院議員、第5代土木学会会長）。

語』、『大学』の素読などから習い始めた。土佐には「5年」ほどいた。このようなプライベートな漢籍の学修は、その後も続く。久万吉は漢籍の素養を深く体得するが、東洋古典による人格育成が彼の基本的人生観に大きな影響を与えたことを強調したい。

なお土佐では自由民権運動が盛んで、民権党の息子ということで、祭り上げられ、官権党と夜中に対立騒ぎを起こし、警察沙汰になった。夜間には共学舎という塾に通い、郷土愛を培った<sup>72</sup>。

元来政治意識の発達していた土佐において子供時代を過ごしたことは、久万吉の精神的形成の大きなバックボーンとなった。本人は以下のように回顧している。

「私達の子供時代はこのような世間の気風の中にあつたから、一般に青少年が、一身の利達ということばかりでなく、天下国家ということを常に念頭におくというように育てられていた。」<sup>73</sup>

また明治史における土佐の動きは独特で、土佐人の気質については岡崎が以下のように要約している。

「土佐の人は個人に独立心が強く、集団で行動できない。薩長のように閥を組んで土佐人の利益を守るなどというのは、もっとも苦手とするところである。

その上に理想家肌のところがあり、政治信念のためには、私的な利益を犠牲にする気持ちがある。板垣（退助）などはまさにその典型で、生涯理想に燃え、私生活は赤貧洗うが如きものがあつた。そういう気質だからこそ、維新の功労者でありながら政府の中での栄達を求めず、反政府の自由民権運動を主導して、日本の政治史に重要な役割を果すのである。」<sup>74</sup>

こうした土佐人の気質は、久万吉の父の信行（自由党の副総理）にも相当するし、その息子である久万吉にも大きく影響した気質である。そして明治学院在学時には、政治家になるつもりであつた<sup>75</sup>。

十二歳の時に東京に戻り、帰京早々に、慶応義塾幼稚舎に在学し、一致英和学校予備門という「宗教学校」に移籍した。この学校がやがて統合されて明治学院として 1887（明治20）年 9 月に設立された。久万吉は明治学院の設立時に普通学部そのまま入学した。久万吉に英語教育の必要性を痛感したのは父信行であつたに違いなく、中島信行は明治学院の理事でもあつた。

この年 12 月に保安条例で中島家は東京から追放となり、横浜に転居した。恐らくこの時

---

白石直治の妻、菊子の父が竹内綱（実業家）であり、久万吉の就職（京釜鉄道、内閣総理大臣秘書官）の斡旋をした人である。竹内綱は吉田茂（首相）の実父にあたる。久家種平の娘、田鶴子は久万吉の弟の多嘉吉と結婚した。久家は土佐宿毛にあり、吉田綱、大江卓、林有造らも土佐宿毛の出身であり、大江卓が理事長であつた東京株式取引所に久万吉は入所した。

<sup>72</sup> 中島（1953.3）p.2

<sup>73</sup> 同 p.3

<sup>74</sup> 岡崎（2009）p.128-129

<sup>75</sup> 戸川（1933）p.198

76、一時的に久万吉と弟の邦彦は神奈川県藤沢市にあった漢学塾である耕余塾<sup>77</sup>に在籍したかもしれない<sup>78</sup>。

そして漢学の素養は継母岸田俊子（湘煙女史と呼称される）によって更に磨きがかけられた。湘煙女史は「ずるずるといつの間にか中島家にはいり込ん」だが、おしかばあさんがいて、親夫婦と兄弟 3 人は別棟、食事も別だった。ただ湘煙女史から『日本外史』の講義をしてもらった。初めて同じ家庭で親しく話したのは、1887（明治 20）年に保安条例で横浜に転居したときであるが、塾（耕余塾か？）に入り、また別れ、本当に湘煙女史と打ち解けたのは、信行が亡くなった 1899（明治 32）年 3 月以降から一年半だけであった<sup>79</sup>。

この母は、「人柄がさっぱりした人で、眼光紙背に徹するといった鋭さがあり」、久万吉も「非常に教育された。」親子というより、友達といった感じだった。学校から帰るとすぐに議論をふっかけ、政治、経済、宗教、哲学、あらゆる方面にわたって、半日でも議論を続けた<sup>80</sup>。

以上基本的には漢籍による東洋思想が中島の精神に子供の時分から仕込まれたことがわかる。

### (3) 慶応義塾童子寮

久万吉が土佐から東京に戻ったのは 12 歳というが<sup>81</sup>、それは数え年であり、1884（明治 17）年である<sup>82</sup>。東京に戻ると、「しばらく慶応義塾の幼稚舎に在学」した<sup>83</sup>。1885（明治 18）年に入学したという記述もあるが<sup>84</sup>、これは正しくない。

---

76 横澤清子（2006）は、耕余塾に久万吉・邦彦が在籍したのは土佐から戻って一致英和学校予備門に入学するまでの短期間であったのではないかと推定している。神奈川県知事だった中島信行[明治 7 年 1 月から明治 9 年 3 月に任官]は小笠原東陽の熱烈な擁護者で、その子供を託したとされる。しかし土佐から戻って早々に慶応義塾幼稚舎に入学したと本人が語っているので、この推測は誤りであり、別の時期とみなすべきだ。明治 20 年横浜に転居したさい、「まもなく塾にはいりましから」と語っているので、この「塾」が寄宿舎のある耕余塾かもしれない。神奈川県藤沢市明治郷土史料室の岩崎稔氏によれば、久万吉が在籍したのは明治 19 年頃、邦彦は明治 22 年だとされている。

77 神奈川県屈指の中等教育機関で、私塾。1872（明治 5）年に小笠原東陽を迎えて創立された塾で、生徒増で耕余塾と改称、さらに東陽が亡くなった明治 20 年に慶応義塾に習い耕余義塾と改称。吉田茂など著名人が輩出した。

78 横澤（2006）p.299

79 昭和女子大学近代文学研究室（1957）p.65-66

80 同，p.67

81 中嶋（1951）p.16

82 『慶応義塾入社帳』によれば、明治 17 年 3 月 16 日に幼稚舎に入社したことが記録されている。福沢研究センター編（1986）p.373。弟の多嘉吉は明治 17 年 5 月 1 日の入社である。同 p.374。

83 慶応幼稚舎では小林一三と同窓であったという。中嶋（1950.8.30）しかし小林一三が慶応に入塾したのは明治 21 年 2 月であり、明治 25 年に卒業した。それゆえに、この時点ではなく、中島が明治学院を退学後、再度、慶応の本科に転学した明治 23-24 年頃のことであると思われる。

84 三田商業研究会編集（1909）p.418

この幼稚舎（童子寮）では、彼は「頑童ぶり」を発揮した。土佐での教育は彼を自由民権の子としての自覚を強くさせ、独立不羈の気風を植え込んだのであろう。大人びた小学生ぶりを示す以下のエピソードがあり、これは『政界財界五十年』にはまったく記述されていない久万吉の少年時代の話である。

「慶応義塾童子寮に一頑童あり、腕白党の随一と称せられ、乱暴狼藉至らざるなく、且つ最も演説を好み、米独立戦争時代の偉人パトリック・ヘンリーに私淑し、其演説を愛誦し、又当時「国民の友」及び「日本新聞」の論説等を暗誦し、常に廊下に立って大声に演説し、手を揮い、足を挙げ、或は板を踏み鳴し、或は戸を叩き、又時に党を組んで食堂に乱入する等、其頑迷なる殆ど制御すべからず。」<sup>85</sup>

このような態度の少年であったので、学校側も対処に困ったことは容易に想像できる。勧められてアメリカ伝道教会の経営に関わる一致英和学校に転学したが、慶応義塾幼稚舎としては、その転学を歓迎したはずある。このような「頑童」ぶりは、学卒を終えるまで続いた<sup>86</sup>。

一致英和学校（後の明治学院）に転学した時期は1886（明治19）年とされるが<sup>87</sup>、これも定かではない。一致英和学校の入る前には、先述したように一時期（明治19～20年頃）に耕余塾に短期的に在籍した。

後に明治学院を退学したあとに慶応義塾に戻ったが本科卒は正しくなく<sup>88</sup>。この当時は脳を病み、土佐に一年以上も過ごし、在籍不十分で学籍を失った<sup>89</sup>。

#### (4) 明治学院

久万吉が父と懇意にしていたミラー宣教師夫婦の勧めで、アメリカ伝道協会の経営する築地の一致英和学校予備門に入学した時期は、1886（明治19）年かもしれないが、3節で述べたように正確には分からない。この学校が明治学院と改称して、芝白金の地に新校舎を移転して開学したのは1887（明治20）年9月であった。久万吉はヘボン館に寄宿し、普通学部の本科一期生になった。

明治学院普通学部は「米人」8人、日本人4人の職員がいた。普通学部は予科2年・本科4年からなり、当時の学制からは予科2年は尋常中学校の低学年に、本科は尋常中学校の高学年に1年を加えたものに相当した。普通学部は、神学部への予備教育を行うという明治

---

<sup>85</sup> 桑村(1911) p.85

<sup>86</sup> 菅(1960)によれば、「中嶋さんも若い頃には土佐の志士風を学び、なかなか反骨が露骨であったとみえて、一橋在学時代から大道で過激な政談演説をやって義母湘煙女史や伯父陸奥宗光伯を心配させた」という。義母は継母の誤りであるが、実社会に出る前まで、過激な演説癖は続いたようである。

<sup>87</sup> 三田商業研究会編集（1909） p.418

<sup>88</sup> 三田商業研究会編集（1909） p.418によれば、明治24年に慶応義塾本科卒とされるが、これは正しくない。

<sup>89</sup> 『政界財界』では、「私は中途に明治学院を退学し、復た慶応義塾に戻りしていたが学業兎角抄取らず、甚だ浮かぬ学生生活を送っている内に更に軽い脳患に罹り、一年有余の惜しい月日を土佐に費やし、恰度父が衆議院議長の時東京に帰り。」と記述されており、正確な時期は記載されていない。中嶋(1951) p.25 この記述に従うと、明治学院を退学したのは1890（明治23）年の秋以降であり、慶応に再入学しながら、土佐で1年余り過ごし、再度東京にもどったのは1891（明治24）年の後半である。

学院の独自のものであったが、普通学部を卒業して高等中学校の高学年に進学しうる科目が用意されていた<sup>90</sup>。

予科・本科では「英語を以て、普通の学科を授け」ることが目的とされた。これは明治初年の文部省の指針によるもので、大学に入って直ちに外国教師の専門学科に関する講義を理解するための予備教育を施すためであったという<sup>91</sup>。米人教師を主体とする普通学部の教育はかなり高いもので、ほとんどの科目は英語の教科書を使って、英語で授業が行われた<sup>92</sup>。充実した英語教育の評価が、キリスト教教育のために割り引いて考えられていた<sup>93</sup>。ベテランの講師陣による授業では、現在のアメリカの大学教育と同じように、教科書を予習させるものであった<sup>94</sup>。『明治学院一覧』の普通学部職員表<sup>95</sup>の教員名と担当科目を列挙すると表1-1のようになる<sup>96</sup>。

表1-1 明治学院普通学部の教員名、担当科目

米人教師	担当科目・テキスト
教頭・ヘボン ドクター・オブ・メジシン	生理学 (J. C. Cutter, <i>Comprehensive Pyhsiology</i> ) 健全学
ジョン・C・バラ	数学 (G. A. Wentworth, <i>A Practical Arithmetic, Algebra, Plane and Solid Geometry, Plane and Spherical Trigonometry</i> ) 星学 (天文学, J. D. Steele, <i>Astronomy</i> )、 簿記学 (週一度、第1学期「単記」、第二三学期に「復記」)
R・F・バラ	唱歌、音楽 Charles S. Robinson, <i>Spiritual Songs</i>
マーティン・M・ワイコフ	化学、物理学、地質学 George M. Avery, <i>The Element of Chemistry, The Element of Physics</i>
ジェイムズ・M・マッコレイ	史学 (Fisher & Swinton, <i>Outline History of the World</i> , Edward Freeman, <i>General Sketch of European History</i> , E. P. G. Guizot, <i>History of Civilization</i> (英訳本)) 本科3年毎週5時間各國古代史、本科4年毎週5時間各國

<sup>90</sup> 明治学院編 (1977) p. 150-151

<sup>91</sup> 鷺山 (1927) p. 194

<sup>92</sup> 中島は「アメリカの宣教師のやっている宗教学校に入って、アメリカ式の教育を受けた」と回顧している。中嶋 (1953, 5月) より。

<sup>93</sup> 鷺山 (1927), p. 151

<sup>94</sup> 同, p. 155

<sup>95</sup> 明治二十年から明治二十一年まで

<sup>96</sup> 明治学院編 (1977) p.151-157

	近代史および文明史 倫理学 (D. S. Gregory, <i>Christian Ethics</i> ・聖書)
ハワード・ハリス	英語、 英文学 (John S. Hart, <i>English Literature, American Literature</i> )
セオドル・M・マクネヤ	心理学、論理学 (J. M. McCosh) 理財学 (Newcomb, <i>Political economy</i> ) 礼拝の讃美歌指導、野球部
トーマス・リンゼイ、ヘンリー・M・ランディス、 ジョン・T・スウィフト (明治 21-22, 歴史、英語)、ピアソン (数学)	
日本人教師	
石本三十郎	英語、動物学
井深梶之助 (代講)	英語訳読
杉森此馬、学院監事	植物学、英語
内田秋蔵、ヘボン館舎監	体操
近藤忠恕 (和漢文学)、上杉熊松 (図画)、山田万太郎 (数学)	

一致英和学校予備門と明治学院普通学部本科での英語による中等教育で、久万吉の英語力がかなり高くなったことは確実であり、英書を読み話し書く能力が醸成された<sup>97</sup>。

戸川 (1933) によれば、当時の学院について以下のように書いている。

「当時の明治学院は時代の先頭に立って居た学校であったが、学生には二種類あった、それは中島さんのような品の良い坊ちゃんと、私のような苦学生とであった。が不思議に両方とも仲が良かった。決して階級的な考えなどは夢にも入って来ず、また先生と生徒の間も円満で、たまたま争ひをしても、それは子供の喧嘩のやうなもので、大体から言へば、面白く快く、自由で、今日の言葉で言へば朗らかな春のやうな学生生活であった。」<sup>98</sup>

久万吉にとっては思い出の多い明治学院であり、マクネヤから野球を習って対外試合も盛んに行った。我国野球の草創期に関わっていた。

明治学院には文学的な雰囲気があり、文豪となった島崎藤村と同級生であった。その他、和田英作、戸川秋骨、馬場胡蝶などの優秀な生徒が集まっていた。明治学院史では「島崎クラス」と呼称されている。1887 (明治 20) 年 9 月に普通学部本科に入学した第一期生は 30 名であり、1891 (明治 24) 年 6 月の卒業生は 20 名であった。

<sup>97</sup> 海外から新刊書の荷物が丸善に着いた時には必ず三四冊は必ず求めたと言われ、洋書・洋雑誌をよく読んでいた背景には明治学院で修得した英語力が発揮された。実業之日本 (1916) p. 33 参照。

<sup>98</sup> 戸川 (1933) p.197-198

1889-1890（明治 22-23）年頃に、久万吉は明治学院の中で『すみれ草』という回覧雑誌の編集長となった。政治家志望の久万吉は政治的論説で健筆を揮い、島崎らに文芸欄へ寄稿させた。島崎は文学者、挿絵を描いた和田は東京美術学校の校長、英詩を翻訳した戸川は東大卒の著名な英文学者、文筆を揮った馬場は小説家となった。そうした才能の温床の場を自ら用意したという自負が晩年の中島にはあった。

#### (4)-1 宗教学校

米国長老教会（プレスビテリアン）・改革教会（リフォームド）の宣教師団、スコットランド一致長老教会宣教師団の協議によって設立された明治学院は、既存の築地の東京一致英和学校と東京一致神学校および神田の東京英和予備校を統合させたものである。「青年に完全なキリスト教教育を施し、特に教会の宣教に当らしめるよう訓練する」ことを目的として、邦語神学部・普通学部・専門学部の三学部が設置された。明治学院創立案に関与した中島信行は、妻の俊子とともに明治 19 年に洗礼を受けた。その翌年、明治 20 年に明治学院が設立された。

ここで重要なことは正統的福音信仰によるキリスト教教育が徹底して行われことである。中島は明治学院を「宗教学校」と呼んでいるのはこのためである。島崎藤村の文学形成を研究した伊東は、当時の明治学院の宗教教育を次のように簡明にまとめている。

「日曜・土曜日以外の曜日には、毎朝課業前にサンダム館の二階の講堂に学院の教授学生が集合して、感謝祈祷の礼拝をなした。聖書の授業は、一二年級は新約聖書福音書、使徒行伝、三年級は旧約聖書歴史及び予言書、四年級は新約聖書使徒書が教授された。また、日曜には講堂で安息日学校が開かれ、聖書学習が行われた。なお注意すべきことは、学科目のなかで、倫理（道徳の要旨）の時間数が非常に多いことであつた。」<sup>99</sup>

1890（明治 23）年 7 月 5 日～15 日には、キリスト教青年会主催で、キリスト教夏季学校で明治学院にて開催された。この夏季学校には 359 名が出席し、明治学院からは 44 名が参加した<sup>100</sup>。島崎藤村や戸川、中島らが参加したことが記録に残っている。夏季学校の講師名と題名は表 1-2 の通りである。

表 1-2. 1890 年のキリスト教夏季学校の講師名・題名

講師名	題名
押川方義	歓迎の辞
海老名弾正	説教 耶蘇基督之本旨
嶋田三郎	名声非干立志之標準
植村正久	説教 聖徒之交

<sup>99</sup> 伊東（1998）p. 304

<sup>100</sup> 瀬沼（1981）p. 88-89



海老名弾正	耶蘇基督之精神
Dr. G.W. ノックス	贖罪論
Dr. of Philosophy 中島力造	科学と有神論
伴直之助	日本之青年と実業
Dr. J.D. Davis	靈之能及其生長
G.W. ノックス	現今之神学
文学士 大西祝	希臘道德移于基督教道德之顛末 講演第一回～第三回
押川方義	欧米漫遊之話其一
海老名弾正	押川氏欧米漫遊之話述所感
押川方義	欧米漫遊之話其二
L.D. ウィシャルド	與干第二回夏季学校生徒書
ドラモンド	博物学教授ドラモンド君の演説

木村駿吉編（1890）

夏季学校の講演内容から分かることは、キリスト教の教義だけでなく、その背後にある哲学や道徳、西洋の最新事情が伝えられていることである。これは近代化・西洋化を推し進める日本の国情を反映している。ただこの中で、伴直之助<sup>101</sup>の実業に関する講演があったことに注目したい。これは次節につながる伏線となる。

上記のように宗教的情操が育まれる中で、岩崎(1934)が述べているように中島久万吉は優秀な学生であり、演説会では雄弁であり、政治家志望ではあった<sup>102</sup>。そして一個の文学青年であった<sup>103</sup>。父の信行がすでに1886(明治19)年に洗礼を受けたように、足立(1969)によれば久万吉もキリスト教に入信したとも言われる<sup>104</sup>。入信の有無にかかわらず、キリスト教の教養や精神的な影響を受けたことは確実であろう。ただ『政界財界』には入信に関する記述は全くない。少なくともカトリックの神父岩下壮一を尊敬していたように、キリスト教の靈性には深い理解を持っていたことは事実である。「西洋仕込み」<sup>105</sup>といわれる

<sup>101</sup> 伴直之助は東京経済雑誌社の社員で実業界に発言力があり、両毛鉄道・京都鉄道の支配人であった。東京市会議員もつとめた。

<sup>102</sup> 戸川(1933) p.200-202

<sup>103</sup> 戸川(1933)は中島が「当時から立派な文人であった」と回顧している。また戸川は、明治学院当時の中島は「文字通りの紅顔の美少年で、色の白い両頬には、ルウジでも施したような紅をみせて、ほんたうに可愛らしい青年というよりも少年であった」という。

<sup>104</sup> 足立(1969) p.198。入信したとはいっても信仰が長く保たれるようなものではなかった。当時文学を志す人々がキリスト教に入信した動機は、伊東(1998) p.285によれば、「キリスト教に対する神学的理解や超越者としての神への深い信仰からというよりも、むしろ西欧文化や異国情緒への憧憬にともなう情感的接近が一般の傾向であった」というのが妥当な見解であろう。

<sup>105</sup> 「西洋仕込み」とは古河合名での部下である菅禮之助の中島評(中川末吉翁記念刊行物編集会編(1965)p. 663)。

中島の合理的思考や生活態度、高度な英語力、さらには“宗教に対する構え”はこの学院での寄宿舎生活の中で培われた。この宗教への深い理解は、後に禅趣味にも傾く契機になったのではないだろうか。これは第5章でさらに探求されるべきテーマであり、中島の内面的豊かさはこの明治学院で醸成されたと思われる。

1890（明治23）年の夏季学校には参加したが、中島は弟の多嘉吉と共に明治学院を中退した。これは「政治論議にうつつを抜かして教師の不興を買っ」たためであった<sup>106</sup>。退学した時期は注39で述べたように、1890年の新学期が始まった秋以降であり、1891年6月に島崎藤村らと卒業することは無かった。

その後、(3)節でも述べたように、慶応義塾本科に復学したが、学業が捗らず、浮かぬ学生生活を送るうちに<sup>107</sup>、軽い脳患にかかり、一年余りをまた土佐ですごし、東京にもどって、無為な生活を送っていた。この時、(1)節で見たように、信行から障子に字を書かれて叱責されたのであった。学生時代の中島の性格は自伝では隠されているが、「狂熱」のある「驕児」であったことがしばしば指摘される意外な性格である。

#### (5) 高等商業学校

明治学院時代には政治家志望の文学青年が何故に実業を志向するようになったのであろうか。中島本人の弁によれば「政治家の生活を、日常見せつけられそのみじめさをつくづく感知して、結局方向を一転し、実業の方面に入ることにした」のであった<sup>108</sup>。保安条例で中島家は東京から追放となり横浜で暮らすようになった。しかし父が選挙で勝利して衆議院議長となると途端に豊かな生活となり、多くの院外団も出入りするようになり、その落差に久万吉は寧ろ嫌気がさしたのであった。明治学院を退学してブラブラしていた時期は、父が衆議院議長を勤めていた時期<sup>109</sup>に該当する。いずれにしろ父の影響により政治家志望となりながらも、同じ父の影響で政治家に嫌気がさし、人生の方向をあぐねている中で、軽い脳の病いとなったのではないかと推測される。

文学青年の政治家志望から実業家志望への転向のきっかけの一つとして、前節の夏季学校での伴直之助の講演が与っていたのではないだろうか。伴直之助の講演は学生たちから

---

<sup>106</sup> 明治学院編（1977）p.163。また楚（1913）p.37によれば、「有名なる驕児で、明治学院にあって朝夕の祈祷は勿論信教の自由は学校の内にあって然るべしなど演説して放逐され」とも記述されており、こちらの理由のほうが退学させられた主な理由であるのかもしれない。またこの記述によれば、久万吉が入信したとは到底想像できない。明治学院時代も「驕児」であった。

<sup>107</sup> 慶応に復学した際も明治学院でのように処分を受けたとも言われている。そして「気概に富み、狂熱のある男であったが、それが全く打って変って今日の如き円満無碍の人格を養い得たのは畢竟彼の異常なる克己力と精神修養の結果であって、若し此の修養努力がなかったならば、彼は依然として一個の驕児で」あった。恐らく社会に出てから自らの修養につとめたことが考えられる。素水生（1913）p.37 参照。

<sup>108</sup> 戸川（1933）p.200

<sup>109</sup> 中島信行が初代衆議院議長となった任期は、明治23年11月25日～明治24年12月25日である。

拍手喝采を受けたことがわかる。その趣旨は、貧乏な日本を豊かな日本にするためには企業的人物が必要であり、実業は困難ではあるが、実業によって青年が胆力と勇気のある人物になれるので、ぜひ挑戦してほしいという内容であった<sup>110</sup>。殖産興業が次第に進捗し始めた当時、世情に敏感な若者であれば、実業へと目が開かれるのは当然の成行きともいえる。

また野球を通じて親しかったマクネヤの理財学の授業も刺激を与えたかもしれない。

(4) 節で述べたようなその無為な日々『商業要綱』という実業関連の書籍を久万吉が読んでいた背景には上記のような理由があると思われる。しかしその実業志向は決して強いものでは無かった。

『商業要綱』のカバーを湘煙女史が見、高等商業学校の校長であった矢野二郎を紹介されることになった。矢野からは半ば強引に「町人」になることを勧誘され、深夜遅くまで激論を受けた。それはあらゆる人間は産業人になるべきという矢野独特の理論であった。逡巡していた久万吉は、矢野によって益田孝から説得され、さらに渋沢栄一にも面談されそうになるや、「必ず町人になります」と決心したのであった。矢野は大満足であった。このように無理やり高等商業学校予備門(予科)に入学することを決意させられてしまった。当時、商人ないし実業家の地位はまだ低かった。高等商業学校に入れたのは継母だが、「それは父の意見でもあった」<sup>111</sup>。信行の思想には(1) 節で述べたように「貿易立国」の思想があった。こうして元来は政治家志望で、ぶらぶらしていた文学青年の久万吉は、「商人＝実業家」の道に進むことになった。

当時、商業教育に対する認識も次第に改まり、高等商業学校への入学志望者は急増し、定員の十数倍にもものぼるようになった。現行制度への不満から 1891 (明治 24) 年には矢野校長に対する排斥運動も起きた<sup>112</sup>。このような中で、「程度ヲ高尚」とさせるために高等商業学校の修業年限は 1892 (明治 25) 年から改正され、予科 2 年・本科 3 年であった<sup>113</sup>。中島は 1897 (明治 30) 年に本科を卒業している<sup>114</sup>、予科に 1892 (明治 25) 年に入学したはずである。矢野二郎校長のもと「程度ヲ高尚ニス」とされた予科と本科におけるカリキュラムは以下の通りである。

表 1-3. 予科学科課程表

時間合計	体操	英語	博物	化学	物理	図画	簿記	数学	作文	書法	倫理	科目
												年限

<sup>110</sup> 木村駿吉編 (1890) p.110-138

<sup>111</sup> 中嶋 (1950.9.3)

<sup>112</sup> 作道好男・江藤武人編 (1975)p. 179-180

<sup>113</sup> 同 p. 185

<sup>114</sup> 『高等商業学校一覧』(明治 30 年 12 月 23 日)

三	三	一〇	二	二	二	二		五	二	三	一	每週時間 第一期	第一学年
三	三	一〇	二	二	二	二		五	二	三	一	每週時間 第二期	
三	三	一〇	二	二	二	二		五	二	三	一	每週時間 第三期	
三	三	一〇	二	二	二	二	三	五	二		一	每週時間 第一期	第二学年
三	三	一〇	二	二	二	二	三	五	二		一	每週時間 第二期	
三	三	一〇	二	二	二	二	三	五	二		一	每週時間 第三期	

予科学科課程表[一橋大学学園史編集委員会編・発行(1982)『一橋大学学制資料 第三集』  
p. 55-56]

表 1-4. 本科学科課程表

時間合計	体 操	実 践	支 語 ノ 内 一 語	仏、 西、 独、 伊、	英 語	法 律	統 計	經 濟	商 業 要 項	商 業 歷 史	商 業 地 理	商 品	簿 記	商 用 算 術	商 用 作 文	科目		年限
																每週時間	第一期	
三一	三				五	三		三	三		五	二	三	二	二	二	每週時間 第一期	第一学年
三一	三				五	三		三	三		五	二	三	二	二	二	每週時間 第二期	

三	三			五	三		三	三		五	二	三	二	二	毎週時間 第三期	
三	三		三	三	三		三	三	二		二	三	二		毎週時間 第一期	第二学年
三	三		三	三	三		三	三	二		二	三	二		毎週時間 第二期	
三	三		三	三	三		三	三	二		二	三	二		毎週時間 第三期	
三	三	六	六	五	三	二	三		三						毎週時間 第一期	
三	三	六	六	五	三	二	三		三						毎週時間 第二期	
三	三	六	六	五	三	二	三		三						毎週時間 第三期	

本科学科課程表[一橋大学学園史編集委員会編・発行（1982）『一橋大学学制資料 第三集』p. 56]

海外との交易も想定して地理や外国語に重点があり、教養というよりも全体的に貿易・金融などの実学を重視した特色のカリキュラムとなっている。

なお矢野二郎は病気もあるなか、各般の事業も整頓したことをもって1893（明治26）年4月に辞表を提出した<sup>115</sup>。

予科2年目の1894（明治27）年元旦に、久万吉は「私は商売人になるのですから」と微笑して「福祿」の両字を新年の「初筆」に書いた<sup>116</sup>。久万吉は達筆であった。賤商意識が濃い中で「商売人」には自嘲的な含意もあったかもしれないが、以下述べるように実業学生の高い志もあった。

矢野校長のあと文部省参事官の由布武三郎が校長に任命され、1895（明治28）年7月に

<sup>115</sup> 作道好男・江藤武人編（1975）p. 186

<sup>116</sup> 湘煙女史の日記である『湘煙日記』より。岸田（1986）p. 88-89.

は文部大臣秘書官の小山健三が校長に就任した。中興の祖とよばれる小山健三<sup>117</sup>のもとでさらにカリキュラム改正が 1896 (明治 29) 年に行われた。倫理は商業道德となり、本科では財政学などの新設学科目が増加した。中島はそうしたカリキュラム改正の恩恵を受けなかったであろうが、高等商業を卒業した 1897 (明治 30) 年の時の校長は小山である。小山は「尚武賤商の旧套を排して学生の品位気風の向上をはかり、その遠大なる使命を痛感せしめることにつとめた」<sup>118</sup>。

このように学問化・倫理重視がすすむ高等商業学校の正規の課程を修めるだけでなく、中島は矢野からの直接的なビジネス・マン教育も受けた。

矢野からは、入学当初に、「おめえ一寸も俺のところへこねえな、教室の学問ばかりではならん。俺の家へ来て矢野教育を受けろ。でないビジネス・マンになれねえ」といつもの江戸弁で言われた<sup>119</sup>。矢野は 1893 (明治 26) 年 4 月には騒動から退任するが、矢野の自宅に毎週一度は通って、深夜まで実地に「矢野教育」を一身に受けた。小山健三校長のもとで理論化が進む学校教育だけでなく、この実際教育を受けた<sup>120</sup>。

中島は、この矢野教育に「非常な恩義を感じている。高等商業に入れたのは継母の湘煙女史だったが、それは父の意見でもあった。そして、矢野先生によって実業家への下地をきたえあげられたわけであった。」と書いている。

また当時の時代背景を意識しながら、以下のように中島は高商時代を回顧している。

「高商在学中日清戦役に会し、日本国が勃然として極東に覇たるの盛時を見た。我邦が殖産興業上に漸く近代国家たる観を呈し来たのに対して、心私かに実業学生として我等の前途を祝福した。」<sup>121</sup>

ここからは日清戦争が在学時におき、国是の殖産興業が進展するなか、国家意識の高い当時の高商の一学生の気概が感じ取れる。

『高商一覧』よれば、明治 30 年 7 月の卒業式において、校長の小山健三はその長い演説で徳義心を訴えた。蜂須賀文部大臣の祝辞があり、商議委員渋沢栄一は国の進歩を図ることを訴え、商議委員の益田孝は東洋貿易を勧めた。明治 30 年卒で唯一華族<sup>122</sup>であった中島

---

<sup>117</sup> 小山健三[1858-1923]の校長在任期間は 1895-98 と短かったが、有力な学者を招聘し、のちの商科大学となる専攻部を置き、福田徳三・佐野善作などを海外留学させるなどの改革を行った。後半生は 42 歳にして第三十四銀行の頭取となり名をなし、貴族院議員となった。

<sup>118</sup> 作道・江藤 (1975) p.204

<sup>119</sup> 中嶋久萬吉 (1950.9.3)

<sup>120</sup> 一橋大学の学園史にみる実学・学問の対立の DNA はこの時点から胚胎していると言えるだろう。なお矢野教育を受けた面々は、徹心会という強固な同窓団体を作った。矢野教育の恩義に報いたかった中島は、内閣秘書官時に矢野の貴族院議員勅選を推薦した。

<sup>121</sup> 中島 (1950.2) p.30

<sup>122</sup> 明治 29 年に父の信行が男爵を受爵していた。勲功による受爵であり、旧大名や公家よりは格下であった。華族の一員となったことは後に人生に効いてくる家柄を形成した。

は本科 85 名の同窓生の一人として卒業した。そしてブルース制度<sup>123</sup>の研究を目指して、東京株式取引所に入社した。

## 2-1. まとめ—漢籍の教養がバックボーンに

明治期の財閥経営者の人物像について森川（1980）は、次のように語っている。

「士族的価値観と国家意識、知的能力、年齢的若さゆえの積極的事業意欲、財閥内部だけにとらわれない広い視野、国際社会に対する鋭敏な反応等である。」<sup>124</sup>

これらは士族の長男として育てられた中島の人物像に該当するが、中島に即して彼が受けた教育面から以下のような属性が看取された。

- ・ 武士の子供としておしかばあさんより厳しく養育され、水泳や弓が得意となった。
- ・ 叔父や継母などより漢籍の素養を身につけた。
- ・ 父の薫陶から国家意識、政治意識を受け継ぎ、強い愛国心や高い倫理観をもつ。これは当時の若者一般の意識でもあった。
- ・ 土佐で子供時代を過ごし、自由民権の独立不羈の精神を身につける。
- ・ 外祖父は居士禅で著名な人で、禅学への傾倒が孫にも伝播したと考えられる。
- ・ 継母の影響で禅仏教への関心を深めた。この点については第 5 章で詳しく述べる。
- ・ 明治学院でアメリカ式教育を受け、英語や文学、キリスト教、海外事情に通暁するだけでなく、宗教的情操が育まれた。
- ・ 高等商業学校での高尚な商業教育だけでなく矢野教育を直に受け、実業界で羽ばたく素地を十分に身に着けた。
- ・ 元来文学青年で文才が有り、読書人であり、雄弁でもあった。

受けた教育に関しては、近代的教育として英語や実学だけでなく、少年時代から私塾を通じて漢籍を深く学び、『大学』の修身齐家治国平天下という道德観、リーダーシップ論にたっていたことが特色である。中島は教育的には江戸時代以来の漢籍教育と近代教育が併存していたという過渡期において、当時としては最高の学識を身に着けた。さらに卒業後も漢籍の学びを続けた<sup>125</sup>。

中島久万吉は漢籍をすらすらと読み、漢文調の設立趣意書などの文章を起草し、漢詩の趣味もあった。こうした東洋古典の素養は高知藩の志士であった信行、叔父久家種平、耕余義塾、継母湘煙女史らの教導によるものであった。湘煙女史からは禅の影響も受けるが、禅の影響は外祖父の伊達自得からも血統的に伝わったと推測される。漢籍が自由に読めた

---

<sup>123</sup> フランス語の *Bourse* で証券取引所の意味を指していると思われる。

<sup>124</sup> 森川（1980）p.20

<sup>125</sup> 実業界で活躍していた時代も、陽明学を東正堂から学び、「偉大な心の世界」を見出し、内省を会得したという。東京大阪朝日新聞経済記者共編（1924）参照。

中島は仏典の研究にも進む。こうした東洋古典の素養や禅学への傾倒は、本稿の課題となる重要な布石である。

第 2 章でも詳しく述べるが、漢籍の素養に関連して、のちに古河虎之助の養育係りとなった中島は虎之助のために、漢籍を通じた帝王学を授けようとしたことは注目に値する<sup>126</sup>。古河虎之助は米国留学以前に、日本では中学 5 年程度の知識にとどまっていた。徳器と知能を成就させる教養を授けるために、中島は高等商業学校の恩師であった杉山令吉<sup>127</sup>を招聘した。1908（明治 41）年夏から杉山は虎之助夫婦のもとに講義にかよい、『論語』に始まり、『日本外史』も講じられた。人格の修養と尊王愛国の精神が吹き込まれた<sup>128</sup>。中島も杉山の講義につとめて列席し、自らも『七書評説』を教示した<sup>129</sup>。

社会に出るにあたり、久万吉は高い国家意識を十分に兼ね備えて実業界で活躍する気概は十分にあった。徳義を重視した高等教育を受け、健康面でも不安はなかった。ただ学生時代の驕りぶりが「円満無碍」の人格へと修養を積むには、卒業後の社会体験が必要であった。

高い国家意識や学識の深さは財界人の要件となるであろうが、それだけでなく、キリスト教の精神性に深くふれながらも継母の影響で禅に傾倒するようになる下地が形成された。あとは実業界で認知されるような人物としての修養を重ね、実社会で能力を発揮することが財界人としての要件として残されている。

### 3. 実社会での遍歴

#### (1) 実業界での遍歴

##### 1) 東京株式取引所

実業界入りにあたり、最初の勤務先は民間企業というよりも、資本主義経済の中枢を担う東京株式取引所であった。ブルース制度（証券取引所）の研究のために入所したと回顧している。このような研究的点関心や好奇心を持っていることに中島らしさがある。

現在の東京証券取引所の前身である東京株式取引所は、わが国で最初の証券取引所とし

---

<sup>126</sup> この時に中島が講釈した漢籍として『七書評説』（和綴本、1911年12月、築地・古河邸で講述）があり、一橋大学図書館に蔵されている。これは杉山令吉が寄贈したものである。

<sup>127</sup> 杉山令吉[1855-1945]は、英文・漢文にたけ、ミシガン大学卒、高等商業学校で商業文の講座を担当。明治 26 年に外務省に任官し、陸奥外相のもとで働き、さらに海軍省に転じる。陸奥の『蹇蹇録』、『日清戦争史』を捕筆した。その後、早稲田大学、東京高等商業学校に籍をおく。なお渋沢栄一の墓碑銘は杉山が揮毫した。

<sup>128</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p.93-100

<sup>129</sup> 楚（1913）によれば、「彼（久万吉）もまた一種の人生観を有し、或は参禅をしたり、人を聘して伝習録の講義を聞き、或は韓非子を研究し、彼の監事たる古河家に於ても学者を呼んで論語を講義し、自分も其の講義をやる一人となって居る。吾輩は嘗つて彼の古河虎之助の為に講述したる七書講義を瞥見したことがあるが、引證該博、所説詳密、専門学者の著というも恥かしからぬものであった」といい、漢籍の深い素養があったことが伺える。



て渋沢栄一らによって1878（明治11）年に創設された。1897（明治30）年7月に新卒の中島が働き始めた時の理事長は著名な大江卓であった。大江は土佐系で、陸奥宗光や父信行と親しかった。株式取引所の研究のためとはいえ、そういったコネクションもあって、大江のいる東京株式取引所に入所したのかもしれない。大江の義父は後藤象二郎であり、その息子の後藤猛太郎と中島はとても親しくしていた。中島は薄給にも関わらず、莫大な遺産を継いだ後藤猛太郎と豪遊することが出来た。

中島は大江卓のもとで秘書役も兼務した。1878（明治31）年3-4月には北海道炭鉱株買占め事件が起き、大江はその責任を取って辞任した。

大江からは上司や部下のあり方について教示され、有能な秘書ぶりを発揮しただけでなく、その教えは後に桂首相の秘書官となった時に大いに役立った。『政界財界五十年』では、取引所でのエピソードが多く掲載されている。本人が秘書以外にどのような仕事に従事したかは不明だが、「組織の改善を志し」たとされる<sup>130</sup>。1903（明治36）年に東京株式取引所の重役を留任したことがあり<sup>131</sup>、取引所の経営に関与するような仕事をしていたのかもしれない。

取引所生活は1年あまりで、1898（明治31）年9月には退所した<sup>132</sup>。もともとブルス研究のための入所であった。それも日本では十分に出来ず、取引所生活に見切りをつけていた際、後見人役の竹内綱<sup>133</sup>から京釜鉄道での測量の仕事を勧誘されたと本人は述べている。しかし取引所を辞めて、京釜鉄道の事業に参画する前に、三井物産に勤務していたのである。京釜鉄道の事業に勧誘された時期については、以下の「3）京釜鉄道」で述べる。

## 2) 三井物産

『政界財界五十年』には三井物産勤務の記述はない。しかし中島はわずかながら三井物産での勤務体験がある。飯田義一（三井物産理事）による紹介とされる<sup>134</sup>。

三井文庫の三井物産資料群から、実際に中島が三井物産に1899（明治32）年において在籍していたことが「第1号 紹介状 使用人身許引受状：誓約書」などから分かった<sup>135</sup>。在籍期間は短く、1899年1月～8月である<sup>136</sup>。三井物産では、当初は計算課に在籍し、す

<sup>130</sup> 素水生（1918）p.78

<sup>131</sup> 東京朝日新聞「株式重役改選」1903年1月20日。

<sup>132</sup> 中嶋（1950.9.9）

<sup>133</sup> 竹内綱[1840-1922]は実業家・政治家。久万吉の叔父の漢学者久下種平の息子の白石直治は竹内綱の娘と結婚しており、竹内綱と久万吉は縁戚関係にもあった。竹内綱は中島信行と同じ土佐派の自由民権運動家であり、初代衆議院議員選挙で当選した。実業家であり、吉田茂の岳父にあたる。

<sup>134</sup> 後藤（1934）

<sup>135</sup> 「明治32年2月7日紹介状」の紹介人は矢野次郎、「身元引受状」の引請人は渡邊亨、江口駒之助で、東京株式取引所の先輩や同僚である。宛名は三井物産合名会社社長三井元之助殿となっている。

<sup>136</sup> 三井物産資料（物産25）、（物産26）によれば以下の中島の動静が分かった。明治32

ぐに秘書課に異動となり、益田孝のもとで秘書役となった<sup>137</sup>。陸軍省に出向き、外国人の対応などもしていたことが三井物産の日誌より判明した。後藤（1933）によれば「余り性に会はずなかつたらしく、間もなく退社した」。しかし三井系の人脈が広がったことは推測できる。中島の性格からして、三井というよりもルーティン的で非創造的な雑用に嫌気がさしたのではないかと思われる。

三井物産に通っていた頃、日銀に勤めていた松永安左エ門と同じ下宿に住んでおり、お互いによく討論したようだが<sup>138</sup>、『政界財界五十年』にはその記述はない。

この間、3月26日には父の信行が死去した。多忙であったために父の死に目には立ち会えなかったことを湘煙女史は嘆いた<sup>139</sup>。

長男であった久万吉は4月に男爵を受爵した。爵位を受け、華族という上流社会の末端に入れたことについては後でもふれる。

### 3) 京釜鉄道

京釜鉄道は朝鮮の京城（現ソウル）と釜山を結ぶ全長四五〇キロに及ぶ鉄道の名称で、日本の近代における対外進出を検討する上で重要性が主張されて久しい<sup>140</sup>。

1894（明治27）年8月に日韓暫定合同條款により京釜・京仁（京城仁川間）鉄道施設権の予約的獲得がなされていた。しかし2年後にその権利は外国人に奪われそうな状況であった。外交上の紆余曲折があり、1898（明治31）年9月に韓国当局者と京釜鉄道発起人の間に京釜鉄道契約が調印された<sup>141</sup>。1899（明治32）年2月に発起人委員の大江卓が渡韓し、同年7月には踏査報告書、線路図、建設費概算が整った。しかし海外政情の不安定さもあり経済界からの資金募集は困難であった。委員らは政府に働きかけ、1900（明治33）年2月6日に「京釜鉄道速成に関する建議案」が可決された。これを受けて政府は「帝国臣民の外国における鉄道施設に関する法律案」を議会に提出し2月23日に可決された。この法律案は京釜鉄道が国外の大事業であるため国内法である商法や私設鉄道条例に拘束されない特例を求めたものである<sup>142</sup>。

---

年1月7日三井物産を訪問し、上田理事と面談、2月1日雇用され、計算課に勤務。4月20日上田理事と面会。5月1日益田理事と面会、大阪支店法をさらに本店支店法とし、秘書課勤務とす。5月29日日本日から出勤する（秘書課詰）。7月14日フランク・ハクサン氏、陸軍省の打ち合わせの為、中島陸軍省へ赴く。なお8月の退職は秦郁彦編著（2002）によるが、秦氏にその出典を伺ったが不明とのことである。

<sup>137</sup> 中島は益田孝と親しかったが、益田のもとで働いたことは素水生（1913）p.38 参照。

<sup>138</sup> 松永によれば、「下宿も五郎兵衛町の上等のところを選んだ。隣室には後に男爵、商工大臣になった中島久万吉がいて、三井物産に通っていたが、よく議論し合ったものだった」という。松永安左エ門（2004）p.357 参照。

<sup>139</sup> 『湘煙日記 明治34年4月22日』に「彼父君の最末に会し奉るを得ざりしも」、さらに祖母が危篤だったが久万吉は都合で土佐にいけなことを嘆かれた。岸田（1986）p.262

<sup>140</sup> 川上（1995）p.23

<sup>141</sup> 帝国鉄道協会（1915）

<sup>142</sup> 川上（1995）p.29

この間、同年 2 月 20 日に京釜鉄道株式会社の発起人総会が開催され、創立委員 13 名<sup>143</sup>や実地測量に関することなどが決まった。創立委員からさらに渋沢栄一を委員長として 5 名<sup>144</sup>の常務委員が互選され、政府との交渉や会社設立に関する一切の常務を委任された。こうして創立委員の竹内綱、大江卓、大三輪長兵衛の 3 名を韓国に派遣し、線路の実測、停車場用地の選定その他諸般の準備につき韓国政府に対して請求交渉をさせることとなった<sup>145</sup>。

以上から、中島が竹内綱から京釜鉄道の測量の仕事の依頼を受けたのは、三井物産を辞職した翌年の 1900（明治 33）年の 2 月以降である。そのため京釜鉄道の測量の依頼を受けて、東京株式取引所を辞任したのではない。恐らく本人の記憶違いであろう。

竹内、大江、大三輪の三名は 1900（明治 33 年）3 月 6 日に東京をたち、韓国に渡航し、16 日には京城に到着した<sup>146</sup>。中島もこの一行と渡韓した<sup>147</sup>。路線実測は笠井愛次郎を技師長に技師ら 20 余名がその後、渡韓した。8 月には実測は終了した<sup>148</sup>。

『政界財界五十年』によれば、中島は「京釜鉄道創業の事務に関与して渡韓」し「実地測量の事業に約一年」を費やした。そして「京釜鉄道の創業に従ふて韓国に渡り、大陸進出の快挙に身を忘れて力を盡くし」<sup>149</sup>、「土地収用の任に当ってこれを大成」させた<sup>150</sup>。渡韓中の 12 月に長崎の人が採掘した金鉱の権利を、林権助公使を通じて韓国政府に要求した<sup>151</sup>。

国策的な事業の創立において政治・外交に深く関わったことは上記のことからもわかる。そして現地情報についても詳しく学び、為政者や民間人にも偏見の多い「韓半島」に関わる「健全な知識」の普及が望ましいことを、友人の著作（信夫淳平『韓半島』）において述べた<sup>152</sup>。

『湘煙日記』の明治 33 年 12 月 16 日には、「去十日に京城を發せしといふ遊子連日の好晴に船量もなく木浦釜山を経て・・・」という記事があり、文学的情景にあふれた感傷的な文章を残している<sup>153</sup>。遊子とは久万吉のことであり、韓国から近況報告を継母の湘煙女史に伝えていたことが分かる。日記の中で俊子は久万吉と「快弁」を長くできないことを嘆

---

<sup>143</sup> 13 名のうち、渋沢栄一、前島密、尾崎三良、竹内綱、大江卓、大三輪長兵衛、中野武彦、井上角五郎、佐々友房、大倉喜八郎、日下義雄の 11 名が選挙された。帝国鉄道協会（1915）p.40

<sup>144</sup> 渋沢栄一、尾崎三良、竹内綱、大江卓、大三輪長兵衛の 5 名。帝国鉄道協会（1915）p.40

<sup>145</sup> 同， p.40

<sup>146</sup> 竹内（1967） p.458

<sup>147</sup> 東京朝日新聞「京釜鉄道線路調査委員」1900 年 3 月 7 日。神戸に到着し、渡韓することが伝えられている。この記事は中島久万吉の名前が東京朝日新聞に掲載された最初の記事である。

<sup>148</sup> 竹内（1967） p.459

<sup>149</sup> 中嶋（1950.2）

<sup>150</sup> 素水生（1918） p.78

<sup>151</sup> 読売新聞「京城通信 昌原郡金鉱を要請」1900 年 12 月 5 日。この記事では男爵中島久萬吉氏（故信行氏の男）と記載されており、読売新聞に中島久萬吉の氏名が初めて登場した。駐韓日本公使館記録にも「昌原採鉱不淮件」（1900 年 12 月 1 日）が残されている。

<sup>152</sup> 中島（1901）序

<sup>153</sup> 岸田（1986） p.189

息し、四五月の帰国を待ちわびていた。12月25日の日記では、「京釜鉄道送金の銀行為替、・・・」という文面があり<sup>154</sup>、京釜鉄道の株式募集に応じた。

翌年の1901（明治34）年3月16日に帰朝した<sup>155</sup>。京釜鉄道の事業は国策的に重要なものであり、男爵の中島の動向は新聞記事となった。帰国後直ちに渋沢栄一に報告のために訪問した<sup>156</sup>。中島が実業家として渋沢栄一から信頼されるきっかけは、この京釜鉄道の支配人としての活躍を認められたことによる<sup>157</sup>。

1年余りの朝鮮半島での滞在であったが、若き中島久万吉は有能であり実行力があることを証明した。そして渋沢栄一からの信頼は、その後長く実業界で活躍する上での無形資産となった。これは財界人へと一歩近づいたことを意味する。またこの事業が国策的に重要であったことは彼にとっても満足のゆく仕事であったに違いない。

## (2) 政界での活躍—総理大臣秘書官時代

帰国後は、また竹内綱の紹介で今度は「政界覗き」を勧められ、桂太郎首相の了解もあり<sup>158</sup>、第一次桂内閣の総理大臣秘書官となった。

第1次桂内閣は比較的長期政権であり、1901（明治34）年6月2日より、1906（明治39）年1月7日まで続いた。組閣時の閣僚の顔ぶれは以下の通りである。

総理：桂太郎　外務：曾禰荒助（臨時兼任）　内務：内海忠勝　大蔵：曾禰荒助  
陸軍：児玉源太郎　海軍：山本権兵衛　司法：清浦圭吾　文部：菊池大麓  
農商務：平田東助　通信：芳川顕正

28歳の中島が総理大臣秘書官となったのは6月17日であり、高等官六等の辞令がおりた。すでに6月7日には杉竹次郎が内閣総理大臣秘書官に任用されていた。杉はフランス語が堪能であったが、中島は英語が堪能であったことが採用の一つの理由であったと思われる<sup>159</sup>。内閣総理大臣秘書官は、内閣と運命を共にすべき特殊な官であり、自由任用が残

---

<sup>154</sup> 同 p.196

<sup>155</sup> 読売新聞「中島男爵が韓国から帰国」1901年3月16日。

<sup>156</sup> 渋沢青淵記念財団竜門社編纂（1957）p.438. また同資料からは渋沢に京城から2度電報を送ったことが分かる。

<sup>157</sup> 「非常に便利な重宝な存在である事を後の渋澤子爵等々から認められた」後藤（1934）p.101。

<sup>158</sup> 桂太郎は明治23年に第一次山形内閣のもとで第一議会有ったときに政府委員をつとめ、民党最大の實力者の板垣退助や林有造などと粘り強く交渉を行った。千葉（2012）p.34参照。この当時、板垣、林の仲間で、自由党土佐派の大物である竹内綱も衆議院議員として一期だけつとめていた。竹内は第二次伊藤内閣で伊藤と板垣との連携の仲介をしており、政界に太いパイプがあり、桂とも面識があったことが容易に推測できる。

<sup>159</sup> 後に中島の後任の内閣総理大臣秘書官には、英語の堪能な山下芳太郎が住友家から転籍した。

されていた<sup>160</sup>。竹内綱という有力者の紹介とはいえ、中島は英語ができたこと、さらにそれまでの短いキャリアの中で有能な秘書であり、かつ大陸における国策事業でも有能ぶりを発揮したことが採用の理由ともなったであろう。

桂内閣は「元勳級指導者」以外の藩閥第二世代による初めての内閣であり、当初は「小山縣内閣」「次官内閣」と揶揄された。しかし内閣の連帯責任が慣行化する中で内部の結束が強く、それは長期政権を生み出す条件となった<sup>161</sup>。内閣組織にあたり、桂は①商工業の発達、②海軍の拡張、③イギリスとの協定締結、④韓国の保護国化の四カ条の政綱を定めた。

桂内閣のもと、最初に直面したのが外債募集問題や日英同盟問題であり、日英同盟が締結されると、桂はその功績を独占する。内政では「地租増徴継続案」が否決され、第17議会を解散した総選挙後の第18臨時議会でも否決されて、議会運営に苦慮した。内閣改造を繰り返して、みずからの辞意表明によって伊藤博文を政友会総裁から枢密院議長に祭り上げることに成功した。政友会との交渉の中で、元老からやがて独立し、みずからのリーダーシップのもとで立憲主義の政治を進めた。

韓国の保護化の方針の中で、日本政府は日露戦争の開戦という帝国主義をかけた戦闘に入る。日露開戦後、総選挙があり、第20議会では増税に成功した。第21議会では政友会との協力関係を結ぶ。緒戦での勝利、そして日本海海戦でのロシアのバルチック艦隊の撃滅で日本の国際的な地位は飛躍的に高まった。しかし巨額な負債を抱えた日本は幕引きとしてのポーツマス条約では賠償金を獲得できず、日比谷焼打ち事件が起きる。重くのしかかる外債問題を抱えるなかで、原敬の政友会との政治取引を行い、西園寺公望に政権を委譲した。こうして桂園時代が始まる。軍人出身の桂首相は、協調型の政治スタイルで元老や政友会との交渉にたけ、その後、第二次、第三次桂内閣を組織した。

中島が務めた第一次桂内閣のもとで、帝国議会は表1-5のような会期に開かれた。

表1-5. 第一次桂内閣のもとでの帝国議会

議会名	会期	種類
第16回帝国議会	1901年(明治34年)12月10日 - 1902年(明治35年)3月9日	通常会
第17回帝国議会	1902年(明治35年)12月9日 - 1902年(明治35年)12月28日	通常会, 12月28日解散
第18回帝国議会	1903年(明治36年)5月12日 - 1903年(明治36年)6月2日	特別会
第19回帝国議会	1903年(明治36年)12月10日 - 1903年(明治36年)12月11日	通常会, 12月11日解散

<sup>160</sup> 第二次山形内閣のもとで、明治32年に文官任用令が改正され、勅任官の任用を廃止した。ただし、内閣総理大臣秘書官や各省秘書官、内閣書記官長、各省官房長は自由任用が残された。戦前期官僚制研究会編・秦郁彦(1981) p.664 参照。

<sup>161</sup> 桂太郎の伝記については、千葉(2012)などを参考とした。

第 20 回帝国議会	1904 年（明治 37 年）3 月 20 日 - 1904 年（明治 37 年）3 月 29 日	臨時会
第 21 回帝国議会	1904 年（明治 37 年）11 月 30 日 - 1905 年（明治 38 年）2 月 27 日	通常会
第 22 回帝国議会	1905 年（明治 38 年）12 月 28 日 - 1906 年（明治 39 年）3 月 27 日 1906 年 1 月 7 日 桂内閣更迭・第一次西園寺内閣の成立	通常会

### 1) 中島秘書官の貢献

第一次桂内閣のもとで、桂太郎首相は中島秘書官を重宝した。そして「書記官長の役をも務め、秘書官としては実によく働いた」とされる<sup>162</sup>。中島が語るように、「第一次桂内閣に取りて最も苦心多く而して最も大切なりしことは、重要政策に於る元老との調和と言う一事」であった<sup>163</sup>。中島は元老の伊藤博文と桂首相とを仲介する仕事を何度もこなしている<sup>164</sup>。また元老と桂首相との秘密の会談などの時に中島だけが立ち会っている事例もある。例えば、ポーツマス講和会議の全権を小村寿太郎外相に決定する際、桂首相、小村寿太郎外相、伊藤博文、山縣有朋の 4 名の密談を官邸で中島一人だけで立ち会ったこともあった。中島は「私は平素首相格別の親任を受け、機密文書の保管を命ぜられ、自然書類の在り所はよく暗中に探り得る程であった」と回想している<sup>165</sup>。

『政界財界五十年』第六章の「内閣総理大臣秘書官在官時代」の記述の分量は、他章と比較しても豊富であり、日露戦争時における政界の舞台裏について精通していた。桂太郎の伝記作者たちが、なぜ中島の回想録を利用しないのか不思議なほどである<sup>166</sup>。

元老の伊藤博文・山縣有朋・井上馨や閣僚の曾禰荒助外相、山本権兵衛海相、大山巖参謀総長、児玉源太郎大将などと中島秘書官と親しくしていたことが『政界財界五十年』から分かる。これら大物政治家たちに関する中島の人物評も秀でている。

桂内閣時における中島の政治的貢献として特筆すべきことを 3 点あげよう。

日露開戦後に、英米の世論工作に金子堅太郎や末松兼澄が派遣され、尽力したとされている<sup>167</sup>。また開戦直後に桂首相兼内相は国内の宗教関係者に宗教対立が陥らないように訓令を出している。宗教関係者も開戦後の初夏に帝国ホテルに多数会合して、日本の立場を世界各国の世論に訴えようとの趣旨に出た<sup>168</sup>。その際、中島は日本が開戦に至った真意を

<sup>162</sup> 素水生（1918）p.78. 内閣書記官長は柴田家門で、寧ろ消極的で陰気であるのに対して、中島は円転滑脱、何人に対しても人触りが良く、豊富なる常識の所有者であり手腕家であったためだという。

<sup>163</sup> 中嶋（1951）p.110

<sup>164</sup> 桂内閣が日英同盟の締結時には、それに反対であり伊藤博文は日露協商をより望み、また日露戦争の開戦にも反対ではあった。こうした当時の伊藤博文の微妙な心情の動きについて特に中島の描写は優れていて、外交史の研究者も注目している。松本（1962）p.21 参照。

<sup>165</sup> 中嶋（1951）p.90

<sup>166</sup> 宇野（2006）、小林（2006）、千葉（2012）の参考文献による。

<sup>167</sup> 千葉（2012）p.108-109

<sup>168</sup> 中嶋（1951）p.75

内外に認められた学識のある日本在住の宣教師の談話体で海外の有力な新聞に掲載したほうが寧ろ効果的であると考えた。この件を桂首相に進言すると、桂首相は予想以上の賛成であった。この時、中島は母校の明治学院総理の井深梶之助と相談し、ウィリアム・インブリー博士にお願いすることになった。インブリーは桂首相と面談し、日本が極東の平和を求めているが、ロシアとの関係で止むを得ず開戦に至った経緯を理解し、その主旨はイギリスのスペクテーター紙に掲載され、さらに欧米の有力な新聞・雑誌に転載され、欧米の世論を味方につけることに成功した。これが第一に上げるべき貢献であろう。この間の会談の設定、英文から日本語への反訳、掲載方法の検討などは中島秘書官が進めた<sup>169</sup>。インブリーはその後、日露戦争時の貢献から1909（明治42）年に勲四等旭日小綬章を受けた。中島もそれは当然のことであったと認識していた。

第二に東京株式取引所における限月問題への対処がある。中島が秘書官となって間もなく、株式取引所の三月限取引の制度が一举に改正され、短期取引となった。閣議に出される前に、中島はこの案件の深刻さがすぐに理解されたが、即日発表されてしまった。中島の予想通り、東株の株価は暴落し、取引は停止した。杉山茂丸からの陳情もあり、取引所の実態に詳しい中島が、日本独自のこの先物取引の制度について桂首相に説明することが出来た。そして限月は復旧され、平田農商相などは辞職するに至った。

第三に日露戦争時、早く平和工作について相談するために児玉参謀総長と桂首相の間での連絡を容易にするために児玉と中島の間で暗号電報を作成した<sup>170</sup>。これは実際に活用され、中島は児玉の憂国の至誠に感激するのであった。

秘書官時代に中島は政友会の原敬とも関係が生まれたことも彼の人生にとって大きな契機となった。「交友関係が出来たのは、ちょうど日露戦争の後で」、中島が桂総理大臣の秘書官で、「比較的親任を受け」ており、「始終半政治的なことにも与っていた」<sup>171</sup>。

杉秘書官は桂内閣辞職の際に免官したが<sup>172</sup>、中島秘書官は引き続き西園寺内閣でも留任が求められ、一議会だけ勤め上げ、明治39年4月20日に依頼免官となった<sup>173</sup>。

日露戦争の際には「軍国会議」にも列席し、その功により中島久万吉は勲四等に叙され、旭日中綬章を受けた<sup>174</sup>。一族の中でも異例の出世であり、「羨望」された。こうして一官僚としての功績が社会的にも認知された。なお日露戦争中の1904（明治37）年7月には三爵

---

<sup>169</sup> 桂・インブリー会談の発案者は中島の記述によれば、中島本人であり、西洋文明社会におけるキリスト教の重要性の認識から発していた。また同時に桂首相自身もドイツでの留学体験からキリスト教の重要性を深く認識し、官邸を訪ねた本多庸一（青山学院長）からもインブリーとの会談を勧められ、中島秘書官にインブリーとの会談の設定を要請したという説もある。中島（2012）p.234

<sup>170</sup> 永野（2002）p.13

<sup>171</sup> 中嶋（1956）

<sup>172</sup> 杉は第二次桂内閣でも総理大臣秘書官[明治41.7.14-明治44.8.30]を勤めた。

<sup>173</sup> 歴代総理大臣秘書官の任免変遷については、戦前期官僚制研究会編・秦郁彦（1981）『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』p.288を参照。

<sup>174</sup> 五十嵐栄吉（1918）p.1146；中外新聞社（1912）p.271参照。

議員選挙で貴族院議員に中島は初めて互選された。そして任期の明治 44 年まで議員をつとめた。

## 2) まとめ：政・官・財界で知られた存在に

このように若くして、首相秘書官として政界の舞台裏に直接関与したことは、「渺たる秘書官」とはいえ、その後の彼の人生経路に大きな可能性を与えた。中島は元老をはじめ政界の実力者や官界さらには、以下述べるように財界にも知られた存在となるだけでなく、格上の華族との婚姻関係で上流階級での地位も高めた。

秘書官時代の 1903（明治 36）年 1 月には井上馨の媒酌のもと、岩倉具視の孫である八千子と婚姻し<sup>175</sup>、2 人の男児が授かった。また 1904（明治 37）年 7 月には若くして男爵議員に互選された背景には首相秘書官としての活躍があるだろう<sup>176</sup>。

政界・官界・財界・華族という高い社会階層における幅広い人脈形成はこの 5 年弱にもわたる首相秘書官時代に形成されたことは間違いない。

この中で当時の財界は渋沢をはじめとする銀行家・実業家たちであり、戦費調達への支援を依頼されて首相官邸や蔵相主催の鰻会とか鮎鱈会などに招かれた。このような会合の取りまとめを行った中島は財界の大物たちとの面識が深まったはずである。

また大阪財界の重鎮であった松本重太郎の百三十銀行の破綻という経済的大事件に際しては、官邸にきた大阪の土居道夫や藤田伝三郎を知るだけでなく、特別融資を請け負う安田善次郎・善三郎らと首相・蔵相との仲介役を中島は任された。

中島は西園寺内閣でも引き続き留任したが、古河鋳業の支援は親戚として避けられず、1 議会だけ勤めて、後任に託して免官となった。その際、古河入りを勧誘したのは、古河鋳業の副社長を退任することとなった原敬と従兄弟の陸奥広吉であった。

日露戦後の経済界の状況について中島は以下のように記述している。

「戦後の財界は大景気に恵まれて諸事業勃興の気運を迎え、既存の各種産業は拡張に拡張を累ね」た<sup>177</sup>。

このような実業界の発展期中に中島は古河入りを決意した。

## 4. 小括

以上、第 1 章では中島久万吉が漢籍の素養をバックボーンとしながら、高等教育を受け、高い国家意識を持っていたことが分かった。特に明治学院に在学中は、英語だけでなく靈

---

<sup>175</sup> 東京朝日新聞「岩倉子爵の妹と華燭の宴」1903 年 1 月 7 日より。八千子の叔父は公爵岩倉具定で当時、侍従職幹事であり後に宮内大臣。中島は義理の叔父から指導を受けていた。八千子の兄は子爵の岩倉具明である。

<sup>176</sup> 伯子男爵の貴族院議員の任期は 7 年で、中島は明治 37 年から明治 44 年まで議員であった。特権的な華族には「皇室の藩屏」という責務を負わされた。しかし「実際政治には全然欲望が無かった」。中嶋（1951）p.111 参照。

<sup>177</sup> 中嶋（1951）p.87



性深い宗教教育を受けたことは精神性を育む素地となった。実業界ではビジネス経験の遍歴をしつつ、有能な実務能力をしめした。さらに英語力と実務能力を買われて、日露戦争という国難の中で内閣総理大臣秘書官として貢献したことの概要を把握することができた。

中島は古河入りを前にして、国益のために献身的に政権の下働きをするだけでなく、有益な進言も行い実行した。国家意識の高さは父親譲りであり、土佐の自由民権の気風を充分に受け、学生時代は政論を訴える演説癖もあった。高い学識があり、漢籍の素養だけでなく、英語も自由に使えた。読書人の中島の学識は常に先の先を見通す慧眼をも備えていた。内閣秘書官時代は政界・官界での活躍により財界にも顔の知られた存在となる。すでに井上馨や渋沢栄一からは能力の高さを認められていた。男爵の貴族院議員となり、政治的欲望はないものの一政治家であった。社会人となってからは、信頼度が非常に上がったこと背景には本人の精神修養もあった。元老から頼られ、大物政治家たちとも面識があり、一官僚として官界にもネットワークをもち、政治的な交渉ごとには十分たけてもいた。水泳と弓の名人であり、野球もできて、山登りも好きな中島は健康面でも問題が無かった。初代衆議院議長となった父の長男として男爵となり、土佐系の人脈から総理大臣秘書官にもなれことは非常に恵まれていた。妻の八千子は、男爵の久万吉からは華族として格上の岩倉子爵の妹であり、明治天皇から信任の厚い岩倉家の親族となった。とはいえ決して親の七光りではなく、本人のもつ高い学識と実行力の賜物で異例の出世を遂げたのであった。

古河入りを前にして、財界人の要件として中島に欠けていたのは、大企業の経営トップ層となって経営手腕を発揮し、企業社会で広く信頼される存在となることであった。

## 参考文献

- 朝日新聞社編／松本重治・岡義武・西春彦・川越茂・加瀬俊一（1962）『近代日本の外交』朝日新聞社
- 足立卷一（1969）『現代日本の文学5 島崎藤村』学研
- 五十嵐栄吉編・発行（1918）『大正人名辞典』第四版、東洋新報社、p.1146
- 伊東一夫（1998）『島崎藤村研究—近代文学研究方法の諸問題—』明治書院
- 岩崎祖堂（1934）『壮談快挙歴代閣僚伝青少年時代編』増訂第21版、玲文社、p.1314-1317
- 宇野俊一（2006）『桂太郎』吉川弘文館
- 岡崎久彦（2009）『新版 陸奥宗光とその時代』PHP 研究所
- 川上浩史（1995）「京釜鉄道株式会社の設立と発起委員の活動について」『駒澤史学』48, 駒澤大学, 4月, p.23-39
- 菅礼之助（1960）「中嶋久万吉先生を偲ぶ」『経団連月報』8(5), 5月, p.30-31
- 岸田俊子（1986）大木基子・西川祐子編『湘煙選集3「湘煙日記」』不二出版
- 木村駿吉編（1890）『編精神的基督教—第二回夏期学校講演集』内田芳兵衛
- 桑村常之助（1911）『財界の実力』金桜堂、p.85-86
- 後藤国彦（1934）「中島久萬吉を語る」『経済往来』1934年3月, p.101-104

- 『高等商業学校一覽』(明治30年12月23日)
- 小林道彦『桂太郎 予が生命は政治である』ミネルヴァ書房
- 作道好男・江藤武人編(1975)『一橋大学百年史』財界評論新社
- 実業之日本(1916)「人の反面-横浜電線社長-男爵 中島久萬吉」『実業之日本』第19巻第29号, 9月15日号, p.33
- 実業之日本(1917)「初対面録-男爵 中島久萬吉氏」『実業之日本』第20巻第4号, 1917年2月15日号, p.13
- 渋沢青淵記念財団竜門社編纂(1957)『澁澤栄一傳記資料16』渋沢栄一伝記資料刊行会
- 昭和女子大学近代文学研究室(1957)「中島湘煙」『近代文学研究叢書第六巻』昭和女子大学光葉会, p.17-71
- 瀬沼茂樹(1981)『評伝 島崎藤村』筑摩書房
- 戦前期官僚制研究会編・秦郁彦(1981)『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版
- 相馬黒光(1985)『復刻版 明治初期の三女性-中島湘煙・若松賤子・清水紫琴』不二出版
- 素水生(1913)「少壮実業家(六)古河家管事男爵中島久萬吉氏」『実業之日本』第16巻第19号、9月, p.36-39
- 素水生(1918)「東洋製鉄新専務中島久萬吉男」『実業之日本』第21巻第10号, 5月1日号, p.75-78
- 竹内綱(1967)「竹内綱自叙伝」, 明治文化研究会編『明治文化集』第25巻雑史編, 日本評論社, 第2版, (初版, 1929年)
- 千葉功(2012)『桂太郎 外の帝国主義、内に立憲主義』中公新書, 中央公論新社。
- 帝国鉄道協会(1915)『朝鮮鉄道史』(帝国鉄道協会会報第16巻第6号付録)
- 戸川秋骨(1933)「中島商工大臣を中心に」『都会情景』第一書房, p.196-202
- 東京朝日新聞「京釜鉄道線路調査委員」1900年3月7日。
- 東京朝日新聞「株式重役改選」1903年1月20日。
- 東京大阪朝日新聞経済記者共編(1924)『財界楽屋新人と旧人』日本評論社, p.149-152
- 中川末吉翁記念刊行物編集会編(1965)『中川末吉』
- 中島久萬吉(1901)序, 信夫淳平『韓半島』東京堂書店
- 中島久萬吉(1911)『七書評説』
- 中島久萬吉(1950.2)「竹潭清話(四) 国老の真面目」『師友』4号, 2月, p.30-36
- 中嶋久萬吉(1950.8.30)「中嶋久萬吉閑談 政界財界回顧七十年2」『産経新聞』1950.8.30
- 中嶋久萬吉(1950.9.3)「中嶋久萬吉閑談 政界財界回顧七十年6」『産経新聞』1950.9.3
- 中島久萬吉(1950.9.9)「政界財界七十年 中島久萬吉回顧談11」『産経新聞』1950.9.3
- 中嶋久萬吉(1951)『政界財界五十年』大日本雄辯會講談社
- 中島久萬吉(1953.3)「教育に望むもの」『中学校』2, 3月号, p.2-10
- 中嶋久萬吉(1953.5)「青年と語る」『につぼん青年』第1巻第3号, 5月, p.2

中嶋久萬吉（1956）「民主政治家・原敬」『人物往来』8月  
中島耕二（2012）『近代日本の外交と宣教師』吉川弘文館  
永野護（2002）『敗戦真相記』パジリコ株式会社  
秦郁彦編著（2002）「中島久万吉」、『日本近現代人物閱歴事典』東京大学出版会，p.367。  
福沢研究センター編（1986）『慶応義塾入社帳 第4巻』  
松永安左エ門（2004）「私の履歴書」『経済人』（私の履歴書）7，日本経済新聞社編  
一橋大学学園史編集委員会編・発行（1982）『一橋大学学制資料 第三集 第二巻（明治十九～三十四年 東京商業学校～高等商業学校）』  
古河虎之助君伝編纂会（1953）『古河虎之助君伝』  
三田商業研究会編集「中島久万吉」『慶応義塾出身名流列伝』実業之世界社，1909年，  
p.417-418  
三井物産資料（物産25）「日記 明治32年1月より6月まで」  
三井物産資料（物産26）「日記 明治32年7月より12月まで」  
三井物産資料（物産504）「第1号 紹介状 使用人身許引受状：誓約書」  
明治学院編（1977）『明治学院百年史』  
森川英正（1980）『財閥の経営史的研究』東洋経済新報社  
横澤清子（2006）『自由民権家 中島信行と岸田俊子—自由への闘い』明石書店  
読売新聞「京城通信 昌原郡金鉉を要請」1900年12月5日。  
読売新聞「中島男爵が韓国から帰国」1901年3月16日。  
鷲山第三郎（1927）『明治学院五十年史』

## 第2章 古河財閥の経営

### 1. はじめに

中島久万吉が財界活動を始める要件として、大企業の経営トップ層となり、企業社会で広く信頼される存在となる点が欠けていた。

本章では中島が財界人としての足掛かりが形成された古河財閥における財閥経営者としてのキャリアを探究する。

なお古河財閥における中島の位置づけ、疎外に関しては、森川（1980）が詳しい<sup>178</sup>。森川によれば同じ産道銅業から出発した住友財閥と古河財閥を比較して、そこに優劣の差がついた背景としてトップ・マネジメントの差があることを鮮やかに描いている。ただ森川の論点からは古河財閥内では様々な系統が経営層に入り、チームとしての統一性がなく、中島の不満は「古河財閥トップ・マネジメントの意思統一にとって大きな妨げになった」ことになる<sup>179</sup>。

本章ではこのような森川による中島に対する過小評価を乗り越えて、中島自身が鉱山（産銅）一本主義の伝統の古河財閥において、古河家 3 代目当主の古河虎之助の教育や古河家奥向理事長だけでなく、産銅業の関連多角化や非関連多角化などいかに貢献したのかを明らかにする。

中島が日本工業倶楽部専務理事となった 1917（大正 6）年 3 月以降も古河財閥への貢献は途切れることは決して無かった。工業倶楽部専務理事に就任以降の古河財閥への貢献もある程度言及するのはそのためでもある。しかし財閥経営が安定化すると財界活動・その他への比重が増す。

### 2. 古河鉱業入り

#### (1) 二代目の古河潤吉の死

古河財閥とはよく知られているように古河市兵衛[1832-1903]による独裁的リーダーシップ<sup>180</sup>によって足尾銅山をドル箱として形成された小規模な財閥であった。市兵衛の独裁に

---

<sup>178</sup> 森川（1980）p.83-156 は「第三章 日本財閥史における住友と古河」であり、中島に関する言及が頻出する。

<sup>179</sup> 森川（1980）p.150

<sup>180</sup> 明治 40 年の足尾銅山での暴動事件の際、事務所に乱入した坑夫達は市兵衛の肖像を見て、退散したという。市兵衛は各鉱山の管理者たちと頻りに書簡を往復し、すべての現場を掌握していた。しかし成績が悪くならない範囲で放任主義を貫き、全面的に信頼した。専制的な独裁者ではなく、自分も部下も事業に使われる身だと確信していた。幹部の岡崎邦輔は、市兵衛は「人を使う点において天才なりき」と回顧している。砂川（2001）p.210-220 参照。五日会（1926a）『古河市兵衛伝』「手束」参照。中島も「これだけの大事業家であったから労働者との間もピッタリ意気が通じ、人心を得る妙を得ていた」と書いている。中島（1950.11.2）参照。

も関わらず、足尾鉍毒事件の対応や経営の近代化は養嗣子の古河潤吉[1870-1905]らに任されていった<sup>181</sup>。古河潤吉は陸奥宗光の次男であったが、子供に恵まれなかった市兵衛の養嗣子となった。しかし市兵衛には嫡男の古河虎之助[1887-1940]がその後、生誕した。既に述べたが、陸奥宗光は中島の叔父にあたり、潤吉と久万吉は従兄弟の関係にあった。

古河潤吉は生涯を独身ですごした。そして虎之助に古河家の家督を譲らせることを市兵衛につたえていた。古河市兵衛が 1903（明治 36）年 4 月に亡くなったあと、潤吉が古河家二代目の総長を継いだ。しかし潤吉はその頃から神経衰弱により療養に専念せざるを得なかった。

1904（明治 37）年 9 月には潤吉の兄の伯爵の陸奥広吉[1869-1942]が潤吉に代わって業務全般の管理や決裁を任されることとなった。しかし外交官である陸奥広吉には会社経営に専心する余裕はなく、以下述べるように原敬にその実権をゆだねた。

1905（明治 38）年 3 月 21 日には潤吉のかねてからの念願であった古河鉍業会社が合名会社に準じて設立され、古河家の家政と事業が分離されることとなった。この時、原敬[1856-1921]が副社長として入社し<sup>182</sup>、社長の潤吉に代わって業務一切の決裁を任された。市兵衛を支えてきた古参幹部の木村長七は監事長に、同じ古参幹部の近藤陸三郎は監事に、さらに陸奥系で政治家でもある岡崎邦輔が監事となった。この 3 名は潤吉が亡くなった後も三頭体制で、古河鉍業の経営を担ってゆく。

同時に「古河家奥向定規」も定められ、古河家の財産管理を行う管事 2 名がおかれた<sup>183</sup>。

このような中で、同年 12 月 12 日に潤吉は死亡した。続いて虎之助への古河家家督相続、古河鉍業会社社長就任の手続きがとられた。

潤吉の遺言により社長となる 19 歳の古河虎之助(米国留学中)を支える後見人木村長七、後見監督人陸奥広吉、親族会議員が公表された。ここに登場するのが親族会議員に指定された男爵中島久万吉であった<sup>184</sup>。ちなみに中島の他に親族会議員となったのは市兵衛の実弟の木村長右衛門、男爵渋沢栄一であった。なぜ中島は親族会議員に指定されたのだろうか。以下の節でそのことを明らかにする。

原敬は 1906（明治 39）年 1 月 7 日に西園寺内閣が組閣されると内務大臣に就任し、古河鉍業会社代表社員の地位を木村長七に譲って退社し、先ほどのべた三頭体制が敷かれた。

## (2) 中島の入社

若い虎之助を支えるために、経営者の一員として陸奥系を代表として古河鉍業の代表社員の原敬に代わって入社したのが中島久万吉であった。これはもとより推薦者がいてのこ

---

<sup>181</sup> 古河潤吉の生涯については『古河潤吉君傳』（1926b）を参照した。

<sup>182</sup> 原敬を古河に勧誘したのは、政界に通じていた中島であった。菅（1960）参照

<sup>183</sup> 中島は後に、明治 41 年 1 月には奥向財産の理事長を兼任することとなった。

<sup>184</sup> 古河鉍業株式会社（1976）p.357.『創業 100 年史』で、中島久万吉の氏名が初めて登場し、その際、この親族会議員という肩書で登場した。

とである。それでは何時ごろからどのように中島の古河入りが検討されていたのだろうか。ここではやや詳しく客観的な状況と本人の証言をもとにその経緯を探究する。

まず中島をめぐる客観的な状況を探る。

潤吉が「大に快方の様子」とされた1905（明治38）年の9月9日のイギリス公使伯爵陸奥広吉から古河鋳業副社長の原敬宛の書簡には以下のようなことが書かれていた。少し長くなるが、内閣秘書官であった中島のその後の人生を決定づける重要なことが書かれているので関連箇所をすべて抜粋する。

「貴書中御申越下され候中嶋久萬吉の事ニ徴するも、内閣更迭の近日ニ在ルハ明カト存候。中嶋は小生等親族中尤も有望の者ニテ、学才共にこれ有、壮年なれとも注意深キ男ニテ、かつ誠実ト存候間、永く会社ノ人ト成リテ尽力致すべき覚悟ニテ古河家ニ入社セハ、同会社の為メニモ利益ナルベキカト存候間、小生に於テハ何等異存これ無く候。

併し未タ同人よりハ一向何等通報これ無く候。本件に関し老台へ申上タル紹介者ハ古河内の者ニ候哉、又ハ他間の人ニこれ有候哉、御差支えこれ無く候えハ御一報願わく候。

中嶋ハ高等商業学校出身ゆへ、全く古河ノ如キ事業ト縁故これ無キ儀ニハこれ無く候え共、愈々入社ノ上ハ如何ナル資格ニテ御使用ノ御考ニ候哉。別段コレト申適當ノ地位モこれ無く候様存ぜられ候ト同時ニ、遊軍的の役員のみ増加候もまた面白カラズト存候。この辺の高見も御序ニ御洩シ下され候エハ、誠ニ有り難く存じ候。」<sup>185</sup>

この文面からは、中島の古河入りは誰かが原敬に提案し、中島の従兄弟である陸奥広吉も大賛成であることを原敬に伝えている。ただ入社後の中島の地位に関してはいまだ決定していないことが分かる。また中島は将来が「有望」な人物であり、「学才」があり、「注意深き」といわれるように冷静な判断ができる人物であり、また「誠実」でもであると表現されていることが重要な点である。広吉は中島に古河入りを勧誘する手紙を中島に送ったようだが、この時点ではまだ返事を返していない。ここに中島の注意深い性格が現われているが、10月23日づけの陸奥広吉から原敬宛の書簡でも中島は「例ノ件は何とも申し越さず候」と書かれているように、中島は広吉に長文の手紙を送りながら進路について返信はしていなかった<sup>186</sup>。

桂内閣の辞職が10月に新聞報道され、中島も自身の身の振り方を考えざるを得ない時期に来ていた。12月12日には先ほど述べたように、中島の従兄弟にあたる古河潤吉が死亡し、その遺言の中で、中島は古河家の親族会議員に指定されたことが判明し、19日には古河鋳業の中で公表された。潤吉が中島を親族会議員に指定した理由は、陸奥家の親族であるばかりではなく、広吉が述べているように中島が親族の中でも最も「有望」の人物であったと認知されていたからに違いない。

原敬から中島は潤吉が死亡する前から古河入りを「高論」されており、親族会議員にもなった中島の地位について、広吉は小役員では面白くなく、「何等かの名義ヲ以て古河家奥

<sup>185</sup> 原敬文書研究会編（1985）p.309-310。原文の一部は読み下し文に改変した。

<sup>186</sup> 原敬文書研究会編（1985）p.313

向の事務を補佐」するような仕事はどうかと原敬にたびたび相談している<sup>187</sup>。しかし、奥向の整理の補佐に中島が適任ではあるが、この件を古河家に説得させるためには陸奥広吉が日本に帰国してからではないと実行できないという<sup>188</sup>。12月25日の時点でも中島は広吉に対して入社についての返事をしていない。

中島が古河入りを決定した正確な時期は分からないが、桂内閣が更迭後、引き続き西園寺内閣の秘書官に留任していた翌年2月以降には中島の入社に関する件が、少なくとも監事長の木村長七に了承されていた<sup>189</sup>。社内文書よれば、中島が秘書官に留任していた頃、「或る人」から勧誘されていた中島が、木村と相互に協議して、古河鉱業会社の商務課長として招聘されたのは、1906（明治39）年5月5日であった<sup>190</sup>。中島は、「会社機関の完備」を図るため、古河虎之助を補佐する木村長七と並ぶ社員として古河家の持ち分の一部を譲渡された<sup>191</sup>。

また『古河虎之助君伝』では「中島久萬吉男は、明治三十九年五月、陸奥広吉伯によって古河に入社し、原敬氏が退社する際に同氏に代って合名会社出資者の一人となったのである。」と記述されている<sup>192</sup>。

以上客観的に見た中島の入社の経緯である。以上をまとめると以下ようになる。

中島が西園寺内閣の秘書官として留任していた時期に、「或る人」からの勧誘によって木村長七が中島と協議して、中島の招聘が決定された。

これに対して、本人は古河入りに関して以下のように証言（1957年）している。これも長い引用になるが、人生の一大転機にあたる場面での決意なので、すべて引用したい。

「私が最初に世に出たのは桂公の秘書官としてでした。桂内閣は御存知のように長い内閣でしたが、これが総辞職して西園寺内閣が生まれました。私も当然辞めねばならぬわけだが、実は辞めた後に何をしようという目的もないんです。ところが西園寺さんはそれまで秘書官を使ったことがないので、中島の辞めるのを少し延ばして欲しいという申出がありましてね。得たりや応と続けたようなわけですが、たまたま原敬さんが内務大臣になりましたね。この原敬さんは私の叔父の陸奥の関係から古河工業の総公務（筆者注；正確に

---

<sup>187</sup> 原敬文書研究会編（1985）p.322-324，明治38年12月25日付，明治39年1月5日の陸奥広吉から原敬宛の手紙より。

<sup>188</sup> 原敬文書研究会編（1985）p.324

<sup>189</sup> 原敬文書研究会編（1984a）p.491。明治39年2月5日付の木村長七より原敬宛て手紙。原敬から古河財閥の経営を任された木村長七は中島が役員として入社する際は、「当分社員」として入社することを了承した。

<sup>190</sup> 原敬文書研究会編（1989）p.200-201。「明治三十九年中報告書」の中の「中島久萬吉君ノ入社」（明治39年6月5日、後見人木村長七）より。中嶋（1951）p.114では7月入社と記述されているが、本人の記憶違いであろう。西園寺内閣の秘書官を依頼免本官となったのは4月20日であった。

<sup>191</sup> 同上「中島久萬吉君ノ入社」（明治39年6月5日）より。古河虎之助の持ち分を450万円に変更し、5万円を中島に譲渡する「決議書」が古河虎之助、木村長七、中島の三名の間で捺印された。

<sup>192</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p.70

は副社長)でしたが、大臣就任でそれを辞めねばならなくなった。そこで原敬さんは私を呼んで、「内閣も変わったのだから、いい加減首相秘書官なんか辞めて古河へ入る気はないか。その気があるなら世話をするよ」ということで、これも得たりや応ですわ。まあ、原敬さんと入替りみたいにして古河工業の番頭になって、爾来財界の人間になってしまったわけでした。自分から特に志望したわけでも何でもなく、ただ自然の成行きでそうなったのですよ。」<sup>193</sup>

この証言から分かることは、陸奥広吉から古河入りを勧誘されていた際には、古河入りの意志が明確に定まっていなかったことであり、そのため先述の通り陸奥広吉に12月末の時点でも返信をしなかった。明治39年1月7日の桂内閣の更迭のあと、何をするのかは全く白紙であったので、西園寺内閣の秘書官に留任できたことは幸いであった。そして古河入りを最終的に決意した理由は、古河潤吉の遺言によって親族会議員になったというよりも、原敬が第一次西園寺内閣の内務大臣となることで、原敬から古河入りを説得させられたということが真の理由であった。上記の木村長七が勧誘を受けた「或る人」とは岡崎邦輔かもしれない。

しかし自伝の『政界財界五十年』(1951)では、古河潤吉の死亡で、「世嗣の虎之助がまだ年若で、監督かたがた私が古河家に入ることに成って居て」と回顧していて、入社決断の時期が潤吉の死亡後の事であるように記述されている。また西園寺内閣で引き続き内閣秘書官を留任したことについて「聊か当惑したけれども」と書いているが、穿った見方をすれば、これは作為的な文章か、あるいは古河入りを内面で覚悟していたことの表れかもしれない。いずれしろ、原敬が西園寺内閣の内務大臣となったのは明治39年1月7日で、上記の証言(1957年)によれば、その後に原敬から古河入りの勧誘を受けて入社を決意したのが真相のようである。

前章でふれたように、原敬と中島との交友関係が出来たのは日露戦争の後で、桂内閣の秘書官として比較的親任を受けていた頃からであった<sup>194</sup>。古河財閥に直接的な影響力をもっている原敬の説得こそ中島が古河入りを決断する大きな要因となった。

また中島の証言(1957年)からうかがわれる「自然の成行き」という表現からは、自分から志願したというよりも頼まれて古河入りを果たし、長い人生を「財界生活」に終始することになった点に中島らしい信頼性と人間性が溢れている。そして本論文にとって重要なことは、財界人となった経緯も自分の意図では決してないことである。

### (3) 古河虎之助の帰還問題と中島の米欧訪問

古河入りした中島が最初に課題としたことは、財閥経営の実務面というよりも、古河虎之助<sup>195</sup>の人物教育であった。これは古河家の親族会議員の中島らに期待されていたことで

---

<sup>193</sup> 中嶋ほか(1957) p.95

<sup>194</sup> 中嶋(1956) p.40

<sup>195</sup> 古河虎之助については『古河虎之助君伝』(1953)によった。同書では中島による教導



もあった。本節では古河虎之助の人物教育の中心人物となった中島の行動、考え方について探求する。とくに留学中の虎之助の帰還問題に中島は中心的に関わり、これに関連した長文の書簡を何度も書いた。それらを以下、長くなるが詳しく分析することで中島の真摯な姿勢と明晰な思考力も合わせて浮かび上がらせる。

1906（明治39）年1月に原敬が古河鉱業の副社長を辞任し、三頭体制になったことは先ほど述べたが、その際、社長虎之助の帰朝が社内から要望された。陸奥広吉は反対であったが、暑中休暇だけならと了承された。米国ニューヨークにいた虎之助は帰朝にあたり、ロンドンの陸奥広吉から召電を受けた。ロンドンでは陸奥からは細かい指示が出されたが、その中で「中島男は陸奥家の親族中最も有為の材にして前に親族会議にも列席を乞うた事もある」ので「十分任用すべきこと」という注意を受けていた<sup>196</sup>。

同年の夏季に帰朝した虎之助は久根、足尾銅山、日光精銅所を視察したが、その際、商務課長であった中島も視察に同行した。中島はここで虎之助の人物を試みようとした。その時、虎之助の留学継続はよくないという感想を中島はすでにもっていた。

1907（明治40）年に足尾銅山で暴動事件がおき、その詳細を中島は米国に留学中の虎之助に報告した。その後、社内で虎之助の帰朝要望の声が再度高まった。親族会議のメンバーで帰還要望の主唱者は中島であった。他方で井上馨伯爵<sup>197</sup>、渋沢栄一男爵、原敬内相ら親族会議のメンバーは、逆に社長である虎之助は留学に専心すべきであるという案をもっていた。彼らから同意を得た中島は、米国の虎之助に帰朝の件の説論とさらにロンドンの陸奥を説得させるためにまず渡米する事となった。渡米にあたり中島は親族会議員の渋沢栄一に渡米の挨拶に伺った<sup>198</sup>。

中島の訪米を聞いた虎之助は鉱山見学の旅に出て<sup>199</sup>、中島とはサンフランシスコで同年7月15日に合流した。

虎之助が、帰国願望があるのか留学を続けるのか、その人物像はいかなるものかについては、中島から原敬宛ての詳細な書簡が残されている<sup>200</sup>。

中島から原への渡米第一報の主要なポイントをまとめると以下のようなになる<sup>201</sup>。原文は漢文調の語彙豊かな表現であるが、一部は現代語に意識した。

---

などが詳しく記述されている。

<sup>196</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p.65-66

<sup>197</sup> 井上馨伯爵を古河家の親族会議のメンバー依頼にする件は陸奥広吉から原敬に明治39年1月5日の手紙で伝言されていた。原敬文書研究会編（1985）p.323参照。同年4月15日には虎之助は井上馨に対して、その意向に従う旨の書簡を送った模様である。原敬文書研究会編（1984b）p.454参照。井上馨が各財閥に対する世話業的なことをしていたことはよく知られている。

<sup>198</sup> 渋沢栄一の明治40年6月27日に日記に「十一時、第一銀行ニ抵り中島男爵ノ来訪ニ接ス。海外告別ノ為ナリ」と記されている。渋沢青淵記念財団竜門社編纂（1966）p.458

<sup>199</sup> 虎之助は米国鉱山の視察を中島と一緒にしたいと希望した。中嶋（1951）p.115.

<sup>200</sup> 原敬文書研究会編（1984b）p.443-457.

<sup>201</sup> 明治40年7月21日付の中島より原敬宛て書簡（消印ビュート7月23日、東京1907年8月18日）原敬文書研究会編（1984b）p.443-446参照。

虎之助の帰国希望は陸奥広吉を通じて東京の井上伯爵や原内相に伝達されたが、井上・原らは帰国反対で、さらに3カ年英国で留学を続けるべきだという意見で、井上・原の書簡を虎之助に示し、自分の意見も伝えた。

これに対して虎之助は「異義はないが、寧ろ帰国して東北か足尾の鉱業所には行って実務の体験を積みたい」という希望を東京に伝えて欲しいと伝えた。

虎之助は自分の主張を出すのも申し訳なく、さらに3年の在学を決心したいと語るかと思えば、同行の小田川<sup>202</sup>には当初の帰国願望を話すなど、とにかく精神が定まっていない。サンフランシスコからこのモンタナ州ビュートまで4,5日共に行動して意見交換したが、在学の意気は衰え、堪忍の力は欠乏し、感情興奮しやすく、沈降しやすく、昨年と比べて小生意気のためか神経過敏症になったように見える。

英国修学も本人のためになるが、在学の意気が全くない今は、心機を一新するに足る動機を作らねば困難である。私の愚案は虎之助の手元を富裕にさせ、半書生半紳士の生活を英国で送らせることで、英国の事物を研究し、友好を結ばせるのも得策かもしれない。しかし不測の結果があるかも知れない。

以上、中島による細かく慎重な観察ぶりや新たな提案が盛り込まれている。論理構成も明確で行き届いた配慮をしていたことが分かる。

中島は、手紙の内容として井上伯爵には以下の文章は省略するとして、英国在留の際は、妻帯すべきではないかという意見を原に披露した。

さらに井上・木村などへは省略した文として、以下のようにさらに虎之助への否定的な性格描写を原に伝えた。

虎之助は世俗的情熱の方面が発達している。物に感じやすい神経質の人である。多少婦人的の傾向があり、これは幼時に女性家庭の感化によるものと察せられる。人に対して献酬する時は、こざかしいことをしようとし、故市兵衛の性情の一端を思わせる。僻みを抱く傾向があり、局量偏狭の小規模人物になる。将来多数の部下を統率し大局を総覧すべき人物となる上で十分に注意しなければならない。

虎之助の人物の大成を期待する中島にとって、現在の虎之助の人物描写はかなり否定的である。経営者として組織の上に立つ人物のあるべき姿が語られ、また古河市兵衛の性格についてもよく知っていたことが分かる。上記のように原敬にはより詳しく虎之助の人物像について伝えている。

---

<sup>202</sup> 小田川全之は鉱学博士で虎之助の留学を補佐しつづけ、経営幹部の一人となった。中島が宇田川博士と表記しているのは誤りである。

原敬への渡米第二報は、以下のように帰国願望の背景にある虎之助の心情を分析した<sup>203</sup>。また虎之助の鉱山視察にも本人に強い意欲がある訳ではないことを指摘した。

矢ノ倉老人と母より時々来書があり、老人と母を思い浮かべて子供のような思いに駆られている。しかし実家から帰朝希望は無いようである。世俗的情熱の方面が発達している。老人の命として御守札を常時肌身に離さない。家庭に対する思いが帰朝の希望を生む一原因に違いない。昨年帰朝して家庭的温情以外に古河家主人として種々の味を占めて、海外留学の乾燥寂寞たる生活を送るに堪えられない次第である。昨年秋に再度の洋行の際もとても辛かった様子であった。船中にて思郷病を起こして独居に堪えられなかった。帰朝希望の萌芽はすでにこの時点で起きていた。海外において陸奥伯の監督が厳しく、母親も不自由を強いられていることを聞いて、ますます帰朝を願う気持ちが強くなった次第である。

今回の鉱山見学も牛に曳かれて善光寺詣の感がある。本人は大きな興味もない。とても気乗りの薄い観がある。

虎之助は昨年の夏に一時帰国したことは先ほど述べたが、井上や渋沢栄一、原敬などは留学延長を推していたことに対して、中島は虎之助の再度の留学はすでに無理だと感じていた<sup>204</sup>。実際に中島の推察通り、虎之助の帰国願望は強まるばかりであった。

原敬への渡米第三報は長文であり、井上から虎之助に対して留学に留まる旨の電報があり、ロンドンの陸奥伯と話して留学を決心すべきであり、ロンドンの陸奥伯と協議が必要な状況であることが冒頭に書かれている。さらに詳しく虎之助の人物描写がされている。その際、経営トップのあるべきモラルも描かれていることが重要である。

第三報の要点をまとめると以下ようになる<sup>205</sup>。虎之助の人物像を4点から論評する。

#### 第一、一切感情的でとても理性に乏しいこと

この傾向が続くと、将来、会社事業のような公事を処理するにあたり私情に偏する傾向があるために、奸智俗才の徒に陥る。苦言は常に退けられ、巧辞が入りやすくなると、公私ともに衆心が離れてしまう。大機関の運転をすることは難しい。

愛憎の念が強く、婦人的神経過敏症で、幼時家庭の感化によるのか「スラリノンビリ」とした少年闊達の風に乏しく、大いに「ヒネ」たるところがある。妙に「マセ」たる点があるのはよくない。

#### 第二、人に向かってこざかしいこと

---

<sup>203</sup> 明治40年7月25日付の中島から原敬宛て書簡（消印ビュート1907年7月26日、東京1907年7月26日）。原敬文書研究会編（1984b）p.446-447.

<sup>204</sup> 「再度の米国留学は虎之助に取りて最早無理だ。・・・」と中島は回顧している。中嶋（1951）p.114-115.

<sup>205</sup> 明治40年8月5日付の中島から原敬宛て書簡（消印デンヴァー1907年8月7日、東京1907年9月2日）。原敬文書研究会編（1984b）p.447-450.

外面の献酬につとめて、心にもない巧辞を弄する。人に対する眼前の接待などには中々心細かに行き渡る。他人の気色をみて言動する点で、婦人的知恵があり、感心しがたい。

### 第三、規矩準繩を嫌うこと

父の片影を彷彿させる。百事不規則で、起居乱雑をのがれない。人に主長として公事にあたる場合、まず自らを律して他を律すべき統御の要道を得ないことになる。

### 第四、使費度がなく、濫浪に流れる傾向があること

これは境涯に慢心する人が常にあることだが、顧みないとほしいままになるだけでなく、公私衆心を総覧することがなくなる。将来大事業の統理者として世に対し人に対し、多少その犠牲となる用意に思うようにさせることが肝要である。

以上のように中島は虎之助の巨大な組織の統率者としての資質に不安な点を四点から論理的に解説している。ここには漢籍の素養に裏打ちされた指導者としてのモラルのあり方がその背後にあることがうかがえる。さらに中島は虎之助の資質について多く論じているが、以下のようなことにも言及している。

不自然的早熟を遂げて人に向けて細巧を用いる趣があるのは、部下の軽視を買いやすい。年少幼弱の精神を去るまで人間（筆者注；じんかん）に出ない用意が肝要である。……

このように神経質で意思薄弱な青年を強制させると（筆者；留学延長させると）、かえって恩を仇とすることになる。このことは私の考えを直言してあなたにだけ伝えたいことである。他人に語るべきことではない。

このように中島は原敬に対して虎之助の人物を「意思薄弱」と断定したことは内密にし、い欲しいことを伝え、用意周到である。今のままでは統率者として表に出させるべきではなく、その人物の大成が望まれることになる。

なお日本の鉦山王の御曹司と中島らの米国内での旅行は、現地の新聞記事ともなり、*Denver Post* には英語の流暢な中島男爵の時局談が掲載された<sup>206</sup>。

原敬への第四報も長めの書簡であり、虎之助の人物描写が繰り返された<sup>207</sup>。この書簡では、中島自身は *Denver* に滞在中は説論の使命から離れた見地から自分の観察した意見を述べたことを振り返った。虎之助への対処の仕方に配慮が必要であることを述べた。そして以下のように、虎之助の複雑な心理の背後にあるものを説明した。

---

<sup>206</sup> 「有名な政治家のデンバー来訪、日本の貴族と一行は戦争の可能性を一笑」という見出しの記事が *Denver Post* (1907, August) に掲載された。この中で写真つきで Nakashima 男爵の談話が掲載されている。古河虎之助君伝編纂会 (1953)p.72-73. 参照

<sup>207</sup> 明治 40 年 8 月 21 日付の中島から原敬宛て書簡 (消印ピッツバーグ 1907 年 8 月 22 日、芝 40 年 9 月 15 日)。原敬文書研究会編 (1984b) p.450-452.

本人にはその心底において一種の病的煩悶がある。それは「自分の生母<sup>208</sup>は元来純白の婦人ではないことを誰でも知っているだけでなく、その腹から生まれた自分は実際古河市兵衛の胤ではなく、名も知れない賤夫から生まれたのではないかと他人が疑いはしないか、従って、常に他人の軽視を受ける傾向はないか」という疑念がある。この疑念は幼時の境涯から生まれたものであると考えられる。

この書簡では中島は「説諭使」としての自分の立場を離れて、虎之助に英国留学を説得させるには無理があること、虎之助の気持ちを慮り、見守る姿勢が良いという立場で、最終的には陸奥広吉と協議するしかないという意見を述べた。原には、留学を望む井上馨にこのような虎之助の心境を伝達して欲しいことを伝えた。

Denver から汽車にてニューヨーク市に赴き、会社営業に関して普段から企画していたことを調査し、その後渡英することを伝えた。

ニューヨーク滞在後、船で渡英した中島は、ロンドン公使の陸奥広吉と協議した。その際、陸奥広吉の反対は極めて強く、なかなか意見の一致を見なかった。しかし、中島が新社長の虎之助の輔導は責任をもってあたるという証言に基づいて、陸奥の了解を得ることができた<sup>209</sup>。その後、渡英した虎之助を含めた3名での協議で最終的に虎之助の帰還問題は了承され、同年の冬までに帰国することとなった。

この協議の成果としての虎之助の今後の一身上に関わる重要な取決めについて、中島はロンドンから原敬宛ての書簡で報告した<sup>210</sup>。それは虎之助の将来に関わる誓書である甲号書類と、それに関連した乙号書類（其一）、乙号書類（其二）という書類からなっている書簡である。これらの書類は陸奥の指導のもと中島の意見も加味して作成された模様である<sup>211</sup>。これらは亡父である潤吉の遺言に基づき、虎之助が自立できるまで、後見人たちによって監督される旨を虎之助が了承し、さらに財産管理に関しても制限が加えられる内容となっている。

虎之助の実印は井上馨が大正元年まで管理していたことは知られていたが<sup>212</sup>、そのような方策はすでに虎之助の留学中において決められていたことがこの書簡より分かる。

虎之助には留学希望は無いだけでなく、修身的にも海外の生活はよくないことを中島は

---

<sup>208</sup> 虎之助の生母は市兵衛の四度目の正妻となった長谷川清子であり、元柳橋芸者であった。明治31年の時点では、市兵衛（66歳）の六人の妾の一人であった、その時清子は36歳で妾の中では最高齢であった。砂川（2001）p.248-249 参照。中島も市兵衛は「趣味一つなく道楽は花街だけだった」と回顧している。中島（1950.11.2）参照。

<sup>209</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p.73-74.

<sup>210</sup> 1907年9月30日付の中島から原敬宛て書簡（消印ロンドン1907年10月2日、東京1907年11月10日）。原敬文書研究会編（1984b）p.452-456.

<sup>211</sup> 同じ趣旨の書簡が陸奥広吉から原敬に届けられた。1907年10月3日付の広吉から原敬宛て書簡（消印ナイツブリッジ10月4日、ロンドン10月6日、東京07年10月24日）。原敬文書研究会編（1985）p.338-345.

<sup>212</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p.83-84.

ニューヨークに到着後に発見して大変驚いた。婦人に関わることはないが、端的に「起居が無規律で、飲食は無節制であり、費用は浪濫である。」と述べた。とにかく早く帰国させることが良く、虎之助の帰国を容認してほしいこと、この件は内密にして欲しいと原敬に伝えた。

以下、この重要な書類の概要を紹介する。

#### 甲号書類

虎之助から井上侯爵、渋沢男爵、原敬氏、陸奥伯などに宛て差出すべき誓書案

(前文省略)

- 一、各位は今後、適当な時期と認めるまで、井上侯閣下にすべて一身一家に関する管理を乞い、一切のことについて同侯閣下または代表者の指揮に従うこと。
- 一、会社事業の経営は原敬、木村長七、近藤陸三郎、岡崎邦輔など重役諸氏に一任すること。
- 一、小生の実印は井上侯閣下において適当と認められる方法によって保管を乞うこと。
- 一、弊家永遠の基礎を強固にし、あわせて将来財産上の安全を図るため、今後適当な時期において各位と協議の上、家憲<sup>213</sup>を制定すること。

(以下略)

#### 乙号書類 (其一)

陸奥より井上侯爵、原敬氏に対する覚書

本人監督のための愚見として

- 一、井上侯から適当な代表者を選定し、この代表者によって日常の監督に当たらせること
- 一、奥向予算は井上侯または代表者の承認をへて決定し、予算外の支出は必ずどちらかの承認をへること。
- 一、家長として自覚もあるので、奥向予算中に主人の自由に使用できる定額の特別費目を設定すること。
- 一、本人一身の修行に関して
  - (イ) 修行地については色々と候補はあるが、寧ろ本店にあつて重役指導のもとに実務を見習うことが最も本人のためになる。
  - (ロ) 兵役に応徴させ、しばらく規律のある生活のもとにあれば、本人の健康を増進させ、節制力を養うことができる。
- 一、ふさわしい配偶者があれば、結婚させて一身一家に対する責任を感得できる。

#### 乙号書類 (其二)

---

<sup>213</sup> 家憲問題は帰国後に中島にその立案が任された。

財産管理が最も憂慮すべき点であり、この際、奥向財産の中から鶴子、美代子、照子など適当の者へ若干の財産を分配し、奥向財産の金額並びに右等分配の各持分額を合わせ、これを資本として合資組織の一銀行<sup>214</sup>を設立し、法人としてその資産の運用処理すべて一人の任意にならないようにしてはいかかと考える。更に進んで鉱業会社をもこの種の方法のもとに真実の合資組織とし、虎之助の行為を牽制させることができる。

(以下略)

以上のように誓書を通じて、虎之助の対して適切な時期まで一家や自身について指導を受けること、会社事業の経営は幹部に任せること、実印は井上に預けること、家憲を定めることが取決められた。

さらに日常の管理指導を受け、奥向財産の利用に制限があることが特に定められた。その他に本店で重役より会社経営の実務の修行を始めること、兵役につかせること、結婚させることなどが定められた。

最後に奥向財産を保全する策として、虎之助と妹 3 名の財産を定めて、銀行設立を通じて資産運用をすることも提案された。

上記の取り決めのうち、兵役以外はほぼ実施にされることになった。

なお米英訪問で当初の目的を終えた中島は、欧州大陸の巡遊を思い立った虎之助、小田川と欧州各地（ドイツ・フランス・ベルギー・スペイン）を約 1 か月視察し、マルセーユから先に P O 社の船で帰国の途についた<sup>215</sup>。この間、中島はドイツのエッセンから 1907 年 10 月 14 日の消印のある書簡を井上馨に送り、虎之助の性格や帰還問題の総括に関して改めて書き送った<sup>216</sup>。虎之助は同年の 12 月 19 日神戸に帰着した。

初の米欧巡歴は虎之助の帰還問題の解決のためだけでなく、中島自身の見識を高めたに相違ない。中島は書簡の中で、原敬に渡航の御礼を述べたが、古河鉱業から潤沢な旅費が支弁されたと思われる。

#### (4) 古河家管事長

虎之助と中島らが帰国して一ヶ月たった 1908（明治 41）年 1 月 21 日には第二回目の古河家親族会の会合が開催された。この場で上記の誓約書が新たに作成され、実印が井上馨に渡された。実印の返還は 1916（大正元）年 12 月 1 日であった。陸奥広吉は会社の代理者と後見監督者の任務を辞し、中島は現職のまま、古河家管事長となった。中島は「内事を監督」する管事長として古河家奥向の財産管理を任されたほかに、古河家としてのファミリーの永続を守るために以下のような課題に対処した。

---

<sup>214</sup> 銀行設立も中島の指揮のもとに動くが、井上馨らは反対した。

<sup>215</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p. 74-75

<sup>216</sup> 中島はドイツのベルリンから井上馨宛に、虎之助の帰還問題に関する総括の書簡（1907 年 10 月 12 日）を送った。井上馨関係文書・資料番号 130-1(国会図書館蔵)参照。

## 1) 家憲問題

井上から古河家百年のため家憲の制定を命じられた中島は、家憲制定には元々気乗りしなかった。しかし研究するのもよかろうと思い、全国を歩いて、門外不出の三井家家憲など諸家の家憲を1ヶ月あまり渉猟して大いに研究につとめた。その中で酒田の本間家の家憲には感銘を受けた。しかし家憲とは永久なものではなく、可変的なものであり、「結局馬鹿らしくなり、虎之助社長に辞めたほうが良いと勧め、原敬に相談し、原も笑って賛成した」<sup>217</sup>。

原敬、木村長七も家憲の草案を作成したが、まとまらなかった<sup>218</sup>。古河家において家憲は制定されることはなかったが、虎之助は自らの言行にこれらの徳目を反映させた<sup>219</sup>。

## 2) 虎之助の人物教育<sup>220</sup>

虎之助の人物の大成を陸奥から任されていた中島は、補導者として杉山令吉を推薦した。虎之助の日本における教育は中学五年程度に止まり、不十分であった。徳と智能を身に着ける教養が必要とされ、中島は教学古典を基本とした素養の獲得が緊要であると主張し、杉山の推薦に至った。中島が杉山を推薦した理由は以下の2つであった。

杉山は中島の高等商業学校時代の恩師（商業文の講座を担当）であり、当時早稲田大学で教鞭をとっていた。英文、漢籍に通じ、陸奥宗光外相のもとで執務し、下関講和会議の随員ともなり、陸奥の『蹇蹇録』や海軍省の『日清戦争史』を補筆したとされる。また書道の達人であった。

杉山は東伏見宮依仁親王に漢籍を進講しており、同妃殿下は岩倉公爵家と重縁関係にある西郷家との縁組が成立したということも理由であった。

杉山による講筵は虎之助夫婦の縁談が決まった1908（明治41）年の夏頃から、結婚後は夫婦そろって、毎週一回行われた。最初は論語、次に日本外史に移って、人格の培養と尊王愛国心の高揚が求められた。中島もつとめてその「論語」の講席に参列した<sup>221</sup>。

杉山の教育を熱心に受けた虎之助は難解な仏典を読み下し、その徳風に感化させられたという。

中島自身も1911（明治44）年12月に古河家の築地本邸において『七書評説』を数回口述しており、虎之助の人物教育に自らも漢籍を講ずることで関わったことがうかがえる<sup>222</sup>。

---

<sup>217</sup> 中島（1950.9.15）

<sup>218</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p. 85

<sup>219</sup> 同，p.85-86

<sup>220</sup> 同，p.93-100。「杉山令吉翁に師事す」を参照。

<sup>221</sup> 中嶋（1951）では週2度「論語」講義に参列し、3年以上続いたとされる。しかし実際には大正初年まで約7年間継続された。

<sup>222</sup> 中島（1911）は一橋大学図書館に唯一所蔵されており、杉山令吉の寄贈印が押されている。同図書館には杉山が寄贈した多くの書籍が確認できる。



### 3) 虎之助の結婚問題<sup>223</sup>

アメリカに滞在していた頃からの懸案事項である虎之助の結婚問題は帰国早々から自薦他薦の候補者が降るように現れた。すでに陸奥広吉は虎之助の結婚相手は名門の出がよく、外国人と妻帯してはいけないことを米国留学中からすでに注意を与えていた。

中島は1908（明治41）年春に妻と縁戚にあたる西郷家の令嬢を候補として、井上の同意を得た。中島はすぐに妻の従兄弟にあたる岩倉具張公爵を通じて、西郷家に内談を試みた。岩倉具張の妻は西郷従道の長女・桜子であった。西郷家では一時期辞退したが、井上馨が重ねて交渉した結果、漸く承諾を得た。これが西郷従道の次女・不二子であった。

この年の夏に麻布内田山の井上侯爵邸で正式の見合が行われた。虎之助は母と、不二子は兄の侯爵夫婦と参列し、中島も列席した。

婚礼の儀式は渋沢男爵夫婦を媒酌人として同年11月20日に築地古河本邸で盛大に挙行された。

### 4) 虎之助の叙勲、受爵<sup>224</sup>

虎之助が留学中の1906（明治39）年12月に虎之助を願人として三大学建設資金百五万円余りが五カ年の分割支出で文部省に寄付されたことがあった。これは国家予算が不足していた際、原内相の勧めによるものであった。中島をはじめ親族会議の議を経て正式決定されたものであった。この義挙は天下の注目を集めるものであった。この巨額の寄付や長年の古河の産業貢献により、1911（明治44）年には虎之助は勲三等に叙せられ、瑞宝章を賜った。さらに1915（大正4）年11月には京都御所における大正天皇即位の大典において勲三等勲章佩用者の代表として参列の榮譽を受けた。同年12月には男爵を授けられ、華族に列せられた。

これらの恩典は虎之助夫婦の日常生活、家風、古河家事業の発展に大きく影響をもたらしたとされる。中島男爵から古河男爵は上流社会に紹介されたことであろう。

### 5) 社長としての虎之助

森川（1980）によれば、オーナーの虎之助は住友と同じように経営には一切関与しなかったことになる。森川がその証拠として引用しているのは『古河虎之助伝』であり、虎之助が帰国してから間もない21歳以降の若い時期の話である。社長としての修行期間において、虎之助には「大勢の大舅小姑が周囲で眼を光らせ、内部では木村、近藤、岡崎の三監事をはじめとした老臣達が、一挙一動について注意を怠らなかった。」<sup>225</sup>。中島も例えば虎之助

<sup>223</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p.119-127「結婚」を参照。

<sup>224</sup> 同 p.128-130「叙勲、受爵」を参照。

<sup>225</sup> 古河虎之助君伝編纂会（1953）p.110-111

が田中光顕元宮内大臣の邸宅の売り建てに際して、買おうとしことを注意した<sup>226</sup>。このように虎之助のマイナス面が強調されているが、いつまでも重臣たちの指導をうけていたわけではない。

彼は毎日会社に出社し、幹部に囲まれながらも、やがて社長としての求心力を発揮するようになった。1921年、古河虎之助男爵が35歳の時、ある社員が社長について語った証言によれば、以下のように記述されている<sup>227</sup>。

- ・至って親切で、丁寧で、傲岸なところは少しもない。
- ・(社長から)『大いに力をかけて下さい』と言われた時、私は全くひきつけられてしまっ  
って・・・。
- ・元気そうな顔、・・・見るからに勇気がありそうです。
- ・堂々たる抱負経綸を有し、自ら陣頭指揮に立って作戦を廻らすのですから、何といっ  
ても偉いものです。

『古河虎之助伝』でも事業の意思決定に関与していることが分かる文章があり、経営に一切関与しなかったということは当たらない。このような人物としての成長に中島が献身的な努力を惜しまなかったことは古河家にとって幸いなことであった。

中島の古河家に対する貢献は誰の眼からも見ても大きかった<sup>228</sup>。ただ中島の虎之助への評価は以下のように最後まで厳しかった。

「(市兵衛は) 事業の人で従って人材も抱擁したが、虎之助の代になって人を使う器でなかったため、折角の人材も外に出て成功した。」<sup>229</sup>

## 6) 政党支援金<sup>230</sup>

古河財閥の経営に参与した岡崎邦輔や原敬は政友会を領導したが、その政治資金としてたびたび古河に支援が政友会から求められ、度々応えていた。「政友会の金庫番が、何かというと金を取りにくる。」総選挙、補欠選挙と、毎日のように来たという。会社としては勝手放題に政治資金に拠出することは何事かということになる。古河家の財産管理をしていた中島も流石にいやになったという。この時、中島は虎之助に以下のように相談した。

「実は政友会が何だかしらんけど、古河の親類みたいな顔をして、金を貰いに来る。岡崎君も、野田卯太郎も貰いに来る。殊に私と近いものだから、権利のような顔をして来る。

<sup>226</sup> 明治43年4月16日の原敬日記。同 p.412

<sup>227</sup> 古河商事会社KK生(1921) p.78-80

<sup>228</sup> 明治42年7月13日付の陸奥広吉書簡、原敬宛で「中嶋男ノ如キモ・・・古河家ニ対スル其助力大ナリトハ一般ノ熟視スル所ニコレアリ候以上・・・」と中島の貢献を評価し、古河家においてそれなりの待遇を与えるべきだと提案している。原敬文書研究会編(1985) p.349 参照。

<sup>229</sup> 中島(1950.11.2)。古河から外に出て活躍した人物として、中島は稲垣平太郎(商工大臣)、菅礼之助(石炭庁長官)、松村光三(大蔵政務次官)、平沢千万人(元帝国生命専務)を挙げている。中島(1950.11.3) 参照。中島自身も古河の外で活躍した人物であった。

<sup>230</sup> 中嶋(1956) 参照。

ところが、木村（長七）や近藤（陸三郎）のように、朝から晩まで古河家の事業自体を経営している側から言えば、不平がうんとあると思います。どうでしょうか、この際、ひとつ、まとまったものを原君にやって、それで縁切りにしようと思うんだが、しかし、これはあなたの金なんだから、あなたの意見を聞きたい」

こうして虎之助の同意を得て、まとまったものを原敬にもっていった。この話は工業倶楽部による米英訪問団の直前のことで、1921（大正10）年である。中島がシカゴで原敬の暗殺を知り、翌年帰国した。原敬はこの巨額の資金を銀行に預け、政友会宛に遺言書とともに残していた。誰から原敬に贈られたかが問題となり、岡崎は帰国した中島に尋ね、金額が一致したという。遺言で、この資金は次の政友会総裁に差し上げてくれとのことであった。中島が古河家の財産管理を任されていた一側面として上記の逸話は興味深い。

以下、木村や近藤などの古参幹部と中島との関係が注意しながら、次節に進む。

### 3. 古河財閥の多角化

#### (1) 疎外説の再考

原敬と入替りのような形で中島は出資社員として古河入りし、1906（明治39）年5月5日に商務課長のポストを与えられた。当初は先述したように古河家理事長として奥向財産の管理や虎之助の人物教育などに専心したが、古河財閥の事業経営にも大きく貢献することになる。渡米中は鉱山視察だけでなく、ニューヨークでは銅の販売に関する調査をしたことが書簡からうかがえた。

古参の老臣である木村長七や近藤陸三郎らがいる中で、途中入社した三十代の中島の立場はどのようなものだったのか。入社した際に、商務課長という肩書を与えられたが、この地位は最高幹部の木村長七が兼務していた部長級の重役待遇であった。

まず中島が古河財閥の幹部であった時代の歴代トップの一覧を表2-1に示した。

表2-1 古河鉱業会社（→古河合名会社）のトップ

時期	トップ・肩書	特記事項
1905.3 ～	木村長七 監事長	1906.1 原敬副社長辞任し木村・近藤・岡崎の三頭体制 木村辞任し、岡崎邦輔理事退任、原敬引退。
1913.12	理事長（1909～）	引退後相談役、古河家3代に仕えた。古河家の柱石。
1913.12 ～1917.11	近藤陸三郎 理事長	鉱学博士 急死し、直後に古河商事設立
1917.11 ～1921.4	井上公二 総理事	慶応卒 1918年から8か月欧米を外遊 商事破綻の引責辞任
1921.4 ～1927.1	昆田文次郎 理事長	鉱毒事件対策の弁護士として入社 鈴木を幹部に迎える、「至人」（中島評）
1927.1	鈴木恒三郎	

～1931.8	理事長	
---------	-----	--

典拠：日本経営史研究所編『創業百年史』（1976）等参照

\*古河鋳業会社は 1911 年に古河合名会社に改称され、1917 年には三社体制に再編され、古河合名会社は持株会社となる。

森川（1980）によれば、古河財閥のトップ経営層に加わった中島は近藤の死後、トップ・マネジメントの中枢となりうるべき存在であった。しかし 1913（大正 2）年の原敬の引退や 1915（大正 4）年の井上馨の死亡で、陸奥系代表の中島が立場は著しく弱まったとされる。さらに新卒採用の井上君二や、親族の中川末吉・吉村萬治郎らの台頭で、その立場を弱くしたとされる<sup>231</sup>。

中島には確かに近藤の死後、トップ・マネジメントの中枢を担うだけの位置にたっていたことは確かである。1917（大正 6）年に近藤の急死のあと、井上公二が総理事となった。井上は慶応卒で市兵衛によって採用された。すでに 20 有余年幹部として勤め、足尾銅山の所長、営業部長、常務理事ともなった経歴の人で人望も高かった。そして井上総理事の次に位置していたのが、「古河家の最高顧問」とメディアから呼称されていた中島であり<sup>232</sup>、1917（大正 6）年 12 月には古河合名の理事となっていた。この時、中島は工業倶楽部の専務理事ともなっており、「敏腕家として、広く世間で推重され」ていた。

中島にとって、古河財閥は事業家としての拠点とはいえ、その中での栄達は本人の意図ではなかったと思われる。経営の意思決定に多く関わったが、老臣に阻まれ、中川末吉のような親族たちに実権を次第に譲っていったのである。以下、『昆田文治郎君の生涯』に掲載された中島の証言を引用しよう。

「古河会社には、元老があつて、私のする事は新しく積極的で常に非難されました。衆と一致しなかつたのであります。処が、昆田君は朝夕私の処へ参つて、他との融和を図られたのであります。私と他の古老との間を周旋して呉れた昆田君の苦心は私の深く感謝して居る所であります。私は何時でも会社を止めると言う肚で、さう申しますと昆田君は「ま、辛抱して呉れ給へ」と兄や父母の様な調子で宥めるので、私も参つて了ふので、こんな事が多かつたのであります。

昆田君は、余りに、多数者の意思に一致しようと力め、為に徹底を欠くと見られる事がありました。多数決を主とする為に、後へ未解決の或る物が残る、つまり問題が残る事になるのであります。……（昆田君は）人事の間に苦勞した人であります。」<sup>233</sup>

元老とは古河家の老臣の木村長七や近藤陸三郎を指し、中島はいつでも古河の事業を辞

<sup>231</sup> 森川（1980） p.149

<sup>232</sup> 白眼生（1917） p.22

<sup>233</sup> 薄田貞敬（1929）p.563-564

める覚悟であったことが分かる。次に『中川末吉翁伝』に掲載された中島精一（中島の長男）の証言も引用しよう。

「親父は晩年にそういっていましたがね、結局いまね、古河家事業でもって、作った時には中島はもう危険分子であって、古河なんかにはあぶなくて仕様がな。やたら金を使う、引張り出しているんな仕事をするんで、危険人物視されたんだ。だが今日になってみりゃね、俺がその金だして、そして作った仕事がみんな古河の・・・。」<sup>234</sup>

序論でも述べたが森川も上記の中島の証言を引用しながら、老臣たちからの反対による古河財閥内での中島の「疎外」を論じた。近藤は特に市兵衛以来の産銅一本主義にこだわった。しかし、以下述べるように古河系諸事業の骨格作りに果たした役割は甚大であった。たとえ原や井上の支援がなかったとしても、中島の経営に関する貢献は自立的にあったとみるべきであろう。彼が関与した多角化の実態について、その概要について検討する。

## (2) 多角化の概要 その1

産銅業に関連した多角化、非関連多角など古河財閥の拡大に中島は大きな貢献を果たしたが、古参幹部からは危険分子のように見なされていたらしいことが分かる。「やたら金を使う」という意味は、産銅一本主義であった古河鉱業会社や古河家による「投資事業の開始」を意味した。投資事業の全案件にどれほど中島が関与したかは不明である。しかし、中島が1906年に入社して以降、「投資事業の開始」<sup>235</sup>といえるほどの投資案件が増大した。その多くは本業に密接に関連したものと言われる<sup>236</sup>。しかし保険業のように必ずしも本業とは直接関係の無い投資もあった。中島は重役として投資先の傍系会社や取引先の取締役となった会社が幾つもある。

その代表例は古河の取引先の横浜電線製造の過半数の株式引受け（1908年）であり、中島らがその取締役となり、1911年には同社の社長となった。

第一次大戦後には投資先はさらに激増するが、古河による投資事業が日露戦争後に開始されて以降、第一次世界大戦前までに中島が関与したと思われる投資先や実際に引き受けた役職などを年代順に並べると表2-2の通りである。

表2-2 第一世界大戦以前に中島が関与した投資事業・取引先

年月	投資事業	特記事項
1907年	南満州鉄道株式会社	1906年設立。岩下清周が監事。 古河鉱業会社の出資、1914年には12320円出資。

<sup>234</sup> 「中島精一談」中川末吉翁記念刊行物編纂会（1965）p.423

<sup>235</sup> 「第6節 投資事業の開始」日本経営史研究所編（1976）p.241-249

<sup>236</sup> 同 p.242

1908年 7月	横浜電線製造株式会社	古河虎之助その他の名義で過半数の株式引受け。 古河鉱業から中島、桜井貢吉が取締役、中田敬義が監査役に。 1911年に中島が社長に、古河鉱業の商務課長を辞任。古河の経営権掌握。
1909年 2月	足尾鉄道株式会社に名称変更、本社東京に	1898年に市兵衛らが創設。足尾鉱山の運搬。1909年近藤が社長。中島は取締役。1918年国有化。
1909年 8月	東亜興業株式会社の創立	桂首相・小村外相が第1回会合に出席。国策会社で三井系など財界有力者の出資。渋沢が発起人代表。古市公威が専任社長。中島と大橋新太郎が監査役。
1910年	万歳生命保険株式会社	1906年8月に岩下・藤村らの創立。中島も株主。 1910年に古河虎之助に持株譲渡 1916年に博愛生命からの包括移転。 1924年川崎家に持株譲渡。日華生命と合併。
1910年	天龍運輸株式会社 (+城西学園) 注1	この年、中島は同社の重役。久根銅山の鉱石を輸送する会社で、古河の取引先。同社の創設者金原明善は篤志家として著名。
1911年 春	南方ゴム園の経営	1911年7月に中島はマレーシアのゴム園の視察。 古河家の事業として古河ゴム園経営の始まり
1912年	博愛生命保険株式会社	中島による増資株引受け交渉。 1914年2月中島が社長。 1916年9月包括移転により万歳生命と合併。中島社長辞任。
1913年 4月	日本興業株式会社の創立	才賀電気商会救済が目的。古河鉱業会社の出資、社債引受。中島は取締役。 1916年9月清算、中島社長。
1913年 6月	日新護謨株式会社の創立	古河・渋沢系のゴム事業。取締役会長に。 1931年12月に中島が清算人。
1913年 8月	中国興業株式会社の創立	国策会社で財界有力者の出資。渋沢が発起人代表。古河虎之助 300株、中島 200株。
1914年 4月	中日実業株式会社の創立	中国興業株式会社の改称。創立総会に中島出席。 中島が大橋新太郎と監査役

出典：故岩下清周君伝記編纂会（1931）、中日実業株式会社（1943）、日本経営史研究所編（1976）、朝日生命保険相互会社（1990）など

注1：城西学園は運送会社の出資で設立されたので付加した。

表2-2に関連して、横浜電線製造（1920年に合併して古河電工となる）以外の事業について若干コメントする。

南満州鉄道株式会社（満鉄）は岩下清周が監事になっていることもあり、岩下と親しかった中島も桂首相のもとで日露戦争の際には深く関わった。そのため満鉄への投資も中島が虎之助に提案したと思われる。

満鉄・東亜興業・中国興業（中日実業）はすべて対支投資の国策会社であり、財界有力者がすべて参加しており、財界に顔の広い中島も当然関わることとなった。

東亜興業の設立にあたり、その第一回会合は三井集会所で開催され、桂首相、小村外相が列国競争下にある清国で日本の実業家の活躍を熱望する内容の講演があり、実業家たちは心を熱くした<sup>237</sup>。渋沢、益田、近藤、大倉、日比谷など有力実業家が集結した1909（明治42）年7月の第一回会合のあと、8月に創立総会が開催され、古市、山本、岩下、小田切、門野、白岩の六名が取締役となり、大橋新太郎と中島が監査役となった。『東京朝日新聞』には役員すべてが顔写真入りで報道された<sup>238</sup>。当時の財界有力者を網羅した事業において、渋沢・益田と親しかった中島は古河財閥も代表して、監査役入りしたと思われる。だが、多忙のために監査役就任を辞退した。

中国興業が改称して中日実業になるが、同社には古河合名として1918年の時点で500株を保有していた。1920年には日中合弁の中華電気製作所が設立され、日本側からは古河・住友が各2割、中日実業が1割を出資した。横浜電線は電話借款をもとに、長距離ケーブル工事、海底線の製造などを請け負った<sup>239</sup>。

これら国策会社の役員となれた背景には、実業家として高い見識をもっているだけでなく、政界・官界にも太いパイプがあったことが考えられる。

天龍運輸株式会社は古河の鉱山の一つである久根銅山の鉱石を運搬しており、古河の取引先にあたる。中島は1910年の時点で、同社の重役であった<sup>240</sup>。古河と資本関係があったかは不明である。その後、同社の支配人で日本運送専務となった竹内龍雄の創案で運送会社の人材養成のために1918年7月に城西実務学校が設立された。その際、中島は同校の設立者として支援し、開校式にも参列した<sup>241</sup>。城西実務学校は一時閉校となり、1929年に中島（国際運送株式会社社長）・新井博次校長から野口援太郎が引受けた。その際改称して城西学園中学部となった。これが現在の城西学園（東京都豊島区）として存続している<sup>242</sup>。

万歳生命と博愛生命への出資引受けも中島の人脈からもたらされたものであった。博愛生命の前身は京都生命であったが、経営も不安定で農商務省の注意を受け、財産整理等の

---

<sup>237</sup> 故岩下清周君伝記編纂会（1931）p.75-76

<sup>238</sup> 朝日新聞「東亜興業会社成立」1909年8月19日

<sup>239</sup> 日本経営史研究所編（1976）p.249

<sup>240</sup> 株式会社丸運（1993）p.111

<sup>241</sup> 株式会社丸運（1993）p.116-117

<sup>242</sup> 城西学園校史編集委員会（1978）

行政命令を受けていた。1912年に中島が増資株引受けの交渉を受け、重役選任と営業方針の一任を条件に引き受けた。同年に役員交代し、小原元美と鈴木市之助を常務取締役とした。資本金を50万円とし、1913年本店を東京に移転し、全国の主要都市に支店出張所、代理店を設置した。1914年2月には中島が博愛生命の社長となった。小原は当初中島を動かし会社の基礎を作った。鈴木は古河家の親戚で慶応卒、留学体験もあった。1915年には契約高1200万円を計上し盛況を見たとされるが、これは古河家総理として「名声かくかくたる」中島男爵一派の信用手腕の賜物だとされた。中島の妻の東本願寺の大谷伯爵と従姉の関係で東本願寺の後援を得て被保険者募集に裨益したという<sup>243</sup>。

しかし年々古河家からの寄付金で収支を償う状況で、約半数の持株を有する古河家は、万歳生命に対し保険契約包括移転を行うことを1916年9月の臨時株主総会で議決した<sup>244</sup>。万歳生命と合併したのは1917年8月であった。

古河の保険事業への投資は上記の他に帝国生命（1888年創立）への投資が1910年から開始された<sup>245</sup>。やがて大株主となり古河系の生保会社となる。現在の朝日生命へと継承されるが、中島と帝国生命との関係は不明である。

古河ゴム園の経営は本店技師の鈴木審三の提言によって1911年春にマレー半島で原始林を購入した時から始まり、主に小泉浩らによってその経営が任された<sup>246</sup>。中島は第一に松村光三をマレーに派遣し<sup>247</sup>、一年後の1911年の春にマレー半島を訪問した。

同じゴム事業の日新護謨は1913年5月に設立され、渋沢・古河系の事業としてシンガポールで事業を行っていた。古河系の出資が多かったが、渋沢系の増田明六が取締役として中心となり、中島も取締役会長として経営に携わった<sup>248</sup>。ゴム事業に関して中島の貢献は少なからずあった<sup>249</sup>。経営難による古河側の追加融資はなく、1931年には清算した。

日本興業は才賀電機商會を救済するために古河鋳業が株式や社債を出資して資本金400万円で1913年4月に設立された。電気事業は電線事業を行っている古河とは無縁ではないが、才賀に泣きつかれた岩下清周と中島は懇意にしており、その関係から古河の財力で才賀救済の財政支援がなされた。「やたら金を使う」危険な投資とも考えられる案件である。

日本興業は1914年7月には藤本銀行に31万円の債務返済をするなど、順調に経営されていた。しかし1915年2月の北浜銀行問題により同社の社長の岩下清周や取締役の速水太郎らが拘束されるに及び、事業が続かなくなった。郷誠之助が整理に関与するという報道も出たが、最終的には1916年9月に破産の申請を出した。その際、同社の最終の社長は中

---

<sup>243</sup> 遠間（1915）p.274

<sup>244</sup> 朝日生命保険相互会社（1990）p.593

<sup>245</sup> 帝国生命と古河との関係は「帝国生命保険会社」古河虎之助君伝編纂会（1953）p.393-402 参照。

<sup>246</sup> 「南洋における護謨園経営」古河虎之助君伝編纂会（1953）p.140-146

<sup>247</sup> 中島（1950.11.4）

<sup>248</sup> 柴田（2005）p.186-190

<sup>249</sup> ゴム関連会社18社の合同準備会が1921年に開かれた際、ゴム園の資産算定で中島が標準価格設定案を出したことがあった。柴田（2005）p.172 参照。



島、取締役は天春又三郎、岩倉具光、監査役は荻野元太郎で、中島と親しい人々<sup>250</sup>であった。1917年1月には同社清算事務所東京出張所において電気用品売却の広告が出された<sup>251</sup>。

以上のように中島が潤沢な古河の資金をもとに事業拡大の戦略家であり、実行者であったことが分かる。そのために盛んに新人材を登用した<sup>252</sup>。事業的な成功もあれば、途中で失敗したものもある。事業拡大が本格化するのには、以下のように第一次世界大戦後の好況期であった。

### (3) 多角化の概要 その2

古河合名会社は第一次大戦下のブームや重化学工業化の興隆の中で、「在来の鉱業、電線を中心とする企業から、1917（大正6）年には、商事・銀行を直系会社として設立し、さらに電線・ゴム・電機・化学・紡織・保険・鉄道・製鉄など多角化事業に傍系会社を設立し、コンツェルン体制を固めていった。」<sup>253</sup>

これらの事業で中島が中心的に関与したのが、銀行や商事の設立であり、電線・ゴム・保険・製鉄の各事業であった。古河銀行の設立には計画段階から深く関わった。古河商事会社の独立にも関わり<sup>254</sup>、横浜電線製造の社長となり、その事業との関係で横浜護謨を自ら設立し会長となった。また外部において大会社である東洋製鉄の専務となったのであった。

古河合名が三社へと分割されたのが1917年12月で、中島は総理事の井上公二に次ぐ理事の立場にあったことは先ほど述べた。同年の1月には中島は古河家事業協議会主事<sup>255</sup>という肩書であり、近藤理事長のもと古河財閥の全体の事業を統括していたことが分かる。恐らく中島が制度設計に深く関わったことが想定される。

1917年～1918年の古河合名会社の組織改革により、古河コンツェルンが形成されるが、この時期以降に中島が主に関わった会社や事業は表2-3の通りである。

表2-3 第一世界大戦後に中島が関与した会社、投資事業

年月	会社、投資事業	特記事項
1917年6月	東京古河銀行の設立	中島が銀行設立計画を開始。松村光三が調査事務に関わり、5年間の外遊。1917年中島（古河家

<sup>250</sup> 天春又三郎は外遊歴の豊富な実業家らしく、豪傑な人物であり、中島家にもよく来訪し、多くのエピソードを残した。「桑名の殿様」という題名で久万吉の長男の中嶋精一氏が書いている。『回想』未収の手記で中嶋信光氏提供。岩倉具光は中島の義理の弟で、岩下清周の娘の主人。荻野元太郎は古河の幹部で中島の部下にあたる。

<sup>251</sup> 同社の情報は東京朝日新聞（1913年4月2日～1917年1月12日）による。

<sup>252</sup> 素水生（1918）p.78

<sup>253</sup> 日本経営史研究所編（1976）p.256

<sup>254</sup> 商務課課長であったが、「古河商事会社を作った」とされる。素水生（1918）p.78

<sup>255</sup> 同 p.280

		事業協議会主事) から設立趣意書などの提出。資本金 500 万円で 6 月に設立。虎之助頭取、中島は取締役。1931 年清算。
1917 年 10 月	横濱護謨製造株式会社の設立	横濱電線製造の多角化。グッドリッチ社との合弁契約は中島邸で激論数日間。資本金 250 万円。中島が取締役会長に。
1917 年 11 月 1 日	東洋製鉄株式会社の設立	渋沢が発起人となり有力財界人に呼びかけて資本金 3000 万円で設立。中島が調査委員として当初から関与し、専務取締役に就任。古河合名からも 2000 株以上出資した。 1921 年八幡に委託経営。 1934 年清算。日本製鉄の合同に参加。
1917 年 11 月 15 日	古河商事株式会社の設立	古河鉱業会社の営業部門を独立。商務課が営業部に 1911 年に改組。商務課長の中島が当初から電線の販路の拡大につとめていた。 1920 年 2 月「大連事件」で古河の危機。 1921 年古河鉱業に吸収。
1920 年 4 月 15 日	古河電気工業株式会社の設立	横浜電線製造と日光電気精銅所・本所工場の合併、資本金 3000 万円。社長に。専務山口喜三郎。 1921 年 3 月専務中川末吉。 1925 年 12 月社長退任。
1923 年 8 月 22 日	富士電機製造株式会社の設立	1921 年 1-6 月ジーメンス社との東京交渉で中島が覚書に調印。1922 年ベルリンにて合併の大綱を協定。設立の際は一株も出資せず。

出典：日本経営史研究所編（1976）など

上記はどれも大会社であるが、その創設に中島は深く関わった。しかし横浜護謨や古河電工のように事業が安定化すると、放任するわけではないが、会社の経営を現場の経営者に任せるとというのが中島の経営スタイルであった。

この中で古河商事への改組は中島が関わったが、その経営には当初からタッチはしなかったようである。やがて一支店員の無謀な投機によって「大連事件」がおき、古河財閥の屋台骨を揺るがす巨額な負債を抱えたことは悲劇であった。

これらの事業で古河電工は、前身の横浜電線製造への出資および買収を実行し、1911 年には商務課長を辞任して、社長となってその事業の拡大につとめた。事業家としては最も重点をおいた本業だった。横浜電線製造への出資や買収に井上馨や原敬が調停役として関

与するが<sup>256</sup>、彼らの指導のもと中島社長案はすんなり実行されたのであった。

そして電線と関連した護謨事業へと多角化して、1917年に横浜護謨を創設し、創設時からその会長となったことも古河系の事業多角化のうえで大きな功績であった。当時としてはまだ外資との合弁事業がまだ少ないなか、来日したグッドリッチ社副社長レーモンド氏との交渉を開始した。「直情径行」のレーモンドとの交渉は、双方譲らず激論となり、数日間夜更けまで青山の中島邸の新館（古河邸の洋館を移築）で行われた<sup>257</sup>。横浜護謨の社史には中川末吉口述「横浜護謨創立の動機」があり<sup>258</sup>、中川が中心的に関与した印象を与える。しかし覚書締結にいたる具体的な折衝は中島が中心的に関わった<sup>259</sup>。

以上のように古河系の多角化に果たした中島の功績は甚大であったと言わざるをえない。古河電工や横浜ゴムは現在でも大企業として存続している有力会社である。ただ経営が安定化すると中島はその権限を大幅に他の幹部に委ねてしまい、財界・その他の方面でより多忙となってしまふ。

財閥内に収まらないスケールと人的関係がすでに政界・財界に築かれている中島の財閥外での貢献について最後に述べたい。

#### 4. 財閥外での活躍

##### (1) 東洋製鉄の設立

東洋製鉄は、古河合名から2000株以上が投資されるものの、古河系の事業ではない。鉄飢餓という産業界の危機に対応するため、財閥だけでなく財界有力者が糾合して1917年によく設立された大会社であった。財閥をはじめ日本中の資産家層から広く資本金を集められた背景には、八幡製鉄の技術的な支援もあった面が強い。この会社はある面、民間資本による国策的な会社であった。

専務取締役となった中島が実質的には設立委員長であった<sup>260</sup>。正式の設立委員長は渋沢になったが、中国での鉄鉱石の原料確保が明らかとなり、1915年暮れに中島らが設立プランを立てはじめた。同時期に渋沢も設立プランを立て、両者が統合して設立に向けて動き出した<sup>261</sup>。製鉄奨励法の立法化だけでなく、立地選定や中古の溶鉱炉の輸入などで中島は中心のかつ献身的に関わった。その際、東鉄設立時には雑誌などで古河合名の閲歴ではなく、東鉄専務の閲歴が利用された<sup>262</sup>。

---

<sup>256</sup> 日本経営史研究所編（1991）p. 81-95.

<sup>257</sup> 中島精一ほか（1987）

<sup>258</sup> 四十年史編纂委員会（1959）p. 4-6

<sup>259</sup> 中嶋（1951） p.126

<sup>260</sup> 中島（1967） p.23

<sup>261</sup> 「製鉄会社創立、大体方針定まる」『東京朝日新聞』1916年4月27日

<sup>262</sup> 1918～20年の雑誌・書籍。素水生（1918）、中外商業新報社編（1919）、ニコニコ山人（1919）、ニコニコ山人（1920）

東洋製鉄の設立は、日本工業倶楽部の設立と同時期であった。両機関の設立準備期には同じ人物が関わっていたという特色がある。財界の有力者が集まって東洋製鉄が誕生したのと同様に、同じ財界有力者によって日本工業倶楽部という財界団体も誕生した。

1916年に製鉄会社設立に向けて実行委員9名が表2-4のように選定された。そして渋沢・尾崎を除いた実行委員と麻生太吉・西野恵之助を加えた9名が東洋製鉄という大会社の取締役となった。麻生は筑豊の炭鉱王であり、西野は会社再建のプロであり、有能な専門経営者として招かれた。

表2-4 製鉄会社設立の実行委員

渋沢栄一（76歳，財界の長老）	中野武宮（68歳，東京商業会議所会頭）
和田豊治（55歳，富士瓦斯紡績社長）	大橋新太郎（53歳，博文館社主）
藤山雷太（53歳，大日本精糖社長、商業会議所副会頭）	郷誠之助（51歳，東京株式取引所理事長）
中島久万吉（43歳，横浜電線製造社長）	倉知鉄吉（41歳，中日実業副総裁）
尾崎敬義（38歳，中日実業専務取締役）	

実業界で既述のような活躍から財閥経営者としてその名を知られ、企業家のコミュニティに中島が十分に認知されなければ、こうした大会社の取締役にはなれないはずである。

なお敷衍すると、大戦後の鉄価の下落により、早くも東鉄の経営は傾き、自力での経営は困難となった。政府との交渉で、東鉄は1921年より八幡製鉄に委託経営されることになり、財界人たちによる経営は頓挫した。しかし経営資産は有効活用された。やがて中島が商工大臣として法案成立させた日本製鉄（官営八幡製鉄所と民間製鉄会社の合同）に1934年には吸収されてしまった。東鉄は福岡県戸畑地区にあり、八幡製鉄所の拡張計画を実現する上で有用な沿岸の敷地を占め、さらにその原料の鉄鉱石も八幡製鉄に裨益した。

## (2) 実業界の代表者

中島が実業家の代表者の一人として認識されるには実業界での活躍が必要であるが、一事業というよりも、実業界全体に対する見識が必要である。そうした意識をもっていた例として国策会社への投資が上げられる。対政府との太いパイプが中島にはあったが、その点も実業界で認知される重要な背景であった。

1914年に国策会社である中日実業が設立された際、中島はその監査役となったことはすでに述べた。財界有力者によって設立されたが、その時すでに中島は財界で認知された存在であった。翌年1915年に広東水害罹災民の救助に関して、支那関係の実業家が渋沢男爵のもと招集された際も中島や大橋新太郎、和田豊治などが集められた<sup>263</sup>。渋沢から信頼され、実業界でも認知されていることは既述の通りである。

<sup>263</sup> 「広東水害救恤 実業家会合」『読売新聞』1916年7月24日

個々の実業家が横の連携やネットワークを広げるには、様々な出会いの場が必要である。実業家の紐帯を形成する場としては日本橋倶楽部のような社交倶楽部は、日本工業倶楽部が設立される前から存在していた。中島や大橋新太郎、服部金太郎などは日本橋倶楽部の会員であった<sup>264</sup>。そして日本工業倶楽部の設立に向けた最初の話し合いも日本橋倶楽部に集った実業家たちによってなされた。

政府からも実業界を代表する人物とみなされた例として、伏見宮家からの招待、政府の審議会への参加などがある。

実業奨励に関心が高い伏見宮家ででの午餐会に招待されることは大変名誉なことだった。日本を代表する実業家の一人として1917年3月に中島男爵は東京地区の一人として、三井八郎右衛門男爵、渋沢男爵、近藤廉平男爵などともに招かれた<sup>265</sup>。

政府の審議会の委員となることは財界人のあかしでもあるが、工業倶楽部が正式に設立される前から、中島は審議会の委員となっていた。すなわち1916年4月に勅令をもって経済調査会の委員となった。大隈首相が会長となった経済調査会は、欧州大戦後の国際経済の激変への対応策を求め、貿易部・租税部・交通部・金融部・産業部の5つの部属からなった。中島は貿易部16名の委員の一人であった。経済調査会は寺内内閣にも継承され、中島らは、翌年には特別委員として報告書を提出した。

### (3) 日本工業倶楽部設立と中島の関与

財界団体の日本工業倶楽部は1917（大正6）年3月に設立されることになるが、その創設にあたり、中島はどのように関わっていたのだろうか。その概要と設立後の活躍の一端を論じる。

日清・日露戦争時には財界の中心勢力が金融家であった。産業化の進展にも関わらず工業家の発言の場がなく、その社会的地位は低かった。商業会議所は中小企業中心の法的団体であった。日本工業協会（金子堅太郎会長）という団体があったものの個人会員を中心として弱小であった。協会の理事であった大橋新太郎らは金子と相談した。さらに1915年12月3日に日本橋倶楽部で大橋、和田豊治、植村澄三郎、藤原銀次郎、吉村鉄之助、諸井恒平、中島の7名が会合し、法人会員をもとに協会の刷新策が検討された<sup>266</sup>。その際、財界世話役で渋沢二世と言われた和田は、全く別種の団体を創設することを提案し、金子からも了承をえた。

三井・三菱両家から出資を仰ぐことなどが日本橋倶楽部でのその後の会合で検討され、拠金の総額も会館建設を射程にいれて、100万円に釣りあげたのは和田であった。大橋・和田は中島を連れて三井・三菱から最初に寄付を仰ぐことに成功した。

<sup>264</sup> 「社交倶楽部 日本倶楽部」『読売新聞』1916年9月16日

<sup>265</sup> 「伏見宮実業家を召さる 今日御本邸」『読売新聞』1917年3月26日

<sup>266</sup> 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会編集（1972）p.23. 本節は『五十年史』などを主に参照した。

1916年1月には発起人総会が開催され、創立委員40名は実業界の錚々たる顔ぶれを集めた。同年2月から創立委員会が開催され、中島は常務委員10名の中の一人となった。1916年は創立事務と寄付金集めに追われ、翌1917年3月10日に日本工業倶楽部の創立総会が開催された。専務理事として和田・大橋の2名が即決まった。和田と大橋は無二の親友であった。この二人の暴走を止める有能な秘書役として後輩の中島も諸井恒平らに説得されて専務理事となった。後の一人は財界の顔役ともなっていた郷誠之助で合計4名の専務理事が決まった。理事の互選による理事長には団琢磨が推薦された。本人は再三固辞したが、最終的に受け入れた。この日本工業倶楽部専務理事の肩書きこそは、中島の財界人としての長いキャリアを形成する土台となった<sup>267</sup>。

日本工業倶楽部設立趣意書は中島の起草によるもので「簡潔にして雄渾」であり、倶楽部の精神が最もよく現われているものであった<sup>268</sup>。

#### (4) 財界の大物へ

日本工業倶楽部の活動・運営に中島は中心的なメンバーの一人として本格的に関わることとなった。製鉄業の奨励、労働問題などに、中島は委員また委員長となり意見を集約し、政府に提言し、政府から信頼されるようになること逆に諮問を受けるようになった。あらゆる委員会の議事に関わった中島は、内外の重要な「陳情書・稟申書」の文案を書いた<sup>269</sup>。

中島は倶楽部の活動に誇りと愛着をもって<sup>270</sup>、先輩たちの庇護のもと縦横に財界活動を行った<sup>271</sup>。その後、1921年の英米訪問実業団の設営には副団長として活躍した。日本を代表する財界人としての存在感を示した中島は、外遊後は方々で講演を頼まれた。

時代がさらに下って、1930（昭和5）年には商工省産業合理局常務顧問として産業界を指導した活躍については、序論でその概要にふれた。その延長で1932（昭和7）年には商工大臣となった。大臣在任中には、工業倶楽部の長年の主張であった八幡製鉄所の民営化・製鉄合同を実現させたことは政治家・財界人として最も大きな功績であった。中島にはその他多くの財界人としての功績があるが、ここではその一部を指摘したに過ぎない。昭和初年において中島は財界人として最前線の一人として最も光り輝いていたといえよう。しかしその直後に政治的生命を抹殺する事件に遭遇することは、第3・4章で述べる通りで

---

<sup>267</sup> 専務理事の在任期間は極めて長い。専務理事の在任期間は、大正6年3月～昭和11年7月、昭和14年1月～昭和22年、昭和24年～昭和27年。評議会会長は昭和22年～23年。昭和27年～35年4月。

<sup>268</sup> 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会編集（1972）p.27

<sup>269</sup> 中嶋（1951）p.144-145

<sup>270</sup> 倶楽部の会館が出来た時、中島は部下の菅礼之助に「あんな喜んだ顔は滅多に見たことがなかった」と言われたほど、会館について自慢しながら説明した。菅（1967）p.157

<sup>271</sup> 鈴木商店にいた長崎英造と比較して、中島は、自分は苦勞をしていないと回顧して次のように発言している。「古河の仕事にこびりついているのも厭になって勝手放題にとういうか、一種道楽的に、財界のいわゆる箱持ちみたようなことをはじめて、これも先輩諸君の非常な御支援で、大した苦勞もなかった。」中島（1952）p.8

ある。

若くして財界首脳部入りした中島も、大物実業家の中にあって一步一步その地位を高め、存在感を増した。そして「財界の大物」となっていった<sup>272</sup>。

## 5. 小括—財界人となった背景

中島は、古河財閥のトップ・マネジメントの一角に収まり、古河の多角化・事業拡大に多大な貢献をなしたことが分かった。古河入りした際は、虎之助の教育や古河家の財産管理にも心を砕き、大組織の統率者を育てる教育者であったことは、深い学識と信頼感が高い中島の一端を披歴したものであった。こうした高い学識は、のちに仏典を通じた精神的指導者となる大きな下地でもあった。

そもそも中島はなぜ財界人となれたのだろうか。

財界人となった背景には、第1章で論じたように、有能な首相秘書官という履歴から政界・官界に太いパイプを元来もちつつ、多くの財閥など実業界にも広くネットワークをもち、特殊な地位と立場にあったことがあげられる<sup>273</sup>。第一に中島は財界人になるべく、実業界と政官界をつなぐ希少な地位と経歴をもっていた。

第二に本章で論じたように古河財閥において実業家として大きな功績をあげたことが直接的に起因しているだろう。

第三に深い学識があり、外遊体験もあり、広い視野をもっていたことも財界人となるうえで裨益した能力であろう。特に深い学識に基づく中島の文筆力は工業倶楽部が内外に活動する上で根本的に役立った。

もともと中島は古河財閥内の狭い領域に飽き足らず、広く日本や世界に目が向いていたことが何よりも財界活動に駆り立てた主体的な要因であった。そして若くして財界活動に相応しい政治経済的な諸問題が山のように押し寄せ、その一つ一つに対処した。

元々政界・官界に顔が広がった中島は、その能力の高さが他の財閥トップ層などの実業界でも認められ、政界と実業界を仲介する財界人になるべくしてなったのである。それも本人の希望というよりも先輩の実業家からの引き上げがあり、信頼され、その期待に応えていくなかで、財界人としての存在感を増していったのであった。

## 参考文献

朝日生命保険相互会社（1990）『朝日生命百年史 上』朝日生命保険相互会社

<sup>272</sup> 中嶋精一によれば、「おやじさんは」帰国後はますます「近寄りたたい存在になった」と証言している。中嶋精一ほか（1987）p.24 参照。

<sup>273</sup> 古河合名で中島の部下であった菅礼之助は、当時の実業家は政治家に容易に会うことはできなかったし、財閥の主人公と随時面会ができるような交際を結ぶことは並大抵ではなく、政界・財界を橋渡し、意思疎通機関として、あらゆる好条件をもっていたのは、中嶋さんと郷誠之助ぐらいのものであったと述べている。これは桂首相・加藤高明首相がいた大正初期の頃の話である。菅（1960）参照。

- 五日会 (1926a) 『古河市兵衛翁伝』 五日会
- 五日会 (1926b) 『古河潤吉君傳』 五日会
- 薄田貞敬 (1929) 『昆田文次郎君の生涯』 後昆会
- 株式会社丸運編 (1993) 『創業百年史』 株式会社丸運
- 故岩下清周君伝記編纂会 (中島方) (1931) 『岩下清周伝』 近藤乙吉
- 渋沢青淵記念財団竜門社編纂 (1966) 『渋沢栄一伝記資料 別巻 第1 (日記 第1(慶応4年-大正3年))』 竜門社
- 城西学園校史編集委員会 (1978) 『資料城西学園六十年史』 城西学園創立六十周年記念事業実行委員会
- 菅礼之助 (1960) 「中嶋久万吉先生を偲ぶ」 『経団連月報』 8(5), 5月, p.30-31
- 菅礼之助 (1967) 「菅礼之助君」, 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会編 『財界回想録 上』 日本工業倶楽部
- 砂川幸雄 (2001) 『運鈍根の男 古河市兵衛の生涯』 晶文社
- 柴田善雅 (2005) 『南洋日系栽培会社の時代』 日本経済評論社
- 遠間平一郎 (1915) 「檜舞台に出現したる博愛生命保険株式会社 (中島久萬吉)」 『事業及人物』 中央評論社 p.273-276
- 中日実業株式会社 (1943) 『中日実業株式会社三十年史』 中日実業株式会社
- 中川末吉翁記念刊行物編纂会 (1965) 『中川末吉翁』
- 中島久萬吉書簡・井上馨宛・1907年10月12日・「古河虎之助帰朝ノ件」・伯林発 (『井上馨文書』 第21冊、資料番号120-1、国会図書館憲政資料室所蔵)
- 中島久萬吉 (1911) 『七書評説』
- 中島久萬吉 (1950.9.25) 「政界財界七十年 中島久萬吉回顧談 (27) 本間老主と石工須坂 横浜ゴムと古河電工の創立」 『産経新聞』 9月25日。
- 中島久萬吉 (1950.11.2) 「政界財界七十年 中島久萬吉回顧談 (61) 地球の底まで掘れ 天成の事業家古河鉦山翁古河鉦山王」 『産経新聞』 11月2日。
- 中島久萬吉 (1950.11.3) 「政界財界七十年 中島久萬吉回顧談 (62) 怪腕菅君の「猛獣使い 稲垣、松村、平沢の輩出」 『産経新聞』 11月3日。
- 中島久萬吉 (1950.11.4) 「政界財界七十年 中島久萬吉回顧談 (63) “露探” となって逆スパイ 快男子“榛沢君”の活躍」 『産経新聞』 11月4日。
- 中嶋久萬吉 (1951) 『政界財界五十年』 大日本雄辯會講談社
- 中島久萬吉・長崎英造・飯田清三 (1952) 「日本経済とデモクラシー(鼎談)」 『パブリックリレーションズ』 3(11), 1月, p.8-12
- 中嶋久萬吉 (1956) 「民主政治家・原敬」 『人物往来』 8月, p.38-47
- 中嶋久萬吉ほか (1957) 「座談会～第一線の高齢者に聞く一私達の日常生活：中嶋久萬吉；下村宏；一松定吉；安藤画一；倉内喜久雄；村江則忠」 『高齢医学』 1(2), 1957年4月, ライフ・エクステンション研究所, p.48-53



- 中島久万吉（1967）「中嶋久萬吉君 回顧談」，日本工業俱樂部五十年史編纂委員會編『財界回想録 上』日本工業俱樂部， p.1-25
- 中嶋精一「桑名の殿様」（手書きの手記，中嶋家より）
- 中嶋精一ほか（1987）『回想』（私家版，中嶋家より）
- 中外商業新報社編（1919）『財界双六』中外商業新報社， p.153-157
- ニコニコ山人（1919）「将に來らんとする世界的大競争の実業界に活躍すべき我実業界の四十男百五十人」『実業之日本』第 22 卷第 1 号， 1 月 1 日号， p.137
- ニコニコ山人（1920）「十年前に卒業した東京高商出の傑出者総評」『実業之日本』第 23 卷第 3 号， 1920 年 2 月 1 日号， p.44-46
- 日本経営史研究所編（1976）『創業 100 年史』古河鋳業株式会社
- 日本経営史研究所編（1991）『創業 100 年史』古河電工株式会社
- 日本工業俱樂部五十年史編纂委員會編集（1972）『日本工業俱樂部五十年史』 社団法人日本工業俱樂部
- 白眼生（1917）「古河家改革物語」『実業之日本』 12 月 15 日号， p.21-30.
- 原敬文書研究会編（1984a）『原敬関係文書 第一卷（書翰篇 1）』日本放送出版協会
- 原敬文書研究会編（1984b）『原敬関係文書 第二卷（書翰篇 2）』日本放送出版協会
- 原敬文書研究会編（1985）『原敬関係文書 第三卷（書翰篇 3）』日本放送出版協会
- 原敬文書研究会編（1989）『原敬関係文書 別卷』日本放送出版協会
- 古河商事会社 K K 生（1921）「社員の觀た社長（その 1） 古河社員の觀た古河社長」『実業之日本』第 24 卷第 2 号， 1 月 15 日号， p.78-80.
- 古河虎之助君伝編纂会（1953）『古河虎之助君伝』
- 森川英正（1980）『財閥の経営史的研究』東洋經濟新報社
- 四十年史編纂委員會（1959）『横浜護謨製造株式会社四十年史』

## 第2部 2つの政治的事件

### 第3章 足利尊氏問題

#### 1. はじめに 昭和恐慌と財界批判

本章では、中島が商工大臣となり、八幡製鉄所の民営化・製鉄合同を実現させながらも、「足利尊氏問題」で大臣辞任を余儀なくされた事件を中心に論じる。この「足利尊氏問題」での辞任は、中島久万吉の名をもっとも高めている事件でもあるが、なぜこのような事件が起きたのかを考察したい。足利尊氏問題での辞任は、続いて起きた帝人事件とともに中島の人生にとって一大転機となった事件である。

まず当時の経済状況を考察しなければならない。1930（昭和5）年について金解禁が断行されたが、日本経済は昭和6年から7年にかけて不況がさらに深刻化し、奈落の底に陥ってしまった。中小企業は破産し、大企業は生産制限を行い、国民の購買力は著しく低下した。国民生活は破綻し、失業者があふれ、「大学は出たけれど」が流行語となった。農産物の価格も下落し、農村の惨状は社会的な問題となった。このような中で、一部の財閥に資本がますます集中するようになり、貧富の格差が増大する中で、経済界の要人が標的となってしまう。

金解禁を断行した元日銀総裁で前蔵相の井上準之助が1932（昭和7）年2月に、さらには3月には三井合名理事長の団琢磨が血盟団によって相次いで暗殺された。日本経済連盟理事の井上や日本工業倶楽部理事長の団琢磨と中島の親しい財界人であった。昭和恐慌期の異常な不況期において実業家・財界人たちは富を独占しているとして血祭りに上げられたのであった。

井上準之助は金融引き締め政策を恨まれた。団琢磨は前年の「三井ドル買い事件」もあるなか、財閥批判の最大のターゲットにされた。続く五・一五事件で犬養毅首相が暗殺されてしまい、政党内閣は終焉を迎える。このような非常時に誕生したのが、挙国一致内閣と呼ばれた斎藤実内閣であった。

#### 2. 商工大臣就任、製鉄合同、政民連携

1932（昭和7）年5月26日に成立したのが斎藤実内閣である。政党政治によらない中間内閣として挙国一致の内閣が作られたが、それは寄り合い所帯であった。政党人ではなく、民間の財界を代表して政党色のない中島久万吉が商工大臣として入閣することになった。貴族院議員としての入閣ではなかった。郷誠之助も候補であったが、正力松太郎が中島を大臣に推薦した<sup>274</sup>。1930（昭和5）に商工省産業合理局常務顧問に就任して以来、中島は全国的にも著名な財界人であった。産業合理化運動を指導した中島は経済政策に明るく、商工大臣として申し分なかったといえる。

---

<sup>274</sup> 池田成彬述・柳澤健編（1959）p.242. 記者の小汀が「郷さんには癖がある。中島久萬吉さんに商工大臣を持って来た時、新聞記者に『中島が商工大臣？何故俺の所に持って来なかったのか？』という意味で不足そうに言ったと伝わって居ります。」と語っている。

政治にはもともと野心の無かった中島ではあったが、財界の長年の懸案であった八幡製鉄所の民営化・製鉄合同という素志の実現を条件として入閣を許諾した。中島大臣はビール合同、製紙合同に尽力しただけでなく、八幡製鉄所の民営化・製鉄合同に成功した。苦勞して省内・製鉄所を動かし、閣内の協力、議会での説得を通じた上での成果であった<sup>275</sup>。

八幡製鉄所の民営化・製鉄合同は財界人キャリアとしての最大の功績であろう。だが、その後の議会では製鉄会社評価委員会の査定に不公正があったのではないかとの疑惑（綱紀肅正問題）が議会で問われたが、言われのないことであった。

政党に無色であった中島は 1933（昭和 8）年 12 月 25 日に政友会と民政党の領袖を集めた会合を芝公園の紅葉会館にて主催した。これはいわゆる「政民連携」の会合と呼ばれるものであり、新聞報道されるほど重要な政治的イベントであった。

さかのぼって同年秋頃に中島は原田熊雄男爵（元老西園寺公望の秘書）ら大物が参列する朝飯会に呼ばれた。この時「軍部の横暴に対抗するために、既成政党がしっかりしなければならぬ」との意見に刺激を受けた。政友会の島田俊雄（広田内閣の農林大臣）が用向きで自邸に来たとき、この話をもちかけた。島田からさらに民政党の町田忠治（岡田内閣の商工大臣）との仲介を頼まれた。中島は島田から頼まれ、町田との仲介のために新橋の料亭で会食させ、相談の機会を設けた。さらに両党の幹部 20 名ずつを呼んで、上記の「政民連携」の会合が開催することになった。

この政民連携の晩餐会は、斎藤首相の了承のもと、財界人であり政党からは中立的な中島大臣が主催した。本来なら政党人自ら開催すべきものであるが、政党人とは全く関係のない中島商相に開催させるのは「浅ましい」と揶揄されるほどの会合であった<sup>276</sup>。新聞でも大きく報道されたが、政界工作に中島の意図があったわけではなく、軍部の台頭・横暴に対抗しようという中島の素志に基づく行動であった。彼には連携の顔役以上の野望など元々なかった<sup>277</sup>。しかし、軍部・右翼からは政党政治を復活させるものとして睨まれることになる。政治史的には極めて危険な集まりを中島が仕掛けたことになった<sup>278</sup>。

芝公園の紅葉会館での会合は、一人の欠席者もなく盛況であった。しかし中島はその帰途、不穏な動きがあるかもしれないとのことで、警視庁の者、2、3 名が来て、表玄関か

---

<sup>275</sup> 中嶋（1951）p.215-217

<sup>276</sup> 丸山（1935）「中島男の肝入」『溜飲を下ぐ』言海書房、p.259-260。

<sup>277</sup> 中島がこの提携運動に乗り出した背後に正力松太郎（読売新聞社長）らが策動していたとの分析がある。「正力を含めた番町会のメンバーが『近いうちに中島商工大臣が総理大臣になる』というような宣伝を行っていたと言われる」（原田熊雄（1951））と前島は説明している。前島（1955）p.113 しかし、これは原田熊雄が聞いた噂話に依存した説明である。政治に野望のなかった中島には総理大臣になる意図などは元々無い。松浦（2002）も『原田日記』（『西園寺と政局』）に依拠した立論を作って、中島の政治的野望の視点から記述しているが、これも同様に誤った見解である。

<sup>278</sup> 松浦は財界が政治システムの編成に乗り出したとまで解釈しているが、中島は危険を承知で「政党を純化して、軍の横暴に対抗させること」が国家のためになると信じた。松浦（2002）参照。

ら出ずに、自邸まで護衛されたのであった<sup>279</sup>。

この「政民連携の斡旋こそ」は「斎藤内閣の没落を早め」遂に中島の「政治生命を封じ去ったもので」あった<sup>280</sup>。軍部や右翼が動いて、以下の足利尊氏問題がおき、さらに帝人事件が起きるのである。

### 3. 「足利尊氏問題」で大臣辞任

「足利尊氏問題」<sup>281</sup>とは中島が大臣辞職に至った事件である。「中島商相失脚問題」<sup>282</sup>とも呼ばれる。これは天皇機関説問題に継承された筆禍事件であった<sup>283</sup>。本節では、辞任の背後にある右翼の動きも追いながら、大臣辞任に至った経緯を論じる。

第 65 回帝国議会が始まる前の昭和 9（1934）年 1 月に、たまたま雑誌『現代』（昭和 9 年 2 月号）に中島が書いた「足利尊氏」が本人の関知していない間に再掲されてしまった<sup>284</sup>。

この記事が右翼系の『帝国新報』の論説記者である、上領一郎が最初に発見したとされる<sup>285</sup>。これがすぐ記事となり、貴族院の菊池武夫議員（男爵・陸軍中將）の目に触れたのである。カンカンに憤慨した菊池は中島に糾弾の書簡を送った<sup>286</sup>。これに対して中島は「あれは、十年前の漫筆で、関知しない不用意の間に掲載されたもので、現在では、当時と思想も異なっているが、国務大臣として洵に済まぬことをしたと思う」と軽く返信した。

この話が、右翼系の団体擁護連合会（以下、連合会と略）の耳に入り、騒ぎはさらにエスカレートした。皇室の藩屏たる華族で、しかも大政輔弼の国務大臣が、読者数の多い通俗雑誌に国体に関する反逆の文章を発表し、国民を惑わすことは、断じて許されないとい

---

<sup>279</sup> 中嶋（1951）p.200-202

<sup>280</sup> 同，p.210

<sup>281</sup> 序章の注 3 参照。中島は足利尊氏を賛美した文章を「足利尊氏」という論説で書いたことがあり、それが雑誌『現代』に再掲されたことで問題化した事件を指す。論説の内容については本章第 4 節を参照されたい。

<sup>282</sup> 『国史大辞典第 10 巻』吉川弘文館，1989 年，p.591 参照。

<sup>283</sup> 駄場(1999)

<sup>284</sup> これは以下の文章が『現代』に再掲された。中島華水「鶏助集 - 其三 足利尊氏」『倦鳥』第 13 卷 2 号 1925 年，p.18-21。雑誌『現代』の名編集者諏訪日出男が中島邸に寄稿を依頼したが、多忙を理由に断った。しかしどうしてもと懇願するのが可哀想に思った中島家の書生が偶々上記の「足利尊氏」を渡した。福田（2009）p.395 参照。中島はこの掲載に関知していなかった。その書生は議会で取り上げられたことに苦しみノイローゼになったという。諏訪日出男は中島、永野護、松浦取引所理事など 10 名と、雑誌『現代』の執筆のために秩父雲取山に登山した。これが縁で、寄稿を依頼しに中島家を訪問し、「足利尊氏」の記事が掲載された。池田（1952）p.138 参照。書生の名前は櫻井であり、雑誌記者の執拗な要求に根負けして、書庫から数冊取り出して、不覚にも中島の承認を得ずに渡した。櫻井にとっては終生の恨事であった。中島実『回想』（1978）p.56 参照。

<sup>285</sup> 以下、院外団の右翼である国体擁護連合会の動向は、三武錠史「昭和九年度 中島商相の尊氏賛美」『五カ年を顧みる』1937 年 p.77-85 を参照した。軍部・右翼からの事件が発生した裏面史について、本稿ではその概要を発掘した。

<sup>286</sup> 菊池は「乱臣逆賊として史論のすでに断定せる足利尊氏」を中島が雑誌で礼讃したことは「不敬不遜」であり、国務大臣として「不謹慎不埒千萬」であると書き送った。飛鳥（1934）

うのが、右翼系の言い分であった<sup>287</sup>。

連合会の中堅幹部はまず、講談社に乗り込み、「足利尊氏」の原稿を見せると迫った。また別の一団は文部省に「教科書をいつ書き改めるのか」と問い詰め、また別の一段は宮内省に出頭し、「華族の尊氏賛美」に関して意見を発表しると詰め寄った。こうして騒動は全国に拡大した。

貴族院には当時、毛利元恒という研究会所属の子爵議員がいた。平素はパツとしない議員であったが、この尊氏問題では、連合会の浪人とたくみに連絡をとり、実によく働いたという。

休会明けの議会を迎えて、連合会の幹部は、「一気に中島を退治しよう」として、準備万端をして待機した。

休会明けの貴族院本会議の劈頭、同和会の上山満之進から製鉄合同問題（綱紀肅正問題）が鋭く質問され、中島はなんとかこれに対しては答えることができた。

衆議院では、鷺野米太郎代議士から「十年前の旧稿で知らぬと言うなら、講談社から、その原稿を取り寄せて示せ」と、痛い急所を衝いてきた。中島は恐縮し陳謝につとめた。国民同盟の栗原彦三郎代議士からは「国民思想上に及ぼす影響少なからず」との質問があったが、中島の釈明でケリがついた<sup>288</sup>。

貴族院の本会議が心配になった中島は、一夜、公正会全部を帝国ホテルに招待して、弁明につとめた。当時、郷誠之助と中島は公正会の領袖であった。その勢力で、男爵議員の質問を封じようとしたという。

2月7日の貴族院本会議が午前10時20分に開会し、国務大臣の施政方針に対する質疑にはいった。ここで国本社の菊池武夫男爵が質問に立った。

菊池武夫男爵の質問内容は、前夜の赤坂での密議において、練られていたものであった<sup>289</sup>。その密議には、日本精神協会会長でもある菊池武夫男爵以外に、同会理事長高須梅溪、龍吟社の草村北星、丸山鶴吉らが参加した。丸山は貴族院官僚系の伊澤多喜男の子分であり、伊澤が菊池を動かしたとされる。伊澤は上山満之進、関直彦らとともに中島商相に綱紀問題で中島商相攻撃を続けていた。中島が仕掛けた政民連携や、「財閥と政党の結託」による従来の政治体制への回帰こそは伊澤らが大反対するものであった。

二三日前から風邪気味で、菊池の声は極めて低かったが、拡声器をつけて、力強く「齋藤内閣内に日本精神を破壊する閣僚がいることは全く遺憾である」として、中島の尊氏問題を中心に取上げた。菊池はクーデター体質のナポレオンを中島が別の雑誌で書いたのはいかがとただし、「国務大臣の地位にあるものが逆賊を礼賛するような文章を書いて、

---

<sup>287</sup> 国体擁護会以外にも、日本新聞、愛国団体、南町塾、大乘会、生産党が糾弾にたつなか、流行新聞は黙殺し、読売、国民新聞は中島擁護にたったという。日本新聞社（1934）p.151 参照

<sup>288</sup> 中島（1950.10.11）参照

<sup>289</sup> 密議に関して、以下の文献を参照。岸田菊伴「中島商相はなぜ辞めたか・菊池武夫男登場前夜の密議・」『政局はどう動く』新東京社、1934年、p.27-31。

ただ議会で陳謝するだけでは済まない」として、「辞職をすべきでないか」と迫った<sup>290</sup>。菊池は南朝方の子孫にあたり、この年はたまたま建武中興六百年でもあった。

菊池の質問に続いて、研究会の三室戸敬光子爵は緊急動議として、菊池男爵の質問は重大であり、その答弁は重要なので内務大臣と海軍大臣の出席も提議した。

中島は菊池に手紙で返事したように、以下のように答弁した。

「あ的一篇は私が十年以上前に記したもので、当時ある文学雑誌に投稿したものであって、それが全く不用意に掲載されたものである。尊氏は逆臣である事は、史実通り何ら論はない。私としては尊氏を礼賛する意味ではない。尊氏が賊子であることは申す迄もない。」

午後にはさらに、研究会の三室戸敬光子爵が発言を求めて登壇し、さらに厳しく中島に対して以下のように追求した。

「説をなす者は大臣であり、対照となるものは尊氏であり、事は順逆の大義である・・・」と始まり、「・・・商工大臣の重責を辞し、栄爵を拝辞なさい。お望みなら、日本人をやめられたらよろしい」

同日、菊池男が登壇している頃、院外において連合会の本部に12名が集合し、自動車4台に分乗して、牛込薬王寺の中島邸を訪れ、秘書に面会して、決議文を手交した。その決議は以下の三カ条であった。

- 一、国務大臣を即時、辞職すべし
- 一、皇室の栄爵殊遇を拝辞すべし
- 一、一切の公職を退き、恐懼謹慎し、以て罪を上下に謝すべし

連合会の一群はさらに、貴族院議員の軟派と目されていた、青木信光、吉田清風、牧野忠篤、東園基光、酒井忠正、三島章道、黒木三次、岡部長景、二荒芳徳、馬場鉄一、西尾忠方の自宅を訪問し、各家庭の玄関で来訪の趣旨を以下のように告げた。

「吾々は、今、天下の問題となっている、中島商相の事件で伺ったものであるが、逆賊を賛美するものは逆賊である。その逆賊に味方する者も亦、逆賊である。お宅のご主人は今や、逆賊にならんとしつつある。吾々の注言を無視して、逆賊の味方をなさる時は、悔を百年の後に貽すこととなる。吾々は逆賊一掃の大運動を捲き起す考えであるから、予め御断りに参上した。御主人に御伝達下さい。」<sup>291</sup>

この訪問は衝撃を与え、各家庭は蜂の巣を突いたようになったという。貴族院の控室はこれらの家庭からの至急電話で、時ならぬ賑わいを呈したという。中島が辞職したのは、その日の夕方というが<sup>292</sup>、これは正しくない。

2月8日の午後1時の段階で、中島は現在の心境について次のように記者に語り、辞意は抱いてないと語っていた。

---

<sup>290</sup> 「商相の尊氏論陳謝では済まぬ 菊池男劇しく追究す 貴族院本会議」『東京朝日新聞』夕刊 1934年2月8日

<sup>291</sup> 三武 (1937) p.83

<sup>292</sup> 同

「貴族院の情勢も最初からそう重大化するとも考えなかった、現在においても、重大な形勢に立ち到っているとは考えない。政府が私を辞めさせれば問題外だが、尊氏論についての政府の答弁は既に打合せが済んでいる、今後客観的情勢がどう変化するかそれに対して確定的な予断は許さぬし、又客観的情勢によって私の進退も自ら帰結を見出す訳であるが、現在絶対に辞意は抱いておらぬ、尚政府としての答弁は既に打ち合わせが済んでいるのだが、斎藤首相はまだその答弁をなさって居られぬようだ」<sup>293</sup>

菊池や三室戸以外、貴族院の大勢はこれ以上追及する必要はないという空気の中、中島は辞意するつもりは無かった。しかし斎藤首相からある朝<sup>294</sup>、議会の開会前に会いたいとの電話があり、中島は事態を直覚した<sup>295</sup>。果して宮内省でも問題となっているという一言があり、考えて欲しいと首相から辞意を促されたことがきっかけとなつての辞意決断であった。辞意の表明は恐らく、2月8日の夕方であろう。中島は軍の陰謀に中てられるのが癪で、総理には注意を与えての辞表を堀切内閣書記官長に届けた。その注意とは軍の陰謀が斎藤内閣の倒壊であり、事実中島の預言した通りに事態は進んだのであり、帝人事件を契機として斎藤内閣は崩壊した。

上記のような院外団の不穏な動きもあり、全国の神道派からは脅迫状も届いたとされるが、中島は決して動じなかった<sup>296</sup>。ただ家族にとっては、薬王寺の中島邸の周囲に、商相辞任要求のビラが貼られるなどの嫌がらせがあった<sup>297</sup>。辞任の夜、中島は悔しさから、涙を流したという<sup>298</sup>。

#### 4. 中島の「足利尊氏」論

10年前に書かれた「足利尊氏」論とは以下のような内容である。

俳句づくりで、1925（大正14）年春に駿河の興津清見寺の寺宝尊氏像を拝観した。その像が「福德円満で英雄豪傑」であり、自分は「尊氏の人物に傾倒している」と書いた。この俳句入りの随筆は中島の博学ぶりを証明するもので、尊氏の功績や足利時代の禅宗を背景とした五山文化の意義を高く評価した文化史論である。

そもそも足利尊氏は公家一統の政治に反抗し、武家集団を統合した源氏の嫡流であった。「公家は時勢に疎く、政務に通じていなかった」と中島は評価する。尊氏は武家政権を京都にはじめておいた苦勞人で、度量の大きな人であった。近年でも足利尊氏が再評価され

<sup>293</sup> 「客観的情勢で自ら帰結す「現在辞意なし・・・」と商相語る」『東京朝日新聞』夕刊、1934年2月9日。

<sup>294</sup> 「ある朝」が2月8日なら、2月8日午後1時に記者に辞意はしないと語ったことは、表向きのポーズになる。

<sup>295</sup> 中嶋（1951）p.209

<sup>296</sup> 同

<sup>297</sup> 中島邸の周囲には「逆賊尊氏を絶賛し傾国大義を葬る商工大臣男爵中島久萬吉自決せよ」のポスターがベタベタと貼り付けられた。久萬吉の五男の中学生だった実ははがして歩いた。中島実『回想』（1978）p.57 参照。

<sup>298</sup> 辞職の夜、「父はひそかに涙を流した」と実は母から後年聞いた。同 p.57 参照。



ており、NHKの歴史番組でも尊氏の業績が放映された<sup>299</sup>。

天龍寺を創建した尊氏が夢窓国師との関係が深い仏教信者であることを中島は特に高く評価した。尊氏は「参禅に熱心で、酒を飲んだ後も、しばしば正坐して禅理を究めたことが『梅松論』に書かれている」などと書いた。この一節は、中島自身も禅に帰依していることを暗示するもので、第5章の議論と関連する。

「南北朝の争いは公家の進歩主義と武家の保守主義の衝突である」と見なす歴史観は、現在から見ても公平で客観的であろう。しかし軍部を背景とする菊池男らの攻撃は斎藤内閣の倒閣そのものにあり、中島はその犠牲となった。

戦後、中島の「足利尊氏論」は逆に自由主義的であるとして、高く評価されることとなった。そのことを中島は苦笑したという。また晩年、「今日になって考えても如何にも馬鹿らしく、どうしてあんなことを問題にしたかと思うやうなことなのである」と回顧した<sup>300</sup>。

## 5. 小括

足利尊氏問題という筆禍事件により、中島は商工大臣の地位を失うことになった。時代背景として軍部・右翼が台頭する中で、政民連携を仕掛けた中島が最大のターゲットとなってしまった。軍部・右翼の目的は斎藤内閣の倒閣であり、中島はその犠牲となった。この事件は中島の「政治的生命を封じ去った」ものである<sup>301</sup>。さらに斎藤内閣を倒壊させた帝人事件がまもなく起きることになる。その意味で、足利尊氏問題は斎藤内閣を倒壊させる帝人事件の序曲をなす事件であった。

序章の注4でもふれたように、足利尊氏問題で辞めた大臣として中島は一般的には有名であるが、本章では事件の背後で活動した右翼の一団の活動を明らかにすることが出来た。

## 引用文献

飛鳥明人(1934)「昭和政戦 - 建武中興六百年目『足利尊氏』合戦記 - 中島商相の落城まで」

『サンデー毎日』1934年2月18日, p.30

池田成彬述・柳澤健編(1959)『財界回顧』世界の日本社

岸田菊伴(1934)『政局はどう動く』新東京社

駄場裕司(1999)「帝人事件から天皇機関説事件へ--美濃部達吉と「検察ファッション」」『政治経済史学』389号, 日本政治経済史学研究所, 1月, p.1-21

中島久萬吉(1950.10.11)「政界財界七十年 中島久萬吉回顧談(42) 斎藤内閣倒壊へ導く葬り去られた政治的生命」『産経新聞』10月11日

中島久萬吉(1950.10.31)「政界財界七十年 中島久萬吉回顧談(60) 戦時は鳴かず飛ばず

---

<sup>299</sup> NHK, 2011年12月13日放映。番組名「室町・鎌倉“武士の世の幕開け”第2回足利尊氏「京都」に挑む」。東京大学史料編纂所准教授の本郷和人が解説。

<sup>300</sup> 中嶋(1956) p.152。『文藝春秋』のこの論説の中で、「足利尊氏」が再掲されている。

<sup>301</sup> 中嶋(1951) p.210。その後、大臣要請が戦時中二度ほどあったが、中島は断った。政治家としての公職からは距離をおくようになった。中島(1950.10.31) 参照。

- 中野正剛との長い友情」『産経新聞』10月31日
- 中嶋久萬吉（1951）『政界財界五十年』大日本雄辯會講談社
- 中嶋久萬吉「足利尊氏と私-『逆賊』にされた思ひ出-」『文藝春秋』34(6) 1956年6月,p152-157
- 中嶋精一ほか（1987）『回想』私家版
- （同書は中島の子供達が綴ったものを編纂したもので、書かれた年代は昭和48年から昭和62年まで至る。本文で引用の際は、実名を入れた。）
- 日本新聞社(1934)『日本精神發揚史：日本新聞十年記念』
- 原田熊雄（1951）『西園寺公と政局 第3巻』岩波書店
- 前島省三(1955)「帝人事件とその後景—日本ファシズムの議会主義的特質をめぐって—」『立命館法學』（11），立命館大学法学会，6月，p.85-117
- 松浦正孝（2002）『財界の政治經濟史-井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代-』東京大学出版会
- 丸山幹治（1935）『溜飲を下ぐ』言海書房
- 三武錠史（1937）『五ヵ年を顧みて』団体擁護連合会

## 第4章 帝人事件

### 1. はじめに

足利尊氏問題に続いて起きた帝人事件は中島にとって「思い出すのも厭」な恥辱となる事件であった。

中島にとって帝人事件は人生の一大転機となり、中島家にとっても没落の始まりであった<sup>302</sup>。この事件を契機として、戦時中は政財界の表舞台から姿を消すことになった。しかし事件を契機として、僧院に入ることによって精神的指導者としての下地を作ることになった。その意味で、精神的指導者が誕生する契機となったのが帝人事件であったと評価できるだろう。

本章では、まず帝人事件の概要を明かにし、事件の「遠因」となった『時事新報』の記事やその責任者である武藤山治の功罪にふれる。複雑な陰謀事件とみなされる帝人事件において、収監された中島の姿を追い、何が問われ、予審廷において虚偽の自白に至ったかを『公判録』から分析する。『公判録』の分析を通じて、中島の人物像が浮き彫りなるだけでなく、事件を通じて中島の精神がさらに磨かれたことを明らかにする。帝人事件は中島にとって恥辱であり、地位も名誉も失う事件となったが、事件は中島の精神を鍛える重大な契機となった。

### 2. 『時事新報』の告発記事「番町会を暴く」と武藤山治

足利尊氏問題が起きていた第 65 議会の最中の 1 月から、『時事新報』（『時事』と略す）の「番町会を暴く」という政財界の腐敗を暴く連載シリーズ（1934 年 1 月 17 日・3 月 13 日）が話題を呼びはじめていた。

実業界の著名人であり、政治家ともなった武藤山治が主宰する『時事』の記事は、議会でも取り上げられた。この記事で「番町会」の秘書格とみなされた中島久万吉は、中心人物の一人として商工大臣の地位を利用して、収賄や斡旋をおこなっていることが告発された。また帝国人絹株（帝人株と略す）の問題が正面から取り上げられ、中島久万吉や河合良成らが属する番町会という財界グループの暗躍が実名入りで告発された。

この告発記事こそは、帝人事件を引き起こす導火線となったものであり、斎藤内閣を倒閣させたものであった。斎藤内閣の後継内閣である岡田啓介内閣は 1937 年の二二六事件で倒壊した。二二六事件では内大臣となった斎藤も再度蔵相になった高橋是清も暗殺された。このように軍部・右翼の倒閣運動が起きるといふ暗い世相のなかで帝人事件は起きた。

著名な実業家であり清廉潔白な政治家ともなった武藤山治は、『時事新報』再建を要請されて、晩年最後の仕事として『時事』の社長を引き受けていた。そして、この連載記事を自らの責任で 2 人の記者たちに書かせた。

---

<sup>302</sup> 中嶋精一ほか（1987） p.63

特に中島久万吉は1932年に商工大臣となってすでに多くの業績を上げていたが、この連載記事で中島の政策は繰り返し批判された。この記事は世間に大きな注目を集めた。武藤は帝人株の引受は政界と財界の苟合腐敗であると決めつけた。そして帝人株が公有物であるから、公売にかけられるべきであるということが、当初からの主張であった<sup>303</sup>。これに対しては、河合良成は帝人株の取引は正当の時価取引による慣習に基づく売買であると反論しているし、判決も河合の意見をそのまま反映したものであった。

『時事新報』においてこの連載記事の予告がされたのは、1934年1月16日であった。第二面に大きな社告が掲載され、以下のような記事が書かれた。

### 和製タマニー「番町会」を暴く—明日朝刊より連載—<sup>304</sup>

政党と政商の結託暗躍はあらゆる社会悪の源となり、遂に五・一五事件を誘発して非常時内閣の出現を見たことは汎く知るところ、然も五・一五事件の先禮をうけた非常時内閣下に於て政党政商等はしばらくその爪牙を隠して世の指弾を避くるに汲々たる折柄、ここにわれらはわが政界財界の蔭に奇怪な存在を聞く。曰く「番町会」の登場がそれである。即ち彼等はいまやその伏魔殿に立籠り、嘗て政党政商が為せるが如き行為。紐育タマニー者流にも比すべき吸血をなしつつ政界財界を毒しつつあるといふ。然もこの「番町会」のメンバーとして傳へられるものに某財界巨頭を首脳とし、これを圍繞するものに現内閣の某大臣あり、新聞社の社長あり、政権を笠に、金権と筆権を擁して財界と政界の裏面に暗躍する暴状は目に餘るものがあり、既に彼等の飽くなき陰謀の一端は、さきには商工会議所乗取り、近くは帝國人絹の乗取り、神戸製鋼所株の拂下げ或は政民聯携運動等となって、世人を戦慄せしむるに至った。我等は敢て事を好むものではない、然も非常時内閣の下、更始一新が叫ばれる今日、権力と金力を背景とする不義不正が横行するに對し、言論機関の使命の爲めに、斷じて黙過すべきでない。よつて本社はこの利権の伏魔殿の策謀に對し、忌憚なき摘發を加へ、以て社会の批判に訴へることとした。

「財界巨頭」とは郷誠之助であり、「現内閣の某大臣」とは中島久万吉であり、「新聞社の社長」は正力松太郎である。帝人株の売買は乗っ取りと評価され、番町会に集う財界人たちはギャング団に仕立てられている。「我等は、あえて事を好むものではない」と言いながら、言論機関の正義感を笠に告発記事のシリーズが展開された。

#### (1) 番町会とは何か

番町会とは番町に住む郷誠之助の私宅での財界人など十名程度の会合を意味した。その番町会のメンバーについては諸説ある。中島の説明によれば、番町会とは「平生、郷誠之助に恩顧を受けた人達が、毎月一回会合を郷男爵の自宅で行っているもので、格別の意味

<sup>303</sup> 武藤 (1934.1.18)

<sup>304</sup> タイトルは松田 (2001) p.128; 本文は時事新報社 (1934) p.1-2.

がない会合に過ぎない。郷男爵が関係している河合良成（東京株式取引所常務）、後藤国彦（京成電鉄社長）、正力松太郎（読売新聞社長）、渋沢正雄（日本鋼管取締役）、金子喜代太（浅野セメント取締役）、中野金次郎（国際通運社長）、日本工業クラブ<sup>305</sup>、中日実業<sup>306</sup>等の関係者の集まりである。」そして中島と小林一三は年に1，2回呼ばれていた<sup>307</sup>。

東株で郷誠之助の部下であった河合良成によれば、番町会のレギュラー・メンバーは10名であり、その内訳は以下述べる永野が述べる10名と符号する。番町会の会員は郷の屋敷の円卓に座れる10人であり、限られた。関東大震災（1923年）以前に会がスタートし、河合、後藤、岩倉の3名が郷のもとに集まって、毎月14日に会合をもっていた<sup>308</sup>。河合によれば、番町会の例会に野田俊作は3，4回来た。正月の例会に中島久万吉と小林一三が呼ばれた。小林中<sup>309</sup>と長崎英造は関係がなかったとされる。中島は年に一度来る程度であり、帝人事件では、むしろ中島のもとに集まった華水会のメンバーが問題とされた。番町会と華水会のメンバーは一部重複している（河合・岩倉・永野・渋沢の4名）。

帝人事件で実際に関連するのは河合、永野、正力だけであり、『時事新報』で長崎も番町会と書かれたのは事実誤認である。『時事新報』で書かれた番町会会員は大部分無関係であると河合は述べている。

中島のもとに集まった華水会のメンバーがむしろ帝人事件と関係が深い。河合は自分が最初のメンバーだと語っているが、永野護の以下の証言とは少し異なっている。

永野によれば、そもそも番町会という名称は、「郷さんの会」であり、都下の新聞社が命名した。元来は番町会の郷誠之助の屋敷で、永野護、後藤国彦、岩倉具光の3名が集まって郷から受けた親爺教育が始まりであった。東洋製鉄が1921年に委託経営となった後、東洋製鉄の郷社長のもとにいた庶務課長の後藤国彦、主事の岩倉具光らが友人の永野護と郷の屋敷に運ぶようになったという。この3人は友人であった。この3人がさらに友人を誘ったのである。後藤が正力松太郎、中野金次郎、河合良成を、岩倉が春田茂躬、伊藤忠兵衛を、永野が渋沢正雄、金子喜代太を連れてきた<sup>310</sup>。

恐らく永野の話が最も古く、震災前の1921年以降から開始されたのであろう。それから10年以上経過し、渋沢栄一をはじめ和田豊治や井上準之助が逝去するなかで、郷誠之助は財界の大御所的な存在になっていた。そして集まっていた実業家たちもそれなりの地位につき、彼等によって内閣でも作れる勢いになっていた。

表4-1に『時事新報』に掲載された番町会のメンバー11名とその関歴を記載する。

---

<sup>305</sup> 誰であるか不明である。

<sup>306</sup> 春田茂躬と思われる。

<sup>307</sup> 中島（1950），中嶋（1951）p.219

<sup>308</sup> 河合（1970）p.26-28

<sup>309</sup> 小林中は番町会であると後にマスコミによってよく言及されたが、河合によればレギュラー・メンバーではないことになる。

<sup>310</sup> 永野（1952）p. 164-165

表4-1 番町会のメンバー

	閲歴
河合良成	東京商工会議所議員、福德生命専務、帝国火災、菊池電気軌道、日本ビルディング、中央毛糸紡績各取締役、帝国人絹、留萌鉄道、東京湾汽船監査役
後藤国彦	成田鉄道副社長、池上電気鉄道、京成電気軌道、京成乗合自動車各専務、王子環状乗合、王子電軌、北海道鉄道、京王電軌、渡良瀬水電、日本商事、大正生命各取締役、西武鉄道、玉川電気各監査役
岩倉具光	合同運送専務、タクシー自動車、桜セメント、東亜石灰各取締役、阪急電車監査役
渋沢正雄	昭和鋼管社長、富士製鋼社長、汽車会社、実用自動車、石川島造船、同自動車、同飛行機、秩父鉄道、大阪乗合、フラール建築、日本建築各取締役
永野護	東京商工会議所議員、帝国人絹、大宮瓦斯、東京湾汽船、山叶、日本レール、東洋製油、東華生命各取締役、横浜取引所、南部鉄道各監査役、日本放送協会関東支部監事
正力松太郎	読売新聞社長
中野金次郎	東京商工会議所副会頭、国際通運、大日本自動車保険、大北火災海上、運送相互保証、門司合同運送、東京合同運送、横浜、京都、大阪、神戸各駅合同運送、郵船運輸各社長、上毛電気、朝鮮運送各取締役、日本空中電気鉄道監査役
金子喜代太	東京商工会議所議員、大阪石綿工業会長、浅野セメント、日本セメント各専務、浅野山倉製鋼、関東運輸、日之出汽船、富士製鋼、浅野スレート、浅野造船所、日本ヒューム鋼管、小倉築港、南部鉄道、日櫓漁業、伏木板紙、三岐鉄道、浅野ブロック製造、青梅電気、五日市鉄道、信越木材、内外石油各取締役、関東水力電気、浅野物産、浅野石材工業各監査役
伊藤忠兵衛	伊藤忠商事、呉羽紡績、富山紡績各社長、三光紡績取締役
春田茂躬	中日実業、大東京鉄道各専務、東亜土木企業、礼豊洋行各取締役、東洋塩業、大正電気各監査役
松岡潤吉	北海道松岡農場、松岡汽船、大和田紡織各社長、加島信託、呉羽紡績取締役、大日本人造肥料監査役

資料：時事新報社『「番町会」を暴く 帝国人絹の巻』（1934）p.9-10 より

メンバーの監事役の後藤は、『男爵郷誠之助君伝』の著者であり、中島の紹介記事<sup>311</sup>も書いた元新聞記者であった。そして番町会の告発に対して、後藤の名前で新聞広告を出した

<sup>311</sup> 後藤国彦（1934）

が、何の効果もなかった。岩倉具光は中島の義理の弟にあたり、岩下清周の娘と結婚した。そのため、岩下清周と中島は縁戚関係にもなっていたが、岩倉具光は中島が関連した企業取締役となっている事例が多い。松岡の名前は河合や永野によっては言及されていない。

世論的には、番町会の兼任重役ぶりは、金持ち＝悪者として映ったに違いない。事件から20年以上たっても、番町会の妖雲は「今日にいたっても」漂っていると中島は回顧している<sup>312</sup>。

## (2) 「番町会を暴く」の記事

連載における中島批判の一部を主に帝人関連の記事を中心に拾い、いかに憶測に充ちたスキャンダラスな暴露記事であったかを回顧したい。下線部は中島が言及されている箇所である。記事はパンフレットにまとめられ、さらに普及した<sup>313</sup>。

武藤山治は決して暴露を目指すような、品性の悪いことはしないつもりであったが、政界と財界の結託は座視できないと言明した。倒産しかけている『時事新報』には売れる記事が必要であったことは言うまでもない。

ペンネームの大森山人という記者は、『時事』編集総務の和田日出吉であり、1935年に『人絹』という小説も書いている。この小説はこの記事の趣旨に沿ったフィクションであり、番町会を事実小説の形式で批判した。これらの記事はすべて武藤山治がその信念のもとに記者に書かせたものであった。武藤が解説記事を自分の名で書いたこともあった<sup>314</sup>。

## 和製タマニー 利権魔の暗躍振り<sup>315</sup>

「何が目覚しいと云って、近頃番町会の暗躍位目覚しいものはない。寧ろ凄じいと云った方が良からう。いや凄じいでもまだ足らぬ。全く戦慄に値するものがある。実際経済会社では、最近この一派の猛烈な暗躍に、非常な戦慄を感じているものが少くない。一派の副総理格たる中嶋君が商工大臣になってから、この一派の暗躍は悪化した。実は中嶋君の商工大臣になったことそのことが既に此の一派の暗躍の結果だというのが朝にいて中嶋君が大臣の名刺を振り廻し、野に物凄い面々が腕節を誘って、上下挾撃ちで経済界を搔廻すのである堪まったものではない。」

「目下問題となっている通信省対全産聯の団体保険の大喧嘩も、中嶋君がその一党に仕事をさせたく、そつと素早く認可を下し、中嶋君の商工省と、同じ政府の通信省とを唾み合わせるという見るものをしてはらはらせるような露骨な利権劇である」

「しかも一派は経済界ばかりではまだ足りないとあって、政界にまでその職場を拵げて、暗躍の芝居を打っている。旧臘押迫って、芝紅葉館に、政、民両党の頭所をずらりと並べ

<sup>312</sup> 中嶋(1950.5.26)

<sup>313</sup> 時事新報社(1934)

<sup>314</sup> 桑田繁志編(1935) p.133-148

<sup>315</sup> 同 p.1-5 より抜粋

て、どんなもんだといった所謂政民聯繫劇がそれである如何にファッションに怯えた政治家達で、溺れるもの藁をも掴むとは云え、天下公衆の面前で、政友床次、民政町田ともあろうものが、中嶋君にあの齒の浮くようなお世辞は、見ているものの方で顔を赤めずにはいられなかった。しかし中嶋君がその齒の浮くようなお世辞を云われるように仕向けた所に番町会が正力某を参謀としての戦慄すべき暗躍がある。」

この記事からは番町会そのものが利権の巢窟のように描かれており、憶測で書かれていることがわかる。団体保険の問題も中島は公正に迅速に処理した筈で、河合からの反論(『経済往来』3月号)もあった。さらに政民連携問題は、第3章で述べたように中島が頼まれて、さらに本人も重要な仲介役であることを意識して実行したまでである。政界工作に深入りするつもりはなく、単なる引き合わせ役に中島は徹した。

番町会に集う人達で、『時事新報』の告発記事に対処して、釈明のために以下の広告が出された。河合によれば、『時事』の記事があまりに見るに堪えなく、会員間でその対処の仕方を取っ組み合いにもなるほどで、名誉棄損で告訴すればよかったと後で正力は公判で述懐している。番町会側でも後藤の名前で反論の「弁明書」を1月22日に都下の新聞全部に出した。以下はその「弁明書」の中で中島に言及した箇所の抜粋である。

#### 番町会に就て

「・・・中島男爵は番町会には全然無関係であるが郷男爵との友人関係から、新年会だけには他の懇親な人々と共に招待するのを例として居ります」

「某紙の記事は郷男爵の人格と会の本質とを諒解せらるる方には一顧にも値しないとは確信致しますが万一の誤解を懼れて茲に事実を明かにする次第であります。

・・・番町会幹事 後藤国彦」

武藤山治に対して告訴が出来なかったが、河合は『経済往来』1934年3月号に、「武藤山治君に対する公開状」を寄稿した。これは武藤の人物像を事実に基づいて批判したものであり、正義感の強い武藤が偏屈な性格であることを表現している。そして武藤の記事の誤りを徹底的に論証したものである。武藤はこれに対して、何の反論もしていない。これは第130回目の公判でも河合によって朗読されたもので、河合の著書にも掲載されている。また以下のような帝人株関連の記事もあった。

#### 『帝人』乗取り (其三) 肩替りの割当にロボット交渉委員<sup>316</sup>

「番町会員の中の猛者連中が、スクラムを組んでやった結果、帝人株肩替りが成功しそうになったので、その連中は自分等だけで勝手にやってうつつもりであったらしいが、そこに行くと中嶋君は稍公正で、大体は一派のもの遣方を黙認してはいるものの、余り遣り

<sup>316</sup> 時事新報社(1934) p.33-35



過ぎる事が、其頃は少し不満に思っていたので、此の帝人株肩替り問題には、それ相当の人を中に立てて保険団に交渉した方が良いという考えとなり、原、河合、永野君等には無断で、第一相互の石坂君に白羽の矢を立て、或る日のこと中嶋商相は石坂君の所へ、満洲セメントの事で一寸会いたいが出来ぬかという電話をかけた。満洲セメント問題で矢野恒太君がひどい目にあつたと世間に評判の立った少し前のことである。石坂君早速行くと見ると中嶋君から一寸満洲セメントの話があつたが、それはほんのちょっとで、後は『帝人株を今度台銀が生保投資団に肩替りしたいといっているが、君一つ骨折って出来ぬか』とこういふような話であつた。

商工大臣が帝人株の肩替りを依頼するので、石坂君先ず一寸面喰つた。然もその条件が台銀の台銀為めを思つたのであろうが、時価よりも三円高く買って出来という仕切値まで大体ついでの話であつたので、少からず驚いた。」

上記の第一生命の石坂泰三と商工大臣の中嶋が話したのは、事実であるが、裁判でもそれが大臣として石坂に帝人株の買取りを要請させるほどの会話ではなかつたことが明らかにされた。なお後に経団連会長となつた石坂については、第5章で再度言及する。さらに以下のような記事もあつた。

#### 『帝人』乗取り (其四) 十一万株の行方 甘い汁を吸う一派<sup>317</sup>

「即ち河合君は川崎系に、根津君は根津系に、原君は高砂企業に、中嶋君は保険団の一部に、永野君は大阪方面に、夫々交渉割振つて分割したと云われている。次にこの大問題の十万株の行方即ち割当先を本件に多少関係のある某所で調査作成した一覧表によつて、お目にかかることとする。・・・」

この記事では帝人株割当先一覧が掲載されるが、株数や約束名義人が実名で明かされたことで記事の信憑性は高まつたことであろう。

連載シリーズ中に中嶋が「足利尊氏問題」で大臣辞任をするという政治的事件が起きた。この中嶋の辞職は以下のように『時事』の告発シリーズの正当性を訴えるものとして利用された。

#### 中嶋君の辞職は当然の帰結 しかも一派の罪悪は尚お解消せず<sup>318</sup>

「中嶋商工大臣は遂に辞表を提出するに至つた。極めて当然の帰結である。前日の記事を執筆するに当り、パリ暴動の通信を見た大森山人は、肌粟の生ずる思いがしてならなかつたが、之れで幾分は救われたような気がする。段々番町会系の大臣なり会員がやつてゐることを掘り下げて探査していると、日一日と醜怪の度を増して来る、・・・ 既に

<sup>317</sup> 時事新報社 (1934) p.41

<sup>318</sup> 『時事新報』1934年2月1日

これまで一派の甚しい悪事を本紙に解剖したことによって、如何に議会で大臣と代議士諸君とが慣れ合って国民を誤魔化そうとしても、到底誤魔化し了うせるものでないし、これから愈々東株問題に関する悪事を白日の下に曝すに於いては、如何に巧妙に頬冠りを通ろうとしても到底通れるものではない。もし頬冠りを通ろうとすればする程国民の憤激を買って容易ならぬ結果を起すこととなる。それが判るので大森山人は肌粟の生ずる思いがしてならなかったのである。そこで遅しと雖も中嶋君が大臣を辞任して呉れたことは、幾分国民の憤激を緩和するものであって、大森山人が国家の為め国民の為めほっとした訳なのである。

中嶋君の辞職の表面の理由は尊氏傾倒論の申開きが出来なかったことである。即ち三室戸君から、大臣と男爵を辞した上日本人をも辞せよと言われ、大臣たることは勿論のこと、日本人たる資格もないことを暴露された為めである。身苟くも男爵を授けられ、皇室の藩屏たるものが、逆賊尊氏に傾倒するなどということは日本の義務教育を受けたものには到底考え得られないことである。それを好んで奇異の説を立てる所はどうも普通ではないと思う。

成る程中嶋君は華水と号して俳句も良くする、又却々西洋の本も読む、相当のもの知りである。更に又山にも時々登って大いに雄大の気を養うことに努めてもいるようであるが、どうも物事を大局的に正しく見ることが欠けている。根本道義に対する理解がない。若し真に中嶋君が根本道義に対する理解があり、大局を見て是非善悪の判断がつくならば、斯くの如き誤った逆賊のことなどに頭を費す訳がなく、又評判の如き番町会一派の面々とスクラムを組んで悪事を助長する筈もない。長い記者生活をしている大森山人は財界世話業者たる故渋沢子、故和田君の如きがその取巻きの選定についてどれだけ苦心したか知れぬことを屢々聞かされている。両故人の生前の話によれば多くの人々が夫々色々の目的を以て利用しようとして両故人を日夜取巻く、少し油断していると飛んだことになるそれを巧みに選定して仕事をさせることが経済界を健全に発達せしめる所以で私達の役目であるというのである。之れは財界の顔役の心得べき最も大切なことであるばかりでなく、取巻きの多い大臣業には最も肝要のことなのである。

中嶋君は俳句をつくったり、小理屈を云うことはうまいが、この根本のものを忘れている。選りに選って、番町会一派のもの如き札附連中を取巻きとして財界顔役をやって来た。その点郷君も同罪である。所で中嶋君がせめて大臣になったらそんな連中を近づけることを遠慮すれば良いのに、寧ろ大臣になったことを幸いにして、それ等の札附連中とスクラムを組んで、丸で商工省を番町会の別館のようにして綱紀紊乱をやったのである。中嶋君が辞職しなければならなかったことは誠に当然の帰結である。

中嶋君が罷めたからといって、番町会一派の連中のやった悪事が消える訳のものではない。『番町会を暴く』の記事は更に明日から筆勢を新らたにして続ける。」

中嶋が足利尊氏事件で辞職するが、それは当然のことだと断定する。このように憶測的

な記事が続いた。『時事新報』のこの「番町会を暴く」シリーズにおいて、『帝人』乗取り」は7回、「神戸製鋼乗取り」は11回、「東株乗取り」は13回連載される。そして連載が終わる直前、武藤山治が3月10日に暗殺されるという痛ましい事件がおきた。その事件も番町会の仕業として『時事』に書かれたため、河合は警察から取り調べを受けることになった。これは実際に武藤を殺害した福島新吉（40歳）<sup>319</sup>が河合に会おうとして、河合は風邪で会わずに、河合からの紹介で福島が清水弁護士に会っていたことなどが影響していた。河合は『時事』が「人殺しの手伝い」を河合がしたような記事を書いたことで、「番町会を暴く」の記事よりも「もっとひどい反響を社会に」与えたと回顧している<sup>320</sup>。

### (3) 小説『人絹』

『時事』の「番長会を暴く」を執筆した和田日出吉は、さらに記事をもとに『社会小説 人絹』なるものを書き、当時かなり流通した模様である。帝人事件の予審によって求刑されたのが1934年の12月であったが、1935年8月10日に初刷6000部発行された。その後、8月15日に第二刷1000部、8月16日に第三刷1000部が発行された。確認できる中で1937年7月20日発行まで増刷されている。

登場人物は実在の人物の名前を模したものであり、中島久万吉は、島中久万吉として登場する。同書は帝人公判の最終判決が出るまで、売れ続けた。小説の内容は、客観的な記述ながら、実業家・財界人らが帝人株の利権をめぐる、暗躍したことが生々しく描かれている。これを読んだ大半の世論は『時事新報』の記事が正しいことを信じたであろう。

以下、参考までにこの小説の登場人物（実名）とその所属（実名）を表4-2に掲げる。

表4-2 『社会小説 人絹』の登場人物（実名）

所属（実名）	登場人物名（実名）	所属（実名）	登場人物名（実名）
鈴木商店総支配人	兼子老人（金子直吉） 67歳	第二相互生命保険 （第一相互生命）社 長	矢田（矢野恒太）
元東京商業会議所会 頭 p.70	藤谷謙市（藤田謙一）	第二相互生命保険 （第一相互生命）支 配人 p.98	石田台三（石坂泰三）
重役業 p.34	奈鳥栄三	大坂の綿糸商人 1万株買取	多村角次郎（田村駒 治郎）

<sup>319</sup> 福島は火葬場問題に関する自分の案を武藤が新聞に掲載したことを怪しからぬとして、武藤に金銭を要求したが受け入れられず、私怨を抱き、武藤を殺害した。福島は武藤に公開質問状を出した河合に興味を抱き、面会を求めたのであった。

<sup>320</sup> 河合（1950）p.51

安井銀行副頭取 台湾銀行元頭取	木村廣蔵	台湾銀行頭取 目黒次官の下、特別 銀行課長 p.147	田島（島田茂）
東洋電燈社長 日本経済連盟会長 東邦商工会議所会頭 財界世話役 番町会の親分 p.83	谷請之助男爵（郷誠之 助） p.84	大蔵大臣	高山（高橋是清）
日銀	久方総裁（土方久徴） 池中理事 p.198 山城営業局長 p.219	山村株式店専務 番町会 p.74, 236	長井（永野護） 43歳
北海道の資産家	板屋宮吉	山崎第百銀行 p.75 愛国生命 p.98 高砂生命 p.233	原久仁造（原邦造）
第二徴兵保険相互会 社	小田清造	大坂綿糸商 p.71, 75, 76	伊東武之助 伊東孝兵衛(日印会商 に綿糸代表) 伊東兄弟
新聞社社長 p.46 番町会	金澤（正力政太郎）	文部大臣 p.54	羽戸（鳩山一郎）
鉄道大臣 田中内閣・大蔵大臣	三浦鉄相（三土忠造） p.231	大蔵次官 p.65	目黒（黒田英雄）
政友会総裁	鈴木	太平生命専務 p.71	清井
山脇銀行頭取 p.71	山脇	豊国徴兵保険（富国 徴兵保険）専務 第一部長 p.244  p.75, 91	林中造（小林中） 窪川経理課長 p.243
山崎第百銀行監査役 p.75	高井	大東生命 p.120	平沢
株式会社谷一社長 田島 p.98, 268	小田清蔵	大坂	伊東孝兵衛 （伊藤忠兵衛）
東京生命	廣瀬助太郎社長	日華生命専務	相川（河合良成）

p.76, 80, 98	阿邊房次郎 岡崎	番町会 相川の秘書 p.86	関山健治 p.223
商工大臣 男爵 番町会客分 老インテリ 進歩的財界人 p.90, 125-134 p.135-144 株の懲憑 p.176 p.227-237 帝人重役 の斡旋	島中久萬吉 (中島久万吉)	阪急電鉄専務 p.90	石倉具光 (岩倉具光)
台銀出身 合同油脂社長 朝日石油 (旭石油) 社長 p.91, 142, 174	川崎栄三 (長崎英造) 木谷と知人	甲州財閥	根塚一郎 (根津一郎)
帝人取締役 元台銀理事 p.97, 109, 175	佐々茂彦 (岡崎旭?) 義彦 p.229	日本生命 p.98	奈取学司 朝吹常二
p.98	藤村政助	中外投資 p.98, 220	山木常太郎 原高三郎
p.98	岩田真一	p.98	山下太郎
p.98	高橋博司 (高梨博司)	p.98	峯木吉左衛門
p.98	杉岡潤吉	台銀理事 p.102, 105, 155	木谷 (柳田直吉)
台銀 p.102, 165	木村理事 長田常務 p.207 坂下株式掛主任 p.212	京阪商事 p.114	村田久次郎
共保生命 p.115	藤田次輔	慶応生命 p.118	藤谷讓
安井生命 p.118	三条隆英	東海生命 p.118	木村雄次
海上保険の巨人	鏡鎌吉 (各務謙吉)	大蔵省	久保銀行局長

日東郵船社長 三倉財閥の大立物 p.141		p.148	(大久保偵次) 野川特別銀行課長 (大野龍太) 原田台銀監理官 (相田岩夫)
文部大臣秘書官 p.162	小林丈治代議士	帝人重役 p.173	内川静太郎
大坂側 村田久次郎 p.182		森田 ? p.181	
台銀秘書課長 帝人常務	岡澤 (岡崎旭)	台銀 p.255	藤村技師 秋葉技師 藤山整理課長 村野整理課次長
p.255	堤秀次郎代議士 (堤康次郎)	政友会代議士 田島と同郷 p.266	小山

和田日出吉『社会小説 人絹』、ページ数は同書のページ数

#### (4) 武藤山治の功罪

武藤の死は、番町会とは直接関係がない。犯人の福島新吉が自ら考えた「火葬場市営問題」について武藤と面談し、武藤はそれを記事にした。そしてその報償に絡み福島は武藤に恨みを抱き殺害に至った。福島は武藤を殺害後に自決した。

武藤の『時事新報』における報道は正論であり、『時事新報』における武藤の最大の業績だとの評価がある<sup>321</sup>。また、武藤の伝記に10年かけた野澤は、帝人事件を詳論する中で、河合ら保険会社の買受団による帝人株の取引が通常の商取引であることに深い疑惑を提示している<sup>322</sup>。

いずれも武藤の立論は全て正しいとみなす論理から生まれた論理展開であり、これらの論者は、判決文すら信じておらず、松田に至っては、河合たちは「法網をくぐって」ボロ儲けをし、河合が武藤殺害に加担したことまで推理している。そして帝人事件は武藤が引き起こしたのではなく、武藤の立論が検察などに利用されただけであり、武藤は財界悪に命を賭して戦ったと讃える。松田は『人絹』を重要な典拠に使うなど、その論法はアカデミックではない。

<sup>321</sup> 松田 (2004) p.116

<sup>322</sup> 野澤 (1998) p.266-267

武藤研究者で武藤が書いた回章<sup>323</sup>をすべて読んだ桑原哲也（故人）は、『時事新報』における武藤の報道姿勢については、筆者に「わからない」と語った。また武藤研究で有名な山本長次は松田の著書に魅力を感じながら、河合良成の著書には松田と同様に批判的である<sup>324</sup>。河合が投稿した武藤の人物批判の文章は客観的事実にそった公平な立論であるが、武藤支持派には読めない文章かもしれない<sup>325</sup>。ここには人物研究の難しさがある。

河合がいかほど武藤を批判しても、武藤殺害まで企てる人物とは思えない。

以上、簡単に武藤サイドから見た帝人事件の見方が、未だに偏っている状況を指摘した。客観的に見れば、武藤のキャンペーンは証拠不十分の中で、正義感の上から一方向的に書いたものである。武藤の友人や慶応の先輩たちも、その報道姿勢に忠告を与えたが、武藤の信念が変わることは無かった。その筆力は余りにも大きく、暗い世相の中で一般大衆は拍手喝采して、『時事』の記事を受け入れた。それは帝人事件の『遠因』となり、検察の陰謀も加わって、中島をはじめ無実の人々の人生を台無しにした<sup>326</sup>。その責任は『遠因』とはいえ深刻であると言わざるをえない。

なお中島は「武藤さんとは交際が全くなく、逆に氏とは対立関係にある和田豊治と親しかった」と書いている<sup>327</sup>。中島は武藤とは面識があったが、親しい仲では無かったらしい<sup>328</sup>。中島は『時事』の記事については、馬鹿らしいと思い、黙殺していた。そして武藤暗殺の報には、中島をはじめ日本工業倶楽部のリーダーたちは、同じ実業家である武藤の死に悄然とした気持ちになったことを付言したい。武藤は日本工業倶楽部の理事就任は断ったが、評議員ではあった<sup>329</sup>。これは三井の大先輩にあたる団琢磨の推薦によるものであった。

---

<sup>323</sup> 回章とは武藤が各工場に伝達した経営ノウハウに関するメッセージを指し、何万通もあると言う。

<sup>324</sup> 山本は、武藤山治について「温情主義」・「家族主義」的施策をし、「ヒト」を大切にした経営者という伝統的な視点で描いている。山本長次（2012）を参照。山本（2013）でも、その視点は変わらず、武藤の主張を追認するにとどまっている。

<sup>325</sup> 武藤の人物像についての批判は少ないが、結婚の決め方、妻を長期旅行に出して家を作った話などを引用して、「武藤は野人」との評価がある。福田（2009）p.397-398参照。松田は武藤の愛妻家ぶりを書いているが、貞潔であった武藤にも芸者の愛人（社会党右派の大立物西尾末広の娘）がいたという秘話もある。木村（1953）p.356参照。なお当時の実業家としては、中島は「待合這入り」が大嫌いであり、夫婦円満で、子宝（8人）に恵まれていた。荒木（1932）p.274参照。

<sup>326</sup> 判決後、中島（65歳）は政財界から引退し、家族にとっては中島家の没落が始まった。河合（53歳）も人生を棒に振った。獄中で父が亡くなったことを悔やんだ河合は『帝人心境録』（1938）で事件の概要を詳しく論述し、司法制度改革を警鐘した。さらに河合は、帝人受難後は、「世の中が一通り終わって、あとは何となく釣銭のような気がしてならぬ。」と書いた。河合（1943）p.1参照。また「私にとってこれぐらい深刻な感傷的な、また考えようによってはためになる事柄はなかったのです。その事件は私の後半生を支配したし、私の人生観を変えさせたのです。」とも書いた。河合（1952）p.71参照。

<sup>327</sup> 中嶋（1950.10.16）

<sup>328</sup> 日本工業倶楽部には武藤から中島宛の手紙が残されている。これは労働時間の問題に関して工業倶楽部労働調査委員長の中島からの問い合わせに答えたものである。

<sup>329</sup> 日本工業倶楽部の『会員名簿』（大正15年4月25日発行）によると、4月20日現在で、

### 3. 帝人事件とは検察による捏造事件

#### (2) 資料から見る帝人事件の真相

帝人事件は、政界・官界・財界の大物が関与した疑獄事件であるだけに、膨大な資料が残されている。関係者（特に被告人たち）の証言から司法学者、政治学者の研究まで多数にのぼる。ただ憶測によって書かれた新聞記者・ジャーナリストの疑心暗鬼的な論説や架空小説『人絹』もあり、これらは資料として参考にはならない。

無罪判決が出て、30年を経過する中で、未だに誤解も多いことを危惧した関係者（被告人）の河合良成<sup>330</sup>が、亡くなる直前に『帝人事件-三十年目の証言』（1970）を書き残した。中島と大変親しかった河合良成のこの書物は、予審廷の記録は未収のもの、公判録を利用し、人物心理にも詳しく、事件の背景・影響など情報が豊富に記載されており、関係者からの訂正も入れている。河合の遺作となったこの書物は帝人研究の傑作物であり、本論の重要な参考文献とした。

また大蔵省の高官であった青木一彦の文章も、本筋をとらえた秀作として、帝人事件の「遠因」・「近因」の語彙を拝借した。

検察側は控訴を断念したが、事件に関係した検察関係者は虚構のフィクションによって事件を捏造したことに全く証言を残していない。しかし後に、東京高等検事の河井信太郎は歴史的に刑事事件を回顧しながら、その中で帝人事件についても概略を述べている<sup>331</sup>。河井は当時の鬼検事、枇杷田源介や裁判官、石和和外（のちの最高裁長官）から詳しく当時の事情をきき、公判録を研究したうえで、帝人事件とは不十分な証拠に基づく、「検察の失敗事例」と結論づけている。以下の文章を紹介する。

「この事件では、検事三人が精神的苦勞で病気となり、主任検事の黒田（越郎）さんも途中で亡くなっている。昔から、事件というものは、うまく行かないと怪我人が出るとい

---

武藤山治は評議員に名を連ねている。

<sup>330</sup>河合良成[1886-1970]は富山県出身。高岡中学、四高を経て、東京帝国大学法科大学政治学科を1911（明治44）年7月卒。農商務省・商公務局を経て、1919（大正8）年に依頼免本官。東京株式取引所支配人、常務理事。日華生命常務、専務。帝人事件無罪判決後、満州国総務庁嘱託、東京市助役、運輸通信省局長。大東亜省顧問、農林次官。貴族院議員。厚生大臣。公職追放。第百生命社長、小松製作所社長（1952-64）。衆議院議員、東京大学講師などもつとめた異色の経歴の人物。著作も多く、亡くなる直前に自伝2部作である『明治の一青年像』・『孤軍奮闘の三十年』と『帝人事件』を書いた。特に『帝人事件』（1970）は河合が最晩年に執念を燃やした著作であった。河合は中島と同じ読書家で、各方面に才能を発揮した秀才で、西田幾太郎の弟子でもある。仏教思想に傾倒した点などでも中島と似ており、お互いに晩年まで交流があった。河合の同級生の正力松太郎（読売新聞社社長）と中島も大変親しく、中島の葬儀委員長を正力が務めた。帝人株の売脚益が河合を通じて、正力の読売新聞社の輪転機に費消されたが、この売脚益が疑惑の争点の一つとなってしまった。

<sup>331</sup> 河井（1979）p.7-14



われている。そして、あとを引き継いだ枇杷田（源介）さんも責任をとって長野の刑務所長に転出されている。

このような犠牲を出すような大失敗をしたのは、要するに「人に聞くより物を見よ。」という捜査の鉄則を忘れたからである<sup>332</sup>。

以上のように、検察側が証拠を見なかったとの反省の弁である。しかし、これも不十分な弁明であり、むしろこの事件は検察の無知というよりも、意図的に検察によって事件が捏造されたことが判決から明らかにされている。「証拠不十分ニアラズ、犯罪ノ事実ナキナリ」という名判決が下された。

この捏造の主体に関しては、さまざまな憶測があり、真の黒幕は分かっていない。少なくとも、以下のように有力な証言がある。

五・一五事件直後に警視総監(1932年5月～1934年10月)をつとめた藤沼庄平の自伝には、「帝人事件我観」という小項目で以下の記述がある。

「一、内閣倒壊の陰謀の成功 塩野氏らがこれを策して成功したのです、為に齋藤内閣は倒れ、平沼内閣が成立し、塩野氏は司法大臣となったのです。塩野氏が名糖事件に関する弱点を握って居る黒田検事を使喚してやらせたのです、私の想像でなくこの方面に通暁する人たちの明言するところです、黒田検事はこれを長崎栄造氏<sup>333</sup>に語ったと聞きます。」

<sup>334</sup>

この一文が、私が調べた資料の中で最も決定的に陰謀の主体を明言しているもので、やや詳しく解説したい。塩野氏とは塩野季彦であり、事件当時の司法省行刑局長をしていた検察の大物であり、後に第一次近衛内閣の司法大臣として帝人事件判決（1937年12月）に対して控訴しなかった人物である。「大乘的判断から控訴」しないとの理由は、議員や被告人たちを激怒させるものであった。

塩野季彦は林銑十郎内閣から司法大臣となり、第一次近衛内閣、平沼騏一郎内閣まで3代にわたり、司法大臣をつとめた。塩野は平沼騏一郎が主宰する右翼団体の一員でもあった。

平沼騏一郎は枢密院議長をしていた司法界のボスであり、五・一五事件以降に首相の座を狙っていた人物とされる<sup>335</sup>。その右翼的思想が元老の西園寺公望に嫌われ、代わりに斉

---

<sup>332</sup> 同, p.10

<sup>333</sup> 栄造は英造の誤記であり、長崎英造。長崎は桂太郎首相の娘と結婚し中島や河合良成の友人でもあった。帝人株買受団の一人であり、被告人となった。永野護と長崎英造は皮手錠をかけられ、虚偽の告白を強いられた。

<sup>334</sup> 藤沼（1957）p.181-182。黒田越郎検事が黒田英雄大蔵次官に書かせた「でたらめの嘆願書」が齋藤内閣の倒壊につながったが、これについては後で言及する。

<sup>335</sup> 歴史学者の佐々木隆が帝人事件の陰謀に関してもっとも公平に研究している。佐々木によれば、「この（帝人）事件は一般に平沼の使喚を受けた若手検事が捏造したものと言われているが、これには『西園寺と政局』の「平沼陰謀説」的な先入観念が多分に混入しているものと思われ、平沼が何処まで関与していたかは判らないというべきである。この事件は元来政友会の内紛として発生し、それに名糖事件の空洞化に対する検事の不満や、軍、

藤実に大命降下した。

黒田検事とは、帝人事件で当初の主任検事であった黒田越郎である。この黒田は、明糖事件<sup>336</sup>を通じて大蔵省に恨みを持ち、国家改造を理想した右翼系の人物であり、株に詳しくあった。捜査と訊問の激職のなか、早くも、斎藤内閣倒閣後の1934年7月23日に病死した。黒田越郎の死に際して、右翼系の演説会があり、その告別式には秦真次憲兵司令官から花輪が届き、異様な光景であったという。藤田謙一はその遺児教育基金に千円義捐していた<sup>337</sup>。この藤田は帝人事件の発生に関しての重要な人物で、あとで詳しく述べる。

このような検察の内部事情、斎藤内閣の倒閣を目指す右翼の動き、政党の領袖、その一派の代議士、軍部とのからみなど、複雑な背景から肥大化して事件となった。

以上、最終判決の視点、陰謀説の視点から帝人事件の真相についてある程度、理解できた。以下、この事件がいかに生まれたのか、河合などの資料をもとに疑惑の対象とされた帝人株の取引そのものから考察する。

#### 4. 帝人事件の全体の概要

##### (4) 帝国人絹株の取引から収賄事件へ

まず帝人とは帝国人造絹糸株式会社の略称であり、帝人株は政府監督下の特殊銀行である台湾銀行の保有株であった。台湾銀行が帝人株保有に至った経緯は以下の通りである。

台湾銀行は金子直吉が経営する鈴木商店に巨額の融資を行っていたが、その関係が深くなりすぎていた。1927年、大戦後の恐慌で企業業績は急激に悪化した。片岡蔵相の失言を通じた金融恐慌の最中、台湾銀行から新規融資を打ち切られた鈴木商店は破綻した。同時に台湾銀行は大損害を受け、さらに金融恐慌が広がる。台湾銀行の救済のための緊急勅令が枢密院で否決され、若槻礼次郎内閣が総辞職した。続く田中義一内閣の高橋是清蔵相のもと、日本銀行による特別融資で台湾銀行なども救済されることになった。

台湾銀行は倒産した鈴木商店から帝人株の過半数（22万株）を担保として所有していたが、これを自己債務の担保として日本銀行に入れた。この株式は台湾銀行から日銀特融へ

---

右翼等の様々な思惑が雪崩込んで肥大化したとみるべきであり、最初から諸勢力連合の「大陰謀」が計画されていたとみるのは穿ちすぎであろう」と書いている。佐々木(1977)p.77なお佐々木は藤沼の証言には関知していない。この中で若手検事とは黒田越郎であり、『西園寺と政局』とは西園寺の秘書である原田熊雄の日記をさす。

<sup>336</sup> 明糖事件（明治製糖事件）は1932年（昭和7年）におきた脱税疑惑事件。五一五事件の直前におきた。この事件は最終的に、税金に関する大蔵省と警視庁の見解の違いと判明し、比較的軽い処分に終わった。国民の政党や財閥に対する不信感を背景に、非常に大きな事件として報道された。司法省の刑事局長は大蔵省の調査結果を受け入れたが若手検事たちは不満を持ち、何とかして政治家や財界人を逮捕したいという執念を抱いたという。これが「帝人事件」へと繋がっていく。黒田越郎主任検事が、大蔵省次官の黒田英雄を収監した際、「黒田さんに会いたかったですな」と語った話は有名である。河合（1970）p.155

<sup>337</sup> 河合（1970）p.57；大島（1970）p.61

の返済のため、売却されるものであった。この帝人株は優良株として買取り運動の対象となっていた。

それゆえ、「帝人事件」というよりも、「台湾（銀行保有）<sup>338</sup>帝人株売却事件」と呼称したほうが分かりやすい<sup>339</sup>。会社としての帝人の内部に不祥事が起きたのではない。

鈴木商店の大番頭であった金子直吉は帝人育ての親であり、帝人の将来を見込んで、第一生命の矢野恒太、石坂泰三に株式の買受の話をもっていったが、高額なので話がまとまらなかった。

鈴木商店と関係の深い藤田謙一（元商工会議所会頭）<sup>340</sup>の買受案は、判決によれば、「頭金三百万円で台銀所有帝人全株（二十万株以上）を抑え漸次処分して巨利を博するか、然らざれば一株につき二十円の利鞘を得ようとするものであって、全く真摯を欠く暴案なりしこと明瞭である」というもので、藤田の買受案は台湾銀行によって拒絶された。藤田から懇請され、援助していた永野護（山叶証券専務）と正力松太郎（読売新聞社長）は藤田の計画が無謀だったので、藤田から袂を分かつた。

そして永野護らは1933年1月頃から、自ら買受運動を主体的に進めた。しかし藤田謙一は逆に買受団から外されたことを逆恨みし、これが事件の「近因」となる。藤田の裏面策動で事件がでっちあげられたことは、公判でも明らかにされた。

永野護は生保団と大阪の綿糸商などに引受けさせるのが公正で適当だとみなした。そこで永野は友人の河合良成（日華生命）、小林中（富国徴兵保険支配人）と長崎英造（旭石油社長）を誘うことにした。この取引は元来、藤田を通じて正力松太郎（読売新聞社長）からの紹介であり、永野と河合は読売新聞の資金難を援助するために<sup>341</sup>、この取引に関わった。1933年5月に河合良成を仲介人とする保険会社の一団と台湾銀行（理事の高木復享）の間で十万株の時価売買が成立した。この取引が成功すると、手数料17万円が正力に贈呈された。後で分ったことだが、正力はその内5万円を藤田に謝礼として渡した。また6万円が鳩山一郎文部大臣に渡された。この献金は不正な取得ではなかったが、議会で暴露され、齋藤内閣の鳩山文相は辞任を余儀なくされた。

河合良成が何度も訴えているように、特殊銀行である台湾銀行との取引には細心の注意

---

<sup>338</sup> 銀行保有は筆者が挿入した。

<sup>339</sup> 有竹（1965）p.344、福島（1969）p.21

<sup>340</sup> 藤田謙一[1873-1946]は実業家。明治法律学校卒。大蔵省辞任後、政府実施の塩専売制において多額の売却益を得た。台湾塩業の取締役などをつとめた。東京商工会議所の会頭[1926年7月・1930年3月]になる際には、派閥組織の辛酉会を組織し、藤山雷太会頭の二一会に勝利するなど闘争心に溢れていたという。1928年に日本商工会議所の初代会頭となり、勅選されて貴族院議員ともなった。しかし1929年には売勲事件で収監された。藤田は正力松太郎の友人であり、倒産した鈴木商店の顧問（東京代表）であり、帝人株買受を最初に志したが失敗した。その後、帝人株買受団（河合・永野ら）から外されたことを恨みに思った。復讐の念に燃えた藤田は「時事新報を動かし、検事局を動かした。そのやり方は大変巧妙である。敵に回すと怖い男である。」と評されていた。坂口（1985）p.116参照。

<sup>341</sup> 読売新聞は当時資金難であり、河合がよく経営資金を支援していた。そして正力は輪転機の買入れ資金が必要であった。河合（1970）p.15-16

を払い、通常の商取引を行い、時価より3円高く帝人株を取得したのであった。河合本人は手数料を一厘も取らず、取引の動機はサービスであり、友情でもあった<sup>342</sup>。

では、このような通常の商取引がなぜ、背任、流職などの罪名のもとに刑事事件となったのだろうか。帝人事件なるものが世の中に広く知れ渡る契機を開いたものは、『時事新報』の暴露記事であった。1934年に大蔵省の外国為替管理部長であった青木一男によれば、この事件はこの『時事新報』の「番町会を暴く」が「遠因」となり、これが議会でも取り上げられ、検察への告発があり、藤田謙一の策謀（流職が加味されたこと）にそって、検事局と動いたことが「近因」となり事件化された。検事局が動いた背景には、右翼・軍部など齊藤内閣の倒閣を目指す一群が動いたことが、一層この事件を複雑にさせたと言及したが、これは先述の通りである<sup>343</sup>。

#### (5) 背任事件から流職（収賄）事件へ—齊藤内閣の倒壊

事件の「遠因」となった『時事新報』の記事「番町会を暴く」が検察の教科書だったと河合は説明しているが、「番町会を暴く」によって世論が沸騰し、国会で議員が告発し、検察への告発もあり、検察が動き出すことになった。この時の問題となったのは帝人株をめぐる背任だけであった。河合ら保険団が不当に台湾銀行から帝人株を安く買い取ったという趣旨である。

この背任事件だけなら、中島が逮捕されることは無かった。帝人株をめぐる背任事件は帝人株をめぐる贈収賄事件へと捏造され拡大化した。そこには藤田謙一の陰謀が検察と合体していた。これが青木のいう「近因」である。流職に関与したとして、大蔵省の高官に続き、中島久万吉や三土忠造（元鉄道大臣）などの齊藤内閣の元大臣も検挙されるという異例の事態に発展した。

この贈収賄事件に拡大した原因の発端は、高木復享（元帝人社長・元台湾銀行理事）が収監中に生まれた。高木復享の予審は1934年5月7日から11月30日まで合計29回もあった。

なお当時の刑事裁判制度は、現在とは異なり、予審廷があった。検事は東京地方裁判所に予審請求を行う。予審廷において取り調べが行われ、予審調書が作成される。具体的には1934年12月8日に被告人の取調べが終了すると東京地方裁判所の両角誠英予審判事から、東京地方裁判所の枇杷田検事に対して予審終結意見書が出された。12月26日に予審終結決定がなされた。被告人高梨博司以外、16名全員に東京地方裁判所の公判に付する判断が下された。

高木の虚偽の自供から架空の贈収賄のストーリーが作られ、極中心理の中で中島も含めた関係者に辻褄が合うよう検察は仕向けた。青木によれば、「関係者間で陳述を一致させるため工作を施し、検事みずから被告間の信書の取次したもの九件、検事が立ち会って被告

---

<sup>342</sup> 河合（1938）p. 16-17

<sup>343</sup> 青木（1959）p.298-330, 河合(1938)

同士接見させたもの十六回に及んだ。」<sup>344</sup>

その経緯は複雑怪奇で、ここで詳細に論じることは出来ない。河合がかなり詳しく論じている。

帝人会社の帳簿がトラック 2 台分も押収され、「会社を潰してやる」と脅された高木は、収監時は帝人の社長になったばかりであった。台湾銀行以外の社会経験の薄い真面目な高木には大変なショックであった。鬼検事の枇杷田の激しい追及にあい、誘導尋問にあい、革手錠で訊問を受けた高木は「虚偽の自白」を作っていく。検事に迎合した高木はもともと胃弱で、拘禁 207 日でついに胃潰瘍で倒れた。公判で真実を語るために獄死できないと思った高木は冤罪を雪ぐために、虚偽の自白をした<sup>345</sup>。

高木が検察の誘導尋問で最終的につくったストーリーを簡単に説明すると、帝人株 1300 株を長崎英造（永野護・小林中が長崎に）から受け取り、これを大臣や大蔵省高官に配布し、自らも換価金を受け取ったという筋立てである。ここで表 4-3 に公判で収賄・背任などに関わった 16 名の氏名、肩書を列挙する。河合だけ背任に問われており、河合は増収賄のストーリーから蚊帳の外におかれた。三土忠造だけ偽証を問われたが、これは収賄を否定したとして法廷での偽証罪に問われたからである。

表 4-3 帝人公判の被告人の求刑内容と氏名

背任及流職（贈賄）	氏名・判決時の年齢（数え年）
元台湾銀行頭取（懲役二年）	島田茂（53）
元帝人社長・元台銀理事（同二年）	高木復享（54）
元台銀理事（同一年）	柳田直吉（51）
元台銀経理第一課長兼第二課長（同六月）	越藤恒吉（48）
元帝人取締役（同六月）	岡崎旭（48）
旭石油社長（同十月）	長崎英造（57）
元山叶商店取締役・元帝人取締役（同二年）	永野護（48）
元富国徴兵保険支配人（同六月）	小林中（39）
<b>背任関係</b>	
元日華生命専務・元帝人監査役（同一年二月）	河合良成（52）
<b>流職関係（収賄）</b>	
休職大蔵次官・貴族院議員（同二年）	黒田英雄（59）
休職大蔵省銀行局長（同十月）	大久保偵次（56）
休職大蔵省特銀課長（同八月）	大野竜太（46）
休職大蔵事務官・元台銀監理官（同八月）	相田岩夫（44）

<sup>344</sup> 青木（1959）p.308

<sup>345</sup> 河合（1970）p.177-187

元大蔵省銀行検査官補兼大蔵属 (同六月)	志戸本次朗 (44)
流職 (収賄)	
元商工大臣男爵 (礼遇不享) (同一年)	中島久萬吉 (65)
偽証関係	
元鉄道大臣・代議士 (同六月)	三土忠造 (67)

出典：東京朝日新聞・号外「帝人全被告に無罪判決」1937年12月16日などより

贈収賄の1300株の分配は以下のようになる。

黒田次官に400株、三土大臣に300株、中島大臣に200株、大久保局長に100株を配布された。残りの300株を換価して、42000円となり、これを島田12000円、高木15000円、柳田・越藤・岡崎が各自5000円ずつ受け取る。島田・高木ら台銀側から大野7000円、相田5000円、志戸本2000円が贈られた。

この中で、黒田次官が収賄を受けた帝人株が重大な意味を帯びる。その換価金の一部が、三土大臣や高橋是清蔵相の息子である高橋是賢子爵などに贈与されたという内容の嘆願書が作成された。黒田越郎検事によって書かされた黒田英雄次官の嘆願書が東京地方裁判所の岩村通世検事正<sup>346</sup>あてに提出された(1934年6月22日付け)。小山松吉司法大臣を通じて斎藤実首相に報告され、内閣の大黒柱であった高橋是清が辞意を固めた。こうして嘆願書は斎藤内閣崩壊(7月3日)の爆弾となった<sup>347</sup>。この「でたらめ」の嘆願書については、二二六事件で斎藤実と高橋是清が殺害後に公判において明かされた。これも倒閣の陰謀説を裏付ける証拠とみなされている。

ここで中島は三土に200株の換価を依頼したと予審廷で証言した。予審廷での懇談会や対質訊問でこの証言を受け入れるように中島から促された三土は中島を罵倒した。三土は300株の收受と中島から依頼された200株の換価を否認たことで偽証罪を問われた。三土と大蔵省の若手三名(大野・相田・志戸本)だけは予審廷において、最後まで検察の要求を呑まなかった。

中島も、この架空の流職の話に乗せられるように仕向けられ、嘘だとわかりながら、関係者への情の配慮から認めていった。そのプロセスは複雑だが、公判の証言からそのプロセスが明かされた。なお大臣であった中島はその他多くの嫌疑がかけられたが、「中島公判録」からその内容を分析する。

以上が収賄事件の概略である。中島は流職(収賄)容疑で起訴されてしまった。

#### (6) 議会、右翼系の告発、藤田一派の動き

「番町会を暴く」の記事は国会でも取り上げられた。貴族院では関直彦(2月3日)、菊

<sup>346</sup> 岩村通世検事正は中島の遠縁にあたる人であり、取調べに二度ほど来た岩村は中島に「早く白状しろ」と言ったという。中嶋(1950.10.27)参照。

<sup>347</sup> 青木(1959) p.301-302

池武夫（2月8日）、衆議院では政友会の岡本一己（2月9日）、江藤源九郎らが、いずれもこの記事をもとに、「不当な安値で買い叩き、77万円ももうけた、これにより台湾銀行は莫大な損失を受けた、司法権を発動して捜査・検挙せよ」と論断した<sup>348</sup>。

八幡の製鉄合同をめぐる疑惑で追究されていた商工大臣の中島は「足利尊氏問題」で2月8日には引責辞職に追い込まれていた。岡本はいわゆる「五月雨演説」で鳩山一郎の樺太工業をめぐる流職事件を新たに暴露した。これは政友会内部の内紛によるものであり、鳩山の無実は証明されたものの、3月3日には辞職した。このように第65帝国議会は大荒れの様相を呈した。これに対して、議会では台湾銀行の監督官庁である大蔵省の高橋蔵相が、台湾銀行の所有株式の売却について正当な手続きで処理したことを答弁した。また日銀も4月には返答をしており、台湾銀行からの申し入れを了承したのであった。

この時、蓮井継太郎（日本国粋民衆党執行委員長）、中井松太郎、加藤松太郎の3名からそれぞれ、告発状が東京地裁検事正宛に提出された。中井の内妻と武藤山治の妻は懇意であった。検事局は告発人の聴取をもとに2月下旬から調査を開始した。その際、藤田謙一の検事調書も重要な捜査の材料となった。ここでの非難の論点は、台湾銀行は帝人株を不当に安く売却して、買受団や仲介人に利得を与えたという背任行為にあった。実際の公訴段階では、背任だけではなく流職罪（贈収賄）も付加されるが、これは『時事新報』や関直彦らの国会での論難にも言及されておらず、藤田一派と検事による裏面の合作であろうという青木の考えは先述の通りである<sup>349</sup>。

## 5. 収監された中島久万吉

### (1) 検事局へ

足利尊氏事件で1934年2月に中島が大臣を辞任していたが、よもや自分が収監されるとは思っていなかったことを公判で語っている。

4月に親しい、長崎、小林、河合、永野の強制処分があった。5月19日には大蔵省の黒田次官が召喚されるという大事件がおき、その号外記事は世間を震撼させた。その他、大蔵省の高官4名も収監され、帝人事件は「大蔵省事件」と当時は言われた。

「虚心平気」にこれらの事態を看過していた中島であった。ところが6月にはいり、自宅の門前に朝4時頃から数台の新聞社の自動車が現れ、中島の出門を警戒するようになった。新聞記者によれば、中島がいつ検事局に召喚されるのかを見張っていたのであった。中島には何の嫌疑の筋か理解に苦しんだという<sup>350</sup>。

嘆願書事件で斉藤内閣が倒閣したのは1934年7月3日であり、岡田啓介内閣の成立は7月8日であり、この谷間に中島の最初の収監がおきた。

---

<sup>348</sup> 大島（1970）p.58

<sup>349</sup> 青木（1959）p.307

<sup>350</sup> 「公判録186号、12.5午後部」

7月5日午前7時に帝人株の収賄(流職)をめぐる中島久万吉は検事局に任意出頭した。14時間にわたり枇杷田検事から取り調べを受けた。午後9時から予審廷で証人訊問を受け、6日零時10分に不拘束のまま一旦釈放された<sup>351</sup>。

一日に及ぶ取調では、一万円贈与の件と特に帝人株收受に関して厳しく問い詰められた。身に覚えのないことであったが、高木が自供したという「帝人株贈与の事実を認めさえすればよい」と執拗に自白を迫られた。岩村検事正も立会い、「長年の経験によれば、どの被告人も最初は否定するがやがて自供するものだ」と言われた。

7月6日午後1時半、中島は検事局に再度出頭を命じられた。枇杷田検事に正力松太郎らと交わした往復書簡などを示して大いに弁明した。聴取は約2時間あり、午後4時に帰宅した<sup>352</sup>。

7月21日午前6時35分に検事局に三度目の召喚を受けた。被疑者として枇杷田検事から午後まで峻烈な取調を受けたと言われる。夕方、起訴前の強制処分となり、市ヶ谷刑務所に収容された。このニュースは特にマスコミでも大きく扱われ東京朝日新聞では「前商工大臣中島男 けさ検事局に召喚さる 今夕市ヶ谷に収容か」の号外(七月二十一日)が顔写真入りで発行された。22日の夕刊では、一面トップで中島の薬王寺邸で家宅捜査を終えた検事らの写真入りで、中島が強制収容されたことが報道された<sup>353</sup>。葉山の岩倉公別邸(週末に過ごしていた)と牛込区薬王寺町四七の本邸が家宅捜索され、証拠物品が押収された。

中島には従三位勲二等という爵位勲等があるので、起訴に関して法相に稟議を必要とし、内閣を経て上奏の手続きが必要であった。このような複雑な手続きの必要性から、22日は起訴前の強制処分ですぐに市ヶ谷に収容されることになった。

岡田啓介新内閣のもと30日に、小原法相は起訴稟請書を取りまとめ、岡田首相に報告し、その同意を得た。さらに小原法相は鈴木侍従長と会見し、内閣を経た上奏の手続きが完了した。このように侍従長を通じて勅裁を仰ぎ、中島の起訴処分が31日の夕方までに付されることになった。起訴処分の通知を受けて、宮内省によって華族の礼遇不享の処分が決定され、告示されることになった<sup>354</sup>。

そして10月11日に保釈されるまで、市ヶ谷刑務所に83日間拘留されることになった。元大臣を家宅捜索する検事の姿やその収監は夕刊一面トップに大きく報道された。彼の栄達や名誉は急角度に転落した。

---

<sup>351</sup> 以下の検事局への収監・家宅捜索から保釈までの事実は東京朝日新聞の記事を参考にした。

<sup>352</sup> 新聞によれば、6日の出頭は自らの進んでの出頭と書かれているが、公判録によれば、出頭を命じられたと中島は語っている。「公判録」では、6日の出廷は1時からだという。

<sup>353</sup> 東京朝日新聞「三度召喚の中島男 今夕遂に強制収容 収賄嫌疑頗る濃厚」「矢継早の家宅捜査 葉山別邸と牛込の本邸で 多数の証拠品を押収」夕刊一面、1934年7月22日

<sup>354</sup> 東京朝日新聞「中島男の起訴 けふ勅裁を仰ぐ 夕刻までに起訴処分」「起訴と共に禮遇不享」夕刊一面、1934年7月31日



強制処分によって訊問を受けた中島は、検事局の語る架空の流職話に最初は疑惑に思ったが、ついに受け入れてしまったことが公判から明るみになった。中島は検事が嘘をつくはずがないと思い、複雑な獄中心理の中で、検察のストーリーに乗っかっていった。

検事による聴取書は表4-4のように5回作成された。

表4-4 中島の聴取書

中島久万吉の聴取書 1934年	特記事項
第1回検事聴取書(7月5日)	
第2回検事聴取書(7月21日)長尾検事	虚偽の告白をする
第3回検事聴取書(7月22日)	
第4回検事聴取書(7月28日)	
第5回検事聴取書(8月13日)	

出典：「公判録188号，12.10午前」より

## (2) 予審廷での取調

8月以降には予審廷での取調を受けた。その記録が流職被告人・中島久万吉の「予審被告訊問調書」として残されている<sup>355</sup>。この予審調書をもとに、中島の予審廷における、取調の月日、場所、予審判事両角誠英の質問に対する中島の答えを表4-5にまとめた。この間、中島と三土との対質訊問(8月21,22,29日)、保釈(10月11日)、上申書の提出日(11月18,25日)も挿入した。

全体として当初から中島が流職関係を認めたことが明確に読み取れる。高木らから謝礼として帝人株二百株を受け取り、その換価を三土大臣に依頼した。その換価金を友人たちの政治資金として分与したことが明かされた。これらの分与そのものは真実であったが、中島が気前よく多くの政治的な寄付をしていたことが判明した。そして三土との対質訊問も行われ、中島は三土から罵倒されたのであった。

それとは別件で、帝人関連の謝礼として、自らに一万円の献金が贈与されたという新たな疑惑も浮上した。途中で痔となって慶応病院に入院した事実も挿入した。

しかし、保釈後に上申書を11月以降に提出し、既存の「虚偽の自白」を翻したのである。

表4-5 中島の予審調書・三土との対質

訊問調書	日時・場所	予審判事両角誠英の問と中島の答え 裁判所書記中村覚三
第1回	8月3日・東京地方裁判所	一問～八問 流職の事実認める。株式上場の認可、永野らの1万

<sup>355</sup> 専修大学今村法律研究室編 『帝人事件(十)今村訴訟記録 第26巻』1997年

		円の献金は政治費。番町会、華水会。
第2回	8月4日・東京地方裁判所	<p>一問～十八問</p> <p>商工大臣の主管事項。台銀所有の帝人株とその上場と価格上昇。河合らに頼まれ、生保会社に買い方の依頼。</p> <p>永野から帝人の重役希望の依頼に応える。保険会社の代表者（石坂泰三・太田清蔵・原邦造・各務謙吉・根津嘉一郎）に買受の話。各務謙吉は拒否。</p> <p>三土に河合・永野の帝人株買入を台銀が受けるよう依頼。</p>
第3回	8月6日・東京地方裁判所	<p>一問～十三問</p> <p>第一生命（石坂泰三）に懲憑。</p> <p>第一徴兵（太田清蔵）に懲憑。</p> <p>愛国生命（原邦造）に懲憑。</p> <p>東京海上（各務謙吉）に懲憑。拒絶。</p> <p>富国徴兵・太平洋（根津嘉一郎）に懲憑。</p> <p>長崎らが自分を利用して台銀に依頼か。</p> <p>帝人株売買契約書。</p> <p>各保険会社が帝人株有利との判断で買受。</p> <p>帝人株の購入で正力・河合ら保険団は利得。</p>
第4回	8月9日・東京地方裁判所	<p>一問～十四問</p> <p>違約引受株。</p> <p>株価 20 円の上昇知らず。</p> <p>帝人重役に二名（河合・永野）推薦。長崎の依頼。</p> <p>売買成立後の帝人株の上場、認可に関与せず。</p>
第5回	8月17日・東京地方裁判所	<p>一問～十七問</p> <p>台銀理事から帝人株百株券二枚受けた。</p> <p>高木理事がテーブルに茶封筒おく。</p> <p>違約株の一部が長崎らを通じて台銀理事へと推測。</p> <p>二百株は御礼。</p> <p>二百株は三土に換価を依頼し、三万四百円を受け取る。</p> <p>その換価に関する詳細、首相官邸で三土から貰う。</p>
第6回	8月18日・東京地方裁判所	<p>一問～二十二問</p> <p>三万四百円の費消。</p> <p>国民同盟代議士・中野正剛に八千円</p>

		<p>政友会代議士・芦田均に七千円  国民同盟代議士・岸衛に二千円  元民政代議士・簡牛凡夫に二千円、別口千円  日本労働総同盟・亡菅野に千円、別口千円  労働総同盟八幡支部長伊藤に千円  無産党代議士・小池四郎に千円  昭和8年12月に永野らから現金五千円、小切手五千円の供与。  第二華水会の七人（渋沢正雄，清水郁，岩倉具光，高梨博司，永野護，小林中，長崎英造）から供与。  六夫婦と小林を自邸に招待して御礼。  佐和田執事から中島家の家計が豊かでないと四人（永野・長崎・小林・高梨）が聞く。  帝人株売買のお礼の意味もある。  永野は株式上場認可に御礼。  永野は帝人重役の推薦に御礼。</p>
第7回	8月20日・東京地方裁判所	<p>一問～六問  大坂にも男爵のファン「土曜会」あり。  岩倉は大坂・東京でまとめて贈呈を永野に提案、しかし永野が東京側のみでの贈呈に憤慨。  土曜会10数名とは、  大坂商船取締役・村田俊彦  日本綿花社長・南郷三郎  三井物産取締役、大阪支店長・田島  阪神電車取締役・岩倉具光  丸紅商店店主・伊藤忠兵衛  ・三土からの帝人株換価金の受領は相違ない。  三土に対する友情のため、強制処分訊問のさいに不実を申した。  清水弁護士が、中島と三土の帝人重役推薦で検察がめをつけていると注意。  3月下旬か4月に永野から晩飯の誘い。新橋の待合田中で。河合・長崎・名川侃市（鉄道政務次官，三土の部下）、清水、正力が参列。</p>
	8月21日・東京地方裁判所	<p>三土：検事局に出頭し、岩村検事正立会のもと中島と懇談させられ、はじめて事件の一端を知り得た。</p>

	8月22日・東京地方裁判所	三土、中島と対質訊問 三土：「中島は気でも狂っているのではないか」
第8回	8月27日・東京地方裁判所	一問～十問 三土は否定しているが、三土に換価を依頼した。 三土と中島の供述が氷炭相容れざる？ 三土と換価についてお互いに明かさぬことが友情だが、私が申したてて信義を破った。 中島の三土の私宅訪問は三、四回。 本年5月8日、築地料亭山口での八日会に三土が参加し、誰かが三土に司法省の過酷な取調を注意されたいと。
	8月29日・東京地方裁判所	三土と中島の再度の対質訊問して帰宅 中島：拘禁心理で非常に迷う。「三土に対して非常な羞恥心、穴があれば潜り込みたい。」
第8回	9月19日・東京地方裁判所	一問～二十四問 保険会社持分振当は中島大臣に一任との電報。これは河合が私を利用したもので、関知せず。 帝人株買受を政務次官岩切重雄を通じて、太田に懇願の件で、岩切・太田は否認だが？⇒永野・長崎を通じて依頼。 ・三土宅の図面、二階洋風の書斎で株券を渡す。大石運転手が自家用車を三土宅の近くまで。三土宅で五分間の対談。 ・三土に昨年7月4日に総理大臣官邸閣議室の隣の控室で換価依頼。11日頃に換価金を総理大臣官邸の地下ホールで収受。図面で場所を説明。 ・商工大臣官邸で島田・高木から帝人株を受けた場所を図示。 ・昨年11月7日、第二華水会を招待（細君は呼ばず、以前の証言は記憶違い）。1万円のお礼の為ではなく、組織してくれた御礼として。1万の謝意はせず。
第10回	10月6日・東京地方裁判所	一問～十七問 昭和8年7月頃に中野正剛に金八千円の供与。中野君に好意あり。 中野に八千円を同君の代々木の私宅（原宿の私宅を

		<p>訂正) で、海外旅行する岸に二千元。</p> <p>昭和 8 年 8 月頃、東京倶楽部で会食し、芦田均に金七千元を供与。芦田の人物愛す。政友会の中の国政一新会のため。</p> <p>岸衛に二千元を供与。金子武麿に手紙を渡して託す。</p> <p>日本労働総同盟の指導者神野信一（菅野ではなく）に二度、二千元を供与。</p> <p>労働総同盟九州連合会会長伊藤卯四郎（伊藤氏ではなく）</p> <p>昭和 8 年秋小池四郎に千円を供与。永野を通じて換価金を。</p> <p>執事佐和田一雄名義の第一銀行室町支店の当座預金のための小切手帳の控え＝吉田茂への千円は帝人株の換価金か⇒協調会理事の吉田へ、何かの社会事業の寄付。</p> <p>・三土からの換価金は自宅の居間に、銀行預金せず。</p>
第 11 回	10 月 10 日・東京地方裁判所	<p>一間～十六間</p> <p>中野への供与は、私から進んで。中野の書生時代から同人の人物を愛し、種々の援助してきた。中野が福岡区から衆議院議員に立候補したとき、三千元を寄付。</p> <p>帝人株二万四百円のうち、八千元を中野（国民同盟）に供与。</p> <p>芦田への供与も私から。換価金から援助。ジャパンタイムスの株式引受を支援。</p> <p>昭和 8 年 10 月 19 日の晩、待合蜂龍での宴会（帝人の新大株主と台湾銀行重役との引き合わせ会）に出席。長崎が主人で、三土、島田、柳田、高梨、小林、河合、永野、高木が出席。</p> <p>昭和 8 年 12 月 19 日の晩、待合山口の宴会（台銀からの返礼）に出席。13 名出席。</p> <p>本年 1 月 10 日の晩、待合山口の宴会（永野・河合が帝人重役になった披露に出席。同じ顔ぶれの出席者。</p> <p>昭和 8 年 7 月の山口の宴会は記憶違い。</p>

		本年4月4日の晩、待合田中家の会食。永野、河合、長崎、清水、正力が参加。名川は？
	10月11日	午前八時半、市ヶ谷刑務所を特別の取扱いで出監（保釈）。 慶応病院へ。地主「中村久吉」の変名で痔の治療、13号室「面会謝絶」、妻、精一、真吾ら一族集まる
第12回	10月20日・東京地方裁判所	一問～十四問 従来の供述に相違ない。 高木からの帝人株百株券二枚の提供は相違ない。 ・換価金処分について保釈後、再考して供述の違いを申し上げたい。 永野からの1万円献金は相違ない。 帝人株買受運動で永野・河合を助力してほしいと長崎から依頼を受けた。 貴族員の公正会と三土の政友会は反りが合わないが、私は不偏不党で、政友会に反対してきたことはない。 昨年7月31日、憲兵隊事件で警戒嚴重の時に、三土から換価金を受け取った。 保釈許可後、中野正剛・芦田均などと面接、手紙、電話など意思の交換はしなかった。
第13回	10月31日・東京地方裁判所	一問～四問 高木からの帝人株贈呈については陳述した通り。 換価金を中野、芦田らに分与したが、善意で受け取った。彼らの立場にご賢察願いたい。 申立てたいことは無い。
第14回	11月20日・慶応病院	一問～八問 15日に痔の手術で入院。 二、三根本的に思い違いあり、上申書を作成。 高木から帝人株を受けていない。 三土に換価を依頼し、代金受け取った事実なし。 それに関連した事実なし。 昨年6月から7月に三土宅を訪問したことなし。 中野、芦田に金交付せず。 各氏への交付した分は私の銀行預金からで、換価金からではない。

		<p>上申書は今月 6 日から書き始め、タイプさせた。</p> <p>何故今さら虚構の事実と訂正するのか⇒恐縮の他ない、その間の事情を文書に作成した（昭和九年十一月八日付）。</p> <p>商工大臣在任中は私邸から通勤。外出する際は、大臣官邸内の塚越が専属運転手。警衛は警視庁の景山巡査が随行。</p>
領置目録	上申書 昭和九年十一月八日付中島久萬吉名義の文書	(電話して、自宅から持参させた文書)
第 15 回	11 月 25 日・慶応病院	<p>一問～十七問</p> <p>三土宅の訪問は昭和 7 年 6, 7 月頃。随衛は景山巡査、運転手は拙宅住込の大石。昭和 8 年には訪問せず。</p> <p>高木・島田が昭和 8 年 6 月 26 日に商工大臣官邸を訪問したことなし。島田は昨年 6 月 29 日頃、商工大臣官邸を来訪。島田は台湾から帰京の挨拶、初対面。</p> <p>保釈後、元秘書官の金子武麿から島田訪問の日時を聞いた。</p> <p>高木は商工大臣官邸に来たことない。</p> <p>高木は私邸に一度だけしか来ていない。</p> <p>高木から帝人株百件株二枚を提供された事実なし。</p> <p>昨年 12 月、第二華水会の連中が岩倉具光の主張で私に 1 万円を提供したのは政治的費用援助であり、帝人株上場に対する禮心に出たものでない。</p>
領置目録	昭和九年十一月二十五日付上申書	
第 16 回	12 月 1 日・牛込薬王寺町四十三番地中島久萬吉宅	<p>一問～三問</p> <p>高木から帝人株を受けた事実は全然ない。高木は昨年 6 月 25 日頃、長崎・河合・永野と帝人重役就任問題で拙宅に来たのみ。</p> <p>高木・島田の主張は相違。</p>

資料：専修大学今村法律研究室編『帝人事件（十）今村訴訟記録 第 26 巻』1997 年，東京朝日新聞，河合（1970）など

## 6. 帝人公判と中島の心境

### (1) 上申書の作成と公判の開始

保釈後から、中島の法廷闘争が静かに始まりだす。10月11日に保釈後、中島は自邸に行かず、慶応病院に痔の検査のため診察を受けた。刑務所に収容中の9月から痔の病にかかったというが、10月15日に入院して手術が行なわれた。退院は12月になってからだとされる。三土は、中島が痔になっていたから変態心理になっていたと公判で証言した。

保釈後まもなく、弁護士連中からの要請で、中島と河合が二人きりで、一泊の予定で箱根の環翠楼に行った<sup>356</sup>。ここで河合は、中島から、中島の心境、獄中での永野への書面の件、三土とのこと、虚偽の陳述に乗せられ、さらに進んで虚偽の上塗りをした理由などを聞いた。そして中島のために上申書の原稿を書いた。それを中島が適当に訂正して、裁判所に提出したという。中島は河合に「君は俺自身よりも俺の心境を書いてくれる」とほめた<sup>357</sup>。これが上記の表にある11月20日に提出された上申書であるが、河合の協力については公判では語っていない。

中島は、保釈後、冷静になって、自分が虚偽の自供をしたことを近親の者にも話したが、どうしても長崎・永野に対しては半信半疑の感情が残っていた。彼らの出所を待って上申書を書きたかったが、彼らが予期したように出所しなかった。上申書を書いて、供述を翻しても、再度、強制収容が有る可能性のあることを秋山弁護士から聞いた中島は、秋山から時期を見るように言われた。このため、保釈後の10月20日、31日には直ちに供述を翻さなかったのがあった。

しかし三土が10月31日に出所したことから猶予がならないと思い、上申書の文案を書いて浄書しておいたが、入院中に偶々両角予審判事が訪ねてきたので、渡すことができた。

痔の手術から回復して、強制収容に耐えられるように健康状態が回復していた事情も幸いしていた<sup>358</sup>。

帝人事件の関連で4月26日に島田・高木ら7名の背任の予審請求が開始され、5月に永野・小林の背任請求が始まり、同月流職で、黒田・大久保ら5名の請求もはじまり、前節でみたように7月に中島の請求もされ、三土が偽証の予審請求されることで役者が全員揃うことになった。

中島の上申書などは効を奏さず、公訴事実がそのまま認められ、12月27日に予審終結が決定された。被告人高梨を除いた16名について東京地方裁判所の公判に付す旨が判断された。

帝人公判は1935（昭和10）年6月22日の第1回公判から始まり、1937（昭和12）年10月5日の第265回公判まで続いた。この間、中島は河合、三土らと裁判に通うこととな

---

<sup>356</sup> 河合（1970）p.243

<sup>357</sup> 同，p.244

<sup>358</sup> 「公判録190号，12.15午前」



った。隔日での裁判所通いを「学校」と称して、通学した<sup>359</sup>。

このうち、流職被告人の中島が焦点となった公判は表4-6のように6日分ある。各日も午前と午後の部があった。その公判速記録を本章では(中島)公判録と呼ぶ。

表4-6 中島の帝人公判

帝人公判	1936(昭和11)年
第186回	12月5日(土曜日)
第187回	12月8日(火曜日)
第188回	12月10日(木曜日)
第189回	12月12日(土曜日)
第190回	12月15日(火曜日)
第191回	12月17日(木曜日)

ここで、まず河合が書いた中島の上申書の概要にふれる。公判前の資料であるが、ここからは出監後の中島の人間性が明確に浮き彫りにされる。

## (2) 上申書に見える中島の人物像

中島と交際の深い河合は以下のようなことを上申書に書いたという。

- (一) 中島は収監されて、すぐに永野・長崎などが帝人株千三百株を台銀側に贈与していることを検察から聞かされ、大体においてそれが真実であることを信じてしまった。
- (二) 帝人株の買受団(特に永野)の内部事情がいろいろあり、その関係で中島にも「迷惑だろうが、一役振り当てて、二百株を背負ってもらおう」ということになっていると思ひ込んだ。
- (三) その頃、よく中島邸で岩倉、永野、後藤、河合、渋沢正雄、清水郁(弁護士)その他7,8名が夕食と歓談にふけり、碁・カードをした。中島はいっさい勝負ごとはせず、口も出さず、淡々とニコニコとして、いくらか哲人的態度を持して、彼らを眺めていた。帝人事件における中島も、その連続であった。
- (四) 中島は自分から進んで、後輩(特に永野)の都合のよいように、利用されるつもりで検事側に陳述した。検事側の深入りする質問に、人のよい中島はさらに深入りした。
- (五) 中島は本来、行雲流水的の心境をもった人で、天成的の一人の俳人である。財界や政治に関係したこともあるが、これは一つの仮相であって、本来、禅道と

---

<sup>359</sup> 河合(1970) p.78

俳道とを交えたような風格の人であり、世上の名利財産などにはきわめて恬淡たる人物である。したがって、常に運命に適従して何の反抗をも示さざる人柄である。その人柄のほどがこの事件によく現われている<sup>360</sup>。

一般に裁判では真偽が問われ、人間性が最大の焦点となる。この上申書からは、被告人・中島久万吉の人格、人間性がよく表現されているとあって良いだろう。財界人・政治家という表向きの役職の裏面で、中島が俳句にこり、禅趣味をもっていた。それは「心の哲学」を重んじた中島の人間性を物語るものである。また利他心が強い中島は、自己犠牲的なこともあえて引き受ける人でもあったことがうかがえる。これは中島が元来、精神的価値を重んじる人であったことを物語る。「財界の精神的指導者」となった中島の人物像がよく現われている。

中島は後輩の永野のことを思って、検事側のストーリー作りに協力した。その結果、斉藤内閣の同僚である三土にもストーリー作りを依頼するが、頑強な抵抗にあい、たじろいでしまった。

以下、永野の公判録に基づき、中島の人物像に迫る。

### (3) 永野公判録にみる中島・永野の関係と中島の人物像

永野護は正力松太郎が釈放されたことに啞然とし、逆に中島が市ヶ谷に収監されてしまったことに大変な精神的苦しみを感じた。それは帝人株取引の主役である、鋭利な永野の自負心から来た。永野は中島のことで苦しみ、獄中で何日も飯が食べられなくなったという。しかし逆に中島が来てくれたことは不幸だが、事件解決の燭光ではないかと思うようになった。

中島が収容された翌日（1934年7月22日）に、中島直筆の手紙を永野は枇杷田検事から渡された。その手紙には「自分が台湾銀行から貰い受けた帝人株二百株を貴君の手で換価した顛末は全部検事局に申立てたり。貴君も小生に頓着する所なく御開陳ありたし。七月二十二日 中島 永野様」と書かれてあった。

帝人株取引の主役であった永野は、洗職に関する「嘘の芝居」（千三百株の件）から外されていて、その役回りは長崎にされていた。そのため、この手紙の内容に永野は驚愕した。

永野は40年以上生きてきて、この時ほど不可解な事実につづかったことはないと言っている。洗職を否定していた永野に対して、枇杷田は「貴様は、中島男爵は神様のような人で、断じて嘘を言わない人だと云っていたが、これが神様のお言葉なんだ。何の顔（かんばせ）があつて貴様は俺に会うことが出来るのだ」と罵倒して、「死ぬ、死ぬ」とも言ったという。

驚愕した永野は枇杷田検事の足元に飛んで「死にますからあなたの靴で蹴って殺して下さい」と言ったという。

---

<sup>360</sup> 河合（1970）p.244-245

検事の誘導により、永野も中島もお互いに錯覚地獄に陥ったのであった。「此日位私苦しんだことはございませぬでした。」と永野は公判で語った。永野は「中島男爵の人格は玉のような人だ」と尊敬していたのであった。それが逆手に取られたのである。

永野はさらに枇杷田から「中島男爵ほど立派な性格の人があると思うか、・・・皇室ともある特殊の関係をお持ちになっておる身分の方じゃないか、・・・その中島男爵を助けなければならぬ。」と脅された。こうして頭のいい永野は、中島を救いだすために、ついにそれらしい出鱈目のストーリーを考え抜き、供述を始めた。

しかし、中島が収容後、何日かしてから、中島から「あれは、永野に関することは嘘だ」という発言によって、永野は嘘の供述から解放されたのであった<sup>361</sup>。

帝人株の換価をした人物は、最終的には永野ではなく三土に仕向けられることになった。ここでは関係者間でストーリーの辻褄を合わせる検察の努力が笑い話のごとく垣間見られる。それよりも重要な視点は、中島が後輩の永野から「神様のような人」・「その人格は玉のような人」として信頼されていたことである。河合良成は永野護を、「私どもの親愛な、最も賢明で、しかも世の中の酸いも甘いもかみ分けている人物」だと紹介している<sup>362</sup>。

永野以外にも多くの人物が中島の人格を尊敬していることを今村力三郎弁護士は法廷で力説した。なおのちに大臣にもなった永野護の略歴は注で紹介した<sup>363</sup>。

#### (4) 中島公判録－永野への誠意に感激、錯覚地獄へ

ここでは、中島が虚偽告白に至るプロセスを考察する。

1934年7月5日の取調の時に、枇杷田検事から次のようなことを中島は聞いた。

「実は永野はすこぶるお前の為に心配し、本件に関連して一生在獄の憂き目を見るところではない、一生在獄の覚悟が持っている。万一中島の一身に累が及ぶようなことがあれば、ほとんど自分の堪えるところではない。そのようなことが無いよう、ご配慮願いたいと、永野は土下座して、躓いて、枇杷田の膝頭に噛り付いて哀訴した。これに対して、この枇杷田も思わず、目の縁を熱くした。」

---

<sup>361</sup> 河合 (1970) p.245-252

<sup>362</sup> 河合 (1970) p.209

<sup>363</sup> 永野護[1890-1970]は実業家、政治家。戦後、政財界で活躍した永野六兄弟の長男。弟たちとは、永野重雄(新日本製鐵会長、日本商工会議所会頭)、永野俊雄(五洋建設会長)、伍堂輝雄(日本航空会長)、永野鎮雄(参議院議員)、永野治(石川島播磨重工会長)である。このうち、伍堂輝雄の結婚式の媒酌を中島夫婦が務め、これは永野護からの依頼による。父が亡くなった東大在学時に永野護は同級生の渋沢正雄の父、渋沢栄一から学費を支援してもらい、弟達に仕送りした。東大法学部を二番で出た秀才の永野は、渋沢栄一の秘書・顧問弁護士となり、多くの会社の兼任重役となった。その中で、帝人株の買受団をリードすることになった。帝人事件以降も永野は中島を慕った。第5章で述べる素修会にも参加したとされる。戦前・戦後に二期衆議院議員になり、岸信介の指南役ともよばれ、第二次岸内閣の運輸大臣ともなった。著書に『敗戦真相記』(2002)があるが、その歴史観は中島と共通している。息子は永野厳雄(広島県知事)、永野健(三菱マテリアル会長及び日経連会長)。

永野のこのような態度を聞いた中島は「非常に感激を致した」と言明している。

岩村検事正が中島に対して大きな嫌疑をかけ、枇杷田検事の自信ある口調があり、さらに永野の態度から察して、自分の知らなかった不正事実が永野によって行われているのではないかと、この時点で中島は思い始めたが、まだ大きな惑いもあった。

5日の深夜、帰宅を許された中島は、6日の午前、まじめに自宅の書斎、居間などに高木から贈られた株券がないかと捜した。そして株券がないことにむしろ当惑してしまうが、高木と永野の間で株券が処分されたのではないかと思った。

6日の午前に清水郁弁護士<sup>364</sup>に伴われて秋山高三郎弁護士（公判の時はずでに故人）が来て、中島は帝人株收受の事実はないのに検事局で無実を強要するように言われて困惑していることを話した。これに対して、秋山弁護士は、「検事局で否認するなら、拘束を加えて、取調だろう、自分が検事でもやると。もし進んで取調べの事実を認めるなら、起訴の手続きもとらぬ、身分の拘束も加えないだろう」と検事局で言われたことと同じことを話した。さらに「株券贈与を受けたとしても、職務に関係ないから収賄とは断定したが。認めても起訴はないだろう」と秋山弁護士は太鼓判を押した。秋山弁護士は検事局と通じているのか、当初から中島に対して疑惑をもっていた。

弁護すべき秋山弁護士が以上のように検事と同一意見であり、永野・高木らにおいて不正行為があったのではないかと中島は確信を持ち始める。しかし身の潔白を証明する方法もなく、6日の午後1時に検事局に二度目の出廷をした。

この時、関係者すべてが帝人株贈与を認めていて、中島と三土だけが認めれば「本件の捜査機構が完成する」と枇杷田検事は中島に迫った。「天下司直の府にある」枇杷田検事のこの言葉に、中島はついに説得させられた。親しい友人たちが認めているなかで、自分だけ否認しても「無益」ではないかという「いかにも変な考え方の経路」に陥った。

協議があるとして退席した枇杷田は戻るなり、取調を打ち切り、「不日予審廷に証人として喚問」があるから「この事実とするところを直白せられれば宜しい」と告げた。そして事実を言わないと偽証罪になるからよく考慮するようにとも言った。「私は実は何のことやら事情が心中にはっきり」しないまま帰宅した。なぜなら中島は容疑の事実を認めていなかったからである。

6日午後に帰宅すると秋山弁護士は岩村検事正と会ってきた後で、そこでの話と中島の検事廷での話が一致していること、即ち「取調の事実を認めるなら、起訴にも及ばない」ことを話した。

帰宅後、さらに当時の金子武麿秘書官が慰問に来て、「商工省に株券など届いていないはずだ」と断言した。商工大臣を辞任した際に、金子と「ちりだらけになって」書類を一つ

---

<sup>364</sup> 清水郁弁護士は中島の友人で、昭和5年には一緒に立山登山にいった。民事が専門なので、刑事事件に詳しい元検事の秋山弁護士を紹介した。秋山は刑事弁護人の第一人者とも言われた人であった。秋山弁護士は中島の公判以前に亡くなってしまった。公判中、中島は秋山に言及することをいつも躊躇した。しかし秋山が検察と同意見であったことがかえって事件を複雑にしたと証言した。

一つ点検し、その上で焼却したのであった。金子の言葉に対して、中島は「当時のことを追憶して思い出してもらいたい」と言った。それほどに疑いをもっていた。

その後、関西への出張旅行が必要であったが、検事正から了承をもらった。しかし、21日になって、再度の検事局出頭を命じられ、これは「二度びっくり」であった。そして再度同じ質問が繰り返された。枇杷田検事は「今日が極度だ」と自白を強要した<sup>365</sup>。

#### (5) 中島公判録—虚偽の告白をした理由とその評価

1934年7月21日の検事廷において中島はついに虚偽の告白をしてしまう。全く身に覚えのないことであったが、他方で疑惑も深まっていたことは前節でみた通りである。中島は虚偽告白を自己分析している。これを箇条書きにまとめると以下のようになる。

1. 自分の知らないところで、ある種の不正事実があり、確からしい。
2. 検事局がこれほど言うのだから、疑いない。
3. 自分も関係していて、逃れ難い運命のもと、動きのとれない境涯に陥っている。
4. 自分が何時までも否認すれば、事件解決は到底予測しがたいように思われなくてもいい。
5. 一日も速やかに事件を片付けて、関係者一同が自由に解放されて、互いに事情を持寄ったなら、事実は自ら説明するであろう。
6. 結果如何に拘わらず、事実の説明を待つ外ない。
7. 自分が何時までも否認して、拘束にでも遭えば、自分の冤を雪ぐ機会を失うだろう。
8. 検事局の言う所を信じて、贈与の事実を認めて、幸いこれによって拘束を免れたあと、篤と事件の真相を究めて、自分と一同のために何とか証する。もし不正事実があったなら、あったで前後の処置を考えるにしかず。
9. 要するに、永野君がこの問題の鍵を握っている。永野君から自分に贈与された二百株券だけを仮想するなら、問題は自ずと解決する。一切、その他の人に迷惑が及ばない。

このようにして、中島は「御恥ずかしながら、ついに全くの虚構の供述をなす」に至ったのであった。「自分のことは自分がよく知っているのだ」という考えは起きなかったかと裁判長にたしなめられると、中島は次のように弁解した。

そのように尋ねられると「汗顔至極であり、実に病的心理とでも申しますか、申し訳の言葉はございませぬ」と理不尽な自分の弁解に平謝りするのであった。

このような獄中心理と錯覚地獄について、被告人である大久保偵次（大蔵省局長）を弁護した穂積重遠<sup>366</sup>は別な刑事事件を引用して、その恐ろしさを弁明し、東大の同級生だっ

<sup>365</sup> 「公判録 188 号, 12.10 午後」

<sup>366</sup> 穂積重遠[1883-1951]は穂積陳重男爵の長男。母は渋沢栄一の長女、歌子。東京帝国大

た大久保を弁護した。また三土と親しかった青木一男も戦犯としての獄中体験から獄中心理に深い理解を示した。

16名の被告のうち12名が獄中心理の中で、検事の誘導によって錯覚地獄に陥ったことを河合は詳細に論証している。

三土と大蔵省の若手官僚3名の4人だけが、「虚偽の告白」に乗らなかったことは勇者として讃えられ、中島の「虚偽の告白」は男を下げるものとして酷評された<sup>367</sup>。

日本経営史学会（2009年、札幌学院大学）で筆者が帝人事件における中島について報告したときにもフロアから情けない人物だと評価された。しかし、上記のような複雑な獄中心理の中、錯覚地獄に陥らせた検事の誘導を割り引いて考察しなければならない。

#### (6) 中島公判録—行雲流水の心境

永野が自分の為に哀訴していることを聞かされ、亡くなった「秋山弁護士も最初から多少嫌疑を懸けている」ことを中島は愚痴りながらも、自分が虚偽の告白をし、さらに検察のために嘘の上塗りを積極的にしたことを反省して、次のような自己分析した。河合（1970）も引用している箇所、中島の心境を大変よく表現しているので、そのまま引用する。

「是は人々の性質にもよることではありますが、智によって動く人もあります。また意によって動く人もあります。また情によって動く人もあります。私は実に盲目的に情によって動かされたと思います。

元来私の性質と致しまして、とにかく一種の人生観をもっているものですから、こういう際にも言わば行雲流水の心境を以て先ず眼前に身を任せてしまって、殊に自分の親しい友達が何か自分の名によって不正行為をしている、而してその人々等の家族は絶えず私等の所へ往復を当時致しておりまして、殊に其妻君達はしばしば獄中における夫の身の上を氣遣って、私も始終それを聴かされて居たという際でありましたから、実に限りない同情をこれらの友人の身の上に注いで居た所に、殊に永野君が一生獄中の生活を甘んじて私の為にそういう哀訴を検事にしてくれたかと云う心持に対しては、聊か酬いたいというような反響的な気分にもなったのでございます。

当時智によって動き、意によって動けば宜しかったのでありますが、私は自分の性質上より致しましてその間に情に依って動いた、而してこの間違を来たしたということは実に今更これを考えましても、甚だ慚愧に堪えぬ次第であります。」<sup>368</sup>

---

学法学部卒。留学して家族法の権威となる。当時は法学部教授であった。帝人裁判では裁判官も弁護士・検事もみな教え子であるなか、民法専門の穂積重遠の弁論(1937.8月刊誌に公表)は深い学識と友情を示すもので、当時評判となった。

<sup>367</sup> 近年でも小林中の伝記を書いた日経取締役論説主幹の阪口昭は「中島はだらしないほど簡単に検事に迎合告白したが、三土は頑として迎合しない」と書いている。阪口（1985）p.118参照。

<sup>368</sup> 「公判録189号、12/12午前」

博覧強記の読書家である中島は優秀で知性が勝っているという印象があるが、智情意の三側面から考察すると「情」が最も強いというのが本人の自己分析である。知性的に考えれば、嘘は嘘であるとの論理が成り立つが、複雑な獄中心理のなかで、知性が弱まり、友情や愛情という情動的な側面が強く働いてしまったと解釈できる。

このように、合理性に徹せず、非合理性に傾く心理はある意味で宗教的であると評価できるだろう。宗教に関連して、中島は「然し私は人生というものを大乘的に考える宗教癡があり、自分の真実悪事を働かないならば、それでよいではないかという諦めが、私の心に去来するのであります。」とも証言している。無欲な中島は悪い意味で諦観し、合理性を喪失していたのであった。

#### (7) 中島公判録—精神的生活の建直しへ

最後に、本章の核心ともいえる中島精神の発露に注目したい。精神修養の道に中島は決意していることを証言した局面であり、河合（1970）も引用した箇所である。深い懺悔と更生の道を歩む中島精神がそこにはある。

藤井五一郎裁判長から「男爵であり、国务大臣でもあったでないか、自分を批判する時間が十分あったではないか、被告のこれまでの経歴、言行からみてもその点を反省すべき修養や鍛錬は積んで居ったのではないか」と問われた。これに対して中島は以下のように答えた。

「どうも矢張り修養鍛錬が足りなかったと思ひますし、またその修養鍛錬が寧ろ私に悪い影響をこの際に与えたとまで実は今日考へて居ります。寧ろ一種の忍従とか何とか云うような文字を非常に消極的に解釈致しまして、それが従来 of 鍛錬と迄は申し上げ兼ねますけれども、多少自分の修養致しましたことが、逆に自分の身に働いたように実は感じました。非常にそれを恥じと致しました。

爾来私は一昨年 of 秋にこの事件の累を満身に蒙りまして、社会に出ました時に唯今裁判長の仰せになりましたことに付いて、実は私の一身を自分で正視して見たのであります。そうして従来 of 私の物の見方、こういう場合において私が自身を批判する力が如何に乏しいかというようなことに対しまして、実はしみじみ自分の姿を憐れと感じました。

爾来私は僧院に身を隠しまして今後再びこういう愚をなさざるように、而してもう少し自分の精神的な工作をして見たい。そうしてこういう馬鹿らしいことによつて、一身を誤り、ひいては只今仰せのように家門を傷つけ、同時に皆様にご迷惑を懸けるというようなことを深く身に責を引きまして、どうか私の残年を以てこの責を償いたいという心持から、爾来自分の精神的生活の建直しに努力致して居ります。

只今そう云う心境の下に当時の私の愚を御責め戴きまするに付きましては、もう一言も

理屈に依ってそれにお答えする言葉を私は持って居りませぬ。・・・」<sup>369</sup>

以上のごとく、公衆の面前で自身の心の弱さを懺悔し、残余の人生の精神的生活を立て直したいと明言した。この僧院とは鎌倉円覚寺のことであり、公判前に半年ほど隠棲的な参禅生活を始めていた。このことについては第5章で詳しく論じる。63歳の老人の中島<sup>370</sup>が、素直に精神修養を決心した背景には元々精神修養に心がけてきた人間であったからこそ出来た決意であろう。

帝人事件の悲劇はまさに彼の人生の精神的な転換点であった。悲劇的な出来事とはいえ、事件を契機として精神的指導者へと転身することになる。ここにこそ、この事件の真の意義があったと本稿では考える。

序章で財界人であった中島が精神的指導者となった背景と意義を課題にすると述べたが、その直接的な背景となったのは、何度も繰り返すが、帝人事件を通じた恥辱であった。中島にとって自己反省を促す最良の道が坐禅であり、仏典の疏釈を通じた自己研鑽であった。一般的にいえば宗教による人間精神の完成が必要であるとの認識が財界人の中島の中にあった。

## 7. 中島公判録余話および判決後のこと

### (1) 家族、本人、関係者への影響

帝人事件は中島家にとっても災難であった。足利尊氏問題後を回想して中島家の五男の実は次のように書いている。

「家運というものがあるとすれば、この昭和八年後半を峠として、我が家の社会的な繁栄は大きく衰退して行ったのであるが、それを決定づけたのは其後に訪れた『帝人事件』の大厄であった。」<sup>371</sup>

昭和八年後半は昭和九年前半の誤りであるが、大臣の地位が現在とは比較にもならないほど高かった中島家の名声と注目は足利尊氏問題・帝人事件を通じて急角度に下がり、家族にも重苦し空気が広がった。

無罪判決後、大勢の人たちが祝賀に駆けつけてくれたが、それは家族の喜びに過ぎず、父の心情は以下の様であったと実は回想している。

「父はこれ（帝人事件）により一部の友人に多大の迷惑を及ぼしたことへの悔恨や、更に自分自身に対する痛烈な、反省の苦渋に満ちたものであったことは、後年に至り私が次第に理解するに至るものであった。

---

<sup>369</sup> 「公判録 189 号, 12/12 午前」

<sup>370</sup> 枇杷田検事は中島が老人であることを永野に語り、中島も老人の自分を支えるためにヤングフレンドの友人たちが第二華水会を構成したと証言した。華水とは中島の俳号である。

<sup>371</sup> 中島実『回想』（1978）p.57



興味本位で眺めていた世間は、全員無罪の判決後も、何らかの疑惑を持った。

河合良成氏をして、『濡れ衣が乾くまでには三十年を要した』と嘆かshめた、昭和初期の一大疑獄事件であった。」<sup>372</sup>

華やかな政治の表舞台から消え去り、隠棲生活を始めた父の内面を理解し、帝人事件の悪評が無罪判決後も長く、中島ら被告人たちが亡くなるまで影響を与え続けた。

そして「既に高齢であった父に、その名誉を挽回すべき時間は残されていなかった。」<sup>373</sup>戦後はある程度、社会復帰は果たすが、すでに高齢であり、十分に活躍する時間は残されていなかった。この点については第6章で論じる。

家族だけでなく、もちろん裁判を通じて多くの人にも迷惑が及んだ。特に同じ被告人となった内閣の同僚である三土元大臣に官邸という神聖な場所で株の換価を依頼したことを認めてほしいと中島が話したことに対して、三土からは変態心理だといって罵倒された。仲間の被告人だけでなく、株式買受団としての保険会社の社長たち、株式換価金三万四百万円を分与された政治家の友人たち、一万円献金事件にかかわる中島ファンの友人たち、運転手の大石、執事の佐和田など、多数の人々が中島被告のために証人として立ったのであった。

## (2)中島公判録録余話—中島家の盛衰、家計

膨大な証言には、中島の友人関係、政治思想、金銭感覚、家庭生活が克明に表白されている。これは『政界財界五十年』などからはうかがえない面であり、大変興味深い事実であった。以下簡単に紹介する。

貴族院議員であった中島は公正会に属したが、不偏不党の立場を貫いた。多くの友人知人がいたが、有望な政治家には寄付を惜しまなかった。表4-5に見られるように寄付先は国民同盟の代議士、日本労働総同盟、無産党の代議士などその交際は広く、彼の偏見にとらわれない幅広い人格がうかがえる。

友人からの一万円の献金は善意の印として、その多寡に関わらず中島は大変喜んだ。大臣となり急激に交際費が増えたため、家計が逼迫していた。中島は少しも「構わなかった」が、中島の家内である八千子が弟の岩倉具光に窮状を訴えたらしい。恐らく政民連携のための宴会代も彼がすべて負担したのだろう。貧乏な中島家が政党復活のために私財を投じたが、右翼・軍部の逆恨みの大原因となったことは皮肉である。

彼は金銭にきわめて恬淡で、永野が富士製鋼の整理に関して中島に謝礼を贈ったが、中島は返却した。「財界に長くいるが、金をもつ専門家の立場に居らない派の実業家なんであり」、「どうにか食うに食えぬことはないようであります」とも語っている<sup>374</sup>。

---

<sup>372</sup> 同 p.59

<sup>373</sup> 同 p.63

<sup>374</sup> 「公判録 191号, 12/17 午前」

財界人として公私の斡旋をしたが、「謂われのない金員は一切受領」しなかった<sup>375</sup>。例えば、東洋製鉄の持株千株は大臣就任時、すべて売却した。

このような事実から今村力三郎弁護士<sup>376</sup>は中島が「金銭に淡泊の人であり、金銭については相当注意深い人であって苟もしない性質の人である」と弁論した。

中島邸には役所とよばれる事務室があり、執事<sup>377</sup>がいて、書生もたくさんいた大所帯であった。久万吉の五男の中島実「今までの貴族的な生活」と戦後になって回想しているが<sup>378</sup>、帝人事件以降は家計的にもだんだんしぼんでいった<sup>379</sup>。

### (3) 今村力三郎弁護士の中島弁論

帝人株二百株の收受という流職は元々虚偽であり、その他に、一万円献金事件や商工大臣としての株上場の認可など多くの罪状が検察側から並べ立てられたが、1937年12月16日の名判決ではひとつ残らず、全て退けられた<sup>380</sup>。

今村力三郎弁護士が中島の弁論をした最終部分だけを紹介したい。この一文は専修大学の日高義博教授も引用している<sup>381</sup>。中島の人間性が伝わる一文であるが、同時に今村弁護士の堂々たる弁論が伝わるものである。

「名家を継ぎ栄爵を辱うし社会の上流に位し清廉己れを持し未だ曾て一点たりとも他人の指弾を受けたることなく、自らの後進の儀表をもって任じたるものが寸毫も犯せる罪なくして累世の辱を受け二年有余公判廷に立って審きを受くる身と為ったのであります、斯

---

<sup>375</sup> 同

<sup>376</sup> 帝人事件で今村は国選弁護人として裁判所から推薦された。帝人事件は68歳で引受け、無罪判決時には71歳になっていた。今村は34歳で足尾鉍毒事件、44歳で大逆事件、57歳で虎の門事件に関わった。専修大学の庭山英雄教授によれば、「帝人事件は今村にとって最後の大事件で、「余程の覚悟がないとあの種の事件を引き受けることはできない」という。庭山（1998）p.24 参照。

<sup>377</sup> 佐和田一雄が公判では執事とされたが、自分は中島男爵家の事務の一部を手伝っていて、浅野長次郎が執事であると証言した。お抱えの自動車の運転手(大石)もいた。

<sup>378</sup> 久万吉の五男の中島実「1919年生まれ、東北大卒。父と同じように思想性のこい文章を『Nippon 青年』（1955）に書いている。貴族的な生活の実態について、中島実（1987）『回想』に詳しい。

<sup>379</sup> 大臣就任時から一切の仕事を辞任したが、それまでの蓄財、資産運用で子供たちへの生活上の変化は無かった。しかし空襲をうけ、戦時中には財貨は払底し、さらに戦災で財産を失った。死ぬまで借家暮らしをして終わった。子供たちも生活が苦しく、老いた両親を財政的に支えることは出来なかったことは慚愧に耐えないと回顧した。中島実（1987）『回想』参照。

<sup>380</sup> 朝日記者で帝人事件を詳しく論じた有竹修二は『政界財界五十年』の中で「中島が明確に公訴事実を否定する力強い文章は一行もない」として、中島の容疑に疑いをいれた文章を書いている。有竹（1965）p.350 参照。福島（1969）も同様。これは明らかに事実誤認であり、中島がこの馬鹿馬鹿しい事件について必要最低限のことしか書いていないためである。河合のいう濡れ衣が乾くのに30年かかるということは、有竹にも該当する。

<sup>381</sup> 日高（2000）

の如き非理非法が行はるるならば、不幸中島一人に止まらず我々同胞は真に枕を高うして寝ることも出来ないのであります、斯る不祥事が今後跡を絶つことを望むものは弁護人や被告人のみならず天下万民の声であります」<sup>382</sup>

#### (4) 全員無罪の判決後

1937 (昭和 12) 年 12 月 16 日の第 266 回公判において最終的な判決が下された。膨大な判決文があり、その名判決は「証拠不十分にあらず、犯罪の事実なきなり」というものであり、司法権の独立を証明したものとして有名になった。無罪をかちとるためには膨大なエネルギーが費やされた。冤罪で苦しむ人のために、河合が闘争記録を残したことは何度もふれたところである。

人権蹂躪が議会で批判された。さらに無罪判決に対して「大乘的判断から控訴しなかった」という司法大臣塩野季彦の発言に対して被告人たちは大変憤った。司法省部内での責任問題はうやむやにされた。議会での批判を通じて司法改革が進み、戦後、予審制度は廃止された<sup>383</sup>。

判決の翌年、雪冤に喜ぶ帝人事件の流職被告人 6 名 (政府関係者) に「叙勲並びに賜金の恩命」が賞勲局から発表された。これは満州事変の功勞により、1934 年 4 月 29 日に遡って同日付で行われた。「貴族院議員従三位勲二等男爵の中島久萬吉」には旭日大綬章が贈られた<sup>384</sup>。このような名誉回復にも関わらず、真に名誉挽回するほど若くはなかったし、その意欲も中島には無かつたろう。

## 8. 総括

帝人事件という疑獄事件は五一五事件と二二六事件のはざまという暗い世相の中でおきた。斎藤内閣の倒壊を目的として企業関係者・大蔵官僚・元大臣が刑事被告人となった事件であった。

---

<sup>382</sup> 今村力三郎「中島久萬吉被告事件弁論稿」専修大学今村法律研究室編 (1999)

<sup>383</sup> 「予審」とは長沼範良によれば「検察官が請求した事件について、裁判官が公判前にこれを審理する手続。予審は大陸法系の制度であって、英米法系の予備審問 (preliminary hearing) とは異なる。日本では治罪法 (1880 公布) 以来、旧刑事訴訟法 (1922 公布) の施行下まで行われていた。予審は、本来、現行犯事件を除き、捜査における強制処分権限を裁判官だけに認めるとともに、公判を開く必要のない事件をその手続限りで打ち切るものである。しかし、機能的には、公判では収集しがたい証拠について綿密な証拠の収集および取調べを実施し、その結果を調書化することにより、公判での有罪宣告をほぼ完全に準備する手続と化した。第 2 次大戦後の司法改革では、捜査機関の権限濫用を防止するためには捜査機関にむしろ必要な強制的権限を付与することが必要があり、これに伴い裁判官の主宰する予審手続は不要となるとの見解と、他方では、訴訟手続を公判中心に再編成すべきであるとの見解とが一体となって、予審は廃止されるに至った (<日本国憲法の施行に伴う刑事訴訟法の応急的措置に関する法律>。1947 年公布)。現行刑事訴訟法は予審を採用していない。」。平凡社『世界大百科事典』(1985 年版) より。

<sup>384</sup> 読売新聞 1938.1.30

事件は、武藤山治が社長を務める『時事新報』の「番長会を暴く」という連載シリーズによる告白記事が遠因となり、その後、右翼や検察などの思惑が重なり事件化した。裁判の最終判決の視点からは、『時事新報』の記事がいかに憶測に基づいていたかが明らかとなった。その意味で、別件で武藤は暗殺されたとはいえ、その新聞報道姿勢には行き過ぎがあったことが判明した。

検察による虚偽のストーリーが無理やりに予審の段階で捏造されたことが明るみとなった。全員無罪とはなったものの、その名誉回復には今なお不十分となっているほどの冤罪事件であった。事件に巻き込まれた中島にとっては人生最大の転機であり、その後の人生に大きく影を落とした。

しかしこの事件を通じて中島が元来もっていた恬淡な性格がさらに強化され、期せずして財界の精神的指導者となる契機になったという意味で本事件の意義を再評価した。学識の高い中島は知よりも情を大切にす心の持ち主であり、若い友人である永野のためにあえて検察の誘導尋問に迎合した。獄中心理による錯覚という複雑な心理状況に対して、我々は理解を深めねばならない。合わせて「公判録」の分析を通じて、事件以前から中島は実業家としては意外なほど恬淡で無欲であり、一個の人格者として尊敬されていたことが浮き彫りとなった。

本稿の課題である「財界の精神的指導者」が生誕する直接的な原因が帝人事件であったことを本章では明らかにした。

## 裁判関係資料

専修大学今村法律研究室「解題 『帝人事件記録』」, 専修大学今村法律研究室編 (1993)『帝人事件 (一) 今村訴訟記録 第 17 卷』 p.1-22

「聴取書 中島久万吉」「強制処分請求書 中島久万吉」「訊問調書 中島久万吉」「第二回聴取書 中島久万吉」「第三回聴取書 中島久万吉」「第四回聴取書 中島久万吉」「訊問調書 中島久万吉」, 専修大学今村法律研究室編 (1995)『帝人事件 (五) 今村訴訟記録 第 21 卷』

「(予審)被告訊問調書 第一回～第十六回 中島久万吉」, 専修大学今村法律研究室編 (1997)『帝人事件 (十) 今村訴訟記録 第 26 卷』 p.1-141

庭山英雄「解題 帝人事件と今村力三郎」, 専修大学今村法律研究室編 (1998)『帝人事件 (十一) 今村訴訟記録 第 27 卷』 p.1-26

「中島久萬吉被告事件辯論稿 今村力三郎」, 専修大学今村法律研究室編 (1999)『帝人事件 (別巻 1) 今村訴訟記録 第 28 卷』 p.1-38

日高義博「帝人事件の裁判の争点」, 専修大学今村法律研究室編 (2000)

『帝人事件 (別巻 2) 今村訴訟記録 第 29 卷』 p.217-236

『帝人公判録速記録』第 186～191 号, 元享社, 1936 年 12 月 5 日～17 日 (「公判録」, 「中島公判録」と略)

## 参考文献

- 青木一男(1959)『聖山随想』日本経済新聞社
- 荒木武行(1932)『新政治家列伝』内外社, p.274-275
- 有竹修二(1965)「番町会と帝人事件」『別冊中央公論, 経営問題』 4(3), 中央公論社  
p.341-351,
- 有竹修二(1963)『武藤山治』時事通信社
- 池田さぶろ(1952)『財界の顔』大日雄辯会講談社
- 石田和外・野村二郎(1978)「石田和外氏に聞く-上-帝人事件裁判の思い出(法曹あの頃-30-)」  
『法学セミナー』 278号, 日本評論社, 5月, p34-38,
- 岩村通世伝刊行会(1971)『岩村通世伝』
- 大草実・葦原宏一・下村亮一(1989)「続・老記者の置土産⑩司法の危機 - 帝人事件の真相を  
語る」『経済往来』第41巻6月号, p.208-223
- 河井信太郎(1979)『検察読本』商事法務会
- 河合良成(1938)『帝人心境録』アジア書房
- 河合良成(1943)『戦時断層』昭和図書
- 河合良成(1952)『私の人生遍路』実業之日本社
- 河合良成(1969)『明治の一青年像』講談社
- 河合良成(1970)『孤軍奮闘の三十年』講談社
- 河合良成(1970)『帝人事件:三十年目の証言』講談社, 1970年(河合(1970)と表記)
- 木村毅(1953)「武藤山治」『日本実業家列伝』実業之日本社, p.345-356
- 桑田繁志編(1935)『公民講座 番町会事件顛末特集号』国民会館
- 後藤国彦(1934)「中島久萬吉を語る」『経済往来』3月, p.101-104
- 坂口昭(1985)『寡黙の巨星』日本経済新聞社
- 澤野廣史(1998)『恐慌を生き抜いた男—評伝・武藤山治』新潮社
- 富永義孝(1935)『経済眼に視る帝人事件の真相 保険王国秘話』保険春秋社, 1935年
- 永野護(1952)「人との面接に四種類」(勝川喜之助『財界百人百話』日本経済新聞社, p.163-165)
- 長崎正造編(1965)『長崎英造遺稿』長崎正造
- 中島久萬吉「政界財界七十年、中島久萬吉回顧談〈45〉～〈48〉」『産経新聞』1950年10  
月15～18日
- 中島久萬吉(1951)『政界財界五十年』大日本雄辯會講談社
- 中島実(1955)「ペンの雫(1)」『Nippon 青年』6月号
- 中嶋精一ほか(1987)『回想』私家版  
(同書は中島の子供達が綴ったものを編纂したもので、書かれた年代は昭和48年から昭和  
62年まで至る。本文で引用の際は、実名を入れた。)
- 日本工業倶楽部(1926)『日本工業倶楽部会員名簿』第九版

- 野中盛隆(1935)『帝人疑獄真相史』千倉書房
- 野中盛隆(1938)『帝人を裁く』平凡社
- 原田熊雄(1951)『西園寺と政局 第三卷』岩波書店
- 福島克之 (1969)「第 2 章帝人事件」『帝人の歩み④』帝人株式会社、p.21-63.
- 福田和也(2009)「昭和天皇丸⑧帝人事件」『文芸春秋』6月号, p.394-406
- 藤沼庄平(1957)『私の一生』「私の一生」刊行会
- 松田尚士(2004)『武藤山治と時事新報』国民会館叢書 53
- 武藤山治 (1934.1.18)「『思ふまま』と番町会問題 本社は何故番町会の問題を取上げたか」,  
桑田繁志編 (1935)『公民講座 番町会事件顛末特集号』国民会館 p.133-134.
- 三土忠造(1937)『帝人事件と私の心境：公判廷に於ける三土忠造氏陳述速記』小笠原喜太郎
- 三土忠造 (1935)『幽囚徒然草』千倉書房
- 山本長次 (2012)「武藤山治の経営哲学」,(経営哲学学会編『経営哲学の授業』株式会社 P  
HP 研究所, p.117-123, 所収)
- 山本長次 (2013)『武藤山治 日本の経営の祖』日本経済評論社
- 和田日出吉(1935)『社会小説 人絹』第一書房

## 論文

- 佐々木隆(1977)「挙国一致内閣期の枢密院—平沼騏一郎と斉藤内閣—」『日本歴史』352号,  
9月号, p.61-77
- 佐々木隆(1977)「挙国一致内閣期の政党—立憲政友会と斉藤内閣—」『史学雑誌』86巻9号,  
p.43-77
- 大島太郎(1970)「帝人事件—商習慣を守った異色の判決—」我妻栄編『日本政治裁判史録 昭和・後』、第一法規出版, p.52-94

## 新聞記事・連載記事の編集物

- 時事新報社『時事パンフレット第八輯 「番町会」を暴く 帝国人絹の巻』1934年2月  
東京朝日新聞・号外「前商工大臣中島男 けさ検事局に召喚さる 今夕市ヶ谷に収容か」  
1934年7月21日
- 東京朝日新聞「三度召喚の中島男 今夕遂に強制収容 収賄嫌疑頗る濃厚」「矢継早の家宅  
捜査 葉山別邸と牛込の本邸で 多数の證據品を押収」夕刊一面、1934年7月22日
- 東京朝日新聞「中島男の起訴 けふ勅裁を仰ぐ 夕刻までに起訴處分」「起訴と共に禮遇不  
享」夕刊一面、1934年7月31日
- 東京朝日新聞・号外「帝人全被告に無罪判決」1937年12月16日
- 読売新聞「青天白日の六氏に恩命—帝人事件の三土氏ら事変行賞」1938年1月30日

## 第5章 仏心の普及

### 1. はじめに

第4章で論じたように、帝人事件は中島の人生にとって最大の転機であり、公判が開始される前から鎌倉円覚寺で参禅生活をするようになった。この参禅生活は一種の回心であり、宗教学的には信仰の「強化」に相当する精神的変容を遂げた。

宗教を通じた個人や集団の精神的変容は一般に回心（conversion）と呼ばれる。回心は仏教語だが、ここでは宗教学的に客観的な用語として回心という用語を使う。

回心の契機として何らかの精神的危機を体験することがよく指摘され、精神的変容のプロセスも劇的プロセス（パウロの回心、マザーテレサの召命体験など）だけでなく、漸次的プロセスもあり、かなり包括的な概念となっている。回心とは人間の精神的変容に関する現象であり、多様なヴァリエーション、事例があるが、ランボ<sup>385</sup>によれば、回心の類型として社会文化的には表5-1のような5類型に区分される。

表5-1 ランボによる回心の5類型

別の信仰伝統への異動	ある信仰伝統から別な信仰伝統に移行する複雑なプロセスで、異文化の衝突のなかでおきる。キリスト教やイスラム教が世界に広がるなかでよく起きた。
同一の信仰伝統内の異動	同一の信仰伝統内である集団から別の集団に所属替えをすること。バプティストからプレスビテリアンへのなど。
加入	未信仰か弱信仰から信仰集団に正式に加入すること。強制加入が社会的問題となりやすい。
強化	正式・非公式に元来もっていた信仰が活性化した信仰心となること。名目的な信心が深い宗教体験や洞察を通じて強化・深化すること。
棄教・離脱	従来の信仰を捨てること、非宗教的になること。カルトからの脱退のためになされるディプログラミングなど。

[Rambo, Lewis R.(1987)を参照に作成]

回心の類型論からみれば、中島の円覚寺参籠の宗教的修行は、明らかに事件を通じた内省・洞察を通じた「強化」のタイプである。もともと禅仏教への深い理解があり、禅の理解者から禅の実践者になったと評価できるだろう。それも自覚的に望んでの求道生活であることに大きな特色がある。

<sup>385</sup> Rambo, Lewis R.[1987] .Rambo, Lewis R.は宗教心理学が専門。シカゴ大学で博士号を取得し、回心論については、心理学だけでなく、社会学、文化人類学、信仰的立場を含めて学際的に論じている。著書に“*Understanding Religious Conversion,*” Yale University Press ,1993 があり、よく引用されている。

本章では、円覚寺での修行生活を実践した遠因を、若い頃からの中島と禅仏教との関係から探る。そして修行生活を終えたあとに、期せずして素修会を通じて財界二世三世の精神的指導を行った意義について考察する。素修会は戦後に復活したが、その理由と意義についても考察する

さらに市井の「在家居士」として、最晩年には高尾山仏舎利塔の建設や世界仏心連盟の設立などを通じて「仏心」の普及に力を入れながら逝去した経緯を探る。ただその「仏心」とは広義の宗教心・宗教的情操に近い意味である。

本章は中島が財界人でありながらも、文化・宗教など精神的側面に関心が深かった異色の財界人であることを特に明らかにする。

## 2. 帝人事件以前における禅仏教との関わり

### (1) 湘煙女史から禅趣味、釈宗演との関係

『政界財界五十年』でも書いているように、中島久万吉の禅仏教に対する関心の契機は継母である中島俊子（湘煙女史と称する）を通じてであった。しかし遡って考える必要がある。

第1章第2節で論じたように東洋古典の漢籍に馴染んでおり、同じ漢籍である仏籍も自由に読める下地は出来ていた。また明治学院での霊性あふれるアメリカ式の宗教教育を受けたことは、キリスト教に入信しなかったとはいえ、“宗教に対する構え”を準備させた。継母となる俊子がいつの間にか中島家には入り込んだのは久万吉が中学生くらいの時であった。俊子から漢籍も学んだが、禅の素養を習得する学識と宗教への関心は準備されていたと考えるべきであろう。また母方の祖父（陸奥宗光の父）は居士禅で著名な学識の高い人であり、その遺伝も考えられることは第1章で論じた。久万吉は後に古河財閥のトップ経営者であった時代にも、心の問題に関心が深かったと言われている<sup>386</sup>。

俊子は女流の民権家・文学者として名を馳せた才媛であり、久万吉の少年期には漢籍の師匠でもあった。父の信行と俊子が事実結婚したのは、1884（明治17）年頃であり、久万吉は11歳であった<sup>387</sup>。とくに信行が1899（明治32）年に亡くなった後に、久万吉は俊子の話し合い手となって親しくなった。宗教談、文藝術、時事などが話題であったという。この時、久万吉は26歳であった。俊子が久万吉との会話を楽しみにしたことも、第1章36頁で論じた。

病いの重くなった俊子は早世を悟り、1893（明治26）年以降、横浜郊外に隠棲していた。俊子は平生一死を覚悟していたが、火取虫が大嫌いであった。ある夏の夜に「一小虫のた

---

<sup>386</sup> 「世間の多くの実業家が余りに物に即して齷齪苦勞し、偉大なる心の世界を見出し得ないのは誠に情けないことである」と中島は記者に語っている。東京大阪朝日新聞経済記者共編（1924）p.150

<sup>387</sup> 横澤（2006）p.296



めに心身の安を失うようで何とすると、一夜故らに戸を明け放ち幾つかの燭を点じ、ぶんぶん虫が飛来する中を端座して暁に至り、この鍛錬によってたちまち火取虫が平気に成った」という<sup>388</sup>。

このような修行ができた俊子は死生の大事を究明していた。久万吉は次のように語っている。「私は母ながら女史が既往に如何なる修行の功に依て死生の大事を究明し得たかを知る所がない。ただその平生に徴して、女史は常に心を死生の外において大に死生の理を究め得たる態に見受けられた。女史の反面には高踏逸脱な一種禪客の風格があると同時に、他の反面には多情多恨な詩人一流の心腸が有った。・・・」<sup>389</sup>

継母からは、心の鍛錬を実践し、死生を超えた一種の禪の心を究めている姿に久万吉は深い感銘を受けていた。

俊子は法外の友として釈宗演禪師<sup>390</sup>と親しかった。『湘煙日記』には信行と俊子が 1896 (明治 29) 年に、2 人で円覚寺まで散歩に出かけたことが記録され、俊子が法華経などの仏典をよく読んでいたことが伺える。臨濟宗の円覚寺の管長であった釈宗演は神奈川県大磯に転居した俊子をよく見舞ったという。病気の夫婦が大磯に転居したのは 1898 (明治 31) 年 11 月であった (信行 52 歳、俊子 37 歳)。この年、釈宗演は管長とはいえまだ 40 歳であった。禪師はしばしば大磯の村荘に病いの女史を訪ね、『文殊来りて問う維摩の疾』などと戯れて言われる。しかし女史は禪師の才気余りあって禪機に未だ全く到らぬ有るを観取して居った。はるかに橋本峨山師をおして居ったようだ」という<sup>391</sup>。このように高名な釈宗演の人物を評論するほどに俊子は禪の心を悟得しており、一流の文学者でもあった。

久万吉は死期が近くなった俊子と禪問答風のやり取りを行い、「臨終端的のところ如何」と尋ねた。すると女史は満面の笑みをたたえて、「ただこれ花前一睡の情」と答え、さらに筆をとって、「藪入にちよいとそこまで独り旅」の一句を書いた。二日たって俊子は息を引き取った。1901 (明治 34) 年 5 月 25 日であった。危篤の報で釈宗演はかけつけたが、臨終の時には間に合わなかった。その葬儀を司ったのは、釈宗演であった。「五月二十五日、中島湘煙女史逝去、俺土仏事。」と釈宗演の日記には記されている<sup>392</sup>。

釈宗演は俊子の息子である久万吉とも親しくし、久万吉が初の欧米渡航をする際には送辞を送っている。釈宗演の日記には「明治四十年、六月、中島久万吉欧米遊行に七律を送る」と記されている<sup>393</sup>。

釈宗演のもとには多くの著名人、政治家、軍人、実業家が参禅したが、その一人として

---

<sup>388</sup> 中嶋 (1951), p.29

<sup>389</sup> 同, p.32

<sup>390</sup> 釈宗演[1860-1919]は慶応卒で洋学を学び、仏教の近代化をした人として著名。1892 年に 34 歳にして鎌倉円覚寺の管長に就任。渡米して鈴木大拙の通訳を通じて Zen を初めて欧米に広めた。日本国内にも盛んに近代仏教としての禪を伝え、政財界に多くの信奉者がいた。

<sup>391</sup> 同, p.31-32

<sup>392</sup> 井上 (2000) p.113

<sup>393</sup> 同, p.158.この欧米訪問は虎之助の説得ための渡航であったことは第 2 章 2 (3) で論じた。

中島久万吉も挙げられている<sup>394</sup>。禅僧である釈宗演は明治期の新仏教運動の中心的な人物の一人で、インドにわたり、アメリカ伝道でも名を馳せた怪僧であった。久万吉は若くして釈宗演のような一流の仏教人とも親しくしていた。またセイロン（スリランカ）に遊学した釈宗演からは南方仏教（南伝仏教、上座部仏教）についても学んだであろう<sup>395</sup>。

釈宗演は1916年から19年にかけて再度、円覚寺管長となり、三宝会を設立し禅宗の布教に努めた。久万吉はこの三宝会の設立に貢献した<sup>396</sup>。1923年に中島家は牛込薬王寺町に転居するが、家の隣に月桂寺があり、この寺は円覚寺派であった。東海裕山老師が中島家によく出入りし、月桂寺の僧を招いて、家族のために禅の指導をしてもらった<sup>397</sup>。なお東京の上野の寛永寺墓地にある中嶋家の墓碑銘は釈宗演の筆によるものであり、釈と中嶋家の関係の深さを示している。

1934年の帝人事件を契機として本格的な参禅生活に入る前を回顧して、次のように語っている。

「私の禅趣味は壮年時からの母湘煙女史と鎌倉円覚寺管長釈宗演老師との因縁に出づるものだ。しかし門より入る物は家珍に非ず<sup>398</sup>、つまり文字禅の拈弄<sup>399</sup>に過ぎない野狐禅式のもので、畢竟自家屋裏の物ではあり得なかった。しかるに往年端無くも帝人事件に係累して世の批判に上った前後から、…」<sup>400</sup>

このように本格的に参禅生活に至る以前は、どちらかと言えば以下述べるように、教養的に禅について勉強しているだけで、謙虚な人柄ではあったものの真の精神修養につながる実践までは出来ていなかったことを帝人事件の際には反省した。

## (2) 禅に関する思索

本章は中島の仏教思想の内実にまで迫るものではないが、永平寺訪問を前にした中島の禅思想への傾倒ぶりを示す文を若干紹介する。

「禅の悟入とは果して如何なるものか。

江月照し。松風吹く、永夜清霄何の所為ぞ。天地至るところに千古の大疑問が存在して居る。アリストーテレスは驚愕怪訝の念は哲学を生むと言うたが、幼稚なる汎神論の如

---

<sup>394</sup> 釈宗演のもとに参禅した居士で最も有名なのは夏目漱石や鈴木大拙であり、その他に実業家の早川千吉郎や原富太郎、政治家の野口卯太郎（大塊）などがいた。釈宗演は三井倶楽部で講演なども行い、当時の一流の名士が集まった。禅文化編集部（1981）p.321；中島が参禅したことは、楚（1913）p.37 参照。

<sup>395</sup> 南伝仏教については、後で大石俊一の注を参照

<sup>396</sup> 中嶋信光（2005）p.129。

<sup>397</sup> 同

<sup>398</sup> 「門より入る物は家珍に非ず」とは禅語で、本当の家宝はもともと家の中にあったもので、外から運ばれてきたものは、早晩また外へ出て行ってしまうという意味。外から入っただけで、真に自分のものとはなっていないことを意味する。すなわち読んだり、聞いたりしているだけで、自分の力にはなっていないことを意味する。

<sup>399</sup> 拈弄とは禅語で、禅的なレトリックのこと。

<sup>400</sup> 中嶋（1951）p.277；中嶋（1953）序 p.1

きものは、暫く別として、吾等の哲学上における思索の第一歩は主として外間の対境<sup>401</sup>に向ふ。すなわち一、多に即して無碍<sup>402</sup>、多、一に即して円通なる宇宙の統一体に対して、専ら多中に一を求めんとする、別言すれば、すなわち不断流転の現象の裏より、久遠常明の理法を認得せんとするに在る。畢竟「それ」の研究である。」<sup>403</sup>

自然界の現象は多であるが、その全体性の背後には永遠に変わらない一つの原理がある。これが「一即多」、「多即一」という大乘仏教の思想であり、上記の論説の論理である。そして実在への驚異が哲学の起源であることは、古くから言われていることであるが、中島の東西に及ぶ該博な教養にたつて禅思想を理解していることが分かる一文である。

以上、中島は帝人事件以前において、『正法眼蔵』の内容に通曉し、禅的な論考を書き残すなど、禅仏教に対する相当の理解をもっていた。もちろん実業家・財界人として多忙な日々を送る寸暇を利用しての「禅趣味」の実践であり、生活の基本は経済活動にあった。禅の修行に本格的な時間をとる余裕などは無い多忙な生活を送っていた。

### (3) 永平寺に参詣

中島は俳句友達の静堂（岩下清周）と共に永平寺に 1924 年 10 月 31 日に参詣し、一泊の修行体験をした<sup>404</sup>。永平寺での、午前 3 時から午後 9 時の就寝までの間の日々の行事は、早朝の坐禅、勤行、寺内洒掃、聴講であり、これが繰り返されることを中島は待僧から聞く。中島らは 31 日の晩 9 時に就寝し、11 月 1 日の早朝 3 時に起床し、4 時からの勤行に持した。このように厳格に道元以来の修行が連綿と続いていることを以下のように感慨深く記述した。

「さすがに道元禅師、不退の精進とその綿密の行持とを垂範となせる修証一如の宗風は七百年後の今日に遺りて、その規矩整然として法度厳密に、毫些の違犯を許さざる底の厳肅さを示して居る所は、少なからず頼もしく感ぜられた」<sup>405</sup>。その一方で毎月朔望<sup>406</sup>の儀式の他に、禅問答が行われたが、それが予想外に儀式化されていたことに大変失望した。こうして 6 時には勤行が終わる。

それから案内されて、「祖師廟に詣り、弁香一炷<sup>407</sup>礼拝した。」中島はここで道元の生涯とその伝統が息づいていることを「祖師廟の燈りて幾代峰の秋」という俳句に詠んだ。

その後、知客<sup>408</sup>の能世忍隆師から、施餓鬼を修してくれるとのことで、再度法堂に戻つ

401 対境とは対象の意味で、仏教語。元一橋大学商学部教授の故山城章の経営学では対境関係とは企業とステイクホルダーとの関係を意味する。

402 無碍（むげ）とは障りのないこと、とらわれがなく自由自在なこと。仏教語。

403 中島（1924.8）p.45

404 『倦鳥』1924年12月号に「永平寺詣」を寄稿した。これは「学道時代の道元禅師」（同年10月号）を執筆後に、永平寺に初めて参詣した時の紀行文・句作である。

405 中島（1924.12）p.17

406 朔望とは陰暦に一日と十五日。

407 香の一たき

408 知客（しか）は禅語で、接客する僧のこと。

た。これは「若干の御膳料」を納めたためであった。意外にも全山の大衆によってきわめて厳粛なる供養が営まれ、中島らは「寧ろ恐縮の念」を禁じ得なかった。

施餓鬼の後、貫主の居室である不老閣、僧堂、その他寺内を案内されたが、孤雲閣の謂れに中島は最も感銘を受けた。孤雲懷聿禪師は道元の衣鉢を継承した二世であり、道元の死後も生前同様に朝夕給持するために、特に結庵常住した場所が孤雲閣であった。

『正法眼蔵』の中に、「示庫院文」というのがあるが、中島は余りに留めていなかった。庫院とは厨房のことであるが、永平寺の庫院を実際に見学することで食法などが厳格に守られていることに深く感銘を受けた。その後 1928 年頃から『正法眼蔵』の勉強会に参加したが、それ以前の 1924 年の時点で、すでに『正法眼蔵』についてある程度の知識があったことがわかる。

昼に近い頃、能世師に送られて山をおりた。永平寺はかなりの山奥深くにあった。鎌倉時代においては相当の奥山にあり、道元がいかに如浄の教えに忠実であったかという史実に中島は思いを巡らすことが出来た永平寺詣であった。

#### (4) 『正法眼蔵』の勉強会

財界人として活躍していた 1928 年頃に、日本橋倶楽部の正法眼蔵の勉強会に熱心に参加した<sup>409</sup>。日本橋倶楽部は都下の社交倶楽部であり、第 2 章で論じたように中島はその会員であった。以下、そのことが分かる文章を引用しよう。

「私が正法眼蔵に接し、親しく拝読できるようになったのは、秋野孝道禪師<sup>410</sup>の啓蒙によってである。『正法眼蔵』も今でこそ、橋田邦彦博士の『釈意』や和辻博士の紹介、更には文庫本による普及で世間的なものになっているが、私達には高く遠い光のようなものであった。私は、禅話会のお世話で開かれる、日本クラブでの会に出席した。会員はわずか五人であったが、秋野禪師は実に根気よく続けられ、月に二、三回ずつ三年もの間（そして遂に病にたおられたが）、身近に拝聴することができた。禪師は西有禪師<sup>411</sup>の直門として

---

<sup>409</sup> 日本橋倶楽部では、「禅話会：可睡齋住職前曹洞宗大学長秋野孝道師、正法眼蔵提唱毎月二回四時半会費月一円」が 1928 年 10 月の行事の一つとして記載されている。都新聞社経済部編（1928）p.31 参照。禅話会はまた「眼蔵会」とも呼ばれていた。中島（1956.11）p.1

<sup>410</sup> 秋野孝道[1858-1934]は静岡県榛原郡相良町生まれ。曹洞宗の僧侶。曹洞宗大学林学監、教頭、永平寺後堂、眼蔵会講師、曹洞宗大学長などを歴任し、1929 年、總持寺独住 7 世の貫首となる。勅賜黙照円通禪師。1934 年 2 月 10 日示寂。世寿 77 歳。

<sup>411</sup> 西有穆山(にしありぼくざん)[1821-1920]は八戸湊村に生まれ。幼少の頃見た地獄極楽図に心を動かされ、13 歳で仏門に入り万吉から金英と改名、その後金英改め瑾英と名乗る。長流寺（八戸市）の金龍和尚に弟子入りし、法光寺（名川町）をはじめ、仙台、江戸に出て修行を重ね、23 歳にして鳳林寺（新宿区）の住職となった。1900 年、横浜に西有寺を建立。1901 年には後醍醐天皇勅願の大本山総持寺の独住第 3 世となり、明治天皇から「直心浄國禪師」の称号を賜る。1902 年には曹洞宗第 7 代管長となり、1920 年、西有寺において 90 歳で遷化されるまで、仏法の擁護を訴え、仏道の復興に尽力した。

丘禪師と隻唱される碩学の人でもあったが、その蔵される禅風には自ら禪師の風格に溢れ、『啓迪』を通しての提唱と共に、私にはしみじみと流れ入るように感じられた。」<sup>412</sup>

ここからは中島の禅の世界への憧憬の心と秋野禪師の風格に対する尊敬の念が読みとれる。中島は熱心に『正法眼蔵』の勉強を続け、その知識を吸収した。そして『正法眼蔵』の著者である道元こそは、中島が最も尊敬した高僧であった<sup>413</sup>。

1921年頃から俳句にこった中島は俳句雑誌『倦鳥』に禅に関する論考を多く載せた（大正期の1924年～1926年、さらに昭和初期、参考文献一覧を参照）<sup>414</sup>。『倦鳥』に掲載された「詩と禅」からは、詩の境地と禅思想が同一地平にあることを東西の思想から明かにしており、彼の禅への深い理解が読み取れる。さらに「学道時代の道元禪師」からは、中島の道元への傾倒ぶりが伝わる。すなわち以下のように道元を讃えている。

「本邦の高僧碩徳中、自分は平昔<sup>415</sup>最も道元禪師に対して崇敬措く能ざる者である。禪師一代の行業事績、もとより日蓮の奇なく、ルーテルの異は無いけれども、仏祖の大道を闡明して普く群品<sup>416</sup>を利財し、その行持綿密、精進不退の生涯を一貫せられた無辺の威徳に至りては、七百歳の下なほ人をして欽仰に禁へざらしむるものがある。」<sup>417</sup>

このように中島は道元の人物像に尊敬の念を禁じ得ないものを素直に表白している。

栄西のもとで十分修行し、さらに宋にわたった道元は、修行ののち如浄から仏祖正伝の大戒を受けた。これが「菩薩の大戒」というもので、それは「釈尊第五十一代の正伝正受」であった。「我が日本の曹洞禅は、実にこの契機によって実現した」と中島は解説する。仏陀の正当な後継者として道元は菩薩戒を受けたが、この宗教的な正統性の伝授は「戒」という儀式を通じてなされる。道元は菩薩戒に関する著作も残している。

なお釈尊の真骨を奉納する仏舍利塔建設に情熱を注いだことは本章の後半で論じる。

### 3. 円覚寺での修行生活

もともと禅に対する理解が深く、精神修養を重んじていた財界人の中島にとって、帝人事件を契機とする参禅生活は最も望んでいたことであつたと思われる。事件以降、参禅生活を送ったことは、以下の文章が詳しい。

「しかるに往年端無くも帝人事件に係累して世の批判に上つた前後から、古人『年七十

---

<sup>412</sup> 中島（1956.7）p.72

<sup>413</sup> 中島（1924）

<sup>414</sup> 禅的な論考のその他のタイトルを上げると、「鶏助集 其一～六」、「無常説法」、「修証一如」、「応無所住而生其心」、「這箇何者」がある。

<sup>415</sup> 平昔とは、かつて、その昔。往日の意。

<sup>416</sup> 群品とは、群類、群生と同義で、衆生のこと、仏教語。

<sup>417</sup> 中島（1924.10）p.21

を過ぎて位に居るは、なほ鐘鳴り漏<sup>418</sup>尽きて夜行くが如し、罪人なり』と警めてあるところに従い、ソロソロ世に年貢を納めて、残生を求道生活に終るべしと決心し、鎌倉円覚寺内の塔頭松嶺院というに参籠し、専ら朝誦暮禪の境涯に入った。毎日の日課は只管打坐だ。これも特に公案に拠らず、自らも黙照して祖意の工夫に精進した。今から回顧して格段長い修行であったとも覚えませんが、今残る当年の感慨に見るも、

禅情詩味淡生涯 林外高居絶市譁  
最喜閑中忘百事 四年如夢又梅花

の七絶にある通り、松嶺院の参籠は前後四年の長きに及んでいる。かなりの勉強であったナと今更のように旧感を新たに作る訳だ。」<sup>419</sup>

また五男の実は、帝人事件後の父の参禅生活について、次のように回顧している。

「父は、深い知識と、高い教養の人であった、と私は思う。その修業に精進して来た父が、帝人事件の予想もしなかった逆境の中にたたき込まれ、検事の策謀に攪乱された時、そしてそれらが終わった時、自分の知性と教養に、強い意志力の裏付けが欠けていたとして痛恨の思いを抱いたのではなかろうか。

帝人事件は、父にとって、終生の恨事であった」<sup>420</sup>

知よりも情が強かったことを公判では自己反省していた中島は、五男実の視点からは「強い意志力」が唯一欠けていたと認識されていた。知情意の三点からは情が強かった点、意志の面でも弱かったことになる。いずれにしろ深い自己反省にたって、修行生活が始まった。

壮年の頃から馴染みのある円覚寺で、その一つの塔頭である松嶺院に前後四年間も籠ったというが、本人にとっては待望の修行生活であり、精神的に大変充実したに違いない。この修行生活の日課は只管打坐（しかんたざ）であり、それはひたすらに坐禅をすることを意味する。と同時に大乘經典の「疏釈」も自ら行った。それが「自らも黙照して祖意の工夫に精進した」の含意である。公案による対話というよりも、一人で注釈に励むのである。実際に注釈したのは、『碧眼集』だけでなく、大乘仏典の精髓である『金剛経』・『信心経』・『般若心経』であり、その「疏釈」に「三ヵ年有余」をかけた<sup>421</sup>。

戦後に、朝比奈宗源（円覚寺管長）は、中島碧巖録について以下のように解説している。

「中嶋さんの講義は新機軸を出したもので、元来碧巖録は臨濟宗のものであるが、中嶋

---

<sup>418</sup> 漏とは十二月のこと。

<sup>419</sup> 中嶋（1951）p.277-278；中島（1953）序 p.1

<sup>420</sup> 中嶋実（1978）『回想』p.59

<sup>421</sup> 中島（1956.1）はしがき；中島（1956.7）p.72

翁は曹洞宗の立場から解されて、その造詣の深さを示されているが、あるいはまだ難しい点が残っているかもしれない、この中嶋碧巖録を篤学の士が出てきて更に、講義をすることになれば、興味深いであろう。」<sup>422</sup>

中島の解釈は独自のものとされるが、円覚寺の管長も一目置いていることになる。

中島は臨済宗の円覚寺に参籠したわけであるが、臨済宗が大切にす公案よりも經典の注釈に励み、ひらすら曹洞宗的に只管打坐を實踐した。只管打坐は何よりも曹洞宗の道元の開発した言葉である。曹洞宗も臨済宗も同じ禪宗であるが、中島のこのような修行も許されたのであろう。

道元その人も、曹洞宗という宗派（セクト）をつくることを反対したようで、仏心宗と呼ばせたかったと言われており<sup>423</sup>、中島も仏教宗派がセクトごとに対立することを不毛だと思っていた。後で述べるが、宗派よりも広義の宗教心を中島は重視した。

### (1) 帝人事件をはさんだ前後四年間の修行期

ここでは「前後四年の長き」時期について考察する。

中島は1934年7月21日に帝人事件で拘束され市ヶ谷に収監され、同年10月11日に市ヶ谷刑務所を保釈となった。この80日余りの獄舎生活で、「禪僧のような枯淡味」が出て来たと言われている<sup>424</sup>。収監後の修行だけでなく、この獄舎生活そのものが、静かな内省の時であり、禪的修行の場になったようだ。帝人事件で同じく収監されていた高木復享（なおみち）や永野護に対する人権蹂躪的に革手錠をつけるというようなことは、男爵である中島にはされなかったことは幸いであった。

保釈後、そのまま痔の手術で慶応病院に入院した。11月には退院し、通院を重ね、12月26日には全快となった。そして退院後に鎌倉の円覚寺に入った。以下の新聞記事を紹介する。

「どうも保釈当時は体を悪しく閉口しました、退院してからはほとんど鎌倉にいまして、二三日前に帰って来たところですよ、保釈になってから八か月ですかネー、まあ一禅坊主の様な生活をして来ましたよ」と語っている。これは帝人事件の公判が始まる二日前の1935年6月19日午後の中島の言葉である<sup>425</sup>。この記事から1935年前半の半年ほど円覚寺に参籠したことになる。

第3章で述べたように帝人公判は1935年6月22日に開始し、1937年10月5日まで続くロングランの裁判であり、同年12月16日に無罪判決がでた。無罪判決直後の中島の感想も本人らしいもので、以下引用する。

<sup>422</sup> 『につぼん青年』第2巻第1号、1954年、10面

<sup>423</sup> この「仏心」という用語は後で重要なキーワードとなる。後で言及する世界仏心連盟の仏心と関係する。

<sup>424</sup> 朝1955.7.4, 朝とは『東京朝日新聞』の略。以下同様。

<sup>425</sup> 朝1935.6.20

「ただ、あの主文を聞いた刹那遠い、長い旅から帰ってホット家に寛いだという気持ちでした。仏書に云う「帰家隠坐」<sup>426</sup>とはかくの如き気持ちを云うものでせうが、無罪確定したら働きます、長い間、休み過ぎた、悪夢のような四年間だった…険しい苦しい長旅だった。」

427

判決が出た 1937 年末において、中島は 64 歳となっていた。恐らく判決後の年明けである 1938 年から 1940 年頃までに残りの 3 年間を円覚寺に通ったと考えられる<sup>428</sup>。とはいえ 1939 年 1 月には工業倶楽部の専務理事に復帰した<sup>429</sup>。月例の専務理事会に出席しながら、参禅生活中心の生活を送っていたのだろう。ただこの間にも大阪で無罪を祝う会<sup>430</sup>や三男の結婚式（1939 年 5 月 17 日）<sup>431</sup>などがあった。

工業倶楽部の火曜会<sup>432</sup>で請われて『碧巖録』の提唱を始めたのが 1941 年秋<sup>433</sup>であるので、その時期以前には長かった修行生活は終えていたはずである。

## (2) 回心体験の評価

財界人として長らく実業界・政界がその基本生活の場であったが、なぜ円覚寺での参禅生活を始めたのか。もともと禅に関心があったという背景があるにしろ、4 年間ものあいだ修行の日々を送った原因について考察しなければならない。

一般的に回心体験は、宗教心理学的には不完全な人間が完全な人間へと変容する体験を意味する。または悩んでいた人間が心の安定を得る。不道德な人間がより道徳的な人間に変容するなどの含意がある。すなわち、精神的危機を契機とした回心体験は人間完成への道を意味する。

---

426 帰家隠坐（きかおんざ）とは禅語で、徹底した坐禅を通じて真の自分、仏性に立ち返ること。

427 朝 1937.12.17

428 毎日のように東京の薬王寺邸から円覚寺に通った。五男の中嶋実によれば「事件後の父の生活は、鎌倉円覚寺への参禅が日課となった。羽織、袴の和服姿で毎日鎌倉との間を往復した。」中嶋実（1978）『回想』p.59 参照。

429 日本工業倶楽部の専務理事はすでに帝人公判の審理が始まる直前の 1936 年 7 月 8 日に辞任していた。しかし 1939 年 1 月 30 日に再び就任し、1947 年まで在任する。1947-49 年には評議会会長になるも、さらに 1949-52 年まで再度専務理事に在任しており、その在任期間がきわめて長いことは序章でも論じた。1952-60 には工業倶楽部の評議会会長として亡くなる日までつとめた。貴族員議員は 1939 年 7 月に引退した。

430 無罪判決で「蘇った中島」を迎えた関西財界の集いで 20 数名が参集した。住友本社の総理事である小倉正恒が挨拶し、高等商業の同窓の庄司乙吉（東洋紡績社長）が感想を述べたという。朝 1938.2.12 参照。

431 三男の和男（30）が鈴木三郎助（味の素本舗鈴木商店の専務）の二女の禎子（21）と結婚した。

432 火曜会とは「昭和 15 年 12 月 27 日に、新進気鋭の財界人有志が相寄り、各界の中心の人士を招請して意見の交換を為し、親睦を図ると同時に相互の研鑽に資することを目的として発足したものである。爾来今日に至るまで発会の趣旨を踏襲し、原則として毎月第一火曜日に例会を開催した。」日本工業倶楽部五十年史編纂委員会（1972）p.127 参照。

433 素修会が「一昨年秋から」開始したことが記されている。中島（1943）「おくがき」p.374



帝人事件以前において中島は精神的修養をしてきたつもりであった。ところが思いもよらず、帝人事件にまきこまれ、検事の誘導尋問においては、友人の永野を想って、精神的錯覚に陥ってしまった。そして三土元鉄道大臣に対して、虚偽な出来事を認めて欲しいとまで嘆願してしまう。後から振り返れば、錯覚地獄に陥って、無実な三土大臣までも巻き込んでしまい、社会的な迷惑をかけてしまったのである。それは本人にとっても、思い出すのも厭な恥辱的な禍根となった。道徳的にも世間的にも決して恥となることはしてこなかったという自負があったであろう中島にとって、帝人事件は世間的にも生き恥をさらす上でも十分なほどであっただろう。

このような精神的危機を契機として、中島は本格的な僧院生活を送ることで真の精神修養・人間完成を求めたのであろう。財界人であり実業家でもある中島が自分に真に欠けているものを補うという強い欲求から僧院生活を送ったはずである。もともと金銭的欲求よりも公益性や社会道義心を大切にしていた中島であったが、それよりも意志力をさらに強固で確かなものとするために宗教的基礎づけがさらに必要であった。その一つの方法論として自ら親しんできた坐禅に時間をかけて実践することは、ごく自然な成り行きであった。

企業活動には道徳心がもともと必要であるが、さらに次元を深めて宗教性が必要であることを認識したことに中島の洞察がある。中島の宗教観は後で詳しく論じる。道徳的源泉は人間理性によるとしたカント的な哲学的転回が近代哲学の特色となり、世俗的な道徳哲学と宗教的規範は対立学説となる。しかし、近代以降においても宗教倫理が道徳的生活の根幹になるということの中島の回心は示している。

そして参禅という宗教的实践だけではなく、大乘經典の注釈という稀有な参究もしたところに、並外れた靈性的知性（spiritual intelligence）が中島精神の中で働いている点が特筆されることである。

#### 4. 財界の精神的指導

##### (1) 素修会での講話・坐禅指導

80日の獄舎生活を送り、帝人事件の公判を挟んで、4年余りの円覚寺での修行を終えて、世俗世界に戻ってきた中島は「禅僧のような枯淡味が出て来た」と言われる<sup>434</sup>。

日本工業倶楽部の少壮の実業家の集まりである火曜会の宴席にたまたま呼ばれた時、中島は次のように語った。火曜会のメンバーは「当時すでに経済社会の重鎮宿老と仰がれた人々をその祖父とし又は父とするいわゆる第二世第三世」であった。

「諸君は皆それぞれ巨大なる財産の所有主で、国家的に重要な事業の董督者<sup>435</sup>でもある。すでにおしもおされぬ財界の権威ではあるけれども、看受くるところ、平生いかにも事業の管理や世間的交際のことに追われがちで、その間個性を涵養し人物の内容を豊富に

<sup>434</sup> 80日の収監後に枯淡味が出たとされる。朝 1955.7.4.

<sup>435</sup> 董督（とうとく）とは総監督の意味。

すべき内観の功夫や、道味に潜心するというような余裕に乏しく、いかにも惜しむに余りある。」<sup>436</sup>

この時、1941年において中島は68歳であり、政財界活動から引退していたが、日本工業倶楽部には1939年1月から専務理事として復帰し、財界活動にはある程度関与していた。1940年には宮島清次郎とともに「肝煎」となって経済同人会を発足させ、その顧問となっていた<sup>437</sup>。

彼は次世代の経営者たちの心のあり方に対してこのように明言したのであった。「内観の功夫」や「道味に潜心する」余裕がないと言われた経営者たちは驚いたことであろう。さらに次のように語る。

「方今政情いよいよ複雑になり、人心ますます陰仄に赴き、国家に対する個人の義務が一層その重さを加うるの秋、時運の変遷に伴うて財界人としてその素するところを錯らぬようにするには、諸君の身分が身分だけに、かつ事業の盛衰における利害が直接にして、これが経営に対する責任が切実なだけに、この後幾度となく公私の分別や一身の処措に迷い、事業の運営における取捨進退の間に困しむような目にも逢うべく、そういう場合に成ると、知恵才覚が鼻の先きから無く、腹のドン底から来るのでなければいかぬ。それには平素時局問題の研究や経済知識の獲得もさることながら、同時に何か個性向上の為めの精神的修養を致されてはどうか。」<sup>438</sup>

ここには企業経営の社会的責任、現代的に言えばCSRの重要性だけではなく、組織の上につつ経営者は人格・人間性が豊かであらねばならないという東洋古典の視点が明らかにされている。

財界人としてのあるべき価値判断の根底はどこにあるのか、「腹のドン底」から来ているのかと問われて、誰もが反論できなかったことであろう。そして中島から精神的修養をしてはと問われて、その方法論について疑問に思ったことであろう。その後、幾日かたってから火曜会の会員の一人から『碧巖録』の講話依頼が舞い込んだ。

『史記列伝』か『菜根譚』くらいならと思っていた中島は、この注文に驚き、一時は躊躇した。しかし、せっかくの申し出で、自分から言い出したことでもあるので、この申し

---

<sup>436</sup> 中島 (1943) p.1-2

<sup>437</sup> 経済新体制要綱の確立に対応して生産拡充第一主義に経済界が対応を迫られる中で、財界中堅層の郷古潔、諸井貫一、膳桂之助ら40名が政策研究を主とする実践団体を日本工業裏部の中で結成させた。その団体が経済同人会であり、中島の親しい財界人が結集していた。読売新聞 1940年12月21日・27日、日本工業倶楽部五十年史編纂委員会 (1972) 参照

<sup>438</sup> 中島 (1943) p.2-3

出を受け入れたのであった<sup>439</sup>。

このように火曜会の会員を中心に中島から「修養講話をお伺いする有志の団体」として素修会が生まれた<sup>440</sup>。素修会とは素心<sup>441</sup>を修むるとか、自性を究るという意味で、中島が命名した。この同人の私的な修養活動は1941年の秋から始まり、毎月2回、時には3回『碧眼録』の提唱を受けることとなった。ちなみに1941年12月には大東亜戦争が始まっている。このような戦時期に、日本工業倶楽部の一室において素修会における講話が静かになされていた。『碧眼録』だけでなく、その他に、予備知識として『般若心経』・『金剛経』・『賛同経』・『宝鏡三昧』などの解説もあった<sup>442</sup>。

中島の解説は非常にわかりやすく、日常の実際生活に即した独自の解説であり、会員は仏教の真義がおぼろげながらも合点するができ、「実にこよなき歓喜の極み」であるとも語っている。講席の写真が残っているが、中島を中央として14、5人の参加者が熱心に勉強している姿が映されている。

また「中島男爵邸の大広間を開放した坐禅会」も開催され、円覚寺から招かれた「直日」<sup>443</sup>によって、正規の座法が教えられた。

素修会における仏典講話は戦時中はずっと続けられたことは、表5-2のように講話集が続けて発行されたことから推定される。『碧眼録』は100則からなる禅の公案集であるが、中島は25則ごとに冊子を作成して、教材として頒布した。

表5-2 中島著『碧眼録講話』

タイトル	発行日
『碧眼録講話第一集』(第1則～第25則)	1943年7月
『碧眼録講話第二集』(第26則～第50則)	1943年10月
『碧眼録講話第三集』(第51則～第75則)	1944年6月
『碧眼録講話第四集』(第76則～第100則)	1945年3月

1942年から44年までの3年間を入れて、3年以上にわたり、中島主宰の素修会が続けられたと思われる。

素修会のような中島による仏典講話は、素修会以外にも「大東亜戦争の盛んな時」に中島が会長をつとめていた日本貿易協会においても有志に対して『般若心経』の講話が行わ

<sup>439</sup> 中島 (1943) p.3

<sup>440</sup> この素修会は日本工業倶楽部の若手会員らを対象とした私的な集まりであり、倶楽部内の正式な会員活動ではなく、『会報』(日本工業倶楽部)にはその活動報告は掲載されていない。

<sup>441</sup> 素心とは、自我を取り去った素直な心、ものごとをありのままに受け入れる素直な心、人間本来の心性を意味する。

<sup>442</sup> 中島 (1943) p.374

<sup>443</sup> 直日(じきじつ)とは禅堂内で坐禅の指導監督をする総取締りの役のこと。

れた<sup>444</sup>。また戦後には、碧眼会という名の仏典講話の会を日本工業倶楽部で再度、主宰した<sup>445</sup>。

## (2) 素修会の意義

戦時期に3年以上に渡り、素修会が日本工業倶楽部内で行われていたわけだが、そこに集った実業家は誰であり、どのような影響を及ぼしたのだろうか。そして素修会の意義とは何であったのだろうか。

経済界の重鎮の二世三世である火曜会の多数の会員が素修会を構成していた<sup>446</sup>。火曜会のメンバーとしては以下のような実業家がいた<sup>447</sup>。

諸井貫一、植村甲午郎、渋沢敬三、藤山愛一郎、安田一、山下太郎、森村義行、矢野一郎、麻生多賀吉、鈴木三千代、清水康雄、小池厚之助、松本兼二郎、正田英三郎など、青木均一も特別参加した。

また中嶋信光は、素修会に参加した実業家として以下のような人々を上げている<sup>448</sup>。藤原銀次郎、宮島清次郎、桜田武、石坂泰三、諸井貫一、原安三郎、足立正、正田英三郎、永野護・永野重雄・伍堂輝雄の三兄弟、安岡正篤。

序章で論じたように、火曜会のメンバーは戦後に経済同友会の創立メンバーとなった。経済同友会の創立時には発起人80名から幹事29名が選出された。幹事29名の中には火曜会の会員は9名いた<sup>449</sup>。

以上のように錚々たる実業家たちに説かれたことが想像される。そして中島が大変尊敬され、感謝されていたことは『碧巖録講話 第一集』(1943)の「おくがき」<sup>450</sup>や『碧巖録講話』(第一集から第四集まで)の出版そのものによっても了解できる。

1943年の「おくがき」によれば、素修会同人たちは、素修会で教えを受けたことに深く感謝して、以下のような証言を残している。

「男爵の御講義は、例證該博、義味當膽、よく吾等をして佛教の大意を了解せしめられ

---

<sup>444</sup> 中島(1952.8) p.3. 同書には日本貿易会と書かれてあるが、日本貿易協会が正しい。日本貿易会50年史編纂委員会編(1998)参照

<sup>445</sup> 注72参照。

<sup>446</sup> 中島「はしがき」『碧巖録講話. 第一集』素修会、1943年7月、p.1-9

<sup>447</sup> 『正田英三郎小伝』(1990)参照。

<sup>448</sup> 中嶋信光(2005)参照。

<sup>449</sup> 菅山真次(1996) p.27の表「経済同友会創立時の幹事」によれば、火曜会メンバーとして青木均一、小池厚之助、清水康雄、諸井貫一の4名に○がついているだけである。残りの5名は、工業倶楽部の会員である磯村乙巳、島田藤、鈴木治雄、森暁と、恐らく、金井寛人かもしれない。後日幹事に加わった13名のうち、正田英三郎、麻生多賀吉の2名も火曜会の会員である。山下(1992) p.10-11参照

<sup>450</sup> 中島久萬吉『碧巖録講話. 第一集』素修会、1943年7月の「おくがき」 p.374-376参照

たのみならず、而かも深奥なる宗旨を日常の實際生活に即して、いとも親切に釈明せらるるが為に、例へて云はふなら、恰度北海の堅氷が春の陽ざしに照らされて、何時とは無しに融けて流れ出すやうに、さしにも宏遠なる佛教上の真義をも、おぼろげながら之を合点することが出来たのであった。実にこよなき歓喜の極みである。

殊に有難いことは、男爵も「はしがき」の中で勧奨していらるる通り、吾等会員の為に正坐内観の工夫を最も必要なりとせらるる趣意の下に、昨年厳寒の頃から数次特に男爵邸の大廣間を座禅の道場として開放せられ、態々鎌倉圓覺寺から「直日」を招じて、正規の坐法を實踐せしめられたことであつた。燈火のゆらぎ、警策の響も、禪堂さながらの雰囲気に、男爵御夫婦を始め同志の者、兀として正身端座したのである。」<sup>451</sup>

多忙な実業家たちにとって、難解な仏典の提唱を通じて大乘仏教の根本原理を学べたことは喜びであり、彼らは正坐をも実践したことが伺える。その目的とするところは、中島の言葉を借りれば、「自己を修養するということは、自己を客観し自己を内省し、正眼に自分を看ることである」とされる。

経営者は日々に決断を迫れるが、そのような時に「腹のドン底から来る」決断が出来なければならぬ。「公私の分別や一身の処措」に迷いがないう、「事業運営における取捨進退の間に」苦しまないことが求められる。そのような「個性向上のための精神的修養」が実業家に求められるており、心作りのために素修会の活動が継続したことになる。

素修会の意義とは、責任ある経営者の心作りの場を提供したことであり、事業活動や財界活動のベテランである中島が精神的指導者ともなったことに特異な点がある。経営者の心の修養はいつの時代でも重要な事項と思われるが、時代を経るに従って、その重要性は次第に看過されているのでは無からうか。

財界人でありながら、仏典を利用して次世代の経営者の心の修養を指導した人物は、中島の後にも先にもいない。その意味で、財界人たちを精神的に領導した中島の存在は財界の歴史に照らしてみても、特異な地歩を占めているといえる。

### (3) 素修会の復活

財界総理の異名をもつ石坂泰三は、第二代経団連会長（1956-68）を四期十二年つとめただけでなく、日本工業倶楽部理事長（1963-75）も途中から兼任して亡くなった。その石坂が工業倶楽部の中に正式に「素修会」を復活させた。『日本工業倶楽部五十年史』を刊行させた石坂は工業倶楽部の伝統精神を知悉していた。自伝の「私の履歴書」でも新資本主義のなかにおける経済道義の確立を強調しているが、その内面では「中島精神」を継承させたかったのだろう。第一生命専務時代の石坂泰三は、帝人株の買い取りに関して、官邸で中島と面談しており、その関係から帝人公判の証人の一人であつた<sup>452</sup>。信光氏によれば、

<sup>451</sup> 同 p.374-375.

<sup>452</sup> 昭和12年2月23日に帝人事件の証人として召喚された。石坂泰三『無事是貴人 石坂

石坂は素修会で教えを受けており、たとえ、そうでなかったとしても中島は財界の大先輩にあたる。

石坂が 1971（昭和 46）年に素修会を復活させたことは、以下の渋谷氏の文章から判明した。石坂は明らかに「精神面の教養」が経済界に肝要であることを意図していた。

渋谷澄（元立川飛行機株式会社社長）「石坂さんの思い出」

「これも、四、五年前であったか、世情が所謂、戦後の高度経済成長を目指して、物質的繁栄をのみ謳歌していた時代に、石坂さんはこれにあきたらず、世の余りにも経済優先の風潮に踊らされている有様を歎いて、われわれは更に精神面の教養にも心懸けて、大いに自省の時間を持って、もっと幅の広い識見の下に行動するよう心懸けようではないかとの趣旨を強調されて、同志を募って今日の「素修会」が組織された次第である。爾来哲学、宗教、文学、思想、その他の学識者の人々と常に交流を持って精神文化に関する修養道場として今日に至っている。石坂さんも忙しい中を時々出席して黙想を続けられた。いかにもそのお人柄が偲ばれて、今更に感慨が深い。」<sup>453</sup>

中島が亡くなってから 11 年後の 1971（昭和 46）年に復活した素修会は日本工業倶楽部の正式の講演会として開始され、現在に至っている。工業倶楽部には復活した素修会の開設当初の講演者の芳名録が残されており、以下の表 5－3 の通りである。

表 5－3 再開された素修会の講師一覧

月日	回数	講師名	演題
昭和 46 年 2/9	1	安岡正篤	新しい時代と人物－素修とは何か
3/9	2	高山岩男	人生と矛盾
4/14	3	朝比奈宗源	悟りと信心
5/11	4	久保田正文	法華経の思想的特徴
6/8	5	高山岩男	人生と矛盾
7/13	6	山田靈林	禅を身ぢかに感ずる話
9/11	7	高田好胤	善悪因果
10/12	8	大森曹玄	禅と剣の道
11/9	9	増谷文雄	唯佛与佛ということ
12/14	10	相溪順忍	「心身の転換」－往生について－

泰三の記録』石坂家，1981年，p.108

<sup>453</sup> 渋谷澄（元立川飛行機株式会社社長）「石坂さんの思い出」，日本工業倶楽部『会報－前理事長石坂泰三君追悼』第 95号，昭和 50年 5月，p.20-23

昭和 47 年			
1/11	1 1	安岡正篤	今年（昭和四十七年）はどういう年か
2/8	1 2	紀野一義	中世に見る日本人の典型
3/14	1 3	小村健三	神道とはなにか
4/11	1 4	湯浅八郎	体験より得たるキリスト教
5/9	1 5	古田紹欽	夢—この一字に学ばん—
6/13	1 6	鎌田茂雄	禅の歴史と思想
7/11	1 7	友松圓締	釈尊の思想
9/12	1 8	岡枝尊	魔禅
10/11	1 9	谷川徹三	人間であること
11/14	2 0	野村耀昌	くまらじゅうの生涯
12/12	2 1	小野清一郎	人間と宗教
昭和 48 年			今年（昭和四十八年）はどういう年か
1/9	2 2	安岡正篤	—本年の干支について—
2/13	2 3	酒井得元	偉大なるもの
3/13	2 4	工藤義修	対向と円融
4/10	2 5	松原泰道	禅のこころ
5/8	2 6	大谷光紹	現代人の救い
7/10	2 7	笠原一男	親鸞—煩惱具足のほとけ
9/11	2 8	花山信勝	在家の仏教
10/9	2 9	徳久克己	心と身体
11/13	3 0	玉城康四郎	瞑想と人生
12/11	3 1	樽林皓堂	禅の思考
昭和 49 年	3 2		
1/8		安岡正篤	甲寅の新年と素修の意義
2/12	3 3	森崎善一	人間といのちと
3/12	3 4	橋本凝胤	人生の矛盾
4/9	3 5	増谷文雄	わが歎異抄
5/14	3 6	増谷文雄	わが歎異抄
6/11	3 7	北森嘉蔵	日本とキリスト教
7/9	3 8	北森嘉蔵	日本とキリスト教（その二）
9/10	3 9	鎌田茂雄	観音の世界（一）
10/8	4 0	鎌田茂雄	観音の世界（二）
11/12	4 1	大森曹玄	禅と現代
12/10	4 2	大森曹玄	禅と現代（その二）

昭和 50 年 1/14	4 3	安岡正篤	乙卯新年の深省
2/12	4 4	笠原一男	日本人にみる女性と佛教
3/11	4 5	板垣雄三	イスラムという宗教
4/8	4 6	笠原一男	蓮如と一向一揆
5/13	4 7	鎌田茂雄	佛教よりみた日本人の心
6/10	4 8	板垣雄三	コーランとは何を説くか
7/8	4 9	弟子丸泰仙	禅と現代文明の危機
9/9	5 0	渡部昇一	不確定性原理と現代
10/14	5 1	早島鏡正	往生浄土
11/11	5 2	松野純孝	親鸞の生死観
12/9	5 3	鎌田茂雄	中世佛教の特質
昭和 51 年 2/10	5 4	安岡正篤	時勢と哲理
3/9	5 5	芋坂光龍	大乘仏教精神

出典：『素修会来賓芳名録（一）』（日本工業倶楽部所蔵）

5年ほどの毎月の講演者の氏名と演題がわかるが、中島と大変親しかった陽明学者の安岡正篤が第1回ならびに年初に講演を行っていることが注目に値する。朝比奈宗源は中島の葬儀を行った円覚寺の管長であるし、山田霊林や増田文雄などは、後に述べる世界仏心連盟の関係者であった。再開された素修会は中島の遺志を汲み取って仏教思想を中心に、その他の宗教や哲学、さらに学問一般から一流の思想家を選びすぐった講演会となった。中島の遺志は精神的遺産となって、今なお工業倶楽部の会員である実業家の精神的素養を学ぶ契機となっている。素修会で学んだ元経営者の鶴岡信一の言葉を最後に引用しよう。

「素修会に入会してから四年になる。世話人や事務局の御尽力で、著名な宗教家、思想家、哲学者などの興味深い話を聞いて、年齢とともに平素忘れかけていること、思い至らぬことが段々増えている中で、貴重なヒントを与えられ、また時には思考の道筋作りを示唆されて、大変有難く思っている。・・・」<sup>454</sup>

鶴岡は現役時代の激務の中でも霊場巡り、仏教書の通読、写経を通じて会社のストレスの解消に努めていた。しかし入院時などには平常心を保つことができなかった。しかし、素修会での学びを通じて、最近の闘病生活においても平常心を保つことが出来るようにな

<sup>454</sup> 鶴岡信一（元三菱重工業株式会社副社長）「素修会で学ぶ」、日本工業倶楽部『会報』192号、2000年4月、p.38



ったという<sup>455</sup>。鶴岡は「宗教は心の問題である」と語っている。心の問題は誰もが対峙していると鶴岡は言うが、別言すれば、生きていることの意味が常に人間に問われている。いかなる人生観、処世観をもつのかは、いつの時代にも普遍的なテーマと言える。

## 5. 在家居士の活動

中島による素修会は終戦前には終了したと思われるが、戦後の平和に時代になってからも碧眼会として工業倶楽部の中で再開した<sup>456</sup>。仏典の提唱以外に、戦後における中島の仏教者らしい活動をここでまとめてみよう。その一つは、高尾山仏舎利塔の建設である。その他に、仏典解釈書の公刊、さらに最晩年には世界仏心連盟を設立させた。

### (1) 高尾山仏舎利奉安塔の建設・落慶式と仏典注釈書の公刊

高尾山仏舎利奉安塔の建設は「在家居士」と自称する中島にとって、晩年における一大心事であった。その由来は以下のようになる。

1930 - 1931 年に少年団日本連盟（ボーイスカウト日本連盟）の二荒芳徳伯爵と米本卯吉氏が率いる代表団 22 名が、両国の親善交流を深めるためにタイ王国（その当時はシャム）に派遣され、現地の少年団と交流し、指導者の養成に尽力した。これに対して、タイの国王ラーマ 7 世によって、両国友好関係の象徴として、大本山であるナコンパトム県のプラパトム・ジェーディー寺院に安置してある釈迦の真骨（仏舎利）が日本に分与された。

この真骨は英国ロイヤル考古学会が鑑定し、釈迦が涅槃後、その同族が中インドバチス州ビブラブ村に壮大な塚を築き、奉安埋葬した真親骨であることが証明された。後にインド政府から仏教国タイに贈与されたものの一部であった。

1932 年 7 月に少年団日本連盟の相談役となった斉藤実首相は後藤文夫農相や中島商工大臣と共に少年団の祝賀会に参列した<sup>457</sup>。このころ中島は斉藤首相からその保管と処理を任せられ<sup>458</sup>、自分が不肖にも大きな責任を負ってしまったことを痛感した。

中島は、20 数年にわたり、この仏舎利を東京都に依頼し、本所震災記念堂（現在の東京都慰霊堂）に仮安置してもらった。当時の東京市長永田晴嵐氏は将来東京近郊の浄地に奉安する計画であったという。

高尾山仏舎利奉安塔建設地の写真が 1953 年 7 月に牛山栄治<sup>459</sup>も含めて撮影されているが、

---

<sup>455</sup> 同、p.39-40

<sup>456</sup> 木下によれば、戦後 9 年を経た 1954（昭和 29）年に「碧巖録講話会」を日本工業倶楽部において毎週中島先生にお願いしたという。木下（1973）p.182-183

<sup>457</sup> 財団法人斉藤子爵記念会（1942）p.59-60.

<sup>458</sup> 円覚寺の落慶 750 年の記念法要でも斉藤首相と中島大臣が参列したこともあり、お互いに仏教帰依者としての信頼感があったようだ。

<sup>459</sup> 牛山栄治[1899 生まれ]は、中学校長会会長、日大教授、群馬女子短期大学名誉学長で山岡鉄舟の研究者。熊谷の紹介で、中島の薫陶をうけた。牛山が編集長の『中学校』に中島の論考が多く掲載された。牛山も参禅した人で、宗教心のある中島の人格を大変尊敬した。中島が仏舎利塔の建設候補地のために百方奔走したことをよく知っていた。中島が質素で

仏舎利奉安会が組織され、仏舎利奉安会の例会が開催されはじめた時期は、恐らく日本青年連盟<sup>460</sup>の活動期と符号している。世界友の会の木下乙市によれば、財団法人東京仏舎利奉安会の設立は1953（昭和28）年11月とされている。東京都から仏舎利奉安会に仏舎利は下付されることになった。仏舎利奉安会会長となった中島は会の趣旨と勧請を依頼する文面を作成した。その文面によれば、奉安塔の完成を通じて、「社会浄化、情操涵養、国際親善の一大都民運動として平和日本の樹立に貢献したい」という趣旨が付け加えられた<sup>461</sup>。事業計画によれば、タイのパゴダを模した奉安塔の仕様は以下ようになる。

本堂の軒高二十七尺、塔高六丈六尺一寸、公費二千万円、基壇六十五坪、建物十三・六坪、敷地二、三五八坪、建設者財団法人東京仏舎利奉安会、設立監督藤原孝一、克彦、施工者清水建設株式会社、正面ブロンズ扉制作田島順三などである。

1954年9月19日に震災記念堂から高尾山薬王院への仏舎利移霊祭に中島と日本青年連盟理事の熊谷辰次郎が参列した。同年11月にはセイロン公使が高尾山に招待された。

1955年頃の中島の備忘録には佛舎利奉安会の例会が毎月のように開催され、その建設費の拠出先は中島が親しくしていた多数の企業からの寄付で賄われたことが記載されている<sup>462</sup>。

高尾山仏舎利塔の落慶式は盛大に1956年11月18日に挙行された。インド大使館情報官の祝辞があり、中島からは設立の経緯に関する報告があった。受贈者の元伯爵二荒芳徳、米本卯吉も参列した。高尾山薬王院の山本秀順貫主が祭主のもと十名以上の大僧正が読経し、花紙片が蒔かれた。参拝者の数は数万人であったという<sup>463</sup>。

「冬の落慶奉遷式」で中島は寒さで病をこじらせてしまったと語っている。

仏舎利塔が建設された1956年はたまたま仏滅2500年祭が全インドで挙行された年でもあった。この年の完成に中島は深い仏縁を感じていた<sup>464</sup>。

高尾山薬王院は真言宗の寺院であり、中島が帰依した禅宗寺院ではない。真言宗の寺院とはいえ薬師如来・飯縄権現を祀る大本堂のほかには飯綱権現を祀る本社（神社）もあり、典型的な神仏習合を示した修験道（山岳仏教）の霊地である。「真言宗教の古道場」<sup>465</sup>とい

---

そこぬけに親切であり、着眼が鋭く、よいことには私財をなげうってでも率先実現に努力し、無欲で私財を残さなかった、登山で骨折した時にみなに知らせず、非常に我慢強い方である、東京文化放送会長（筆者注：日本放送の誤り）に推された時、2億円を借金して、会社の急場を救ったなどのエピソードを書いた。牛山宛ての中島の手紙に依れば、82歳の自分は「残生はこれ在家の僧」と書いた。牛山（1977）参照。

<sup>460</sup> 日本青年連盟については第6章で詳しく論じる。

<sup>461</sup> 木下（1973）p.184

<sup>462</sup> 備忘録には16社の「結縁勧誘先」が書かれていた。

<sup>463</sup> 木下（1973）p.185-186

<sup>464</sup> 高尾山仏舎利塔の背後には塔の由来が記されており、東京佛舎利奉安會會長の中嶋久萬吉の名前が彫り込まれている。その文章の中には「佛紀2500年」が指摘されている。塔の由来については本章の付録1を参照せよ。

<sup>465</sup> 中島の追悼文を書いた、僧侶の大石俊一の表現。中島は大石俊一が建てた八王子駅近くの「都市寺院」（禅宗系単立仏教寺院）に対して深い理解を示した。大石俊一は、中島は「堂々

う高尾山を選定した理由は多摩地域を愛した中島が、教団・教派にこだわるよりも、日本人の伝統的な霊性（スピリチュアリティ）を大切にすることを意味する。高尾山を「都下随一の幽境」と中島は塔の由来の中で書き遺している。

仏舎利塔建設を中島は寺院関係者に何度も自慢して語り、満足していた<sup>466</sup>。高尾山仏舎利塔では現在でも毎年地元のボーイスカウトによる4月に法要奉仕が行われている。中島がその建設に尽力した史実は塔の裏に記載されているように長く後世に伝えられるだろう。

高尾山仏舎利塔建設に合わせて、自身の仏教文化業である『禅苑拾翠』が1956年に刊行された。この書籍には、『金剛経』『般若心経』『信心銘』の講義の他に、「自然堂独語」という宗教的・哲学的洞察も掲載されている。「自然堂独語」は『政界財界五十年』（1951）からの再録であり、深い学識に裏打ちされた中島の哲人的側面がよく出ている。

## (2) 仏舎利奉安会と仏教青年会の構想

1954年12月に中島はアメリカのブレイトン・ウィルバー宛の英文レターで、「仏舎利骨堂の建設に合わせて、青年仏教会を結成している」と説明した<sup>467</sup>。この青年仏教会が世界仏心連盟を意味しているのではないかと思われる。ウィルバーあての手紙で中島は、以下のように説明した。

「宗教が個人生活の完成のために、最善であり、宗教は人間各個人の尊厳と価値を強調する。新しい日本は強固な道義と大乘的な宗教的組織を求める。この点から、青年仏教会は、我が日本青年連盟と表裏一体的である。・・・指導者養成のために、意見の交換、友情の交流を図るために青年たちと交わる機会をもつことです。」このために施設が必要であり、日本青年連盟と青年仏教会の両者を結び付ける理由はここにある。

「高尾山麓、納骨堂<sup>468</sup>近く、我々は前途ある青年たちの簡易な宿舎と同時に、成年者の会合所としての大きな宿泊所と、図書館を持ちたいと考えて居ます。」

このように戦後日本の平和を目指すために仏教青年会を組織したいと語った。これは熊谷理事が中心となった日本青年連盟と一体的に仏教思想という確固たる基礎づけのもとに、施設を作りたいという構想であった。この仏教青年会が世界仏心連盟という名の組織として登場するのは、1956年初頭であった。

なお「仏教」という名称が全面的に出なかった背景には、青年団（運動）が日本の地域社会の特性と民族伝統から自然発生した団体であり、友愛団体であり、宗教・イデオロギ

---

たる一個の仏教学者であり、南方仏教にも通じている」と評している。この寺院は禅東院東福寺である。活発なる出版、仏教啓発運動の大石俊一の伝統を受けて、佛紀2550年平成18年4月29日スリランカ大寺派総本山アスギリア精舎管長ブッダラキタ大長老ふくむ二十人の長老方によりこの地が上座仏教テーラワーダ戒壇として日本で初めて認定された。

「南方仏教にも通じている」中島が生きていれば、この壮挙を喜んだことであろう。南方仏教に通じている理由は恐らく、スリランカに渡った釈宗演からの教示かも知れない。

<sup>466</sup> 大石（1960）p.10-11.

<sup>467</sup> 中島（1955）

<sup>468</sup> 仏舎利塔のこと。

一とは無縁の政治結社ではないという熊谷辰治郎の青年団理論が影響したかもしれない<sup>469</sup>。

### (3) 世界仏心連盟の設立と青年修養道場の建設へ

『Nippon 青年』によれば、1956年2月に中島は、日本青年連盟理事の熊谷や木村尚一だけでなく、宮本正尊博士、佐々木泰翁、増谷文雄、山田靈林、那須正隆、増永靈鳳らと世界仏心連盟の結成につき懇談した。同年5月12日にも世界仏心連盟の性格・事業につき小野清一郎博士、宮本正尊博士その他と懇談した。

何が語られたかは不明だが錚々たる学者・高僧が参集した。これらの著名な仏教学者の閲歴は以下のようになる。宮本正尊[1893-]は日本インド哲学仏教学会の創設者で、インド哲学の世界的権威。佐々木泰翁は曹洞宗宗務総長で日本仏教連合会にも関連した人。増谷文雄[1902-1987]は東大宗教学科卒で原始仏教の専門家、正法眼蔵ほか広範な仏教研究をした著名学者。山田靈林は曹洞宗管長、永平寺第七十五世貫主となった名僧。那須正隆は大乗経典の注釈をした高僧。増永靈鳳[1902-1981]は駒澤大学教授、正法眼蔵・禅宗史の研究者。小野清一郎[1891-1986]はのちに文化勲章を受けた刑法・刑事訴訟法の専門家で、親鸞研究者。

4月9日正午から、日本工業倶楽部で世界仏心連盟の会を開かれ、出席者七十名、日本青年連盟の熊谷常任理事の司会、中島の所見発表の後、宮本正尊博士、永野護（第4章参照）、安岡正篤の所見の発表があり、盛会であったという。宮本博士・小野博士などとの世界仏心連盟の懇談会は57年2月、6月とあり、58年8月まで記録に残っている（表5-4参照）。

以上が、世界仏心連盟という団体のわずかな活動記録である。1956年3月号の論説では、中島はこの団体の目的は「現代文明救済の悲願のもとに、「弘く仏心普及の運動に挺身しようと思う」と述べた。仏舎利塔に合わせた「仏教青年会」がこの団体の元々の目的であったらう。論説の締めくくりで「カントの至上力こそは仏心であり、わが連盟の期するところは、仏心を通じて、わが国人、殊に明日の支配者たる青年層に、確固たる精神的定軌を育成しようとする。」と述べてもいる。

なお世界仏心連盟発行（日本工業倶楽部内）の中島のパンフレット、『碧巖録と道元禅師』（1956年11月）、『世界仏心連盟』、『人間生活の行き詰りと新意義』（「人間生活の行き詰りと新教育の道」『中学校』1957年と類似）、『宗教々育の振興』（「宗教教育の振興の振興に待つのみ」『中学校』1956年と類似）、『社会革命時代』の5点が刊行された。

### (4) 広園寺の青年修養道場の建設計画と中島の死

1957年10月27日に、日本青年連盟の東京盟友協議会が秋多町菅生（現在のあきるの市）の蔵守院至道庵（曹洞宗の寺院）で開催された。広大な規模で「世界友の会フィールド・センター」の建設が構想され、その中で青年修養道場に関して中島は熱く語った。「多摩至道会」は「多摩青年に対する修養としてももっとも為すべしとするものはこの「天啓」に

---

<sup>469</sup> 熊谷（1953）p.3-7

おける自覚と自得に他ならぬ」と熱く論じた<sup>470</sup>。

「天啓」とはグスタフ・ルボンが述べた神に対する崇敬の念であり、フィヒテのいう宗教的実在であり、神秘の発見による歓喜であるとも言い換えている。すなわち宗教的情操が熱く説かれた。

この青年修養道場は世界仏心連盟の事業であったに違いない。場所は以下のように秋多町から八王子に変更されようである。

1958年7、8、9月には名刹広園寺（八王子市横山）の復興と青年修養道場を建設しようという会合があり、小林吉之助（前八王子市長）、丸山今朝兵（市議会副議長）、大石俊一（八王子市、禅東院東福寺住職）<sup>471</sup>、清水、稲村、前島康彦（造園史家）などが工業倶楽部の中島のオフィスを訪問した。

その実現を見ることなく、中島は1960年に87歳で亡くなった。

## 6. 総括

本章は、1934年に連続して起きた二つの悲劇から失脚させられながらも、精神的指導者として活躍したことを明らかにした。事件以前から中島は禅趣味があったが、それがいつごろからどのように形成されたのかを明らかにした。鎌倉円覚寺での修行期を経て中島の精神はさらに磨かれた。財界サークルに戻り、期せずして素修会という財界二世三世の集まりにおいて、碧巖録などの大乘經典の勉強会を主宰するだけでなく、坐禅の指導も行った。財界の外からではなく、財界内の財界人が難解な仏典に依拠した精神的指導者となったという点で、中島は大変ユニークな存在であった。

3年以上にもわたり財界二世三世たちが精神修養の勉強会に集まった背景には、人格の修養が責任ある経営者にとって重要であることが共有されていたからである。ここで学んだ経営者の中には経済同友会の創立メンバーを構成した人たちもいて、戦後経済の復興の背後に中島精神があったともいえる。

素修会を戦後復活させたのは石坂泰三であり、経済道義の確立を目指して財界人の修養の場が復活したことを意味する。中島の遺志は精神的遺産となって、今なお工業倶楽部の会員である実業家の精神的素養を学ぶ契機となっている。

戦後には高尾山仏舎利塔の建設を実現し、世界仏心連盟という団体を自ら創設しながら、青年教育に尽力しようとした側面を浮かび上がらせた。どちらも大乘仏教に関連した営みであるので、第5章はまとめて「仏心の普及」と名づけた。

大乘仏教学者なみの学識があり、自称「在家僧」でもあった点、そして宗教教育を訴え

---

<sup>470</sup> 中島（1957）p.4-6

<sup>471</sup> 大石俊一の中島への追悼「父子二代三多摩を愛した中嶋久萬吉翁」（1960）は中島の晩年の仏教的功績を詳しく論じている。広園寺（臨済宗）の改修費用に多大な支援をした中島は静寂な広園寺でいろいろな計画をたて、自らも隠棲したいと考えていたという。仏舎利塔の建設にはすこぶる満足で、僧侶である大石に何度もその自慢話をしたという。そして仏舎利を中心に毎年恒例の法要を営みたいと考えていた。

るほどの霊性の持主であり「高潔な」<sup>472</sup>人格者であったとされる。

中島の五男実によれば、「政財界に活躍した父の姿は謂わば假相であって、私の目には行雲流水、一種禅味を帯びた俳人の姿に受け取られた。」<sup>473</sup> 同様な表現は、帝人事件の同僚である河合良成の以下の中島評にも見られる。

「中島さんは本来行雲流水的の心境を持った人で、天成的の一人の俳人である。財界や政治に関係したこともあるが、これは假相であって、本来禅道と俳道とを交えたような風格の人であり、世上の名利財産などにはきわめて恬淡たる人物である。したがって常に運命に適従して何の反抗をも示さざる人柄である。」<sup>474</sup>

以上のように、中島は人物像的には経済人というよりも禅味を帯びた俳人に近いことが実像であるらしいことが分かる。このような人物が財界人として財界の本流を歩みながら、次世代の経営者の精神的指導者となった史実が本章から判明した。

---

<sup>472</sup> 叔父は「高潔な」人であったとは、鮫島純子氏の発言より。鮫島純子は渋沢栄一の子息、渋沢正雄の娘で、何度も叔父である久万吉に会っていた。

<sup>473</sup> 中島実（中島家『回想』p.78）

<sup>474</sup> 河合（1970）p.245

## 付録1 高尾山仏舎利塔の裏面に刻印された由来書

### 東京佛舎利奉安塔由来

大聖釋尊菩提樹下に深甚の法を開顯し廣大無邊の慈悲を垂れ給ひてより法輪を五大に轉じ歸依隨喜の徒五族に及び佛徳炳焉として衆庶を光被たり真に敬仰に堪へず謹みて經典を按ずるに釋尊の滅後その真身舎利は八国に奉祀せられしことを傳うれども真蹟杳として不明なりき然るに偶一八九八年北印度バスチ州ビウラーフの遺蹟に於て嘗て釋迦族の奉祀せる真身舎利寶龕を發見し世界の佛教徒を驚喜せしめたり印度政廳はこの佛舎利を擧げて佛教國泰王室に贈獻せり泰國は又之を頒ちてビルマ及びセイロン兩國に贈ると共に明治三十二年我國にも分贈せられたり現に名古屋市覺王山日泰寺に奉安する佛舎利は即ち是なり

次で昭和六年春少年團日本連盟代表招聘せられて泰國を訪問の砌王立大寺院ナコムパトム寺に正式參拜し國王の特旨により日泰親善の印として佛舎利數顆を贈與せられ恭しく奉戴歸国したり仍て之を東京市に托し假に東京都慰靈堂に奉安せられしより既に二十餘年を経たり

今般本會發願する所あり新たに地を都下随一の幽境高尾山上にトし塔を建立莊嚴して奉遷し永く佛徳讚仰の殿堂たらしめ佛陀の精神を以て混濁せる社會人心を教益し世界人類の平和親善に資せんことを期す乃ち淨財を篤志に仰ぎ工を起し白亜の寶塔今や完成せり茲に佛紀二千五百年の嘉辰に當り恭しく落慶奉遷の法儀を行う寔に欣快に堪へず謹みて由来を記し後世に傳う

昭和三十一年十一月十八日 東京佛舎利奉安會會長中嶋久萬吉撰文  
高尾山主山本秀順書

For the permanent expression of the joy of having here in company  
With the many whose earnest desire it is to contribute through the Buddhist  
Spirit to the peace and happiness of mankind. Erected this monument for  
The genuine relics of the great Lord Buddha received through the Boy  
Scouts Federation of Japan from His Majesty the King of Thailand  
In the year 1932.

The Tokyo commission for the preservation of the Relics of Lord  
Buddha September 19, 1956.

The Two Thousand Five Hundred Year after the  
Entrance of the Lord Buddha into Nirvana.

\* 日本文は縦書きであるが、本稿では横書きで記した。英文は縦書きの日本文の下側に横書きで記されている。

参考文献

書籍・雑誌記事

Rambo, Lewis R. "Conversion," (Mircea Eliade, editor in chief, *The Encyclopedia of Religion*, Vol.3-Vol.4., c1987, 1993, Macmillan Publishing, p.73-79)

石坂泰三 (1981) 『無事は貴人 石坂泰三の記録』 石坂家

井上禅定 (2000) 『釈宗演伝』 禅文化研究所

牛山栄治 (1977) 「中島久万吉翁」『修行物語』 春風館, 9月, p.255-267

大石俊一 (1960) 「父子二代三多摩を愛した一中嶋久萬吉翁」『多摩文化』 第5巻, 多摩文化研究会

岡崎哲二・菅山真次・西沢保・米倉誠一郎 (1996) 『戦後日本経済と経済同友会』 岩波書店

河合良成 (1970) 『帝人事件: 三十年目の証言』 講談社

熊谷辰治郎 (1953) 「最近の青年団論と青年団運動の本質」『中学校』 第5号, 7月号, p.2-9

熊谷辰治郎全集刊行委員会編 (1984) 『熊谷辰治郎全集』 勁草書房

杉本民三郎 (1960) 「葦草の同人ことども」『Nippon 青年』 第8巻第5号, 5月号 p.4-5

禅文化編集部 (1981) 『明治の禅匠』 禅文化研究所

財団法人斉藤子爵記念会 (1942) 『子爵斉藤実伝 第四巻』

筒井芳太郎 (1952) 『財界人物読本』 (「夢をもつ人出よ 中島久萬吉」、p.223-235)

鶴岡信一 (2000) 「素修会で学ぶ」、日本工業倶楽部『会報』 192号, 4月, p.38-43

東京大阪朝日新聞経済記者共編 (1924) 「王陽明の哲学を基礎として事業を営業して居る  
古河電気工業社長 中島久萬吉」『財界楽屋新人と旧人』 日本評論社, p.149-152

中島久萬吉 (1924) 「詩と禅」『倦鳥』 8号 (『師友』 1953年, 2月号に再録)



- 中島久萬吉 (1924) 「学道時代の道元禪師」『倦鳥』10号 (『師友』1951年, 8月号に再録)
- 中島久萬吉 (1924) 「永平寺詣」『倦鳥』第12巻12号, p.16-20.
- 中島久萬吉 (1943) 『碧巖録講話第一集』素修会編
- 中嶋久萬吉 (1951) 『政界財界五十年』大日本雄辯會講談社
- 中嶋久萬吉 (1952) 『般若心經講話』師友会、8月
- 中嶋久萬吉 (1953) 『碧巖録. 上巻』青山書院
- 中嶋久萬吉 (1956) 『禪苑拾翠』明德出版社、1月
- 中嶋久萬吉 (1956) 「精神的支柱の確立-世界仏心連盟の発足に当たりて-」『Nippon 青年』第4巻第3号、3月号、2-5頁
- 中島久萬吉 (1956) 「正法眼蔵に参究して」『大法輪』23巻7号、7月号, p.72-75
- 中島久萬吉 (1956) 『碧巖録と道元禪』世界仏心連盟, 11月
- 中嶋久萬吉ほか (1957) 「特集: 国際親善の構想をめぐって-多摩至道会について」その他『Nippon 青年』、第5巻第8号、11月号
- 中島久萬吉 (1959) 「新春清語」『中学校』65・66号, 1月, p.2-5
- 中嶋久萬吉・鮎川義介ほか (1959) 「中嶋・鮎川両雄対談—青年を語る」『Nippon 青年』第7巻第3号、p.4-5
- 中嶋精一ほか (1987) 『回想』私家版
- 中嶋信光 (2005) 『評伝 中嶋久萬吉』私家版
- 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会 (1972) 『日本工業倶楽部五十年史』
- 日本青年連盟 (1954) 「碧巖録出版記念会の記」『にっぽん青年』第2巻第1号
- 日本貿易会 50年史編纂委員会編 (1998) 『日本貿易会 50年史』日本貿易会
- 都新聞社経済部編 (1928) 『倶楽部めぐり 附・財界犬と猿』都新聞社
- 山下静一 (1992) 『戦後経営者の群像—私の「経済同友会」史』日本経済新聞社
- 由井常彦 (2006) 「財界人と日本的経営の理念—日本工業倶楽部のリーダーにみる経営一  
観の進化—」『経営論集』第16巻第1号
- 横澤清子 (2006) 『自由民権家中島信行と岸田俊子-自由への闘い』明石書店

## 新聞記事

- 東京朝日新聞「帝人公判あと二日-お歴々・動か静か-胸中に何を描く? - “ただ明鏡” 水は  
嫌だと中島元商相」1935年6月20日 (朝日新聞は朝と略)
- 東京朝日新聞「帝人判決-未曾有の緊張-喜びの巨頭-中島元商相談」1937年12月17日
- 東京朝日新聞「中島男を迎へて」1938年2月13日
- 東京朝日新聞「中島男令息お目出度」1939年5月17日
- 読売新聞「財界中堅層“経済同人会”結成 政策確立に積極協力」1940年12月21日
- 読売新聞「新体制と財政問題も俎上 経済同人会検討」1940年12月27日

表5-4 日本青年連盟などにおける中島久万吉の活動年表

年・年齢	日付	場所	事項・典拠資料
1949(昭和24)年	9月	日本工業倶楽部	師友会の設立発起会、中嶋久万吉、木村尚一ら、小林正雄が管掌。事務所を神田淡路町に。機関誌『師友』が10月1日創刊。35年間で407号に。『安岡』
1951(昭和25)年	12月	丸の内常磐家	安岡「先生を囲む会」。中野金次郎、中嶋久万吉など政財界文化人多数出席。共産主義思想過激化に対して、政治家の責任なりと議論百出。『安岡』
1952(昭和27)	6月頃	日本貿易会	熊谷辰治郎が安岡正篤を通じて中嶋久万吉(翌年4月25日に日本貿易会会長を引退)を初訪問。
中島79歳	7月31日	官邸	吉田首相は改造人事の意見交換のため、30日に中嶋久万吉、小林中ほかを官邸に招いた。『読売』7/31
	11月1日	日本工業倶楽部	師友創立三周年記念大会 『安岡』
	11月11日	日本工業倶楽部	明治天皇御生誕百年記念国民大会、中嶋が委員長、安岡参列。日本青年連盟の企画 『安岡』
1953(昭和28)年	1月9日		日本青年連盟の発足。趣意書、規約、役員(会長1名、顧問11名、常任理事2名、理事6名、参与8名)の決定。
中島80歳	1月23日	日本工業倶楽部	理事会主催、中嶋会長以下中央理事出席、機関誌を「にっぽん青年」に決定。
	2月19日		国際電電会社の会長に中嶋久万吉氏内定。社長に洪沢敬三。『読売』2/19
	2月20日	日本工業倶楽部	牛山栄治に「教育にのぞむもの」を前後4時間半語る。『中学校』1953年3月号
	3月8日	新潟県へ	中嶋会長ほか役員、新潟県下の青年団幹部協議会に出席のため出発
	3月23日		日本発の老人診療所(ライフ・エクステンション・クラブ)が銀座に誕生へ。中嶋が名誉会長。『読売』3/23
	3月25日	東京会館	午後1時から、青年と政治を語る座談会、中嶋会長ほか10名。
	4月21日	日本工業倶楽部	碧巖録講義開講(毎月第一、第三火曜日、午後四時から六時)
	5月4日	山形県、秋田県へ	中嶋会長、栗原、熊谷両常任理事21時半上野発、山形、秋田の青年団協議会に出发
	5月6日	山形県	庄内二市三郡教育委員会理事懇談、青年団幹部協議会東北農家研究所(理事菅原平治)視察
	5月7日	山形県	松が丘開墾場視察、中嶋会長講演会、酒井家訪問、庄内学の懇談、輸出関係事業視察、市及商工会議所主催の懇談会
	5月8日	秋田県本荘町協議会	秋田県本荘町に向う、秋田県青年団幹部協議会、「青年と語る」講演会
	5月17日	大阪府、中之島公会堂	青年団幹部協議会開催、中嶋会長、栗原熊谷常任理事出席。
	5月18日	京都東本願寺白書院	青年団幹部協議会開催、中嶋会長、栗原熊谷常任理事出席。思想の場、大学・宗教関係者が出席。協議会終了後、前田青年の生家を訪問[熊谷(1960)]。

	5月24日	伊豆下田	黒船祭の第2日目、開国記念碑除幕式と記念式典（日本開国百年記念事業中央委員会、会長中島久万吉）『読売』1/24
	6月2日	日本工業倶楽部	竹潭碧巖例会
	6月10日		青年指導の諸問題につき座談会を開く。青木誠四郎・下村湖人・駒田錦一氏、中島会長・木村参与・熊谷栗原両常任理事
	6月19日		明治学院大学名誉学長を受諾へ『大川周明関係文書』
	6月29日	読売ホール	読売宗教講座で、中島（元商工大臣）「正法眼蔵の話」の講演。『読売』6/28
	7月	高尾山	中島、牛山らが仏舎利奉安塔建立地の前で写真撮影。『中学校』1955年2月号
	7月8日	岩手県、青森県へ	中島会長、熊谷栗原両常任理事、岩手、青森県青年団協議会へむけ出発
	8月		財団法人日本外政学会の再出発、中島が会長に。理事会に毎回出席。
	8月9日		中島会長を囲み、山下氏、熊谷、栗原両常任理事、滋賀県青年団協議会の件、打ち合わせ
	9月10日	新潟県へ	中島会長、熊谷栗原両常任理事、新潟県における協議会へ出席のため離京。
	9月13日	新潟県長岡市互尊社	「新しい精神文明の建設と日本青年」の題で講演。
	9月28日	滋賀県へ	中島会長、熊谷栗原両常任理事、滋賀県青年団幹部協議会へ向け離京。
		滋賀県近江八幡市近江兄弟社	事業の視察。
		京都、一燈園	一泊し、事業に視察、西田天香氏らと意見交換。
	10月17日		中島会長著、「新しい精神文明の建設と日本青年」印刷完了
	10月27日	日本工業倶楽部	午前11時から在京有志の懇談会：中島会長、田子一民、丸山鶴吉、香坂昌康、細野軍治、石川彌八郎、吉岡弥生、井上秀子、栗原美能留、熊谷辰治郎の各顧問理事その他が参集し、青年団の今後のあり方、日本青年連盟の発展方策について懇談した。戦後の青年の思想問題などとりあげられて、論議された。
	11月11日	千葉県館山市 館山市教育委員会主催	中島会長、栗原、熊谷両常任理事は千葉県館山市における安房郡協議会に出席。館山市青年団振興協議会、40数名参集、中島会長の「祖国再建の道」講演ほか、その晩に商工会議所より経済問題の座談会に出席のご指導賜りたいとの要望、晩10時まで懇談、多大の感銘与えた。
	11月14日	山形県へ	中島会長、両常任理事、鶴岡市における庄内松柏会に出席。
	11月29日	西多摩郡氷川町 思源寮	都下西多摩郡青年問題協議会（石川彌八郎、大野惣太郎、中村八郎右衛門らが発起人）に会長、香坂昌康顧問両常任理事出席して充実した振興懇談会。池田幸三の提案で西多摩郡盟友会結成に中島が涙、「父信行が神奈川県令で多摩に親しみあり。登山が好きで40年前から氷川に、4、50回来ている。」ドイツ復興について講演。
	12月15日		京都大卒の前田典夫氏から「中島先生の世界史の完成を期待す」の手紙
	12月16日	日本工業倶楽部	「碧巖録出版記念会」：中村元督司会、小倉正恒、河合良成、安岡正篤、朝比奈宗源らが

			お祝いの言葉、百余名参加。
1954(昭和29)年	1月8日	西多摩郡西多摩村	連盟主催の農村青年長期講習会、西多摩郡西多摩村青年学級の開所式、中島会長「最近の世界情勢について」講演
中島 81 歳	1月8日	山形県松岡、東北農家研究所・含翠学院	連盟主催、農村青年長期講習会（青年 50 名、3 ヶ月）開会式挙行、中島会長の告辞（激励文）が読まれる。
	1月12日	日本工業倶楽部	竹潭碧巖会開筵
	1月13日	高知県へ	中島会長、両常任理事、高知県における青年の日の青年大会並に幹部懇談会に出席のため離京
		高知市など	高知市の成年式に三千余、佐川町、窪川町では二百名余が参加。
	1月21日	新宿区西小山中学校	新宿区立中学校研究発表会に、中嶋会長、両常任理事出席。「新しい精神文明の建設と教育者」の題で講演。
	2月23日	日本工業倶楽部	アメリカ帰りの駐米大使、新木栄吉と中島の対談「対談 議会に祈る心、あめりか土産話」（健康法など）
	3月4日	山形県へ	中島会長、熊谷常任理事、山形県講習会出席のため離京。
	3月30日		ハンガリー共和国の初代首相フェレンツ・ナージー博士と第二次世界大戦中にロンドン・ポーランド亡命政権の内閣官房長官のジェルジー・J・レルスキー博士が日本を訪問へ。この2人は日本外政学会（会長中島久万吉）など主催で、2か月滞在予定。『読売』3/30
	4月6日	都内	元ハンガリー首相のフェレンツ・ナージー博士一行の歓迎パーティに中島会長、熊谷・栗原両理事出席
	5月1日号		ビキニ島水爆実験で第五福龍丸の被爆に関して、中島会長の「死の灰の恐怖の前に」が掲載。
	5月1日号		中島会長パンフレットの広告、「新しい精神文明の建設と日本青年」「日本国民が世界に学ぶべきもの」「文明国家の直面する教育の欠陥」「最近の世界情勢展望」「世界政治と世界政府」の5点。
	5月4日	宮城県へ	中島会長、栗原・熊谷両常任理事、宮城県協議会及び東北方面における欧州問題講演会のため離京。
	6月1日号		ビキニ島水爆実験に関連して、中嶋会長「世界政府の建設」が掲載。（原子力の秘密が暴かれた、世界政府によって新しい精神文明へ）
	7月1日号		中島会長、「碧巖録」（上下）、中島会長のパンフレット5点の広告
	7月8日	新潟県長岡市へ	中島会長、栗原・熊谷両常任理事、新潟県長岡市盟友会に出席のため離京。
	7月15日	高尾山へ	中島会長、栗原・熊谷両常任理事、都下浅川町高尾山薬王院における第一回青年指導者中央講習会に出席のため出発。
	7月16～18日	高尾山	都下高尾山薬王院にて第1回青年指導者中央講習会開催、二泊三日、中島会長「日本の世界的使命」の講演、安岡正篤の講演など。

	7月23日	連盟（中央区京橋）	世界友の会理事長木下乙市氏来所。
	7月24日	日本工業倶楽部	丸の内工業クラブにてPL教団青年部より世界友の会を通じスイスへの桜の種子贈呈式が行われ、熊谷常任理事が出席。
	8月3日	世田谷区	中島会長、栗原・熊谷両常任理事、世田谷区青協主催の夏季講習会に出席講演した。
	8月7日（予定）	護国寺月光殿	夏季講習会（4日間）開始、会長中島先生、開会の挨拶と「世界経済の話」（午後1時-2時）、安岡正篤らが講師。
	8月8日（予定）	護国寺月光殿	夕食後の研究会（中央地方質疑研究懇談会）の司会に中島先生。
	8月8日		師友会の研究協議会で熊谷常任理事青年運動につき講演。
	8月10日	岐阜県へ	中島会長、栗原・熊谷両常任理事、木村参与、岐阜県郡上郡青年講習会に出席のため離京。
		岐阜県郡上郡八幡町	指導者講習会で、中島らの講演あり。
	8月23日	都内	中島、熊谷、一燈園東京大会に出席講演。
	9月1日号	一橋講堂	財団法人日本外政学会主催の現代政治経済講座の案内（一橋大学教授赤松要、中山伊知郎ら講師12名、10月25日から30日午後6時から9時まで、千代田区神田一橋講堂にて）
	9月4日	焼津市東小学校	午後6時から、「中嶋会長を囲む座談会」（ビキニの死の灰で注目を集めた焼津。かつて海洋青年館（漁業青年道場）の建設で熊谷が昭和8年頃に支援した。座談会の参加者は連盟から熊谷・栗原両常任理事と地元の青年団員、県・市の職員、郷土史家など。中島は英文パンフレット「世界政府の建設」を作成。）
	9月6日		中島は安藤国務大臣（ビキニ問題の主務）と面会し、焼津の訴えを伝え、被害者に対する援助を速やかに実現するよう要望。大臣も了承。
	9月19日	高尾山	震災記念堂より高尾山薬王院への仏舎利移靈祭に中島会長、熊谷参列
	10月13日		中嶋会長、NHK「朝の訪問」の時間に全国放送。
	10月13日（予定）	鳥取市扶桑相互銀行会議室	鳥取県鳥取市 青年指導者研究協議会で、中島会長、熊谷・栗原常任理事、菅原理事らが講演予定。中島の講演「人類の平和と世界政府の建設」。
	10月14日（予定）	鳥取県松江市など	松江市で鳥根県青年運動懇談会、優良青年団の簸川郡脾原村青年団、その他を視察予定。
	10月23日		細野軍治（日本外政学会理事）理事が視察のため羽田より空路アメリカへ向かった。
	10月24日	鳥取県・島根県へ	中島会長（脚部の傷害が快方に向かい）、熊谷・栗原両常任理事、菅原理事は鳥取県、島根県における指導者講習会開催のため出発。
	10月25日	大坂	鳥取への途次、大阪にて一泊京都、大阪の盟友らと会談。
	11月（予定）	山形県松岡、東北農家研究所含翠学院	農閑期を利用して、庄内地区の各指導者を会して、中島会長「世界政府建設講演会」の予定。

	11月16日		中嶋会長、熊谷常任理事は秋田・山形県の指導者協議会出席のため離京。
	11月19日	秋田県県庁	中嶋「この世界を何と見る」の講演。『中学校』1955年2月号
	11月24日	高尾山	高尾山仏舎利塔にセイロン公使を招待。中嶋会長、熊谷常任理事及び木下世界友の会理事長出席。
	12月7日	一橋講堂	大学演劇連盟主催の大学演劇祭が一橋講堂で行われ連盟より出席した。
	12月17日		米国サンフランシスコ在住のブレイトン・ウィルバー氏から同日づけの手紙が中嶋にあり、中嶋が返信（仏舎利塔の建設に合わせて、仏教青年会を結成する。仏舎利塔の近くに青年のための会合所、宿泊所、図書館を持ちたい。）。
	12月28日		中嶋会長、日本短波放送にて全国に放送。
			(11・12月号未収)
1955(昭和30)年	1月18日	東京都世田谷区	世田谷区青年協議会主催の青年講座で中嶋が「世界と日本」につき講演
中嶋82歳	3月12日		中嶋会長ほか、宮城県・山形県・新潟県における青年指導者講習会に出席のため離京。
	4月7日	谷中、本光寺	4日、安岡盛治81歳で逝去。7日、本葬、告別式。師友協会の会長として、中嶋久万吉が弔辞を献ず。『安岡』
	5月	東京都世田谷区	春季青年講座に、中嶋会長、熊谷常任理事出席、それぞれ講演した。
	6月1日号		中嶋会長「青年に与える言葉」掲載（行為を伴わない思想は無意味である）。
	7月2日	文化放送	中嶋会長、文化放送会長に決定した。
	7月9日	埼玉県秩父郡長瀬町	埼玉県連合青年団主催青年指導者講習会、秩父長瀬養浩亭に開催。中嶋会長、熊谷常任理事、吉田昇（お茶お水女子大助教授）出席講演。中嶋は午後2時から地方における「村落文化のあり方」を講演。参加者は県下の青年団幹部50名。
	7月10日	埼玉県秩父郡長瀬町	前日の晩から、この日午前まで3人の講師を囲んでの座談会。
	7月22日	連盟	世界友の会理事長木下乙市氏来訪。デンマーク研究者平林広人氏来訪。
	8月号		中嶋の「さらに新しい出発の日…敗戦後十年、八月十五日を迎う…」が掲載（敗戦が第3の革命、原子時代の開幕、社会道義は崩れた。）。
	8月9日	文化放送	文化放送の労組によって中嶋会長、木村尚一理事の退陣を決める。事態の收拾は渋沢敬三顧問に任せることに。『読売』8/9
	9月29日	川越農業高等学校	埼玉県中学校長会主催の講演会、川越農業高等学校に開催、中嶋会長、熊谷常任理事、牛山理事、加藤（日出男）盟友等出席、中嶋会長は激動する世界と日本の立場、熊谷常任理事は戦後の青年動向について講演した。
	10月号		中嶋の「批判に終るな…「暴力教室を中心として」…」が掲載（映画「暴力教室」に関連して、）。
	11月5日	日本工業倶楽部	全国師友協会創立6周年記念大会
	11月18日		世界友の会主催（会長中嶋久万吉）のアジア親善の会に熊谷常任理事出席。

	11月25日	宮城県水沢市へ	東北地区勤労青年-研究業績発表協議会の主宰のため、中嶋会長、熊谷常任理事、今野編集委員上野駅出発、午後6時55分に水沢駅着。市長らから歓迎受ける。
	11月26日	岩手県水沢市	岩手県水沢市の公民館にて協議会、午後1時半から開式。東北地方七県（新潟も）から代表者参加。700名参加。中嶋会長の挨拶は村落文明について。東大農学部川田信一郎博士の講演。各県代表の研究発表会。午後9時まで。
	11月28日		宮城県古川市大崎地区4日青年クラブ指導者協議会にて中嶋会長（世界情勢と日本の立場）、熊谷常任理事がそれぞれ講演。午後5時閉会。なお同日村婦人会総会にて中嶋会長講演。
	11月29日		宮城県栗原郡若柳町農協青年部において中嶋会長、熊谷常任理事講演。
	12月号		中嶋の「因習弊風の刷新 - 東北の一青年からの通信によせる -」が掲載（東北地方の「よばい」の蛮風について）。
	12月号		中嶋会長のパンフレットの広告（7点、既存の5点に「斯の世界を何と見る」「斯の社会を何と見る」が追加）
	12月8日		中嶋会長と共に仏舎利奉安会例会に熊谷常任理事、鷲尾盟友出席。
	12月14日	連盟	八木師友会事務局長訪問。
	12月23日		社団法人世界友の会発起人会、工業クラブに開催。中嶋会長、熊谷常任理事出席。
1956(昭和31)年	1月号		中嶋の「新春に思う」が掲載（精神的基盤なくして日本の真の復興はあり得ない）。
中島83歳	1月18-19日		中嶋会長、NHKを通じて「若き日の思い出」2日間、全国放送。
	1月26日		社団法人世界友の会理事会の出席。
	1月29日		ライフ・エクステンション・クラブ付属の永寿病院が2月11日に開院へ。中島ら財界人たちが53年夏にクラブを設立。『読売』1/29
	2月号	高尾山仏舎利塔	白亜の高い塔が建立。仏舎利塔の建設工事を進め、近く完成へ。中島先生は世界仏心連盟を組織。『中学校』1956年2月号
	2月3日		中嶋会長は宮本正尊博士、佐々木泰翁、増谷文雄、山田霊林、那須正隆、増永霊鳳の諸氏と共に、木村尚一氏、熊谷常任理事を招き、世界仏心連盟の結成につき懇談した。
	2月27日		中嶋会長、世界仏心連盟について宮本正尊、佐々木泰翁その他と懇談。
	3月5日	世田谷区経堂	中嶋会長、東京都世田谷区経堂青年会で、青年時代の回想につき講演。
	3月6日	山形へ	農村青年幹部養成講習会の講義のため、山形県東田川郡羽黒町東北農家研究所に、中嶋会長、熊谷常任理事その他出張。
	3月8日	山形県庁	中嶋会長、熊谷常任理事、山形県庁に安孫子知事を訪問し、青年学級、開発青年隊のことどもにつきそれぞれの担当者より説明を聞いた。
	3月18日	岡山	岡山県下、児島郡琴浦町並に岡山市の盟友の招聘をうけ、中嶋会長、木村参与、熊谷常任理事、岡山に出張。各地で講演会並に座談会に臨んだ。
	4月9日	日本工業倶楽部	正午より工業クラブで世界仏心連盟の会を開く。出席者七十、熊谷常任理事司会、中嶋久萬吉氏の所見発表の後、宮本正尊博士、永野護氏、安岡正篤氏の所見の発表があり、盛会

			であった。
	4月11日		秋田盟友鷺井よし子さん中嶋会長訪問。
	4月16日	大坂へ	中嶋会長、大阪へ。
	5月12日	日本工業倶楽部	世界仏心連盟の性格事業等につき、中嶋会長を中心とし、小野清一郎博士、宮本正尊博士 その他と懇談した。
	5月22日		中嶋会長ルイス氏と工業倶楽部で懇談した。
	6月28日	日本工業倶楽部	世界友の会理事会、中嶋会長、熊谷常任理事出席。
	7月17日		熊谷、牛山両理事、中嶋会長と懇談した。
	8月22日		中嶋会長、熊谷常任理事、佐々木参与懇談。
	9月13日		世界友の会主催の懇談会あり、中嶋会長、熊谷常任理事、木下理事と懇談した。
	11月7日	日本工業倶楽部	全国師友協会設立七周年記念大会。
	11月18日	高尾山	仏舎利塔の落慶奉遷式の挙。木下(1973)。仏舎利の落慶奉遷式が冬にあり(中嶋は「参 加してすっかり風邪をひき、入院した。腰に力が入らなくなり、弱りました。」)『中学 校』1959年1月号
	12月18日	日本工業倶楽部	中嶋会長、香坂顧問、熊谷常任理事、工業倶楽部で懇談。
1957(昭和32)年	2月7日		宮本正尊博士、増永壺鳳博士、山田壺林の諸氏と中嶋会長、熊谷常任理事、木村参与など、 青年と宗教の問題等について協議した。
中嶋84歳	3月号		中嶋の「人間生活の生き詰りと新意義」が掲載(18頁)。
	3月27日		東京都下飛田給にある生長の家、錬成道場で中嶋会長、青年問題につき講演。
	6月5日	日本工業倶楽部	世界友の会総会、工業クラブに開催。中嶋会長、熊谷常任理事出席。
	6月17日	日本工業倶楽部	小野清一郎博士、中嶋会長をかこみ日本工業クラブで、東南アジア地区の仏教、青年の宗 教問題等に就て懇談
	7月9日		木村参与、熊谷常任理事、向島の新店に中嶋会長を訪問。
	8月号		中嶋の「いたたましい出来事に思う一教える人の態度」が掲載(体罰で中学生が死亡し たことに関して)。
	8月20日	日本工業倶楽部	中嶋会長、河合良成氏、熊谷常任理事、木下世界友の会常務理事その他、工業クラブで懇 談。
	8月22日		世界友の会桜の種子贈呈式あり、中嶋会長、熊谷常任理事出席。
	10月1日		中嶋会長、永寿病院に入院し、健康診断を受けられる。
	10月2日	日本工業倶楽部	世界友の会理事会、日本工業クラブに開催。
	10月14日		三島市の新しい発展構想について、三島市長の上京を促し、浦島明治製菓社長、中嶋会長、 熊谷木下両理事など中心に、種々懇談。
	10月27日	秋多町菅生、蔵守 院至道庵	東京盟友協議会(午前10時～午後3時すぎ)：世界友の会がこの地に「世界友の会フィ ールドセンター」(農園とゴルフ場、東南アジアその他世界の青少年と指導者たちのユ-



			スセンター、青年修養道場などを構想)を設置、その具体的工事が進捗中。その構想の中に、青少年を通じての国際文化交流事業が実現予定。その構想について石川彌八郎理事(元西多摩郡連青団長)が議長となって、議事を進める。中嶋は「多摩至道会について」と題して1時間講演し、協議会に入る。
	11月2日	日本工業倶楽部	仏舍利奉安会の例会、工業クラブに開催。中嶋会長、熊谷常任理事出席。
	11月5-10日		世界友の会主催、外務省、文部省、毎日新聞社、日本人形協会後援の『世界人形展』が上野松坂屋デパートにて開催。
1958(昭和33)年	1月号		中嶋の「二つの青年像」が掲載(明治精神は臥薪嘗胆、上げ潮の時代で希望をもった発展期。今こそ臥薪嘗胆の精神を)。
中嶋85歳	1月4日		葉山の中嶋会長を訪問。
	1月30日	日本工業倶楽部	中嶋会長、熊谷常任理事、石川彌八郎理事、工業クラブで三多摩地区の文化運動につき協議。
	2月15日		大川周明博士の告別式。中嶋、安岡ら参列。
	2月26日	虎の門、共済会館	全国師友協会発行の「師と友」発行100号記念会、虎の門、共済会館で開催、中嶋会長出席。
	3月3日		浦島喜太郎氏(世界友の会理事)アメリカに出発。その送別会に中嶋会長、熊谷常任理事出席。
	3月23日	西多摩郡吉野村	第5回東京盟友の会を開催。中嶋会長、熊谷常任理事の講演並びに出席者の活発な意見の交換があった。
	4月3日	連盟	中嶋先生来訪。
	5月号		中嶋「国を愛する一票」が掲載(4月17日、政治がわれわれの生活を左右する、良い政治家を選んで欲しい)。
	5月24日		世界友の会理事会に熊谷常任理事出席。
	6月4日	連盟	AA会議に出席、更に欧州視察を終えて帰った、牛山栄治理事を迎え、中嶋会長、熊谷常任理事視察談さく。
	6月12日	日本工業倶楽部	工業クラブにて、中嶋会長の御尊父中嶋信行氏(初代衆議院議長)の書幅を観賞。
	7月1日		中嶋会長と共に、前島康彦氏蒐集の江戸に関する古文書の解説をきく。
	7月3日		名利広園寺(八王子横山)に青年修養道場建設について懇談。
	7月16日		神奈川県葉山に、中嶋会長を訪問。
	8月号		中嶋「人類最大の課題」掲載(人生の意義、神を見つける生活を築くこと、それが20世紀後半の人類最大の課題)。
	8月5日	日本工業倶楽部	工業クラブで世界仏心連盟につき懇談。
	8月6日		中嶋会長、木下世界友の会理事、熊谷常任理事国際親善のつき懇談。
	8月7日		工業クラブで、広園寺再建問題青年修養道場建設につき打合せをする。出席者、小林吉之

			助（前八王子市長）、丸山今朝兵（市議会副議長）、大石俊一（禅東院東福寺住職）、清水、稲村、前島康彦（造園史家）の諸氏。
	9月3日		雑誌『大法輪』編集部員と中嶋会長、熊谷常任理事と対談
	9月11日		中嶋会長、熊谷常任理事、八王子市広園寺にゆき、山門再建並に、青年修養道場問題につき懇談、盟友野口八王子市長はじめ有力者多数参加。
	9月13日	日本工業倶楽部	工業クラブで、中嶋会長を中心に青年修養道場問題につき打合わせを行った。
	9月28日		中嶋会長と共に木村尚一参与（元大蔵省専売局参事）を練馬のお宅に見舞った。
	10月30日		永寿病院に静養中に中嶋会長を見舞った。
	11月14日	向島百花園	中嶋会長のご招待で、向島百花園で懇談。晩秋の秋色を探る。
	11月17日	日本工業倶楽部	世界友の会十年以上関係者慰労の会。工業クラブにて開催。
	11月22日	立川国際カントリークラブ	国際カントリークラブ、ゴルフ場（東京都西多摩郡秋多町）開場式に中嶋会長と共に出席。村木市長はじめ多数の人々に会った。
	12月2日	日本工業倶楽部	午後2時から世界友の会（会長中島久万吉）が“母と子の平和の歌”レコードを各国大使に贈る贈呈式。『読売』12/2
	12月8日		世界友の会（中島久万吉会長）が友情育てる種子センター（1万坪、秋多町草花2390）を本格的に来春に造園することが決定。『読売』12/8
1959(昭和34)年	1月号		中島の「私の植林事業一年頭のよろこび」（活躍する若者3名を紹介）掲載。
中島86歳	1月4日	葉山	牛山と熊谷常務理事が葉山の中島家（鈴木三郎助の別邸）を訪問。中島の妻八千子（貞明皇后のご学友）も同席。『中学校』1959年1月号
	1月16日	日本工業倶楽部	工業クラブで懇談会開催。
	1月29日	日本工業倶楽部	川村清太君、再度上京、工業クラブへ行く。
	1月30日	日本工業倶楽部	午前11時過ぎから中政連の鮎川義介氏と中嶋会長との対談。次男金次郎氏も同道。
	2月3日		宗広力三君（郡上八幡で郡上紬を復興させ、後に人間国宝）が中嶋会長を訪問。
	2月4日	日本工業倶楽部	午後2時半から、盟友の川村清太君（23歳）の送別会（東南アジア視察青年代表団）。中嶋会長、安岡正篤顧問、熊谷常任理事、牛山理事、木村参与その他出席。
	3月12日		東南アジア使節団片岡团长は川村君と共に中嶋会長を訪ね、具に視察の報告をなした。
	3月14日		中嶋会長、東南アジア視察の青年数氏を会食に招き、労をねぎらった。
	3月19日		興立産業株式会社社長と共に中嶋会長を訪う。
	6月3日	立川国際カントリークラブ	立川国際カントリークラブに、ゴルフ場視察に行く。
	6月21日		葉山に中嶋会長を訪ね、午後1時に正力松太郎氏を鎌倉にお訪ねして用談した。
	7月1日		中嶋会長と懇談。
	7月19日		中嶋会長、夕刻東京都内をドライブせられ、午後八時立寄られて、いろいろと清談せられた。

	7月29日	立川国際カントリークラ	中嶋会長と共に、立川国際カントリークラブに行く。
	8月9日	立川国際カントリークラ	立川国際カントリークラブの開場式。高松宮殿下も御臨場とのことで、中嶋会長も出席、西多摩に行く。
	8月23日		中嶋会長、仙台の盟友鈴木君などともに、上目黒のふるさとで懇談。
	8月24日	日本工業倶楽部	工業クラブで中嶋会長、木村尚一参与と懇談。
	9月3日		向島に中嶋会長を訪ね懇談した。
	9月16日	日本工業倶楽部	松田文部大臣を囲む会、中嶋会長発起で工業クラブに開催。主として、最近の文教政策について懇談した。出席者は、渡辺鉄蔵博士、安岡正篤、両角全国高等学校長会長、牛山全国中学校長会長、野全国小学校長会長、木下乙市、熊谷辰治郎、鈴木東京都小学校長会会長、城西高校校長など。
	10月9日		永寿病院に中嶋会長を見舞った。頗る元気そうであられた。
	10月23日		中嶋会長を訪う。
	11月7日	日本工業倶楽部	全国師友大会、工業クラブに開く、安岡正篤氏の講演をきく。
	11月10日		中嶋会長訪問
	11月30日		味の素の鈴木和夫氏（久万吉の三男）を訪ねて、中嶋会長のその後のご様子をきく。
1960(昭和35)年	4月25日	葉山	午前8時15分、老衰のため葉山町堀の内160の自宅で死亡、86歳。『読売』4/25
中嶋87歳	4月28日	築地本願寺	1時から2時に葬儀、2時から3時まで告別式。葬儀委員長は正力松太郎。安岡が弔辞を献ず。『読売』4/28

資料：日本青年連盟の機関誌『Nippon 青年』各号の「にっぽんせいねん抄」、掲載記事より。『Nippon 青年』の発行人は熊谷辰治郎であり、熊谷を主語として「にっぽんせいねん抄」の人物の行動記録が残されている。中島、中嶋の表記などもそのまま掲載した。日付の号名は『Nippon 青年』の号名を意味する。その他、『読売』は『読売新聞』の略。『中学校』は全日本中学校長会の機関誌。『大川周明関係文書』（大川周明関係文書刊行会、1998年）。『安岡』は『安岡正篤先生年譜』（1997年）。中嶋久万吉『禅苑拾翠』明徳出版社、1956年1月。熊谷（1960）は熊谷辰治郎「ありし思い出を語る」（「故中嶋久萬吉先生追悼」中嶋久萬吉追悼号『Nippon 青年』第8巻第3号所収）木下乙市編『世界に咲く日本学童の桜：世界友の会運動二十五年史』社団法人世界友の会、1973年。

## 第6章 社会貢献活動

### 1. はじめに

第5章においては、仏典や座禅を通じて財界の精神的指導者となり、また晩年は仏教興隆の文化事業などに献身的に働いた側面を浮き彫りにした。本章では、戦後に財界の「世話役」として、仏教とは直接関係のない日本貿易会や各種の社会貢献活動に多忙であった側面について論じる。

日本貿易会を引退後は、高齢でありながら日本青年連盟の会長を引き受けた。これは青年層への精神的指導の実践であり、深い学識と精神性をもった教育者としての実像が明らかになる。多くの講演活動を行い、その講義録が残っている。彼の最晩年の講演内容にもふれながら、人生の最後はどうであったのかを明らかにする。

### 2. 戦後経済界への奉仕

#### 1) GHQ との折衝、日本貿易会会長

日本工業倶楽部の会館は連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の接收を逃れることに成功し、戦後の経済復興・民間外交の舞台として重要な役割を果たし、経団連などの主要な経済団体が誕生する根拠地となった。英語の流暢な財界人たちがGHQとの折衝で大活躍することになったが、その中の一人に中島もいた。

中島は占領下の中で、幾度も総司令部や米国本国に意見書をおくった<sup>475</sup>。1950年の書簡では日本の歴史の視点から上からの民主化が困難なことを解説した。1955年の書簡ではドッジに高速道路の建設の計画や外交についての意見を伝えた。上記の手紙も含めて、国会図書館憲政資料室ではアメリカに送られた4通の中島の手紙が保存されている。

専務理事の中島は接收を逃れた工業倶楽部が単なる社交倶楽部に過ぎないと言う趣旨の嘆願書をマッカーサーに出して激怒されたこともあったという。中島の言明は正直であったが、彼らは工業倶楽部が経済活動の重要な舞台であると知らされていたためであった<sup>476</sup>。

戦前に活躍した財界人・実業家の大半がページされる中で、中島は追放処分を受けなかった大物の経済人であった。そのために「野中の一本杉」となって財界活動の表舞台での活躍のフィールドがまた戻ってきた。軍閥が去り、平和な時代へと大混乱の時代に中島の活動が待望された。そして毎日多忙な日々を送った。貿易会会長<sup>477</sup>その他で多忙な様子は以下のような記事から分かる。

---

<sup>475</sup> 橋本（1952）p.288

<sup>476</sup> 秋元（1968）p.108

<sup>477</sup> 中島が1941（昭和16）年1月から会長職を引受けていた日本貿易協会は、他の3つの貿易団体と大同団結して日本貿易会として発足し、1947（昭和22）年5月に中島がその初代会長となった。日本の経済政策の立案にあたり、英語の堪能な中島は会長として政府、GHQ、アメリカから来る高官に盛んに政策提言を行い、日本の経済復興に尽力した。

「・・・熱海桃山の Teppen から毎日三時間余りを汽車にゆられて東京に出てくる、銀座裏の日本貿易会につくと、そこにはもうお客さんが待ちくたびれている、お客さんはみな意見をききに來るのだ、テキパキと意見をのべる、その間に手紙を書く、外国の雑誌を読む、あれこれと構想もねる、七十五になる中島さんの日常生活はまことに忙しい、若い頃から勉強家で博覧強記の中島さんは、事にブツかると、すぐその対策が頭に浮かぶ、思い切ったことをズバズバいう・・・」<sup>478</sup>

ドレイパー使節団には中島は「十億ドル貸して下さい」と発言し、同席した一万田日銀総裁や石川日産協会長が思わず顔を合わせたという。

日本貿易会での細かい活躍について述べる余裕はないが、貿易会関連では 1951 年 2 月に JETRO（財団法人海外市場調査会）を設立させ、その名誉理事長となったことは大きな功績の一つであろう<sup>479</sup>。

戦後の困難な経済事情の中で日本貿易会会長の在任は、1947（昭和 22）年 5 月に会長を就任してから 6 年間にもおよんだ。1953 年 4 月には高齢（80 歳）をもって辞任し、二代目を稲垣平太郎<sup>480</sup>にバトンタッチした。

## 2) 川島織物への支援

戦後の経済混乱の中で、裏方から中島は工業倶楽部を本拠地として戦後復興に尽力したが、その好例として伝統工芸織物の有力な会社である川島織物へ支援があった。川島織物の社史の序文には川島会長から中島男爵への賛辞の言葉がある。やや長くなるが、当時の中島の活動や中島の人柄がよくわかる文面でもあるので全文を紹介しよう。

### 「 序 文

たしか終戦の翌年の春と記憶する。或る日私は次のような電報に接した。

「メンダ ンシタシ〇〇ヒオコシマツニホンコウギ ヨウクラブナカジ マクマキチ」

中島久万吉男爵、その名前は知っていたがご面識は得ていなかった。当時の工業倶楽部評議会議長、財界の大御所のお一人、そのお方から直々の招電である。どんな御用かと緊張して取るものも取り敢えず上京、東京駅前の今もその儘の工業倶楽部に馳せ参じた。

478 時事新報「人と人 中島と長崎 屋台骨のクサビ締め」1948.8.23

479 日本貿易会 50 年史編纂委員会編（1998）p.118-119

480 稲垣平太郎は、古河電工での中島の部下であった。ジーメンス社と古河の合弁事業である富士電機の設立の際に、中島が稲垣に基本方針を下したという。最終的な契約は稲垣と中川末吉が行った。中島は稲垣を財界世話役の人物であると見込んでいた（中嶋『産経』1950. 11.3）。中島の逝去に対して、日本貿易会長の稲垣は「高邁なる御人格と、秀徹せる御理念とにより、戦後の混乱したわが国貿易業界にその向うべきところを示され、今日みるわが貿易発展に資するところ極めて大いなるものがあったこと」は感謝に堪えないと書いている。稲垣（1960）p.8 参照。

端正にして枯淡、高僧を思わせる男爵は、初対面の私を折柄お集まりの長崎惣之助氏、工藤昭四郎氏等数人の方々にお引合せ下さった。男爵は祖国復興にこよなく老の血を沸かさされ、その具体策を連日鳩首ご協議とのこと、たまたま川島のごことが討議に上り私の招致となったのである。

当時の私は明らかに云うと、果して日本は何うなるか、独立を通せるのか何うか、その見極めがつかず、長いものには巻かれろと占領米第八軍に頭を突っ込み、次第によってはその御用商人に成るのが生きる道とひそかに決心、懸命にその手蔓を模索していた。司令官ア中將にも気軽にご引見願えるリストに入れて貰っていた。

「私共は川島の伝統の技術を高く評価している。祖国日本の復興にそれが是非必要と思うから、川島さん頑張って下さい……。」

こう男爵は申されるのであった。川島の技術が祖国復興に今必要だと仰っしゃるのである。何んで応えずに居れよう。何で黙して居れよう。私は恐懼してそれに答えた。「力の限りを尽して頑張ります」と。この時ぐらい誠心まことというものの不思議な威力ちからを身に沁んで感じたことがない。男爵の祖国愛が奏でる言葉の響きが及ぼす力、それは男爵のご人格の力と相俟ってこの私を震い立たせたのだった。米軍一辺倒だった私は眼の前が啓けて明るくなった。

その後日譚には興味深いエピソードが沢山あるが省略する。男爵から賜った数々の有形無形のご厚誼は昭和三十五年<sup>481</sup>のご逝去まで連綿と続いた。想うて頭が下がる。

以来春秋二十有余年、いま川島織物の三十五年に亘る会社履歴が上梓されんとしている。私は波瀾多き会社の来し方を顧みて、故男爵とのご邂逅が大きく思い出され、その経緯を述べて序文とした次第である。

昭和 48 年 3 月 31 日

取締役会長 川島甚兵衛 』<sup>482</sup>

上記の文章からは中島が戦後の祖国復興に情熱をもっていたことや、中島が高僧のように、その人格からにじみでる誠実性に一経営者が心を打たれたことが分かる。1948（昭和 23）年の同社紫野工場の竣工式に中島は京都府知事らとともに招待された<sup>483</sup>。中島の川島織物への支援に実態については同社に記録は残されていない。中島の備忘録には川島織物の株式を保有していたことが分かる。

なお長崎惣之助は追放解除後には国鉄第三代総裁となった人、工藤昭四郎は復興金融公庫総裁などを勤めた人である。

### 3. 社会貢献活動

<sup>481</sup> 本文では二十五年とあるのは誤りで修正した。

<sup>482</sup> 川島織物（1973）i

<sup>483</sup> 同、p.42

日本貿易会会長の時期には、財界の顔役として色々な社会貢献活動をしたが、その中で主なものを年代順に列挙した。

#### a) 世界友の会会長・立川国際カントリー倶楽部

世界友の会は救援物資のお礼に国連ユニセフへ日本人形を贈ったことを契機として、「国連友の会」として1948年5月1日に設立された。同会は1956年には貿易界の約150の団体が参加して社団法人となった<sup>484</sup>。定款によれば、婦人青少年少女の国際親善協力と世界恒久平和を目的として目的とした団体である。「同会の世話役」となった中島の言葉と使えば、この会は「世界各国人が互いに国境を超越し、曾ての恩讐を忘れて、互いに握手し、お互いの心と心の接触によって世界平和に貢献しようというのだ。原子力兵器の発達に反比例して、むしろ精神的の団結によって、戦争を回避しようという運動である。」<sup>485</sup>

「世界友の会」と改称して再発足した際に、中島が木下から依頼を受けて会長の職を快諾したのは、1952（昭和27）年の夏頃であった<sup>486</sup>。

海外から贈呈された種子の育成のために樹木園と温室が必要で、合わせて健康増進のためにゴルフ場も建設しようとのことで、立川国際カントリー倶楽部が秋多町（のちの秋川市）に造成されることになった。その土地の選定に骨をおり、カントリー倶楽部創設の会長ともなったのが中島であった。カントリー倶楽部創設の実行委員長には斯波孝四郎が就任し、中島の高弟とされた河合良成、悟堂輝雄（日本鋼管専務）など多く有力な経営者たちが支援した<sup>487</sup>。

世界友の会の活動は国際親善のニュースとして以下のように読売新聞の記事となり、中島会長の名がよくメディアに出た。

同会の子供たちは、1956年3月28日には工業倶楽部にて13か国の大公使館にサクラとイチョウの種を贈った<sup>488</sup>。

同年12月3日には同会の第一回全国大会があり、全国の1万2000名の会員から各県の代表47名の「よい子と20人のお母さん」が参加した<sup>489</sup>。その行事として11か国の大公使館の家族を招いた世界友情婦人子供パーティーが日本青年館で開催された。子供たちが作った日本人形が贈呈された<sup>490</sup>。

1958年には「母と子の平和の歌」レコードが日本語盤と英語盤が世界五十四か国に贈ることが決められ、12月2日工業倶楽部にて各国大公使館代表14か国に贈呈された<sup>491</sup>。同

---

<sup>484</sup> 読売新聞 1962.1.5

<sup>485</sup> 中島（1957.3）p.2-3

<sup>486</sup> 木下（1973）p.102

<sup>487</sup> 同，p.153-157

<sup>488</sup> 読売新聞 1956.3.29

<sup>489</sup> 読売新聞 1956.12.2

<sup>490</sup> 読売新聞 1956.12.3

<sup>491</sup> 読売新聞 1958.12.2

年の年末には世界から贈られた種を育てるフィールド・センターの建設計画が明かされた<sup>492</sup>。フィールド・センターは立川国際カントリー倶楽部に併設して設立された。

同会の理事会に中島が熱心に参加したことは、本人の備忘録から伺えた。そして老骨に鞭打って、同会のために各地を回って講演して回った<sup>493</sup>。また古河時代の部下である茂野吉之助の長女の三緒子さん<sup>494</sup>が世界友の会の中の母の会(Mothers Club)の会長であり、よく顔を合わせたことを大変喜んでいた<sup>495</sup>。

#### **b) 株式会社国連社の設立<sup>496</sup>**

国連社は1949年12月に日本国際連合協会の協力団体として政府関係の広告を取り扱い、その利益をもって同協会を財政的に支援するため設立された民間会社である。全国主要新聞社などからの株式募集で設立された。日本国際連合協会は国際連合の知識を国内に普及しようとして、佐藤尚武<sup>497</sup>を会長として設立されたが、財政難で苦しんでいた。

貿易会会長であった中島は安部十二造（後に国連社会長、社長）に依頼され、直ちに賛同し、会社設立の発起人となった。1949年11月17日に国連協会講堂（東京丸の内）にて創立発起人総会が開催され、中島が議長となり、安部により趣旨説明があり、創立委員を選任した。中島は互選で創立委員長となった。佐藤は同社の設立について吉田茂首相に趣旨説明したところ、次官会議で政府の支援が早急に決まり、年内に同社は急遽設立されることになった。同社の創立総会の中島が議長のもと12月17日に開催され、定款（資本金五百万円）・役員などが決まった。中島は同社の相談役となり、創立当初の12月27日の役員会に出席し、貴重な提言をなした。

中島の備忘録からは「国連社役員会」に毎月参加したことがわかる。

#### **c) ライフ・エクステンション倶楽部と永寿病院**

1952年秋に倉内喜久雄医学博士が米国における老人医学の進歩ぶりを日本工業倶楽部・交詢社などで講演した。これをきっかけとして中島を中心とした財界と医学界の発起人によって1953年5月に社団法人ライフ・エクステンション倶楽部が設立された。これは老化の諸問題追求を目的とした団体であった。試験的に発起人らを会員制として顧問医10名が総合的な立会診断を行い、障害の早期発見と治療を行う「日本初の老人診療所」が誕生したことが報道された<sup>498</sup>。

3年後には同倶楽部付属の永寿病院が開院し、日本で初の間ドックも行われ、「生活習

---

<sup>492</sup> 読売新聞 1958.12.8

<sup>493</sup> 中島（1957.3）p.4

<sup>494</sup> 川崎秀二代議士（元厚生大臣）の妻

<sup>495</sup> 同 p.2-3

<sup>496</sup> 小野敏夫編（1966）p.3-39

<sup>497</sup> 佐藤尚武は外交官・政治家。外相の経歴があり、国連社設立時には参議院議長であった。

<sup>498</sup> 読売新聞 1953.3.23



慣病検診の草分け」の病院となった。この病院は現在でも東京都台東区の中核病院（“永寿総合病院”）として存在感を示している。

ライフ・エクステンション倶楽部の役員として、中島は名誉会長、会長は倉内、常任理事に中島精一、理事に菅礼之助、郷古潔、中村元督ら中島と親しい財界関係者そして多くの医学博士たち、そして監事には木村尚一らが就任した<sup>499</sup>。中島は永寿病院の理事会に毎月参加したことが、備忘録に記述されている。そして晩年にこの病院に入院したこともあった。

#### d) 黒船祭り、 開国記念百年祭記念事業中央委員会

黒船祭りは 1947 年に日本工業倶楽部が伊豆の下田市から支援を頼まれ、中島が中心となって日米の要人を集めて実施した。この行事は日米の民間外交の上で大きな貢献となった<sup>500</sup>。

さらに 1953 年にも黒船祭りが下田で開催された。この時は開国記念碑の除幕式が行われた。米国関係者の他、日本側では開国記念百年記念事業中央委員会会長の中島、日米協会会長小松隆らが出席した<sup>501</sup>。記念碑は吉田首相の字が刻まれているが、恐らく中島が依頼したであろう。

この年は「ペリル来日満百年」を祝して東京都でも賑やかな日米交歓行事が行われることが報道された<sup>502</sup>。その一行事として実際に「港めぐり」があった。

「港めぐり」は 1953 年の開港百年祭にちなみ作られた総踊りで、新橋演舞場にて『秋の東をどり番組』（11 月 1 日から 25 日上演）第一部三において上演された。会長の中島は、以下のように寄稿した。

「・・・港を鎖す時は戦争であります。港の開かれる時には平和があります。港々が栄えて、文化と物産の交流が活発に行われる時、世界はなごやかです。港々の繁栄を謳って、日本のため、世界のため、平和な親善を祈りましょう。」<sup>503</sup>

黒船祭りは現在でも下田市の名物として存続しているが、中島の貢献について全く知られていないのではないだろうか。備忘録からは 1950-51 年にも参加の予定が書き込まれていた。

#### e) 国際電信電話株式会社の設立

---

<sup>499</sup> ライフ・エクステンション倶楽部（1957）『高令医学』第 1 巻第 1 号、1957 年

<sup>500</sup> 日本工業倶楽部五十年史編纂委員会（1972）「黒船祭りの復活」p.492-495

<sup>501</sup> 読売新聞 1953.5.24。1953 年の第 15 回国会衆議院文部委員会において「日本開国記念百年記念事業費の国家補助」が審議された。陳情者は中島ほか 4 名であるが、中島、小松の他に、藤山愛一郎、石川一郎ら財界の大名が名を連ねた。他の 1 人は不明である。文部委員会議録第 11 号参照。

<sup>502</sup> 読売新聞 1953.1.24

<sup>503</sup> 中島久萬吉（1953.11）

1953年4月1日に国際電信電話株式会社が資本金33億円の民間会社として設立された。同社は吉田内閣のもと第13回国会の審議によって1952年8月7日に公布された国際電信電話株式会社法に基づき発足したものであった。

同法にもとづき1953年11月15日に第一回設立委員会<sup>504</sup>（委員長中島）が開催され、村田省三を委員長とする特別委員が定められた。特別委員により早急に定款・業務範囲などが定められた。1953年1月7日に中島が起草した設立趣意書が公表された<sup>505</sup>。2月には中島は同社の会長内定が顔写真入りで報道された<sup>506</sup>。社長は奇しくも渋沢敬三であり、経営陣には専門家のほか全国の主要商工会議所の会頭が加わった。

設立趣意書で中島は「我が国の国際電気通信事業の前途は、民族の復興及び対外通商の伸長と共に、なお洋々たるものがある」ことを強調し、事業の支援を訴えた<sup>507</sup>。

同社の源流にあたる日本無線電信株式会社は1925年に設立されたが、渋沢栄一が設立委員長、中島が設立副委員長<sup>508</sup>となり、財界人として多忙な中を実質的な委員長としてその発足に尽力した<sup>509</sup>。日本無線電信株式会社の発足時には、社長となるべき位置にあった。しかし内田嘉吉が社長となり、自らは取締役におさまった。

このように国際電々の事業に関与した経緯があり、貿易会会長の中島に吉田内閣から依頼されて、国際電々会社の設立委員長を引き受けたと思われる。

実質的な経営者ではないが、国際電々の創設やその前身の日本無線電信の創設にも財界人の中島が関与していたことは余り知られていない。

## f) 日本外政学会

終戦後の民主日本建設の大転換期にあたり、国際的な教育の振興と知識の普及のために1946年初めに教育文化財団設立の計画が閣議でも了承されたが、食糧不足のために頓挫した。同年8月にこの教育文化財団の計画を継承した日本外政学会が設立された。伊藤述史が理事長、細野軍治らが理事であった。同会は国際連合の研究にも関わったが、日本国際連合協会に統合された。この協会を支援するために国運社が設立されたことは先述の通りである。細野は日本国際連合協会、国運社の役員でもあった。

日本外政学会は財政基盤を強化するため財団法人として再出発することになり、1953年7月15日に発起人会が開かれ、同年9月1日には外務大臣から設立許可を得た。その際、

---

<sup>504</sup> 26名の設立委員には一万田、原、藤山、佐藤、杉、宮島、村田、諸井、長崎など大物の財界人が名を連ねている。

<sup>505</sup> 国際電信電話株式会社編（1979）p.5-6

<sup>506</sup> 読売新聞1953.2.19.しかし実際に会長には就任しなかった。

<sup>507</sup> KDD社史編纂委員会（2001）p.60-62

<sup>508</sup> 正式の委員長は渋沢栄一で、中島が渋沢に顔役として依頼した。実際は副委員長の中島があらゆる事務を引き受け、全国の商工会議所を回って資金依頼を行った。渋沢は相談役として関わったが、人事面で内田嘉吉が社長に就任したことは気苦労した。

<sup>509</sup> 渋沢青淵記念財団竜門社編（1963）p.99

中島は日本外政学会の会長、細野が理事長となった<sup>510</sup>。

日本外政学会の理事会や同会主催の海外からの賓客の講演会などに中島は必ず出席した<sup>511</sup>。細野は戦前安岡正篤の会合で中島と面識を得て、碧巖録の講義を聴いて中島に私淑していた。そして中島の英語のボキャブラリーの豊富なことに驚嘆していた<sup>512</sup>。

常に学習を怠らず学識の高い中島ならではの会長職であった。

### g) 文化放送

中島は 1955（昭和 30）年に文化放送会長に就任したことがあった。同社は占領期に宣教師たちによって設立されたが、元々財政的に脆弱であった。設立者のマルチェリーノと会長の徳川宗武との騒動のあと、武井大助が会長となるも融資策に失敗したとされる。そして中島に依頼が来たものであった。しかし同様に融資策が進まず、約束の 1 億円融資が実現せず、7 月分の賃金三分の二が未払いになっていることに対して、組合側は闘争体制にはいった<sup>513</sup>。

すなわち民放で初の電波ストを実行したばかりの文化放送労働組合（279 名）は、再度中島経営陣に対しても 7 月 30 日にスト権確立と中島会長の退陣要求を決めた<sup>514</sup>。8 月 3 日午後からの団体交渉では経営陣は退陣要求を拒否すると、直ちに職場放棄が実施され<sup>515</sup>、8 月 4 日から 6 日にかけて深夜放送の放棄が決められた。5 日は幹部の対応で穴は開かなかったが、同日非公式に中島は辞意を表明し<sup>516</sup>、8 月 8 日には退陣要求を受け入れた<sup>517</sup>。

文化放送理事会で中島新会長が決定したのが同年 7 月 2 日で、理事に木村尚一、監事に中島実（久万吉の子息）が就任した<sup>518</sup>。中島には文化放送の母体であるカソリックの主義に共鳴し、放送事業を通じて成人教育を行い、国民文化を高めようとの悲願も潜んでいた。そして「世界は東洋西洋両思想の融合により一つにならねばならない」というのが持論であった<sup>519</sup>。

実際に 82 歳の中島が会長として活躍したら興味深かったが、文化放送はもともと倒産寸前の状況であった。中島の後任には、渋沢敬三顧問を通じて、財界現役の大物達の推薦により、国策パルプ副社長で経済同友会の生みの親でもあった水野成夫（56 歳）が会長となった。信用力のある水野は大手銀行数行から総計 1 億円の融資を引出し、経営再建に成功

---

<sup>510</sup> 『ニューズレター』日本外政学会

<sup>511</sup> 同；中島の備忘録

<sup>512</sup> 細野（1960）

<sup>513</sup> 読売新聞 1955.7.31

<sup>514</sup> 同

<sup>515</sup> 読売新聞 1955.8.4

<sup>516</sup> 読売新聞 1955.8.5

<sup>517</sup> 読売新聞 1955.8.9

<sup>518</sup> 朝日新聞 1955.7.2

<sup>519</sup> 朝日新聞 1955.7.4

した<sup>520</sup>。水野はさらに産経新聞社長ともなり、本格的にマスコミ界に転進した。

早々の会長辞任で元商工大臣の中島の肩書に汚点が付いたと三鬼は批評した。中島が早急に資金集めに成功すれば事態は変わったかもしれないが、文化放送のために 2 億円を借金したという証言もある<sup>521</sup>。しかし老齢の中島には経営者としての信用力はすでに無かったという現実が突き付けられたと解釈できるかも知れない。

#### h) その他—備忘録の分析

1955 - 56 年頃に利用された中島の備忘録<sup>522</sup>を閲覧すると、上記の世界友の会・永寿病院・国連社・日本外政学会の他に、電気興業重役会、山叶証券重役会、総合国土計画顧問会、佛舍利奉安会、含翠学院卒業式、亜細亜大学卒業式、碧巖会講義、師友会、世界仏心連盟、海外の賓客との会合など日々の日程が縦書きで万年筆によって書かれていた。

僅かな役員報酬で老後の暮らしを支えたのであろうが、高齢にもかかわらず多忙な日々を社会のために捧げたことが分かる。

以下、貿易会会長引退後に亡くなるまで最もエネルギーを注いだ社会貢献活動について独立した節を設けて考察する。

#### 4. 日本青年連盟会長

80 歳にもなる中島が人生最後のライフワークとしたのが、日本青年連盟を通じた青年教育の推進事業であった。中島はもともと教育問題に対する関心が高く、青年教育に尽力した小尾晴敏を尊敬していた<sup>523</sup>。そして祖国日本の再建のためには青年教育が意義深いことを確信していた。

日本青年連盟とは 1953 (昭和 28) 年 1 月に「地域青年団の発達と、勤労青年層の健全な進歩、そして民主主義日本の確立による祖国の振興を目的」として結成された。この組織は青年と青年を愛する指導者、幹部を単位とした人的結合組織であった。戦前期は中学卒が多く、若い社会人たちへの教育が官民一体で盛んになった伝統があった。

---

<sup>520</sup> 三鬼 (1962) p.29-31

<sup>521</sup> 牛山 (1977)

<sup>522</sup> 中嶋の日常的に利用していた備忘録が数点残されている。故中嶋信光氏提供。

<sup>523</sup> 小尾晴敏が松柏塾を移設して、宮城内の 1921 年に設立させた社会教育研究所では、全国から青年教育に熱意のある教師を 20 名募集し、全寮制で二年間無料教育を行った。講師は主に文部省、内務省の官僚が教鞭をとり、大川周明や安岡正篤も講師となった。大塚 (1995) p116 参照。内務省社会局の参与だった中島は 1922 年ころに、ここで「6, 7 度、経済講話を」試みた。文部省社会教育局嘱託・内務省嘱託の小尾晴敏が関わっていたが、その後改組され、国土養成機関に変貌した。小尾晴敏は難波大助を預かって教育していたが、その難波大助が虎の門事件を起こしたことを大変悔やんだ。中島は献身的に青年指導に情熱を傾けて亡くなった小尾晴敏 (昭和 10 年死去) を大変尊敬していた。中嶋 (1951) p.161-163 参照。

日本青年連盟の創設は、戦前期の青年団運動で有名な熊谷辰治郎<sup>524</sup>によって企画された。熊谷は1952年11月に公職追放から解除され、祖国開発のための青年団運動の再起に情熱を燃やす。熊谷が中島久万吉と「お近づきを得た」のは安岡正篤を通じであり、終戦後であった<sup>525</sup>。

明治天皇御生誕百年記念祝典の行事を、熊谷は同志である栗原美能留、西田重一らとともに発起し、その際、委員長を中島に依頼した。それは1952年6月頃であり、日本貿易会にいた中島を訪問し、中島は委員長を受諾した<sup>526</sup>。そして明治天皇御生誕百年記念国民大会を機会として、「敗残の祖国再建を目的」として新たに日本青年連盟が結成されることとなった。この記念祝典において中島委員長は「日本再建の道」という大講演をし、日本青年連盟の結成の意義を格調高く論じた<sup>527</sup>。

こうして中島は日本青年連盟の会長となり、常務理事の熊谷辰治郎らとともに多忙な日々を送りはじめた（表5-4の年表を参照）。

日本貿易会の引退（1953年4月25日付で引退）の前後から、中島は日本青年連盟での活動を本格化させるが、この当時、中島が親しい友人である大川周明<sup>528</sup>に送った手紙（1953年5月3日付）の一節を紹介する。

「老生、このほど日本貿易会引退、右を契機に漸次、実業関係を稀薄にし、文化宗教方面に新生致すべくを期し候。したがってこののち更に高教ニ相浴しもうすべきものこれあ

---

<sup>524</sup> 熊谷辰治郎[1893-1982]は戦前・戦後を通じた著名な青年団運動の活動家で、青年団史、青年団運動の理論、経営論などの多くの著書がある学究肌の人であった。昭和23-27には公職追放となった。1953（昭和28）年2月に接収から解除された日本青年館とは距離において、独自に日本青年連盟を設立させた。娘の鈴木ハマ子は、父が非難や誤解をこえて、「まるで情熱が噴火したような闘志を湧かせて、もう六十歳を過ぎていたのに、東西の講習会、講演会に奔走した。」と述懐している。熊谷辰治郎全集刊行委員会編（1984）p.957参照。熊谷には青年団運動の貢献に対して藍綬褒章が1961年に授与された。

<sup>525</sup> 熊谷（1960）p.2。熊谷辰治郎は小尾晴敏の門下生であったので、中島の「経済講話」を受講したかも知れない。しかし、本格的に両者が関わったのは終戦後だった。

<sup>526</sup> 同

<sup>527</sup> 中島（1952.12）

<sup>528</sup> 大川周明[1886-1957]はアジア独立運動の思想家、宗教学者、革命の志士。東京裁判では民間人で唯一の被告となったが、裁判席で東条英樹の頭を叩くなど精神異常（梅毒尿毒症による）を偶々引き起こし、精神病院に入院を余儀なくされた。この間、コーランの翻訳を終えるなど、精神的には回復する。1948年12月に東条らが死刑となり、本人は不起訴処分となって、退院した。1953年頃から農村再建をめざして行脚をはじめていた。中島と大川は大正期の社会教育研究所で安岡正篤を通じて知り合っていたと推測される。大川が極端な右翼陣営から疎外されていた戦時中（1943-45年）から二人の手紙の往復が残されている。戦後は1950年から手紙の往復が開始され、日本青年連盟が活動をはじめた1953-54年には特に多くの手紙がやりとりされ、大川の故郷である山形に中島が訪問することを積極的に伝えていた。中島は学者であり国士でもある大川との面談を殊のほか喜びとしていた。二人は祖国日本の精神的復興において同じ思想を共有していた。

るべきかと楽しみおり候。」<sup>529</sup>

文面からは青年教育運動にかける彼の決意が「文化宗教方面に新生致すべく」という表現に現れている。青年教育には宗教や日本の伝統文化が土台となるべきであると元来考えていた中島は、大川から日本（瑞穂の国と大川は呼ぶ）の歴史的伝統や、イスラム教などについて学んだ。実際に二人は何度も工業倶楽部などで会ったようで、老年の中島は常に新知識を貪欲に求めていたことが分かる。その背後には祖国の道徳的退廃を座視できぬ憂国の情を二人が共有させ、似たようにどちらも地方行脚を行っていた背景がある。

財界活動を希薄にするとはいえ、日本青年連盟の活動資金は経済界から多大な支援を得ていることが連盟機関誌の『Nippon 青年』誌から伺えた<sup>530</sup>。

中島は単なるお飾りの会長ではなく、連盟を実際に主宰する会長として、常務理事の熊谷などと講演のため「日本中を歩き回」った。1953年6月19日付の大川宛ての手紙で中島は以下のように書いている。

「老生亦斯の国運の一転機に際し宜しく衰老を待つべきに非ずと考へ来り、自ら揃らず青年指導の事に従ふことに成り、近くまた奥羽之地に前住いたすべき予定に之あり、それにつけても種々御教に預りたきもの之あり候。なお幾分その道に寄与致すべきやにもぞんぜられ候ため、近く母校明治学院大学名誉学長を引受申すべき意図にごぞ候。先ずこのへんが老後奉公の一筋たるべく御一晒くださるべく候。」<sup>531</sup>

この手紙からは、ただ戦後の道徳的荒廃を座視して老後を送るのではなく、思わず依頼された青年指導という新たなチャレンジを受け入れたことが分かる。そのため大川の教えに与りたいと中島は御願ひする。さらに教育面で明治学院大学名誉学長を依頼されたことにもふれる。

座談会では青年たちと膝づめで話し合い、鼓舞激励した。これは都会で実業家相手の講演とは、全く異質な、若者層、青年指導層、自治体関係者、大学関係者、宗教関係者などとの対話・講演活動であり、本人にとっても未知の領域であった。

同年7月25日の大川宛ての手紙では、「その後岩手青森両県下巡講、近く帰庵<sup>532</sup>仕候。衆人之座にも臨み、一箇半箇<sup>533</sup>とも接し、何分初経験の事とて不任意次第また少なからず、

---

<sup>529</sup> 大川周明関係文書刊行会（1998）p.729

<sup>530</sup> この機関誌の広告には中島関連の企業広告が毎回出されている。日満鋳業株式会社、鹿島建設、味の素、横浜護謄製造、古河電気工業、日本軽金属、山加証券、日本碍子、三菱鋳山、電気興業、三菱地所、三菱信託、東京海上など。

<sup>531</sup> 大川周明関係文書刊行会（1998）p.730

<sup>532</sup> 帰庵とは家に帰ること。江戸期の俳人が使い、禅語としても利用されている。

<sup>533</sup> 禅語で、一箇半箇（いっこはんこ）とは「一人でも半人でも」の意。きわめて少数のこと。

来月々初さらに房総地方出張の予定にこれあり候。」と述べているように、80歳すぎの老人が若者たちと座談し、それまごく少数の会合も含めて地方行脚するのであった<sup>534</sup>。

講演のために原稿を書くだけでなく、機関誌『Nippon 青年』にも多くの論考を寄せた<sup>535</sup>。

その他に先述のように「世界友の会」会長、「日本外政学会」会長なども引受け、民間外交や国際親善にもつとめるが、青年教育運動にこれらの諸活動を連携させるリーダーシップをとった。さらに1956年4月の仏舎利塔の建設に合わせて、「世界仏心連盟」を自ら組織し、日本青年連盟と表裏一体的に青年の精神修養に努めようとした。この点については第5章で論じた。

### (1) 全国的な講演旅行

上記のように80歳を超えた中島はかくしゃくとして壮者を凌ぐ活動ぶりを示す。かれはこの青年教育活動を愛し、日本の将来を担う若者が日本人としての伝統と誇りをもって活躍することを期待した。中島は日本再建のためには新しい青年が必要であり、そのたとえとして古い材木では役に立たず、新しい材木が必要であるとして、「人間植林」という言葉をよく使った。中島の国際的視野と文明史的な歴史観にたった教養はフレッシュで、若者たちの心に大きな啓発を与えた。彼は熱心に青年の声に耳を傾け、山形で篤農家の研究発表大会の後でも、青年たちに鋭い助言を与え、青年たちを感激させた<sup>536</sup>。

中島が講演旅行に出かけた訪問地は、表5-4の通り、日本全国のかなりの地域に及ぶ。特に遠隔地への訪問は最初の3年間(1953年~1955年)に集中している。これは連盟(日本青年連盟の略)の活動を全国各地に普及させるための種まきのな路程で、熊谷の旧知の各地の盟友がその組織化に協力した。青年団研究史家の多仁によれば、その中でも熊谷は東京西多摩郡福生町と岐阜市郡上八幡の盟友とは戦前から特に親しくしていたという。

中島会長の80歳から83歳にかけての全国講演旅行の日々は、とても老人とは思えない頑健な健康と強い精神力を感じさせるものである。熊谷によれば、実際に訪問した地域は、東京都下三多摩地区をはじめ、新潟、埼玉、長野、山形、岩手、青森、秋田、宮城、岐阜、大阪、京都、滋賀、島根、鳥取、愛媛、高知、岡山、福岡、山梨、茨城である<sup>537</sup>。その他に、少なくとも千葉県館山市や静岡焼津市もある。

この中で、中島は東北山形の庄内地区、茨城の水戸地区、東京の多摩区、長野に親愛と期待をもった。地域的に特色があり、思想や考え方が独特なものを愛していたという。とりわけ山形県庄内地区松丘に特に親しみを感じていた。そこには連盟理事でもある菅原兵治<sup>538</sup>が主催する東北農家研究所があり、別に含翠学院という農村の中堅青年養成所がある。

534 大川周明関係文書刊行会(1998) p.730

535 最晩年の「久万吉はいつも何か書いていた、読書していた」と孫の信光氏は回想していた。

536 熊谷(1960) p.3

537 熊谷(1960) p.3

538 菅原兵治(ひょうじ)[1899-1979]は宮城県出身。金鶏学院で安岡正篤に師事して東洋

この含翠学院と連盟が共催して東北地方の長期講習会が開かれた。

中島は毎年講義を担当し、人生の問題、宗教の問題、世界情勢について講述することを楽しみにした。この学院は全寮制で、早朝に盤木の音で起床し、清掃、坐禅のあとに朝食をとり、小憩ののち、講義と農業実習を行うことを日課としていた<sup>539</sup>。中島の『禅苑拾翠』（1956年）にも、東北農家研究所で中島が生徒たちの前で合掌している写真が掲載されている。ここでの禅的な修養生活は中島が理想としている青年修養の風景である。

東南アジア視察訪問の代表青年である川村清太君という青年は、この東北農家研究所での講習会の仲間であった。

## (2) 「新しい精神文明の建設」<sup>540</sup>

日本青年連盟を通じて何十回も講演した中島の思想をよく表すものとして、「新しい精神文明の建設」と題する講演内容について説明する。目次は次のようになっている。

精神的定軌道（ノルム）

新たなる文化意識

アジアは一つである

黒人の文化的結集

国家至上主義の衰退

完全自由貿易

伝統的文化の台頭

アジア認識を改めよ

日本共産主義者の謬見

極右政権の危険

ハインリッヒ・ミュラーの青年運動

国民共同の理想

講演の冒頭の趣旨は要約すると以下のようになるが、大変格調高い論調である。

---

哲学を修めた。長野県実業補修学校教員養成所の勤務を経て、1931年埼玉県菅谷に開設した日本農士学校の検校（校長）に迎えられ、農村の人材養成に尽力。1945年鶴岡へ。東北農家研究所を開設して多数の人材を育成、1965年黄綬褒章受章、1979年宮崎町の名誉町民になった。享年80歳。代表作に『大学味講』など著書多数。1952年に月刊誌『耕心』を発刊した。東北振興研修所として現在も存続し、活発に活動している。

<sup>539</sup> 熊谷（1961）p.8

<sup>540</sup> 中島は「新しい精神文明の建設と日本青年」の題名の講演を1953年9月に新潟県長岡市の日本互尊社において青年指導者に行った。これと同内容の講演「新しい精神文明の建設と教育者」が1954年1月に東京都新宿区西戸山中学校で開催された「新宿区立中学校研究発表会」で行われた。前記の講演はパンフレットとなり、後者は全日本中学校長会の機関誌『中学校』に掲載された。



「トインビー博士が語るように西洋文明といえども氣息奄々としている中、世界全体を通じて旧文明が次第に没落し、新たな精神文明がまさに起きようとしている。アジア民族の覚醒はロシア革命と比べても一層深遠であり、世界文明の転換期である。敗残の我日本は、このような全面的変局に処して、祖国の再建を計らねばならない運命にある。」

「アジア精神は一つ」という思想は岡倉天心にはじまり、大川周明の「大東亜秩序建設」に沿った思想の流れである<sup>541</sup>。もちろん軍国主義的な意味ではなく、世界平和の視点にたった世界観である。

世界貿易に通じた中島は、遅れたヨーロッパのポンド建てからアメリカのドル建てへの趨勢にもふれる。

最後に、「国民に宗教的信仰が無い処に真の国家は有り得ない。不幸にしてこれが今の日本人間に最も欠如している所のもので」あり、日本人としての凝集力がない。「世界中で宗教上の信仰にもとづく文化的政治的の革命が醗酵されるなかで、我が祖国の歴史と伝統とに典拠する所の、一種の精神革命が我邦上下の間に行われることを待望する」と締めくくった。

ここで中島のいう宗教とは仏教、キリスト教、イスラム教など世界の各国が固有にもつ民族的心性を意味している。明治学院という「宗教学校」でキリスト教の宗教的情操を学び、欧米を何度も遊歴し、常に世界の最先端の情勢に知悉している中島の宗教観はトインビーの歴史観を援用しながらも広範な視角から立論されたものであった。

グローバルな視点に立ちながらも、彼は精神的頹廢が進み、イデオロギーの乱れる日本の現状を危惧する。日本の伝統的な宗教や価値観は神道・仏教・儒教等の混成的なものであるが、彼自身は禅仏教の思想伝統に依拠していることは言うまでもない。

### (3) 「宗教教育の振興」<sup>542</sup>

次に、精神文明の再興を期待した中島がその該博な歴史観にたつて、宗教教育の意義を力説した論説「宗教教育の振興に待つのみ」を解説する。

中島は第一世界大戦後のヨーロッパを歴遊し、その精神的破壊に驚き、世界の諸問題に関する処方箋を『核心之問題』という冊子に書いていた<sup>543</sup>。それから30年たち、この論説では、その後の世界情勢も踏まえて、やはり30年前と同じように文明史的な視点からまずは、ローマ文明からはじまるヨーロッパ文明の興亡について論じた<sup>544</sup>。ここで注目される

---

<sup>541</sup> 大塚 (1995)

<sup>542</sup> 『中学校』42, 1956年9月号に掲載された中島著「宗教教育の振興に待つのみ」参照。牛山によれば、世界仏心連盟を中島がおこし、挺身宗教教育に当たっているから熟読玩味をお薦めすると編集後記で書いている。中島著「宗教教育の振興」という題名のパンフレットも世界仏心連盟から出版されている。

<sup>543</sup> 村山 (2011)

<sup>544</sup> 1953年5月に京都で大学関係者などに講演した際、京大卒の若者が感銘を受けて、『Nippon 青年』に「中島会長の世界史の完成」を期待する手紙を12月に送った(年表参

ことはヨーロッパの思想精神を過去一千二百年間も陶冶してきた「キリスト教の教育は、高尚なる敬神的観念より来た人間浄化の聖業であった」という論旨である。

ここからは中島の深い宗教理解が読み取れるが、以下のようなエピソードがある。

中島は岩下清周の子息で、日本のカトリック神学をリードした岩下壮一神父を大変尊敬しており、神父からはカトリックの精神性を学ぶことをすこぶる楽しみとしていた<sup>545</sup>。中世神学の権威であった岩下神父からは、暗黒といわれた中世においてカトリックの霊性がいかにヨーロッパ人の精神生活を充実させていたかを中島は学んでいた。文化放送を引き受けた際も設立者がカソリック関係者であったことに中島は惹かれたことは先述の通りである。

さて、この論説では、30年前と同じように、現下の問題である、政治的対立、経済的対立、文化的対立について論じた。その中で米ソの対立、原子爆弾を利用した第三次世界大戦の危機などにも言及した。

そして物質文明が行き詰まり、「物質文明が人類生活の本義に戻り、人間生活の良識とも相容れがたい」ことを論じ、「人間精神力の再興、人間精神界の再建」を力説する。そのためには「宗教教育の新興」が必要だと語った。

詩人ゲーテ、原子力の権威トーマス・モレルを引用し、宗教の重要性を述べる。ここでいう宗教はドクトリン（教義）ではなく、宗教性ないし精神性（スピチュアリティ）といえる。中島も宗教教育は「教義の口授ではなく、寧ろ主として宗教的情操の涵養である」と明言している。

現在の世俗的で教養的な宗教教育を批判して、旧来のヨーロッパにおける霊性教育こそが重要だと中島は考えていた。往時の宗教教育とは次のようなものであったという。

「言わば別の世界の入門で、通常人の容易に推測出来ぬ霊的眞実をひらいて、人間生活の本義を明らかにしようとするものであった如く、人類を『神秘の発見による歓喜』に導くことを目的とするものである。」

次に、イスラム教の宗教即実生活の面やイスラム教がアフリカで黒人に広がっている状況などの説明に移行する。恐らくコーランを翻訳した大川周明から受けた知識であろう。

最後に、ホワイトヘッド、アインシュタインを引用する。アインシュタインは、「人間には直覚があり、知覚の最高度に至る時で大発明が起きる時、大悟機発の行われる時に、人間が宇宙生命の永久性とか、自然界の無限大を感じる場合に必ず限らない脅威を感じる」と語ったという。そしてこのアインシュタインのいう「驚異の念」が敬虔な宗教心に他ならず、シュバイツェル博士のいう「人間の精神力」であり、宗教教育の最大の目的だと論じた。

以上からは中島が宗教の教義よりも、宗教性、宗教的情操を重視していることが分かる。中島の立論を要約すると宗教的情操とは敬虔な宗教心であり、驚異の念であり、神秘の発

---

照)。恐らく、ヨーロッパ文明の歴史観を話したと思われる。

<sup>545</sup> 中嶋（1951）p.135-137

見による歓喜であるとされる。

ただこれだけでは宗教的情操とはいえない。中島が言及しているようにイスラム教における逆境や迫害に打ち勝つという克己心もあるだろうし、敬神生活を通じた感謝と喜びの心、さらに中島がよく強調する自己犠牲的な精神<sup>546</sup>や、隣人愛に代表されるような信仰共同体を通じた一体感の感覚も含まれる。こうした宗教的情操はスピリチュアリティの中核的な構成要素である。

#### (4) 「人類最大の課題」

『Nippon 青年』第六巻第七号（1958年）に、「人類最大の課題」という題名の簡単な中島の文章があり、宗教とも関連した話として本節で検討する。近代の科学文明が自壊的症狀を呈していると警告する中島はトルストイを引用して、青年にとってもっとも肝心なことは科学的な事実を学ぶよりも人生の意義は何か、いかにして生きるべきかを解決すべきであると語る。そして以下のように語る。

「人間生活はますます自然をもてあそび、自然から遠のいているかに思われてならない。人間生活は自然に近い程、神に近く、自然から離れることによって、いよいよ神を離れて遠くなるのである。空には原子兵器がとび、海には原子潜水艦がくぐっている今日の時代を、わたしは、人類の幸福な時代であるとは思わない。もっと自然に近い、神から離れない時代を創らねば人間が救われないと信じている。

かの歴史上、暗黒時代といわれた、ヨーロッパ中世の頃、人は神に近づき、精神的に覚醒し、宗教上の革新の気運が動き、芸術上には、澁刺たる新生命をひらいて人類文化にさんぜんたる貢献を残した<sup>547</sup>。・・・」

人生をいかに生きるべきかは、「神を見つめる生活」によってこそ人類の幸福がもたらされるというのが最後の趣旨であった。ここで中島が語る神は特定宗教の神というよりもあらゆる宗教に普遍的な超越者というべき実在を含意している。人間のエゴがもたらす弊害を警鐘し、自然の背後にある実在者に目覚め、真の幸福を求めるべきであるというのは宗教者がよく語っていることであり、とりわけ新規な説ではない。

各家庭には神棚や仏壇があり、宗教的な雰囲気が昔はあったことを別な場で中島は発言している。彼の思想は東西宗教を超えた立場にたっているが、日本人には日本人にあった宗教的信仰心が大切であると言いたいのであろう。

中島は理想家ではあるが、むしろ理論より実践を重んじた人であった<sup>548</sup>。

---

<sup>546</sup> 中島は「一般に財界人は専門外のことはあまり興味や関心を持たぬ。犠牲になる観念が少ない。金もうけ以外のことを考えたがらない。これは明治以来の日本の教育の欠陥の現れで、専門化の教育の弊だ。・・・」と語った。筒井（1952）p.223。

<sup>547</sup> 中世神学について岩下壮一神父から詳しく学んでいたことは、注 71 参照。

<sup>548</sup> 「行為の伴わない思想は無意味である」と中島は若者に語りかけている。中島「青年にあたえる言葉」『Nippon 青年』1955年6月号参照。ここには中島が学んだ陽明学的な知行合一の思想も流れているだろう。

## 5. 中島の逝去

5章で論じた青年修養道場は実現を見ずして、1959年の末から病に臥せていた中島は60年2月には寝たきりとなり、60年4月25日朝8時25分に葉山の自宅である鈴木三郎助（三男和夫の婿入り先）の別荘で亡くなった。

私財はほとんど残さなかったという<sup>549</sup>。

子息の実によれば、「死期間もない頃、父は枕頭に在った母に語りかけるでもなく、“人間はこうやって死んで行くんだなあ”つぶやいたそうである。」<sup>550</sup> この一言からは無理な延命は止めて、自然に自らの死を受け入れた心情が読み取れる。

### (1) 中島久万吉の葬儀

経団連顧問でもあった中島の葬儀・告別式は、どんより雲ったなか東京築地本願寺で1960年4月25日の午後1時～2時、2時～3時に厳かに行われた。生前の功により正三位勲一等旭日大綬章が授与され、霊前に飾られた。

導師は親交のあった鎌倉円覚寺の朝比奈宗源管長で、位牌には「真覚院殿華水竹潭大居士」が刻まれた。真覚からは求道の姿勢から到達した彼の境涯が伝わり、華水の俳号、竹潭の漢詩作りの時の号を含めて久万吉にふさわしい仏名であった。

葬儀委員長は親友で読売新聞社主の正力松太郎であった。弔辞は「国学者」<sup>551</sup>の安岡正篤、古河電工社長の小泉幸久、日本貿易会会長の稲垣平太郎、城西高等学校長の新藤富五郎、日本外政学会理事長の細野軍治らが述べた。財界、政界、言論界など名士多数が参列したという。さらに宗教関係者、学校関係者、青年団関係者もいただろう。

正力松太郎は弔辞の中で、「もっと長寿せられて、国家のため、社会のためにつくしていただきたかったと思う」と惜別の辞を贈った<sup>552</sup>。

1959年の末から自ら関わった永寿病院に入院したが、無理な延命は断り、自宅で亡くなった。家族の他に、中島の死をもっとも痛切に感じ、心を痛めた文を草したのは熊谷辰次郎であった<sup>553</sup>。

なお中島は死後に「菩薩界の名号」として「萬達菩薩の名号」をある団体から授記された<sup>554</sup>。菩薩と呼ばれてあの世の中島は苦笑しているだろうが、その精神的事業は“仏陀を

---

<sup>549</sup> 牛山（1977）p.261

<sup>550</sup> 中島実（中島家『回想』p.78）

<sup>551</sup> 読売新聞によれば、国学者という肩書であるが、陽明学者の方が正確であろう。

<sup>552</sup> 読 1960.4.25,28;「故中嶋久万吉先生追悼号」『Nippon 青年』1960年3月号;中嶋(2002)

<sup>553</sup> 熊谷（1960）

<sup>554</sup> 「中島久萬吉」宛（昭和35年7月の郵便消印、葉山町堀之内一六〇の住所）に菩薩の名号を授記する「証書」とその尊記に関連する「挨拶文」が郵送された。この菩薩の名号の送主は「菩薩界総司所」（淡路島群家郵便局私書箱第六号）という団体であり、宗教団体ではないと自称している。証書の文面を紹介すると、「証書 中島久萬吉殿 諸神諸仏はあなたの過去の徳行を認めたまいこのたびあなたに 満達菩薩 の名号を授記せられました。

目指して修行し、仏の慈悲行を实践し、衆生を救おうという意味”において菩薩と呼ぶにふさわしいことに変わりはない。

## 6. 総括

戦後に平和な時代が戻り、高齢ながら日本貿易界会長として表舞台にたち、追放解除をのがれた大物財界人として再度活躍することが出来た。そして多くの社会貢献活動に多忙な日々を送った。その深い学識と国際豊かな感覚により、会社方面だけでなく学界・国際親善・民間外交などに大きな働きをしたことが分かった。

日本貿易会会長引退後は、日本青年連盟会長を引き受けた。80歳を超えながら、青年教育者となり、若者たちに大きな啓発を与え続けた。その政治・経済・文化の広範な教養から、彼は宗教的情操の大切さを力説した。晩年の仏教への傾倒は高尾山仏舎利塔の建設、仏典講釈書の出版に具現化され、さらに青年教育のための道場建設を中心とした世界仏心連盟の構想までであった。

経済界の仕事であろうと各種の社会貢献活動であろう、そこには「高僧のような」精神的指導者としての指導精神があったと思われる。深い思想があり、常に実践者であった。

元氣な老人であり、老衰で倒れるまで老骨に鞭打って全国各地で講演活動を行った。

中島は財界人でありながらも、国際色豊かに、教育者・文化人としての側面も深く合わせもっていた。その方面で各種の社会貢献活動が期待され、その期待によく応えて人生を全うしたことが本章を通じて明らかとなった。その死も無理な延命など行わず、平常心で迎えたことは精神的指導者らしい最後であったと評価できるだろう。

## 参考文献

### 書籍・雑誌記事

秋元秀雄（1968）『経団連』雪華社

牛山栄治（1977）「中島久万吉翁」『修行物語』春風館，9月，p.255-267

大石俊一（1960）「父子二代三多摩を愛した一中嶋久萬吉翁」『多摩文化』第5巻，多摩文化研究会，大川周明関係文書刊行会（1998）『大川周明関係文書』芙蓉書房出版

大塚建洋（1995）『大川周明』中公新書、中央公論社

小野敏夫編（1966）『国連社15年史』国連社，11月

---

仍てここに之を証すると共に更に徳行を累ねて行かれるように望みます 菩薩界総司所」というものである。どこの団体か不明であるが、中島の徳行（筆者注；中島による大乘経典の注解や仏舎利塔の建設などのこと等）を認知して、菩薩の名号を送ったようだ。徳行者すなわち菩薩が増えることで、「世界はだんだん清く、正しく、明るく、浄化して、やがて神仏の天国づくり、浄土づくりが完成する」とされている。この「証書」の存在については、久万吉の直系の孫にあたる故中嶋信光氏から資料の教示を受けた。なおこの証書が送られた封書の切手は法隆寺観音菩薩像の10円切手（第二次動植物国宝切手）であり、この切手の発行期間は1953（昭和28）年7月から1961（昭和36）年10月までであり、郵便消印の昭和の年号の下一桁が「5」は読み取れるので、昭和35年と断定できた。

- 河合良成（1970）『帝人事件：三十年目の証言』 講談社
- 川島織物（1973）『川島織物三十五年史』 株式会社川島織物
- 木下乙市編（1973）『世界に咲く日本学童の桜：世界友の会運動二十五年史』 社団法人世界友の会、
- 熊谷辰治郎（1953）「最近の青年団論と青年団運動の本質」『中学校』第5号、7月号、p.2-9
- 熊谷辰治郎（1960）「ありし日の思い出を語る」『Nippon 青年』（故中嶋久萬吉先生追悼号）第8巻第3号、p.2-4
- 稲垣平太郎（1960）「日本貿易会のために惜しむ」『Nippon 青年』（故中嶋久萬吉先生追悼号）第8巻第3号、p.8
- 熊谷辰治郎（1961）「中嶋翁の思い出」『Nippon 青年』第9巻第4号、4月号、p.8-9
- 熊谷辰治郎全集刊行委員会編（1984）『熊谷辰治郎全集』 勁草書房
- KDD社史編纂委員会（2001）『KDD社史』 株式会社KDD Iクリエイティブ
- 国際電信電話株式会社編（1979）『国際電信電話株式会社二十五年史』 国際電信電話株式会社
- 杉本民三郎（1960）「葦草の同人ことども」『Nippon 青年』第8巻第5号、5月号、p.4-5
- 筒井芳太郎（1952）「夢をもつ人出よ 中島久萬吉」『財界人物読本』 p.223-235
- 中嶋久萬吉（1951）『政界財界五十年』 大日本雄辯會講談社
- 中嶋久萬吉（1952）「日本青年連盟の結成に就て一明治天皇御降誕百年記念國民大会に臨みて一」『師友』38号、12月、p.38-45
- 中嶋久萬吉 『新しい精神文明の建設と日本青年』 日本青年連盟、1953年
- 中嶋久萬吉「開国百年記念『港めぐり』に寄せて」（鈴木清次編・発行人『東をどり』東京新橋組合、1953年11月）
- 中嶋久萬吉「新しい精神文明の建設と教育者」『中学校』10、1954年1月号、p.2-13
- 中嶋久萬吉「新しい課題への前進」『Nippon 青年』第3巻第2号、1955年2月号、p.31
- 中嶋久萬吉「精神的支柱の確立-世界仏心連盟の発足に当たりて-」『Nippon 青年』第4巻第3号、1956年3月号、p.2-5
- 中嶋久萬吉「宗教教育の振興に待つのみ」『中学校』42、1956年9月号、p.2-9
- 中嶋久萬吉「序 一茂野君のことども一」（『茂野吉之助』茂野吉之助伝刊行会、1957年3月、p.1-5）
- 中嶋久萬吉ほか「特集：国際親善の構想をめぐって-多摩至道会について」その他『Nippon 青年』、第5巻第8号、1957年11月号
- 中嶋久萬吉「新春清語」『中学校』65・66号、1959年1月、p.2-5
- 中嶋久萬吉・鮎川義介ほか「中嶋・鮎川両雄対談一青年を語る」『Nippon 青年』第7巻第3号、1959年、p.4-5
- 中嶋精一ほか（1987）『回想』 私家版  
（同書は中島の子供達が綴ったものを編纂したもので、書かれた年代は昭和48年から昭和

62年まで至る。本文で引用の際は、実名を入れた。）

中嶋信光『評伝 中嶋久萬吉』2005年，私家版

日本工業倶楽部五十年史編纂委員会、『日本工業倶楽部五十年史』1972年

日本貿易会 50年史編纂委員会編『日本貿易会 50年史』日本貿易会，1998年

橋本徹馬『占領治下の闘ひ』紫雲荘出版部，1952年

細野軍治「中嶋会長を悼む」『ニューズレター』221号，日本外政学会，1960年5月

三鬼陽之助『財界首脳部』文藝春秋社，1962年

村山元理（2011）「財界人の歴史観—男爵中嶋久万吉の第一次世界大戦後の世界像」韓国経営史学会『経営史学』第26巻第3号,p257-282

ライフ・エクステンション倶楽部（1957）『高令医学』第1巻第1号，1957年

## 新聞記事

時事新報「人と人 中島と長崎 屋台骨のクサビ締め」1948年8月23日

読売新聞「ペリル来日満100年 六月頃“黒船祭” 都で賑かな日米交歓行事」1953年1月24日

読売新聞「会長に中島久万吉氏 国際電々会社の人事内定」1953年2月19日

読売新聞「日本初の“老人診療所” 財界人の胆入りで銀座に誕生」1953年3月23日

読売新聞・夕刊「開国記念碑の除幕式／静岡・伊豆下田」1953年5月24日

東京朝日新聞「文化放送会長となった中島久万吉」1955年7月4日

読売新聞「中島会長の退陣要求 文化放送再びスト権確立」1955年7月31日

読売新聞「文化放送 実力行使」1955年8月4日

読売新聞・夕刊「中島会長辞意 文化放送職場放棄」1955年8月5日

読売新聞「中島会長ら退陣決る 文化放送争議」1955年8月9日

読売新聞「世界中にサクラ並木を“友の会”から13カ国へタネ贈る」1956年3月29日

読売新聞・夕刊「「世界友の会」全国大会開く」1956年12月2日

読売新聞・夕刊「友情で結ぶ世界のヨイ子達 「友の会」全国大会で人形など贈る」1956年12月3日

読売新聞・夕刊「話の港」1958年12月2日

読売新聞「友情を育てる種子センター 西多摩に来春から造園 世界友の会 各国特産の木で森を」1958年12月8日

読売新聞・夕刊「中島久万吉氏死去」1960年4月25日（読売新聞は読と略）

読売新聞「しめやかに葬儀 故中島久万吉氏」1960年4月28日

読売新聞「世界ファミリー・センター 人形や民芸品1000点 60ヶ国からの寄贈品点じ 今年中に建設計画」1962年1月5日

## 終章

### 1. 本稿の要約

第1部「財界人への歩み」というテーマのもと、財界の精神的指導者となった中島久万吉が、そもそもなぜ財界人となれたのかを第1章・第2章を通じて検討した。

第1章では中島久万吉が漢籍の教養簿バックボーンとしながら、高等教育を受け、高い国家意識を持っていたことが分かった。特に明治学院に在学中は、英語だけでなく深い霊性高い宗教教育を受けたことは精神性を育む素地となった。実業界ではビジネス経験の遍歴をしつつ、有能な実務能力をしめした。さらに英語力と実務能力を買われて、日露戦争という国難の中で内閣総理大臣秘書官として貢献したことの概要を把握することができた。

中島は古河入りを前にして、国益のために献身的に政権の下働きをするだけでなく、有益な進言も行い実行した。国家意識の高さは父親譲りであり、土佐の自由民権の気風を充分に受け、学生時代は政論を訴える演説癖もあった。高い学識があり、漢籍の素養だけでなく、英語も自由に使えた。読書人の中島の学識は常に先の先を見通す慧眼をも備えていた。内閣秘書官時代は政界・官界での活躍により財界にも顔の知られた存在となる。すでに井上馨や渋沢栄一からは能力の高さを認められていた。男爵の貴族院議員となり、政治的欲望はないものの政治家であった。社会人となってからは、信頼度が非常に高まったこと背景には本人の精神修養もあった。元老から頼られ、大物政治家たちとも面識があり、一官僚として官界にもネットワークをもち、政治的な交渉ごとには十分たけてもいた。水泳と弓の名人であり、野球もできて、山登りも好きな中島は健康面でも問題が無かった。初代衆議院議長となった父の長男として男爵となり、土佐系の人脈から総理大臣秘書官にもなれことは非常に恵まれていた。妻の八千子は、男爵の久万吉からは華族として格上の岩倉子爵の妹であり、明治天皇から信任の厚い岩倉家の親族となった。とはいえ決して親の七光りではなく、本人のもつ高い学識と実行力の賜物で異例の出世を遂げたのであった。

古河入りを前にして、財界人の要件として中島に欠けていたのは、大企業の経営トップ層となり、さらに企業社会で広く信頼される存在となることであった。

第2章では古河財閥における中島の活躍と財閥外において財界人として活躍するようになった原因について論じた。

中島は、古河財閥のトップ・マネジメントの一角に収まり、古河系の事業の多角化・事業拡大に多大な貢献をなしたことが分かった。当初、古河入りした際は、虎之助の教育や古河家の財産管理にも心を砕き、大組織の統率者を育てる教育者であったことは、深い学識と信頼感が高い中島の一端を披歴したものであった。こうした高い学識は、のちに仏典を通じた精神的指導者となる大きな下地でもあった。

そもそも中島はなぜ財界人となれたのだろうか。

財界人となった背景には、第1章で論じたように、有能な首相秘書官という履歴から政



界・官界に太いパイプを元来もちつつ、多くの財閥など実業界にも広くネットワークをもち、特殊な地位と立場にあったことがあげられる。第一に中島は財界人になるべく、実業界と政官界をつなぐ希少な地位と経歴をもっていた。

第二に本章で論じたように古河財閥において実業家として大きな功績をあげたことが直接的に起因しているだろう。

第三に深い学識があり、外遊体験もあり、広い視野をもっていたことも財界人となるうえで裨益した能力であろう。特に深い学識に基づく中島の文筆力は工業倶楽部が内外に活動する上で根本的に役立った。

もともと中島は古河財閥内の狭い領域に飽き足らず、広く日本や世界に目が向いていたことが何よりも財界活動に駆り立てた主体的な要因であった。そして若くして財界活動に相応しい政治経済的な諸問題が山のように押し寄せ、その一つ一つに対処した。

元々政界・官界に顔が広がった中島は、その能力の高さが他の財閥トップ層などの実業界でも認められ、政界と実業界を仲介する財界人になるべくしてなったのである。それも本人の希望というよりも先輩の実業家からの引き上げがあり、信頼され、その期待に応えていくなかで、財界人としての存在感を増していったのであった。

第2部は「2つの政治的事件」というテーマのもと、第3章で足利尊氏問題を、第4章では帝人事件について検討した。両事件とも1934年に立て続けにおきた政治的事件である。第3章で扱った足利尊氏問題での大臣辞任の背景には、中島が政民連携を行ったことにより、軍部・右翼から睨まれてしまったことを明らかにした。右翼系議員による議会での追求だけでなく、その背後には右翼サイドによる強力な辞任活動があった史実を明らかにした。

第4章は帝人事件が中島に与えたインパクトを考察した。この疑獄事件は五一五事件と二二六事件のはざまという暗い世相の中でおきた。斎藤内閣の倒壊を目的として企業関係者・大蔵官僚・元大臣が刑事被告人となった事件であった。

この事件は、武藤山治が社長を務める『時事新報』の「番長会を暴く」という連載シリーズによる告白記事が遠因となり、その後、右翼や検察などの思惑が重なり事件化した。裁判の最終判決の視点からは、『時事新報』の記事がいかに憶測に基づいていたかが明らかとなった。その意味で、別件で武藤は暗殺されたとはいえ、その新聞報道姿勢には行き過ぎがあったことが判明した。

検察による虚偽のストーリーが無理やりに予審の段階で捏造され、求刑されることになったことが明るみとなった。公判の結果、全員無罪とはなったものの、その名誉回復には今なお不十分となっているほどの冤罪事件であった。事件に巻き込まれた中島にとっては人生最大の転機であり、その後の人生に大きく影を落とした。

しかしこの事件を通じて中島が元来もっていた恬淡な性格がさらに強化され、期せずして財界の精神的指導者となる契機になったという意味で本事件の意義を再評価した。学識の高い中島は知よりも情を大切にする心の持ち主であり、若い友人である永野のためにあ

えて検察の誘導尋問に迎合した。獄中心理による錯覚という複雑な心理状況に対して、我々は理解を深めねばならない。合わせて「公判録」の分析を通じて、事件以前から中島は実業家としては意外なほど恬淡で無欲であり、一個の人格者として尊敬されていたことが浮き彫りとなった。

本稿の課題である「財界の精神的指導者」が生誕する直接的な原因が帝人事件であったことを本章では明らかにした。

第3部は「精神指導者としての歩み」として第5章では、1934年に連続して起きた二つの悲劇から失脚させられながらも、精神的指導者として活躍したことを明らかにした。事件以前から中島は禅趣味があったが、それがいつごろからどのように形成されたのかを明らかにした。鎌倉円覚寺での修行期を経て中島の精神はさらに磨かれた。財界サークルに戻り、期せずして素修会という財界二世三世の集まりにおいて、碧巖録などの大乘經典の勉強会を主宰するだけでなく、坐禅の指導も行った。財界の外からではなく、財界内の財界人が難解な仏典に依拠した精神的指導者となったという点で、中島は大変ユニークな存在であった。

3年以上にもわたり財界二世三世たちが精神修養の勉強会に集まった背景には、人格の修養が責任ある経営者にとって重要であることが共有されていたからである。ここで学んだ経営者の中からは経済同友会の創立メンバーを構成した人たちもいて、戦後経済の復興の背後に中島精神があったともいえる。

素修会は戦後復活させたのは石坂泰三であり、経済道義の確立を目指して財界人の修養の場が復活したことを意味する。中島の遺志は精神的遺産となって、今なお工業倶楽部の会員である実業家が精神的素養を学ぶ契機となっている。

戦後には高尾山仏舎利塔の建設を実現し、世界仏心連盟という団体を自ら創設しながら、青年教育に尽力しようとした側面を浮かび上がらせた。どちらも仏教の崇拝物や精神に関連した営みであるので、第5章はまとめて「仏心の普及」と名づけた。

大乘仏教学者なみの学識があり、自称「在家僧」でもあった点、そして宗教教育を訴えるほどの霊性の持主であり「高潔な」人格者であったとされる。

中島の五男実によれば、「政財界に活躍した父の姿は謂わば假相であって、私の目には行雲流水、一種禅味を帯びた俳人の姿に受け取られた。」同様な表現は、帝人事件の同僚である河合良成の以下の中島評にも見られる。

「中島さんは本来行雲流水的の心境を持った人で、天成的の一人の俳人である。財界や政治に関係したこともあるが、これは假相であって、本来禅道と俳道とを交えたような風格の人であり、世上の名利財産などにはきわめて恬淡たる人物である。したがって常に運命に適従して何の反抗をも示さざる人柄である。」

以上のように、中島は人物像的には経済人というよりも禅味を帯びた俳人に近いことが実像であるらしいことが分かる。このような人物が財界人として財界の本流を歩みながらも、次世代の経営者の精神的指導者となった史実が本章から判明した。

第6章では、「社会的貢献活動」というタイトルのもと財界の精神的指導者であるだけでなく、その精神のもと戦後の平和な時代において、高齢ながら日本貿易界会長として表舞台でにたち、追放解除をのがれた大物財界人として再度活躍することが出来た。そして多くの社会貢献活動に多忙な日々を送った。その深い学識と国際豊かな感覚により、会社方面だけでなく学界・国際親善・民間外交などに大きな働きをしたことが分かった。

日本貿易会会長引退後は、日本青年連盟会長を引き受けた。80歳を超えながら、青年教育者となり、若者たちに大きな啓発を与え続けた。その政治・経済・文化の広範な教養から、彼は宗教的情操の大切さを力説した。晩年の仏教への傾倒は高尾山仏舎利塔の建設、仏典講釈書の出版に具現化され、さらに青年教育のための道場建設を中心とした世界仏心連盟の構想までであった。

経済界の仕事であろうと各種の社会貢献活動であろう、そこには「高僧のような」精神的指導者としての指導精神があったと思われる。深い思想があり、常に実践者であった。

元気な老人であり、老衰で倒れるまで老骨に鞭打って全国への講演活動を行った。

中島は財界人でありながらも、国際色豊かに、教育者・文化人としての側面も深く合わせもっていた。その方面で各種の社会貢献活動が期待され、その期待によく応えて人生を全うしたことが本章を通じて明らかとなった。死去する際も無理な延命など行わず、平常心で迎えたことは精神的指導者らしい最後であったと評価できるだろう。

## 2. 本稿の結論と貢献

中島が財界の精神的指導者となった意義を考察すると、第3部第5章で論じたように中島は財界人でありながら、自らが財界の精神的指導者になるという稀有な存在であるということである。財界ないし実業界の外から精神指導者を迎えるのではなく、財界人自身が精神的指導者となった事例は後にも先にも無いだろう。渋沢栄一が論語を通じて道徳経済合一を目指して実業界のモラル向上を目指したが、精神的指導者になったわけではない。この点、中島は碧巖録などの難解な仏典に依拠するだけでなく、座禅の指導も行い、靈性（スピリチュアル）という意味での精神的指導者となった。その意味で渋沢とは異なる道徳的源泉による精神的指導を行った。

このような希少な財界人がどのようにして財界人にそもそも生まれたのかを第1部で明らかにすることができた。そして精神的指導者が生まれた直接的な背景として、第2部で、2つの政治的事件について明らかにした。足利尊氏問題では、右翼サイドの動きが資料を通じて明らかとなり、帝人公判録を通じて、中島が精神的に深く懺悔している側面を明らかにした。

政治的に失脚した人物が、表舞台には見えないところで、大変に尊敬される精神的指導者として活躍した史実を明らかにしたことが本稿の第一の意義となる。

大企業のトップ層であり、財界二世三世からなる火曜会のメンバーの大半から素修会は成り立ったが、彼らに対していかなる精神的影響が与えられたのだろうか。彼らが戦時下

の厳しい経済統制の時代に、3年以上にわたり、中島から教えを受けた背景には、経営者にとって心の修養が重要であるという認識が共有されていたと思われる。火曜会のメンバーからは、戦後に経済同友会の創立メンバーが誕生するなど、戦後の経済復興の背後には中島精神があったと言って良いだろう。

石坂泰三が経団連会長ならびに日本工業倶楽部会長を兼任していた時代に、素修会は精神修養を目指す講演会として石坂によって工業倶楽部内に復活した史実を明らかにした。素修会のもともとの歴史や目的は現在の財界人は余り知られていない。その意味でも財界の精神的遺産ともいえる素修会を誕生させた人物の歴史を発掘したことに本稿の意義がある。

一般的に財界人による財界活動には個々の企業家活動の利害得失とは離れて、より高い視点、すなわち国家的意識のもとで意思決定がなされることが実は求められてきたことは、関係者や一部の研究者以外に従来余り認識されて来なかったと思われる。

経済活動全体をまとめ、政界に影響力を行使する経済団体は、部分最適ではなく全体最適を目的として、むしろ高いエートスが保持されてきた<sup>555</sup>。現代的なビジネス倫理の視点からみても、昭和初期の中島たち財界人のエートスは再評価されてしかるべきであろう<sup>556</sup>。

パワーエリートである財界人ないし企業トップのモラルリーダーシップは現代の経済団体にも継承されている精神である<sup>557</sup>。ただ中島が求めた経営者としての「人格を高め」<sup>558</sup>る精神的伝統が現在の経済団体には十分に継承されているかは疑問である。

その他、本稿の研究から副次的に生まれたインプリケーションを述べる。

帝人事件の研究からは、武藤山治の時事新報における報道姿勢の功罪を論じた。従来、武藤山治は世界的な大会社の経営者として著名であるが、その攻撃的な執筆姿勢によって被害を被った人たちのことを忘れてはならない。

現代社会におけるCSR（企業の社会的責任）の観点<sup>559</sup>から論じると、本業に関わらない社会貢献こそが社会から企業に期待されているニーズである。晩年の中島の日常生活は

---

<sup>555</sup> 帆足（1962）p.158, 諸井（1967）p.242-243 など参照。戦前の日本工業倶楽部や工業倶楽部と表裏一体の日本経済連盟会の伝統的精神に関する当事者の証言。

<sup>556</sup> ビジネス倫理の歴史的アプローチは欧米でも日本でも十分に研究されているとは言い難く、ビジネス倫理学は応用倫理的、社会課題的、法的アプローチから主に研究されている。

<sup>557</sup> 日本経団連の企業行動憲章（2010年改定）の第9条には、「経営トップは、本憲章の精神の実現が自らの役割であることを認識し、率先垂範の上、社内ならびにグループ企業にその徹底を図るとともに、取引先にも促す。また、社内外の声を常時把握し、実効ある社内体制を確立する。」とある。また日本経団連の次期会長予定の榊原氏は「人格見識に優れた方、イノベーションを重視している」と米倉会長は力説している（『産経新聞』2014年1月15日）。

<sup>558</sup> 諸井（1967）p.243

<sup>559</sup> A.B.キャロルのCSR4段階説に基づくと、CSR（企業の社会的責任）には経済的責任・法的責任・倫理的責任・裁量的責任の4つの段階がある。この中で、裁量的責任とは本業に関わらない社会的貢献を意味し、現代社会のニーズもここにある。

社会貢献活動の日々そのものであった。それも無償の社会奉仕に近かった<sup>560</sup>。

財界人に期待される社会貢献活動という視点からは、中島はそのロールモデルといえるだろう。特に最晩年の日本青年連盟会長としての全国行脚の講演旅行などは、青年団運動の研究でも十分に明らかにされていない史実の発掘であった。日本青年連盟常任理事の熊谷辰次郎は青年団運動の3人の大物指導者の中でも最後の一人であり、その全集もある<sup>561</sup>。

### 3. 本稿の限界と今後の課題

素修会の影響は素修会同人の証言はあるものの、実際に教えを受けた経営者の証言を探すことができなかったのは本稿の資料的限界の一つである。

中島の日記や本格的な追悼録が作成されていたら、この研究は実り豊かになったであろうが、資料面での制約は免れなかった。少なくとも親族から中島の備忘録などの提供を受け、そこから日々に社会貢献活動に多忙であったことが読み取れた。

財界の精神的指導者が成立する要因や、その意義を中心に中島を研究したために、日本工業倶楽部の専務理事としてまた財界人としての活躍については概要のみにふれたにとどまった。この点、財界人中島の全体像の研究は今後の課題となる。

### 参考文献

- 帆足計（1962）「日本財界の伝統について」、堀越禎三編『経済団体連合会十年史』社団法人経済団体連合会，p.158.
- 諸井貫一（1967）「諸井貫一君」日本工業倶楽部五十年史編纂委員会『財界回想録 下巻』日本工業倶楽部，p.233-252

---

<sup>560</sup> 資産維持・税金対策のために財団を設けて社会貢献活動をする場合もあるが、中島の場合は、個人営業的であり、自己犠牲的であり、自らの資産はほとんど残さなかった。

<sup>561</sup> 『熊谷辰治郎全集』（1984年）の編纂に携わった多仁照廣（敦賀短期大学）、上野景三（佐賀大学）の教示による。『全集』では大正15年から昭和23年までの熊谷の著作物が掲載されており、戦後の日本青年連盟期の記事はない。これは関係者が存命であり、研究出来なかったという。なお熊谷は、長年の青年団運動の貢献により昭和36年に藍受褒章を授与された。

## 中島久万吉 略年表

時期・満年齢	事項
1873（明治6）年 0歳	7/24 横浜で出生
1877（明治10）年 4歳	8/20 母死す
1890（明治13）年 7歳	土佐へ
1894（明治17）年 11歳	東京に戻り、3/16 慶応義塾幼稚舎に入社
1896（明治19）年 13歳	一致英和学校予備門（築地）に転学
1887（明治20）年 14歳	明治学院普通学部本科に入学
1890（明治23）年 17歳	明治学院退学、慶応義塾本科で除籍。 土佐へ
1891（明治24）年 18歳	9/13 東京に戻る
1892（明治25）年 19歳	7月高等商業学校予備門入学
1894（明治27）年 21歳	高等商業学校本科入学
1897（明治30）年 24歳	7月高等商業学校本科卒業、東京株式取引所に入所
1898（明治31）年 24歳	9月東京株式取引所辞任
1899（明治32）年 25歳	2/1 三井物産に雇用、8月退社 3/26 父信行死す、4月男爵
1900（明治33）年 27歳	3/16 京城に到着、京釜鉄道線路調査委員
1901（明治34）年 28歳	3/16 帰国 5/25 継母俊子死す 6/17 桂内閣総理大臣秘書官（叙高等官六等）の辞令
1903（明治36）年 30歳	1/9 岩倉子爵の妹と華燭の宴
1904（明治37）年 31歳	男爵議員
1906（明治39）年 33歳	1/9 西園寺内閣総理大臣秘書官留任 4/21 内閣総理大臣秘書官、依願免本官 5/5 古河鉱業商務課長
1907（明治40）年 34歳	7/14 桑港に到着、虎之助と米国内旅行 欧大陸の巡遊、マルセイユから帰国
1908（明治41）年 35歳	1/21 第2回古河家親族会議、古河家管理事長兼任 横浜電線製造の株過半数を取得
1909（明治42）年 36歳	8/18 東亜興業株式会社創立総会、監査役辞任
1911（明治44）年 38歳	1/27 横浜電線製造社長 7月マレーシアへ
1912（明治45）年 39歳	7/30 マレーシアにて崩御の報に接し、帰国 9月博愛生命の増資株引受け

1913 (大正 2) 年	40 歳	4/2 日本興業創立総会 6 月渋沢家と日新護謨株式会社 設立 8/11 中国興業株式会社創立総会
1914 (大正 3) 年	41 歳	4/25 中日実業株式会社総会, 新任の取締役
1916 (大正 5) 年	43 歳	1 月 日本工業倶楽部設立のための発起人総会 4/25 経済調査会の委員が勅令で発令 5/3 製鉄創立協議 帝国ホテルで協議会
1917 (大正 6) 年	44 歳	3/10 日本工業倶楽部の創立総会、専務理事 6/21 東京古河銀行の創立発起人総会 8/14 東洋製鉄発起総会 10/13 横濱護謨製造株式会社設立
1918 (大正 7) 年	45 歳	城西実務学校設立認可願
1919 (大正 8) 年	46 歳	1/18 補欠選挙で男爵議員(昭和 14 年 7 月まで) 5/12 日米電信株式会社設立協議会 6 月 日本運送株式会社社長 12/22 協議会設立
1920 (大正 9) 年	47 歳	1/28 協議会理事 (昭和 21 年 5 月 26 日まで) 2 月古河商事大連事件 4/1-5/1 米賓歓迎協議会 4/22 古河電工社長 11/25 日本工業倶楽部会館落成式 (工事監督委員長)
1921 (大正 10) 年	48 歳	1/11 内務省社会事業調査委員会委員 2/10 臨時財政経済調査会 2/9 シーメンス代表と古河交渉委の第 1 回交渉 4/15 東洋製鉄委託経営へ 9/17 英米訪問視察団内定 10/15 英米訪問実業団横浜出航 10/29 シアトル商業会議所, 代表スピーチ 12/22 ロンドン着
1922 (大正 11) 年	49 歳	1/20 公式日程終了, 欧州大陸歴訪二か月ベルリンに滞在 8/1 日本経済連盟会創設
1923 (大正 12) 年	50 歳	1/19 社会局参与に任命へ 8 月富士電機設立
1924 (大正 13) 年	51 歳	2/7 日本無線電信株式会社発起人総会
1925 (大正 14) 年	52 歳	3/25 帝都復興建築会社の社長に決定 6/22 日本無線電信第 1 回設立委員会、設立副委員長 9/24 東京商科大学、記念講演会

		10/20 日本無線電信創立総会 12月 古河電工社長辞任
1926 (大正 15) 年	53 歳	3/27 池上電気鉄道社長 6/12 国際運送社長へ 10/11 合同運送株式会社社長 (昭和 3 年まで)
1927 (昭和 2) 年	54 歳	5/23 商工審議会委員 12月 東京湾汽船社長
1928 (昭和 3) 年	55 歳	12月 横濱護謨取締役会長辞任
1929 (昭和 4) 年	56 歳	6月 日本信託取締役 11/19 臨時産業合理化審議会
1930 (昭和 5) 年	57 歳	1/28 東洋モス整理問題で債権者の羊毛商側と懇談 6/2 臨時産業合理局常務顧問就任, 毎日出勤 12月 日本信託社長
1931 (昭和 6) 年	58 歳	10/3 東京商科大学予科専門部廃止の政府の命令に、渋沢翁は自分の代理として中島に依頼、解決へ 11/24 渋沢翁追悼会の会合、工業倶楽部にて 12/4 協調会副会長 (昭和 10 年 12 月 4 日まで) 12/11 渋沢子爵追悼会
1932 (昭和 7) 年	59 歳	5月 斎藤内閣商工大臣の就任
1933 (昭和 8) 年	60 歳	4月末 ビール合同を斡旋 9/26 日本製鉄株式会社設立委員長 12/21 政民連携の斡旋
1934 (昭和 9) 年	61 歳	1/29 日本製鉄株式会社設立 2/8 商工相辞任 7/4 東京地検に召喚, 市ヶ谷刑務所 80 日間収容 7/30 華族の礼遇不享 12/26 予審の結審
1935 (昭和 10) 年	62 歳	円覚寺に参禅 (半年) 6/22 帝人第 1 回公判
1936 (昭和 11) 年	63 歳	7/8 工業倶楽部専務理事辞任 12/5,8,10,12,15,17 中島の帝人公判
1937 (昭和 12) 年	64 歳	8/12 中島男に懲役 1 年の求刑 12/23 無罪判決の確定 12/24 貴族院公正会に復帰
1939 (昭和 14) 年	66 歳	1/30 工業倶楽部専務理事に再任 6/6 男爵議員の推薦を辞退 5/16 東京株式取引所の理事長候補辞退
1940 (昭和 15) 年	67 歳	12/28 東京地下鉄道社長



1941 (昭和 16) 年	68 歳	日本貿易協会会長に就任 2/25 東京緑地協会設立総会、副会長 秋頃、素修会始まる (月に 2, 3 度)
1945 (昭和 20) 年	72 歳	3 月末、薬王寺の旧中島邸空襲で消失 5/25 青葉町の自宅が戦災で消滅、大やけど
1946 (昭和 21) 年	73 歳	川島甚兵衛 (川島織物) へ電報
1947 (昭和 22) 年	74 歳	工業倶楽部専務理事辞任 5/28 日本貿易会創立総会 会長 黒船祭りの復活に支援
1948 (昭和 23) 年	75 歳	5/1 世界友の会発足 会長
1949 (昭和 24) 年	76 歳	工業倶楽部専務理事再任 2/26 川島織物紫野工場竣工式に参列 11/17 国連社発起人総会、委員長
1952 (昭和 27) 年	79 歳	工業倶楽部専務理事辞任・工業倶楽部評議会会長就任 9/15 ライフ・エクステンション倶楽部結成 11/11 明治天皇御生誕百年記念国民大会
1953 (昭和 28) 年	80 歳	1 月 日本青年連盟会長 1/7 国際電電設立趣意書公表 5/24 黒船祭 7/15 日本外政学会発起人会
1955 (昭和 30) 年	82 歳	7 月 文化放送協会会長内定、8 月に辞任
1956 (昭和 31) 年	83 歳	2/11 社団法人ライフ・エクステンション倶楽部附属永寿 病院開院 11/18 高尾山仏舎利塔の落慶奉遷式
1960 (昭和 35) 年	87 歳	4/25 葉山の鈴木別邸で死亡 4/28 築地本願寺で葬儀 工業倶楽部で追悼会
1969 (昭和 44) 年		12/31 妻八千子逝去

## データベース

国立公文書館・アジア歴史資料センター 中島久万吉で 246 件

帝国議会会議録検索システム 中島久万吉で 210 件

国会会議録検索システム 中嶋久万吉で 2 件 (日本貿易会) 中島久万吉で 7 件 (文化放送など)

国立国会図書館サーチ 中島久万吉で 325 件 (2015.1.5 アクセス)

朝日新聞のデータベース (聞蔵、明治から昭和) 中島久万吉で 1026 件ヒット

読売新聞のデータベース 中島久万吉で 327 件ヒット

期間	件数	キーワード
1874(明治 7 年).11.2- 1912(大正 1 年).7.31	6	韓国から、首相秘書官任免・留任・更迭
1912(大正 1 年).7.30- 1926(大正 15 年).12.24	47	財界活動、東洋製鉄、多摩電社、無電会社、
1926(大正 15 年).12.1- 1936(昭和 11 年).12.31	186	産業合理化、商工大臣、日本製鉄、帝人事件
1937(昭和 12 年)1.1- 1945(昭和 20 年)12.31	35	帝人弁論、財界活動
1946(昭和 21 年)1.1- 1960(昭和 35 年)12.31	53	日本貿易会、国際電々会社、文化放送、死亡

神戸大学附属図書館・「新聞記事文庫」中島久万吉 : 170 件ヒット

(<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/index.html>)

### その他の新聞

中島久万吉 (日本貿易会会長), 「あの頃を語る—尊氏論で大臣失脚、”すみれ草”藤村、孤蝶生む」『時事新報』1948 年、12 月 26 日 (←ビール合同、製鉄合同なども)

「顔/芸能で立つ役者/中島久万吉」『夕刊中外』1950 年 9 月 29 日

### 雑誌・図書類

『大宅壮一文庫雑誌記事検索総目録人名編 4』(1985 年) 中島久万吉 : 16 点

渋沢栄一伝記資料検索エキスパートシステム (渋沢栄一史料館提供)

中島久 262 件のヒット

中島男 96 件のヒット

渋沢栄一伝記別巻検索エキスパートシステム (渋沢栄一史料館提供)

中島久 68 件のヒット

中島男 38 件のヒット

## 参考文献一覧

### 1. 中島久万吉に関連した研究文献

小林俊治 (1980) 「「産業合理化」と経営学-『経営学論集』(第6輯)を中心として-」『早稲田商学』285号, 早稲田商学同攻会, p.389-404

島田昌和 (1989) 「協調会の設立と経営者の労働観: 日本工業倶楽部信愛協会案をめぐって」『経営史学』24巻3号, p. 27-57

島田昌和 (2008) 「渋沢栄一の労使観の進化プロセス-帰一協会・協調会・修養団」、橘川 武郎・島田昌和編『進化の経営史-人と組織のフレキシビリティ』有斐閣、2008年、p. 83-105

高橋衛 (1975) 「昭和初年における産業合理化政策導入の契機」『政経論叢』24(6), 広島大学政経学会, p. 75-106

松浦正孝 (1995) 「『帝人事件』考-戦前日本における財界の組織化と政界・財界関係」, 日本政治学会編『年報政治学』1995年度「現代日本政官関係の形成」, 岩波書店。

松浦正孝 (2002) 『財界の政治経済史-井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代-』東京大学出版会

松浦正孝 (2007) 「政治研究と現代政治分析-拙著『財界の政治経済史』(東京大学出版会、二〇〇二)をめぐって-」『レヴァイアサン』40号, 木鐸社, p. 57-65.

宮島英昭 (1988) 「1930年代日本における独占政策思想-商工官僚と「財界世話人」-」, 逆井孝仁教授還暦記念会編『日本近代化の思想と展開』文献出版, p. 377-395

村山元理 (2011) 「財界人の歴史観-男爵中島久万吉の第一次世界大戦後の世界像」韓国経営史学会『経営史学』第26巻第3号, p.257-282

村山元理 (2014) 「財界リーダー中島久万吉と仏教的精神-精神的指導者への道」, 住原則也編『経営と宗教-メタ理念の諸相』, 東方出版, p. 60-83.

森川英正 (1978) 『日本財閥史』教育社

森川英正 (1980) 『財閥の経営史的研究』東洋経済新報社

森川英正・由井常彦 (1983) 「近代日本の「産業の将帥」たち」『歴史と人物』第13年第12

号, 10月号, p. 32-43

由井常彦・島田昌和 (1995) 「経営者の企業観・労働観」『日本経営史 3 大企業時代の到来』岩波書店

由井常彦 (2003a) 「団琢磨の民間経済外交—英米訪問団 (1921-2 年) の活動と意義について—」『三井文庫論叢』第 37 号

由井常彦 (2003b) 「日本工業倶楽部実業家資料室公開講演会講演要旨 国際的にみた日本の実業家 上・下」『日本工業倶楽部会報』206 号 (2003 年 10 月)・207 号 (2003 年 12 月)

由井常彦 (2004a) 「日本的経営の思想的基盤—経営史的な考究—」、経営学史学会編『経営学史学会年報第 11 輯経営学を創り上げた思想』文真堂、p. 91-120

由井常彦 (2004b) 「日本工業倶楽部実業家資料室公開講演会講演要旨 戦後日本経済と財界人 上・下」『日本工業倶楽部会報』210 号 (2004 年 10 月)・211 号 (2004 年 12 月)

由井常彦 (2005) 「日本工業倶楽部実業家資料室公開講演会講演要旨 日本の経営と財界人 上・下」、『日本工業倶楽部会報』214 号 (2005 年 10 月)・215 号 (2005 年 12 月)

由井常彦 (2006) 「財界人と日本的経営の理念—日本工業倶楽部のリーダーにみる経営一体観の進化—」『経営論集』第 16 巻第 1 号

渡辺尚 (1981) 「富士電機成立過程の試論的分析」、土屋守章・森川英正編『企業者活動の史的研究—中川敬一郎先生還暦記念』日本経済新聞社、p. 212-232

渡辺尚 (1990) 「富士電機の創立過程—第二・三段階を中心に—」、中川敬一郎編『企業経営の歴史的研究—脇村義太郎先生卒寿記念』岩波書店、p.263-283 所載。

## 2. 中島久万吉の人物像、経歴、紹介記事

### 自伝・回顧録・家族の手記

中嶋久萬吉「中嶋久萬吉閑談—政界財界回顧七十年 1~65」『産業経済新聞』

1950 年 8 月 29 日~11 月 6 日

中嶋久萬吉 (1951) 『政界財界五十年』大日本雄辯會講談社

中嶋久萬吉「中嶋久萬吉君に聴く日本工業倶楽部の思い出 (上)」『日本工業倶楽部会報』第 53 号, 1965 年 3 月, p. 22-29 (1956 年 2 月 8 日録音)

中嶋久萬吉「中嶋久萬吉君に聴く日本工業倶楽部の思い出 (下)」『日本工業倶楽部会報』第 54 号, 1965 年 6 月, p. 26-35

中嶋久萬吉「中嶋久萬吉君」(1967) 『財界回想録・上巻』日本工業倶楽部五十年史編纂委員会編、日本工業倶楽部、p. 1-25 (1956 年 2 月 8 日談)

中嶋久萬吉 (1957) 「中嶋久萬吉氏談」、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第六巻』, p. 66-68 (1956 年 9 月下旬、日本工業倶楽部に訪問インタビューを受けて、湘煙女史の回想談)

中嶋家 (1987) 『回想』(私家版) (久萬吉の子供達が家族の視点から描く、長男精一が昭和

48年3月に青山時代について、昭和53年に牛込時代について五男実が記述—貴族の生活と尊氏事件・帝人事件以降の中島家の没落、母について愛子が記述、昭和62年に思い出を六男豊が記述)

中嶋久萬吉、編者中嶋信光 (2004)『政界財界五十年』まつ出版

中嶋信光 (2005)『評伝 中嶋久萬吉』(私家版)

### 財界人名辞典、財界人評伝、雑誌記事等に紹介、評論、追悼記事

実業之日本「中嶋久萬吉(首相秘書官)、近世逸話； 中嶋久萬吉汁粉屋に失敗す」『実業之日本』第8第4号、1905年7月、p.71

実業之日本「近世逸話； 中嶋久萬吉折角の秘密を素つ破抜かる」『実業之日本』第11第17号、1908年4月、p.61-62 (毛生え薬)

三田商業研究会編集「中嶋久萬吉」『慶応義塾出身名流列伝』実業之世界社、1909年、p.417-418 (「貴族院議員 男爵中嶋久萬吉氏」古河興業商務部長・古河家監事長、横浜電線製造、天龍運輸取締役)

実業之日本「名士の涼吟—男爵中嶋久萬吉」『実業之日本』第13第17号、1910年8月、p.63 (p.60-64に31名の中より) (漢詩を紹介)

古橋亀治郎編 (1911)『実業家人名辞典』、p.442 (中嶋多嘉吉も掲載)

桑村常之助 (1911)『財界の実力』金桜堂、p.85-86 (「電線会社 男爵 中嶋久萬吉」、頑童、陽明学)

実業之日本 (1911)「横浜電線製造株式会社社長男爵中嶋久萬吉氏夫人中嶋八千子」『実業之日本』第14第17号、1911年8月、p.60 (八千子の母は大谷伯爵の姉、子爵岩倉具明は兄)

実業之日本 (1911)「余若し此処に百萬円を得たりとせば如何なる目的に使用するか(下)—横浜電線製造株式会社男爵中嶋久萬吉氏」『実業之日本』第14第18号、9月、p.38-39 (45名への質問)(史蹟保存に)

嬌溢生 (1911)『名士奇聞録』実業之日本社、p.127-128 (「中嶋久萬吉汁粉屋に失敗す」)

中外新聞社 (1912)『現代人物史』中外新聞社、p.271(横浜電線製造株式会社社長男爵中嶋久萬吉君)

九十九湾外史「男爵中嶋久萬吉に寄する書」『実業之横浜』第九卷第十七号、1912年、実業之横浜社、p.4. (横浜電線は古河に乗っ取られた。今後となるか?)

杉謙二編纂兼発行人 (1913)『華族画報』華族画報社、p.666-668 (中嶋久萬吉男爵 中嶋男爵家 Baron Nakashima Family) (家族の写真、妻の写真、邸宅の庭園、「令名噴々、実業界に重視せらる」)

素水生 (1913)「少壮実業家(六)古河家管事男爵中嶋久萬吉氏」『実業之日本』第16第19号、9月、p.36-39

矢野滄浪 (1914)『財界之人百人論』時事評論社、p.24 (「中嶋久萬吉」三田義塾で演説)

- 実業之日本 (1914) 「夫婦仲のよい実業家—中島久萬吉四十二歳・婦人八千子三十一歳」『実業之日本』第 20 第 4 号、2 月、p. 80 (8 組の夫婦)
- 遠間平一郎 (1915) 『事業及人物』中央評論社、p. 273-276 (「檜舞台に出現したる博愛生命保険会社社長 中島久萬吉」)
- 実業之日本 (1916) 「人の反面—横浜電線社長—男爵 中島久萬吉」『実業之日本』第 19 卷第 29 号、9 月 15 日号、p. 33
- 実業之日本 (1917) 「初対面録—男爵 中島久萬吉氏」『実業之日本』第 20 卷第 4 号、2 月 15 日号、p. 13
- 素水生 (1918) 「東洋製鉄新専務中島久萬吉男」『実業之日本』第 21 卷第 10 号、5 月 1 日号、p. 75-78 (秋山将軍と座談の競争)
- 実業之世界社編纂局 (1919) 『大日本実業家名鑑』p.306 (「中島久萬吉」)
- 五十嵐栄吉編・発行 (1918) 『大正人名辞典』第四版、東洋新報社、p.1146 (「中島久萬吉」)  
[大正人名辞典 下巻、日本図書センター、1987 年]
- 中外商業新報社編 (1919) 『財界双六』中外商業新報社、p.153-157 (東洋製鉄会社専務)
- ニコニコ山人 (1919) 「将に來らんとする世界的大競争の実業界に活躍すべき我実業界の四十男百五十人」『実業之日本』第 22 卷第 1 号、1 月 1 日号、p. 137 (3 人目、東洋製鉄専務、横浜電線社長、その他名誉の肩書数多く、明敏達識・・・など)
- ニコニコ山人 (1920) 「十年前に卒業した東京高商出の傑出者総評」『実業之日本』第 23 卷第 3 号、1920 年 2 月 1 日号、p.44-46 (実業界の要地にある高商出身者 34 名の中の 1 人、東洋製鉄専務として)
- 清風子 (1920) 「癖暑地探聞記 名士の銷夏振り」『実業之日本』第 23 卷第 16 号、8 月 15 日号、p.25-26 (大磯の別荘地に中島ら)
- 寸鉄生 (1921) 「華族の重役」『実業之日本』第 24 卷 11 号、17 月 1 日号、p.118-121 (男爵 実業家として)
- 一記者 (1921) 「華族出の実業家評判記」『日本一』第 7 卷 11 号、p.61-69 (「中島久萬吉 男—東洋製鉄会社取締役—」として紹介)
- 実業之日本 (1923) 「名士の似顔 古河電気社長 中島久萬吉男」『実業之日本』第 26 第 7 号、4 月、p.58
- 「花水川で発句を釣る中島久萬吉君」『朝日新聞』1923 年 12 月 19 日 (趣味読書、発句狂、書、弓)
- 湯本城川 (1924) 「自惚れとキザが人格の全部である—古河電気工業社長中島久萬吉君」『財界の名士とはこんなもの』p.7-9 (陽明学)
- 東京大阪朝日新聞経済記者共編 (1924) 『財界楽屋新人と旧人』日本評論社、p.149-152 (「王陽明の哲学を基礎として事業を営業して居る 古河電気工業社長 中島久萬吉」)
- 「噂の人 建築会社社長に内定せる 中島久萬吉君」『朝日新聞』1925 年 4 月 11 日 (半官半民、恬淡、)

- 実業之日本 (1925) 「社長と専務 古河電気社長 中島久萬吉氏」『実業之日本』第 28 卷第 8 号, 4 月 15 日号, p.46. (復興建築会社の社長に推され承諾、財界にあつては最近引つ込み思案であつた彼、ともすると財界の人としては忘れかけようとした彼、・・・)
- 「経営百態 財界世話業 (9) 女人専門と秘書的」『朝日新聞』1925 年 11 月 7 日 (郷君の弟分、徳分ない、軽薄才子、秘書的世話業)
- 実業之日本 (1925) 「一言居士 男爵 中島久萬吉君」『実業之日本』第 28 卷第 21 号, 11 月, p.30.
- 猪野三郎編 (1927)『大衆人事録一昭和 3 年版』帝国秘密探偵社・帝国人事通信社, p. 90 (「中島久萬吉」)
- 御大礼記念出版刊行会編 (1928)『現代実業家大観』御大礼記念出版刊行会 p. 216 (「中島久萬吉」)
- 都新聞経済部 (1928) 「日本工業倶楽部の巻」『倶楽部めぐり』倶楽部研究会 p. 53-97 (中島について多く言及、[十二 和田気取の中島久萬吉]など。財界世話業論)
- 野依秀市編 (1930)『明治大正史』第十五卷 (人物編)、明治大正史刊行会, (十) の部, p. 15 (「中島久萬吉」) [大正人名辞典Ⅲ下巻、日本図書センター、1994 年]
- 池田さぶろう (1930)『財界お顔拝見記』新時代社, p. 247-249 (日新護謨取締役会長 中島久萬吉氏)
- 中西利八編 (1931)『財界フースヒー』第 3 版、通俗経済社刊, p. 45 (「中島久萬吉」)  
[『日本産業人名資料事典 2 第 2 巻』日本図書センター、2002 年]
- 荒木武行 (1932)『新政治家列伝』内外社, p.274-275 (新内閣の閣僚 商工大臣、水泳・弓・登山)
- 十條四郎 (1932) 「純財界人から入閣した一商工大臣中島久萬吉男」『実業之日本』第 35 卷第 12 号, 6 月, p. 26-27 (小さいながら財界世話業)
- 阿部真之助 (1932) 「新閣僚論」『中央公論』7 月号, p.182-191 (中島は政党色なし、常識人)
- 飛鳥明人 (1934) 「昭和政戦 - 建武中興六百年目『足利尊氏』合戦記 - 中島商相の落城まで」『サンデー毎日』1934 年 2 月 18 日, p.30
- 後藤国彦 (1934) 「中島久萬吉を語る」『経済往来』1934 年 3 月, p. 101-104
- 山と溪谷社編 (1934) 「中島商相と山の会」『山と溪谷』24 号, 1934 年 3 月, p. 49
- 向原寛 (1934) 「街の人物評論 中島久萬吉」『中央公論』1934 年 3 月号, p. 266-268
- 岩崎徂堂 (1934)『壮談快挙歴代閣僚伝青少年時代編』増訂第 21 版, 玲文社, p. 1314-1317 (男爵 中島久萬吉 学業優秀であつたこと、父から厳格に育てられたこと)
- 岩井良太郎 「世話役三代記」『財界新閣將伝』千倉書房, 1934 年, p.223-260 (財界世話役の二代目の世代、官役世話役、産業合理局の首脳などを紹介、やや辛口に説明)
- 阿部真之助 (1934)『新人物論』日本評論社, p. 178-183、(「中島久萬吉」辛口の批評)  
[芳賀登 [ほか] 編『日本人物情報大系 28』皓星社、2000 年]
- 文藝春秋 (1934) 「一頁人物評論 中島久萬吉」『文藝春秋』1934 年 8 月号, p. 143

- 山口愛川 (1935)『波瀾立志大臣』合名会社一心社, p.1333-1336 (「中島久万吉」)
- 今日の問題社 (1938)『問題の人物は何をしてゐるのか:久原、真崎、三土、中島、小川』  
今日の問題社 (帝人事件の中島久万吉)
- 谷元二編 (1942)『大衆人事録一昭和 17 年版』第 14 版、帝国秘密探偵社, p. 693  
[昭和人名辞典第 1 巻[東京編]1987 年より] p. 695 (中島精一氏も掲載)
- 荒垣秀雄 (1950)「財界ページの生き残り翁 宮島清次郎」『現代人物論』河出書房,  
p. 177-181 (ページを逃れた中島、宮島)
- 文藝春秋 (1951)「現代日本の百人 (其ノ二十四)、中島久万吉 (日本貿易会会長)」『文藝  
春秋』1951 年 8 月 (一枚の顔写真)
- 筒井芳太郎 (1952)『財界人物読本』経済往来社。(「夢をもつ人出よ 中島久萬吉」、p. 223-235)
- 池田さぶろう (1952)『財界の顔』大日本雄弁会講談社。(「日本貿易会会長 中島久万吉」  
p. 138-139) (永野護、小林中、河合良成ら来る)
- 田村茂撮影 (1953)『現代日本の百人』文藝春秋 (中嶋久萬吉, p. 98 三宅晴輝の紹介文:  
世話役の適任者)
- 読売新聞出版局 (1953)「老人病予防私案一 中島久万吉氏 (80)、日本貿易会会長」『家庭よ  
みうり』363 号, 1953 年 11 月, 読売新聞出版局, p. 10
- 大内兵衛 (1954)「中島久萬吉の文才」『風物・人物・書物』黄土社, p. 156-159. (『信濃  
毎日』1951. 7. 20)
- 人事興信所 (1956)「中嶋久万吉-電気興業会長」人事興信所『財界家系図』, p. 266-267
- 実業の日本 (1957)「酉年 名士番付 大関日本貿易会会長 中嶋久万吉 (八四歳)」『実業  
の日本』1957 年 1 月 p.111
- 栗田勝啓編 (1957)『財界に雄飛せる一橋人』経済談話社, p. 311 (「中島久萬吉 日本工  
業倶楽部会長」、(帝人事件の公判での信用丸潰れ、敗戦の 2 字さえなかったら、郷誠之  
助の後継者、財界世話役頭だった。)
- 高津彦次 (1959)「官場回顧一第 3 回一尊氏論で中島商相辞任一よき時代のよき官僚たち一」  
『人物往来』1959 年 3 月, p. 32-39.
- 日本青年連盟 (1960)「故中嶋久萬吉先生追悼」『Nippon 青年』第 8 巻第 3 号、3 月 25 日発  
行, p. 1-15.
- 大石俊一 (1960)「父子二代三多摩を愛した一 中嶋久萬吉翁」『多摩文化』第 5 巻, 多摩文化  
研究会, 1960 年
- 菅礼之助 (1960)「中嶋久万吉先生を偲ぶ」『経団連月報』第 8 巻第 5 号, 5 月, p. 30-31
- 細野軍治 (1960)「中嶋会長を悼む」『JIFA 日本外政学会ニュースレター』221 号, 5 月 11  
日, p. 6
- 杉本民三郎(同窓会主事) (1960)「中島翁と学院」『明治学院同窓会報第 5 号』(「森田金之  
助 賀川豊彦 中島久万吉 記念追悼号」) 10 月 15 日発行, p. 23-27
- 衆議院・参議院編集 (1960)『議会制度七十年史 貴族院・衆議院名鑑』p. 76 (「中島久萬



- 吉」、明治 32 年三井物産合名会社勤務)
- 人事興信所 (1962)「中嶋精一(株)関東レース倶楽部監査役」人事興信所『財界家系図』, p. 442-443
- 有竹修二 (1965)「実業人政治家 (二八) 中島久萬吉」『国民サロン』2 月, p. 57-63
- 有竹修二 (1965)「実業人政治家 (二九) 中島久萬吉」『国民サロン』3 月, p. 56-63
- 中島久萬吉 (1965)「産業合理化における三大基調」、森川英正解説、『別冊中央公論. 経営問題』第 4 巻第 1 号, 3 月、中央公論社
- 川崎吉蔵 (1967)「おちこちの人<sup>㊤</sup> 山好きの大臣 中島久萬吉」『山と溪谷』343 号, 6 月, p. 119
- 中川敬一郎, 由井常彦 編集・解説 (1970)「中嶋久萬吉編」『財界人思想全集-第 2 巻-経営哲学・経営理念 (昭和編)』ダイヤモンド社, p. 125-158
- 牛山栄治 (1977)「中島久萬吉翁」『修行物語』春風館, 9 月, p.255-267  
(全日本中学校長会会長の牛山の回想談、高い見識の人と評価)
- 週刊読売 (1981)「特別企画ザ・三和グループの研究・鴻池ファミリー」『週刊読売』10 月 11 日 (息子の真吾が十二代目鴻池善右衛門の娘、芳江と結婚し山中家を再興。)
- 戦前期官僚制研究会編、秦郁彦著 (1981)『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会 (閲歴詳しい、「内閣総理大臣秘書官」の任免変遷は p. 288-289)
- 木坂順一郎 (1989)「中島久萬吉」、『国史大辞典』第 10 巻, 吉川弘文館, p. 590。
- 野村英一 (1990)「三田の政治家たち (23) : 中島久萬吉・竹越与三郎」『塾友』(376) 3 月, p. 23-32 (統制経済に執念と評価、明治 17 年慶応義塾幼稚舎に入学)
- 木坂順一郎 (2001)「中島久萬吉」, 臼井勝美・高村直助編『日本近代現代人名辞典』吉川弘文館, p. 745。
- 松山弘志編 (2001)『百五十九人の大臣』, p. 288-291 (「中嶋久萬吉」)
- 秦郁彦編著 (2002)「中島久萬吉」, 『日本近現代人物閲歴事典』東京大学出版会, p.367

### 3. 中島久萬吉の経歴に関連した参考文献・資料

#### 両親

- 昭和女子大学近代文学研究室 (1957)「中島湘煙」『近代文学研究叢書第六巻』昭和女子大学光葉会, p.17-71
- 相馬黒光 (1985)『復刻版 明治初期の三女性—中島湘煙・若松賤子・清水紫琴』不二出版
- 西川祐子 (1986)『花の妹—岸田俊子伝—』新潮社
- 岸田俊子 (1986) 大木基子・西川祐子編『湘煙選集 3, 湘煙日記』不二出版
- 鈴木裕子編 (1986)『湘煙選集 4, 岸田俊子研究文献目録』不二出版
- 横澤清子 (2006)『自由民権家 中島信行と岸田俊子—自由への闘い』明石書店
- 倉間勝義・武蔵野郷土史刊行会 (1977)『多摩の人物史』 (中島信行、民権の理は東洋に

もあり)

## 明治学院

『白金学報』(1905-20) 第5～49号 明治学院同窓会

戸川秋骨(1933)「中島商工大臣を中心に」『都会情景』第一書房, p. 196-202

鷺山弟三郎(1927)『明治学院五十年史』

明治学院編(1977)『明治学院百年史』

中島久万吉(男爵)(1943)「学友島崎藤村を語る」『厚生の日』10月号

中島久万吉(1956)「過去と未来」(耕治人編『白金文学』第1号、2月)

中島久万吉(1959)「学院時代の和田君」『同窓会報第2号』3月10日

足立巻一(1969)『現代日本の文学5 島崎藤村』学研

瀬沼茂樹(1981)『評伝 島崎藤村』筑摩書房

伊東一夫(1998)『島崎藤村研究—近代文学研究方法の諸問題—』明治書院

## 高等商業学校(一橋大学)

島田三郎編著(1913)『矢野二郎傳』矢野二郎翁傳記編纂會。

矢野二郎先生記念計畫委員會編(1913)『矢野二郎先生記念事業記録』如水会。

『東京高等商業學校同窓會名簿』

『高等商業学校一覽』(1897)

株式会社三十四銀行編・発行『小山健三伝』

馬越恭平(大日本麦酒社長)(1929)「本邦商業教育の大恩人-矢野次郎翁の思出」『実業之日本』9月1日号, 第32卷第17号, p. 58-59 (徹心会主催で25年忌会追悼会に300名参加)

杉村敦子編・発行,(1960)『杉村廣蔵博士を憶う』

作道好男・江藤武人編(1975)『一橋大学百年史』財界評論新社

一橋大学学園史編集委員会編・発行(1982)『一橋大学学制資料 第三集 第二卷(明治十九～三十四年 東京商業学校～高等商業学校)』

## 三井物産に明治32年勤務

物産25 「日記 明治32年1月より6月まで」

物産26 「日記 明治32年7月より12月まで」

物産504 「第1号 紹介状 使用人身許引受状:誓約書」

(明治32年2月7日付で矢野二郎(高等商業学校前校長)の紹介状、同日で渡辺亨、江口駒之助が引受人の身許引受状)

若林幸男(2007)『三井物産人事政策史 1876～1931年—情報交通教育インフラと職員組織—』ミネルヴァ書房

## 男爵家、明治 32 年 4 月襲爵、貴族院

- 維新史資料編纂会編 (1982)『華族譜要』1929 年の復刻版 (岩倉家、中島家)  
財団法人岩倉旧跡保存会 (1933)『岩倉公五十年祭紀要』12 月  
西邑木一 (1981)『華族大観』華族大観刊行会、1939 年の復刊 (史籍出版)  
霞会館 (1988)『貴族院と華族』 (公正会、足利尊氏事件)  
尚友倶楽部『その頃を語る：旧貴族院議員懐旧談集』、1990 年  
霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成・下巻』1996 年  
内藤一成『貴族院と立憲政治』思文閣出版、2005 年

## 京釜鉄道

- 信夫淳平 (1901)『韓半島』東京堂書店  
帝国鉄道協会 (1915)『朝鮮鉄道史』(帝国鉄道協会会報第 16 号第 6 巻付録)  
「竹内綱自叙伝」、明治文化研究会編 (1967)『明治文化集』第 25 巻雑史編、日本評論社、  
第 2 版、(初版、1929 年) 所載  
渋沢翁頌徳会 (1937)『渋沢栄一自叙伝』  
渋沢青淵記念財団竜門社編 (1960)『渋沢栄一伝記資料 第 16 巻』渋沢栄一伝記資料刊行  
会  
川上浩史 (1995)「京釜鉄道株式会社の設立と発起委員の活動について」『駒澤史学』48、駒  
澤大学、4 月、p. 23-39

## 古河財閥・古河コンツェルンの形成

*Brief Description of Mines, Copper Works and Coke Manufactory of Furukawa Mining  
Company, 1910, Tokyo, Japan*

“YOKOHAMA DENSEN SEIZO KABUSHIKI KAISHA.” Nishizawa, Iwata, Japan in  
the Taisho Era, In commemoration of the enthronement, 1917, p.169-170

- 五日会 (1926)『古河潤吉君傳』五日会  
薄田貞敬 (1929)『昆田文次郎君の生涯』後昆会 (トップマネジメントチームの中での中島  
の疎外)  
井上馨侯伝編纂会、阪谷芳郎 (1933)『世外公伝 第二巻』  
井上馨侯伝編纂会、阪谷芳郎 (1934)『世外公伝 第五巻』  
古河虎之助君伝編纂会 (1953)『古河虎之助君伝』 (中島の貢献)  
田辺一雄編 (1957)『茂野吉之助伝』茂野吉之助伝刊行会 (中島の序—茂野君のことども  
一、結婚の仲介、娘さんの三緒子さんと世界友の会での縁)  
中川末吉翁記念刊行物編集会編 (1965)『中川末吉』 (中島の貢献、中島の人物像)  
四十年史編纂委員会 (1959)『横浜護謨製造株式会社四十年史』

日本経営史研究所編（1976）『創業 100 年史』古河鋳業株式会社  
日本経営史研究所編（1991）『創業 100 年史』古河電工株式会社  
河野幸之助（1958）『現代人物史伝・菅禮之助』日本時報社（菅禮之助は中島の部下）  
西野入愛一（1937）『日本コンツェルン全集 IX 浅野・澁澤・大川・古河』春秋社  
中外産業調査会編（1937）『中堅財閥の新研究』  
武田晴人（1978）「日露戦後の古河財閥」『経済学研究』第 10 卷 21 号、東京大学経済学研究会  
武田晴人（1980）「古河商事と『大連事件』」『社会科学研究』32 卷第 2 号  
武田晴人（1980）「第一次大戦後の古河財閥」『経営史学』第 15 卷第 2 号  
武田晴人（1987）『日本産銅業史』東京大学出版会  
武田晴人（1992）「古河市兵衛の日光発電所建設計画」『経済学論集』第 58 卷第 3 号、東京大学経済学会

#### 日本工業倶楽部、各経済団体

「財界楽屋（7）日本工業倶楽部（上）」、「同（8）同（中）」、「同（9）同（下）」『朝日新聞』1923 年 4 月 5・6・7 日  
日本工業倶楽部十一年会（1926）『英米訪問実業団誌』[中島が記述]  
日本工業倶楽部（1926）『日本工業倶楽部会員名簿』第九版。  
「日本工業倶楽部の巻」（都新聞社経済部編、『倶楽部めぐり 附・財界犬と猿』倶楽部研究会，1928 年，p.53-117）（中島についても詳しく、和田の後継者として物足りない面）  
「日本工業倶楽部」（報知新聞経済部『財界を牛耳る人々』千倉書房、1931 年、p.162-176.）  
（全国資本家団の参謀本部 労働法案反対）  
日本工業倶楽部（1938）『日本工業倶楽部創立二十年記念会員写真帖』  
日本工業倶楽部（1943）『日本工業倶楽部二十五年史 上・下巻』日本工業倶楽部，[中島が編集委員長]  
日本工業倶楽部二十五年史編纂室『男爵 中島久萬吉氏その他座談会速記』1940 年 9 月 13 日  
日本工業倶楽部二十五年史編纂室『男爵 中島久萬吉氏談話速記』1941 年 6 月 3 日  
堀越禎三編（1962）『経済団体連合会 前史』社団法人経済団体連合会編  
日本工業倶楽部五十年史編纂委員会編（1967）『財界回想録 上・下』東京：日本工業倶楽部  
土屋喬雄監修（1969）『諸井貫一追想文集』秩父セメント株式会社  
日本工業倶楽部五十年史編纂委員会編集（1972）『日本工業倶楽部五十年史』社団法人日本工業倶楽部  
竹内壯一（1975）「日本工業倶楽部設立とその主体」『千葉商大論叢』第 13 卷第 1 号-B（商経編）1975 年 6 月，p.25-49

小島直記（1979）『大過渡期—大正を動かした男たち—（上）』新潮社  
日本経営者団体連盟（1998）『日経連五十年史-本編』日本経営者団体連盟  
正田英三郎小伝刊行委員会（1990）『正田英三郎小伝』日清製粉株式会社

### 澁澤栄一との交友

澁沢青淵記念財団竜門社編『澁沢栄一伝記資料 第16・25・26・29～31・33・  
35～40・42～57・別1～4・別8巻』、澁沢栄一伝記資料刊行会、1955-71年  
白石喜太郎『澁沢栄一翁』刀江書房、1933年（三世話業、その三 日本無線電線会社、そ  
の四 復興建築助成会社）に中島）

### 原敬との交友

原奎一郎編『原敬日記』第2・3・5巻、福村出版、1967年  
原敬文書研究会『原敬関係文書』第1・2・3・10・別巻、1985年

### 国際通運株式会社

中野金次郎編『国際通運株式会社史』1938年11月（昭和3年発足、昭和12年日本通運に  
吸収される）  
村田弘『中野金次郎伝』東洋書館、1957年

### 日本無線電線株式会社・国際電電

電波監理委員会『日本無線史』第五巻（第四編）1951年  
日本電信電話公社電信電話事業史編集委員会『電信電話事業史』第一巻、1959年  
澁沢青淵記念財団竜門社編『澁沢栄一伝記資料 第52巻』、澁沢栄一伝記資料刊行会、1963  
年  
国際電信電話株式会社編『国際電信電話株式会社二十五年史』国際電信電話株式会社、1979  
年  
KDD社史編纂委員会『KDD社史』株式会社KDD Iクリエイティブ、2001年

### 東京湾汽船会社

『東海汽船80年の歩み』1970年4月

### 日本外政学会

日本外政学会『ニューズレター』1954年4月第1号～1960年5月11日、221号

### 国連社

小野敏夫編『国連社15年史』国連社、1966年11月

## 川崎織物

株式会社川崎織物 (1973) 『川崎織物三十五年史』

### 中島の知人・親戚で中島に言及した参考文献

男爵団琢磨伝刊行会『男爵 団琢磨伝』大正 15 年 [中島が編集副委員長]

渋沢正雄「夏の旅の印象-天龍川下り」『実業之日本』1929 年 7 月 1 日号, 第 32 巻第 13 号,  
p.196 (中島男と軽井沢別邸で偶々会って)

喜多貞吉編『和田豊治伝』和田豊治編纂所, 1926 年

小野秀雄・阿部武司・大豆生田稔・松村敏編『実業の系譜 和田豊治日記』日本経済評論社、  
1993 年

郷男爵記念会『男爵郷誠之助君伝』1943 年 11 月

故岩下清周君伝記編纂会『岩下清周伝』大空社, 2000 年 [近藤乙吉発行, 1931 年の復刻]  
(序文を中島が執筆、中島は監修委員の一人、中島の妻八千子の弟の岩倉具光の妻花子は岩下の娘)

庄司乙吉「中島男爵を迎へて」『杜峯戊寅随筆』木下正人, 1938 年, p.30-34

庄司乙吉「中島男爵の詩翰」『杜峯庚辰随筆』木下正人, 1941 年, p.301-315

小金義照(衆議院議員)「尊氏論」『政界往来』22 巻 1 号, 1956 年 1 月, p.174-175

吉野孝一編『膳桂之助追想録』日本団体生命保険株式会社発行、1959 年

木村毅「跋にかえて」(渡辺茂雄『猿翁芸談聞書』1963 年所載)(足利尊氏論を現代に掲載したのは渡辺)

長崎正造『長崎英造遺稿』1965 年 (題字は中嶋が寄稿。後書きに中嶋翁に言及 帝人事件についても言及)

富永能雄、富永能雄文集刊行委員会編『蓮の実：富永能雄文集』蓮の実書院, 1964 年 3 月  
(富永から中島宛書簡「印度副大統領訪日に際して」、昭和 31 年 10 月 3 日)(昭和 6 年  
鞍山製鉄所長の時に中嶋と知り合う、昭和 15 年函館ドック社長)

有竹修二『吉野信次』吉野信次追悼録刊行会、1974 年

鈴木三郎助『遺稿葉山好日』鈴木重明編、日本経営史研究所, 1974 年 (息子和夫が鈴木家に婿養子、50 歳で亡くなった)

鮫島純子『祖父・渋沢栄一に学んだこと』文藝春秋, 2010 年 (父・渋沢正雄と中島が製鉄合同法案が通て、抱き合ったこと、昭和 16 年の純子の結婚式に参列)

### 『産業合理化』関連 (下記と一部重複)

中島久萬吉「臨時産業合理局に就て」『産業合理化 第一輯』日本商工会議所, 1930 年,  
p.21-31.

中島久萬吉「産業合理化における三大基調」『産業合理化 第二輯』日本商工会議所, 1931

年, p.10-40 (同書の中に、「我国の製鉄事業と其の合理化」)  
中島久萬吉「時局対策と産業合理化」『産業合理化 第六輯』日本商工会議所, 1932 年,  
p.1-6.  
中島久萬吉「製鉄合同に関する法案に就て」『産業合理化 第七輯』日本商工会議所, 1933  
年 (p.1-7 同書に日本製鉄株式会社法案などの資料)  
通商産業省編 (1961)『商工政策史 第9巻 産業合理化』  
吉野信次 (1962)『商工行政の思い出—日本資本主義の歩み』商工政策史刊行会。  
吉野信次追悼録刊行会『吉野信次』1978 年  
「第2章中島久萬吉と吉野信次」西山又二『小金義照伝』逋信研究会、1977 年

### 産業合理化、科学的管理

佐々木聡『科学的管理法の日本的展開』有斐閣、1998 年

### 第 65 議会

中村継男述『中島商相を引責せしめたる製鉄合同の真相』〔第六十五議会衆議院本会議速記  
録〕、日本講演通信社、1934 年

### 教育事業

城西学園校史編集委員会『資料城西学園六十年史』1978 年  
(中島が設立者、関係会社の日本運送から資金を提供)

### 帝人事件関連

『帝人公判速記録 第 186~188 号, 昭和 11 年 12 月 5, 8, 10 日』(中島久萬吉氏その 1)  
『帝人公判速記録 第 187~191 号, 昭和 11 年 12 月 12, 15, 17 日』(中島久萬吉氏その  
2)  
専修大学今村法律研究室編 (1993)『帝人事件 (一) 今村訴訟記録 第 17 巻』  
専修大学今村法律研究室編 (1995)『帝人事件 (五) 今村訴訟記録 第 21 巻』  
「聴取書 中島久萬吉」「強制処分請求書 中島久萬吉」  
「訊問調書 中島久萬吉」「第二回聴取書 中島久萬吉」「第三回聴取書 中島久萬吉」  
「第四回聴取書 中島久萬吉」「訊問調書 中島久萬吉」  
専修大学今村法律研究室編 (1997)「(予審)被告訊問調書 第一回~第十六回 中島久萬吉」  
『帝人事件 (十) 今村訴訟記録 第 26 巻』p.1-141  
専修大学今村法律研究室編「中島久馬吉被告事件辯論稿」(1999)『帝人事件 (別巻 1) 今  
村訴訟記録 第 28 巻』  
富永義孝 (1935)『経済眼に視る帝人事件の真相 保険王国秘話』保険春秋社  
和田日出吉 (1935)『人絹』、第一書房

- 野中盛隆（1935）『帝人疑獄真相史』
- 野中盛隆（1938）『帝人を裁く』平凡社
- 野依秀市「無罪となった帝人事件の中島男爵その他は慙死す可し」（1938）、「中島久万吉男は渋沢青淵翁記念会の理事を辞職せよ」（昭和13年2月15日）『真剣勝負』秀文閣書房、p.296-308
- 河合良成（1938）『帝人心境録』アジア書房
- 河合良成（1969）『明治の一青年像』講談社
- 河合良成（1970）『孤軍奮闘の三十年』講談社
- 河合良成（1970）『帝人事件:三十年目の証言』講談社
- 前島省三（1955）「帝人事件とその後景」立命館法學（11）、立命館大学法学会、1955年6月、p.85-117
- 小島直記（1963）「第5章帝人事件」『株式会社物語 第3』河出書房新社、p.141-175
- 有竹修二（1965）「番町会と帝人事件」『別冊中央公論、経営問題』4(3)、9月、p.341-351、中央公論社
- 御手洗辰雄『伝記 正力松太郎』大日本雄弁会講談社。
- 大島太郎（1970）「帝人事件—商習慣を守った異色の判決—」我妻栄編『日本政治裁判史録 昭和・後』、第一法規出版、p.52-94
- 石田和外・野村二郎（1978）「石田和外氏に聞く-上-帝人事件裁判の思い出(法曹あの頃-30-)」『法学セミナー』（278）、p.34-38、日本評論社、1978-05
- 河井信太郎（1979）『検察読本』商事法務会
- 駄場裕司（1999）「帝人事件から天皇機関説事件へ—美濃部達吉と「検察ファッション」」『政治経済史学』1999-01（389）、p.1-21、日本政治経済史学研究所、
- 筒井芳太郎（1957）『武藤山治伝・武藤絲治伝』東洋書館
- 有竹修二（1962）『武藤山治』、時事通信社
- 入交好脩（1964）『武藤山治』、吉川弘文館
- 澤野廣史（1998）『恐慌を生き抜いた男—評伝・武藤山治』新潮社
- 松田尚士（2004）『武藤山治と時事新報』国民会館叢書53
- 小林中追悼録編集委員会編・発行（1982）『追悼 小林中』
- 阪口昭（1985）『寡黙の巨星：小林中の財界史』日本経済新聞社、

#### 4. 中島久万吉の戦前期の著作（経済・企業・労働・政治・地理関係）

（皓星社『明治・大正・昭和前期 雑誌記事索引集成』（120巻）、『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』（1993年）、復刻版『サラリーマン』などより）

#### 明治34（1901）年

中島久萬吉 序（信夫淳平『韓半島』東京堂書店1901年所載）



#### 明治 41-43 (1908-1910) 年

中島久萬吉 (古河鋳業商務課長) 「銅の前途」『實業俱樂部』第 6 卷第 4 号、1908 年

中島久萬吉 (古河鋳業会社商務課長男爵) 「水電の発達に伴う今後の有望事業」『商業界』  
第 13 卷第 5 号、1910 年 p.49-51

中島久萬吉 (古河鋳業会社商務課長男爵) 「当然起こすべき有望なる事業」『時事評論』5(5),  
1910 年, p.39-40

#### 明治 44 (1911) 年

中島久萬吉「余の見たる桂公の腹藝」『実業之日本』第 14 第 21 号、1911 年 10 月, p.145-148

#### 大正 6 (1917) 年

中島久萬吉 (男爵) 「支那國民其自奮」, 中国実業雑誌社編集部『他山百家言』上卷 3, 中国実業雑誌社所収, 1917 年, p.54-55.

#### 大正 7 (1918) 年

中島久萬吉 (男爵) 「工業独立の根本問題」『実業公論』第 4 卷 1 号, 1918 年 1 月 10 日,  
p.16-18 (不言実行は吾が主義也, 工業立国とは何ぞ耶, 来る可き工業的革命, 産業上の  
日支提携)

中島久萬吉 (男爵) 「工業立国と日支共同」『日本乃関門』第 3 卷, 36 号, 1918 年 9 月号,  
下関市; 日本之関門発行, p.15-17

中島久萬吉「資本と労働との調節に就て」(大正七年十一月一日於帰一協会社会政策研究会  
席上)『中島久萬吉演説速記』

中島久萬吉(東洋製鉄株式会社専務取締役男爵)「寧ろ憂ふべきは徴兵後の軍事的占拠問題」  
『実業之日本』第 21 第 23 号、1918 年 11 月, p.26-28

#### 大正 8 (1919) 年

中島久萬吉談 (東洋製鉄専務) 「鉄の自給自足、大合同と保護」『中外商業新報』1919 年 1  
月 3 日

中島久萬吉「職工教育に關する道德的意義」[演説筆記]、1919 年  
[大正 8 年 7 月 16 日東京府工場主懇話会に於る]

中島久萬吉演; 田邊恒之編「利益分配としての持株制度の一例」『職工問題資料; A310』工業  
教育會, 1919.4, 11p.

中島久萬吉「労資協同実現の二大方針」『実業之日本』第 22 卷第 18 号, p.33-36. 1919 年 9  
月 1 日号, 実業之日本社, (労資協同実現の具体化号)

Baron K. Nakashima, "Development of Japan's Iron Industry – Great Progress Made

Despite Meager Deposits and Many Difficulties”, *The Tans-Pacific*, 1919, October, Vol.1, Number 2,

#### 大正 9 (1920) 年

中島久萬吉 (横浜電線株式会社社長男爵) 「今後の不景気襲来を警む」『実業之日本』第 23 卷第 9 号, 1920 年 5 月 1 日号, p.20-21(『財界の不況が物価に及ぼす影響の (六)』)

中島久萬吉 (東洋製鉄株式会社専務取締役) 「不景気の第一歩」『財政と経済』第 4 卷第 6 号, 1920 年 6 月号, 財政経済社, p.22-23

中島久萬吉 (日本工業倶楽部理事男爵) 「是非共削減を要する重大項目」『実業之日本』第 23 卷第 14 号, 1920 年 7 月 15 日号, p.11-16 (『臨時議会重要議題、新所得税法の可否論の (三)』)

#### 大正 10 (1921) 年

中島久萬吉 「関税問題の根本義 (1)、(2)、(3)、(4)」『東京朝日新聞』1921 年 8 月 28 日、10 月 30 日、10 月 31 日、9 月 2 日

#### 大正 11 (1922) 年

『内外物価政策論 / 中島久萬吉演説』1922 年

[大正 11 年 7 月 5 日大阪商業会議所主催の大阪公会堂における演説速記と 7 月 21 日立憲政友会東京本部における演説速記を増補したもの、物価調節、生産政策]

「近代教育運動の基調」中島久萬吉演説筆記、大正 11 年 5 月 30 日、(大日本国防義会大会において)

「独逸の国民経済と賠償金問題」中島久萬吉演説筆記、大正 11 年 5 月 15 日、(商工懇親会歓迎会席上において)

中島久満吉 「日獨合資事業に就て」『経済時報』第 22 卷, 5 月号, 215 号、経済新報社, 1922 年, p.11-12

中島久萬吉 (貴族院議員男爵) 「物価政策と国民教育問題」『大阪商業会議所月報』7 月号, 第 183 号, 1922 年 8 月 p.1-13 (7 月 5 日、中央公会堂、欧米訪問実業団講演会)

中島久萬吉 (男爵) 「独逸賠償問題と我経済界」『日本乃関門』第 7 卷, 85 号, 1922 年 8 月号, 下関市; 日本之関門発行, p.12-13

中島久萬吉 (男爵) 「近代教育運動の基調」『文明協会講演集 第六』1922 年 8 月, 大日本文明協会, p.1-20

- (1.欧米国民生活の緊張 2.欧米国民教育の刷新 3.国際教育の計画 4.学校教育の改善策 5.日本に於ける教育の現状 6.近代教育運動の基調 7.近代教育の目的
- 8.英国青年教育の発達の要素 9.労働階級に対する教育 10.英国青年教育の機関
- 11.労働組合の教育機関 12.文化の発達に資する教育)

中島久萬吉（男爵）「国民生活革新の一大問題 物価政策と消費組合」『実業之日本』第 25 卷第 13 号, p.23-28

「物価政策と消費組合の発達」中島久萬吉演説筆記、1922 年

中島久萬吉「独逸国民経済と賠償金問題」『大日本山林会報』第 477 号、1922 年, p.1-17

中島久萬吉「独逸の現状と賠償金問題」『大横浜』第 19 卷第 8 号, p.31- 35. (未完)

中島久萬吉「最近教育運動の基調と労働者教育」『社会政策時報』第 28 号、協調会発行、1922 年.

中島久萬吉「世界経済の復活と独逸賠償問題」『国際連盟』第 2 卷 8 号、1922 年.

中島久萬吉（貴族員議員）「運輸政策及生産政策—物価問題の考察—」『鉄道』第 196 号、1922 年、10 月号、鉄道共攻会, p.23-32

#### 大正 12 (1923) 年

中島久萬吉君（男爵）「ピックアップ」『読売新聞』1923 年 6 月 5 日（電気代の高い理由、金利が高い理由）

中島久萬吉男談「連立は変態だ」『読売新聞』1923 年 6 月 5 日（加藤子爵の連立内閣に対して批評）

中島久萬吉『核心之問題』1923 年 8 月 20 日（非売品）

中島久萬吉男談「山本内閣と財界、国民経済の安定」『読売新聞』1923 年 8 月 30 日

中島男爵祝辞「演説」『商士 市邨先生寿像除幕式記念号』200 号、市立名古屋商業学校商友会内市邨先生銅像建設会、1923 年, p.11-13

#### 大正 13 (1924) 年

中島久萬吉「予の推奨する事業と人物： 三、電磁機工業の時代」『太陽』第 30 卷第 5 号、1924 年, p.14-15

中島久萬吉（古河電気工業会社社長）「生産国策に就て」『工業評論』10(6), 大坂：工業評論社, 1924 年 6 月, p.60

中島久萬吉（男爵）「旅のはなし」『読売新聞』1924 年 7 月 23 日～24 日（マレーシアに明治 45 年 7 月に訪問、車が故障して命懸けで帰った話、明治天皇ご大患の報に接する）

中島久萬吉「貴族院改革の目標（上）（中）（下）」『大阪朝日新聞』1924 年 8 月 8 日、9 日、10 日

中島久萬吉談「鉱山労働扶助問題（一）」「改正されんとする労働扶助之を如何にすべきか（二）～（五）」『中外商業新報』8 月 13 日～17 日（内務省社会局参与、春に筑豊炭山を視察）

中島久萬吉「浜口蔵相の人物、力量と財政観： 軍事費の大節減が最大使命」『太陽』第 30 卷第 10 号、1924 年, p.31-32

## 大正 14 (1925) 年

- 中島久萬吉「工業家としての我が所感」『東京商科大学創立五十周年記念講演集』1925年
- 中島久萬吉『消費経済論』印刷者、上村新輔；印刷所、株式会社博聞館印刷所，1925年7月20日発行、著作兼発行者・中島久萬吉（非売品）108p（「はしがき」は「消費経済は生産経済の先決問題」、本文は「消費経済論（1－4章）」，大正十三年晩秋、某所において講演したもの）
- 中島久萬吉（設立副委員長 男爵）「日本無線電信株式会社事業計画及収支計算の内容に就て」（演説速記）【洪第52巻，p.88-97】

## 大正 15・昭和元 (1926) 年

- 中島久萬吉男「失業者溢るる日本に人材欠乏、人材登用の必要力説さるる」『一橋新聞』1月1日
- 中島久萬吉氏（男爵）「首相の逝去を中心とする政界の変動と経済界、各方面の希望と観測」  
「財界は無影響か」『読売新聞』1926年1月29日（加藤首相の死後、経済界に影響なし）
- 中島久萬吉『米國実業家の団体的行動：全米製造業者協會（The National Association of Manufacturers）』1926年4月17日，非売品
- 中島久萬吉「」『工業』創刊号，大阪工業会
- 中島久萬吉「我が実業家に必要とする団体的行動」『工政』（80）工政会，1926年7月号，p.14-18
- 中島久萬吉（男爵）「運送業合同問題解決策」『実業』9(4)，1926年10月実業社，p.12-16
- 中島久萬吉『運送業合同問題に就て』1926年9月1日，p.18（冊子）（愛知大学所蔵、名古屋市舞鶴図書館所蔵）（『実業』9(4)と同一の内容、最後の数行付加されている）
- 中島久萬吉「経済随想 工業の田園化」『朝日新聞』1926年10月27日（合同運送会社社長に内定）
- 中島久萬吉「消費経済は生産経済の先決問題」『統計集誌』第542号、1926年.
- 中島久萬吉「消費経済論（上、中、下）」『龍門雑誌』第448-450号、1926年
- 中島久萬吉「消費経済は生産経済の先決問題」『龍門雑誌』第451号、1926年
- 中島久萬吉「消費経済論（上）」『統計集誌』第544号、1926年

## 昭和 2 (1927) 年

- 中島久萬吉「消費経済論」『統計集誌』第546号、1927年.
- 中島久萬吉（日本工業倶楽部専務理事・男爵）「米國企業家団体の組織及運動 - 全米製造業者協會」『工場研究』第32号、1927年，兵庫県工業懇談会（26年の翻訳部分と同一）
- 中島久満吉（男爵）「誰が蒔いたか争議の『タネ』」『労資協調の方策』東京大勢出版社，1927年，p.128-130

#### 昭和3(1928)年

中島久萬吉ほか「御大典記念事業には何がよいか—商工博物館 男爵中島久萬吉」『実業之日本』第25第11号、1928年8月、p.65 (p.60-65に特集記事、70人の名士から意見)  
中島久萬吉ほか「渋沢子爵米寿記念座談会」『実業之日本』第31巻第19号、1928年10月  
中島久萬吉(男爵)「社会問題解決の一策 消費組合に就いて」『実業時代』第5巻第1号、1928年11月、p.10-11

#### 昭和4(1929)年

中島久萬吉(男爵)「金の輸出解禁は尚早」『ビジネス』第2巻第2号、1929年2月号、東京時事通信社、p.2-3  
中島久萬吉(商工審議会第三特別委員長男爵)「中小商工業者の金融を円滑便利にするには—まづ組合制度を發達させよ」『実業之日本』1929年6月15日号、第32巻第12号、p.29-31  
中島久萬吉「庶民金融と産業組合」『庶民金融』第5巻8号、1929年9月、p.2-3.  
中島久萬吉「新平価・即時解禁がよろし」『サラリーマン』第2巻第11号、1929年、p.39-43.  
中島久萬吉「英雄肌の人」(鶴友会編『鶴翁余影』鶴友会、p.51-52)

#### 昭和5(1930)年

中島久萬吉「中島久萬吉氏(貴族院議員・男爵)」相馬半治『還暦小記余録』相馬半治編、1930年、p.91-92 (昭和5年6月5日)  
中島久萬吉「中小商工業者金融改善に関する建議—十九. 中島久萬吉氏の中小商工業者金融改善意見」日本商工会議所『調査資料.19』1929年6月(昭和4年9月1日発行の『庶民金融』第5巻8号に掲載の意見の要点)  
中島久萬吉「世界經濟の行詰りと産業合理化の意義」『中外財界』第5巻第7号、1930年  
中島久萬吉「産業合理化と景気」『經濟往来』第5巻11号、1930年  
中島久萬吉「内外經濟時局の研究」『保險評論』第23巻6号、1930年  
中島久萬吉「内外經濟時局の研究」(6号の接)『保險評論』第23巻8号、1930年  
中島久萬吉「「合理化」は「金解禁」の後始末に非ず—世界的不景気の根本的事情・第2の産業革命に就て」『サラリーマン』第3巻第9号、1930年、p.17-31.  
中島久萬吉(貴族院議員)「不景気は如何なるか(一)」『庶民金融』第6巻18号、1930年9月、p.3.  
中島久萬吉(貴族院議員・合理局顧問)「不景気は如何なるか(四)」『庶民金融』第6巻19号、1930年10月、p.5-6  
中島久萬吉(貴族院議員男爵)「現下の經濟時局並に其の対策」『有終』17(12)、205、海軍有終会、1930年12月、p.16-31 (10月11日講演)

#### 昭和6(1931)年

- 中島久萬吉「臨時産業合理局の事業に就て」『銀行通信録』第 539 号、1931 年
- 中島久萬吉「臨時産業合理局の事業に就て」『産業合理化』第 1 号、1931 年
- 中島久萬吉『産業合理局の事業』横浜商工会議所、1931 年
- 中島久萬吉「産業合理化に於る三大基調」『産業合理化』第 2 号、1931 年
- 中島久萬吉（産業合理局顧問男爵）「産業合理化の三大基調」『講演集 第 250 号』、大阪市講演同好會、1931 年 4 月 10 日（3 月 28 日大阪商工会議所で講演）
- 中島久萬吉「生産管理の改善に関する中央機関の設立に就て」『工場研究』第 74 号、1931 年
- 中島久萬吉「我国工業の合理化に就て」『工政』（141）工政会、1931 年 10 月号、p.1-6  
（9 月 19 日長岡市、第 7 回全国工業家大会の講演）
- 中島久萬吉「蘇連邦五箇年計画の真相」『大日』第 13 号、東京：大日社、1931 年、p.11-19
- 中島久萬吉「ソヴィエト露西亜の五ヵ年計画の驚異的成功」『サラリーマン』第 4 卷第 7 号、1931 年、p.9-16.
- 中島久萬吉「世界を震撼するソヴィエト露西亜の「計画経済」の実際と・その人間的方面に就いて」『サラリーマン』第 4 卷第 10 号・11 号、1931 年、p.29-35.
- 中島久萬吉（男爵）『ロシアの他の半面：世界を動かすロシアの計畫経済の実際とその人間的方面に就て』（時事講座、第 1 輯）サラリーマン社、1931 年 11 月、p.71
- 中島久萬吉「ロシアの産業五ヶ年計畫」『経済研究叢書；第 26 輯』日本工業俱樂部經濟研究會、1931 年、p.96
- 中島久萬吉「臨時産業合理局顧問としての経験から」『経済連盟』1 卷 1 号、1931 年 11 月

#### 昭和 7（1932）年

- 中島久萬吉「再び臨時産業合理局顧問としての経験から」『経済連盟』2 卷 1 号、1932 年 1 月
- 中島久萬吉「世界経済の趨向と露西亜の五箇年計画」『ダイヤモンド』第 20 卷第 1 号、1932 年 1 月
- 中島久萬吉「産業合理化の諸問題」『経営學論集』Vol.6(1932 年 9 月 15 日)（産業合理化と失業）日本経営学会編、pp. 69-81
- 中島久萬吉「臨時産業合理局顧問としての余の経験」『社会政策時報』第 136 号、1932 年 1 月
- 中島久萬吉「時局対策と産業合理化に」『産業合理化』第 6 号、1932 年
- 中島久萬吉「我國工業の合理化に就て」『工政』第 141 号、1932 年
- 中島久萬吉「円価安定の方法に就て」『保険金融』第 9 卷第 6 号、1932 年
- 中島久萬吉（産業合理局常任顧問男爵）「円」の安定に就て『東京工場懇話会会報』第 64 号、1932 年、p.2-9（英国のケーンズ教授の景気不景気循環の理について）
- 中島久萬吉「統制経済」『経済連盟』第 2 卷第 6 号、1932 年 12 月

中島久萬吉「満州新国家と極東経済ブロック」『社会政策時報』第140号、1932年5月

中島久萬吉（商工大臣 男爵）「題字（自作の漢詩，筆字）」聯合情報社編集部編『保険美談死線突破記』聯合情報社所収，1932年

中島久萬吉（商工大臣男爵）述「当面の問題五六」社団法人大阪経済会，1932年，19p.（商工大臣就任後の歓迎会、1932年6月23日、大阪クラブにて）

中島久萬吉（商工大臣 男爵）「中小商工業の救済と工業の統制実現」『中外財界』7(6)中外商業新報社、1932年6月，p.14-15

中島久萬吉（商工大臣）「中小工業者救済の根本策」『京都の実業』第3巻第8号，京都の実業社，1932年8月1日

中島久萬吉（商工大臣男爵）「茶の貿易の過去及将来」『茶業界』27（7）静岡県茶業組合連合会議所，1932年7月号，p.7-11（6月2日JOAKでラジオ放送）

中島久萬吉閣下（商工大臣男爵），揮毫「彩美 昭和壬申七孟夏 竹潭中島久萬吉」，稻西合名会社編，『染織之流行』第14巻第9号，菱山相互会，1932年9月

中島久萬吉（商工大臣）題字「粧美 昭和壬申七初秋 竹潭中島久萬吉」『東京小間物化粧品名鑑』東京小間物化粧品商報社，1932年

中島久萬吉（商工大臣）「中小商工業者厚生之途」『民政』6（非常時議会号），民政社，1932年9月，p.10-11

中島久萬吉「燃料問題に就て（十周年記念大會講演録）」『燃料協會誌』第11巻，第122号（1932年11月）pp.153-155，社団法人日本エネルギー学会

中島久萬吉（商工大臣男爵）「日満経済の創刊を祝して」『日満経済』創刊号、1932年11月

中島久萬吉（商工大臣）「日本の燃料問題輸入石炭三十六割増 - 斯界に及す撫順炭の影響」『満州日報』1932年11月4日

中島久萬吉「時局の政治と経済を説く - 一橋講堂最初の講演 - 産業合理化より統制経済へ - 中島商相の力説」『一橋新聞』第163号、1932年11月11日

#### 昭和8（1933）年

中島久萬吉（商工大臣）「産業経済の維持確立を樹つ」『新名古屋』第8巻1月号，1933年1月，p.7-8

中島久萬吉「産業統制と日満ブロック提唱」『工場世界』第14巻第1号、1933年1月、p.43-45.

中島久萬吉（商工大臣）「我が経済界前途悲観の要なきも眩惑陶醉は禁物」『日本化学工業新聞』第17年（1），日本化学工業新聞社，1933年1月15日，p.16

中島久萬吉（万国婦人子供博覧会副総裁・商工大臣男爵）「消費経済の合理化」『工政』（156）工政会，1933年3月号，p.3-4

中島久萬吉「中島商相と国際通商の危機を語る会／中島久萬吉；前田蓮山；錦織晃；木舎幾三郎」『政界往来』4(7)1933年，p.32-41（協定の途如何、政治的感情はまじらぬ、

- 世界を覆ふ国民主義の風潮、満州に於ける工業の特異性、報復関税の効果はない、印綿と労働組合の関係、世界経済会議の先決問題、軍縮会議と並行せねば駄目だ、日米貿易の前途は悲観せぬ、石油国策樹立の急務、日満経済ブロックに於ける理想)
- 中島久萬吉(商工大臣男爵)「現前の眩惑陶醉は禁物」『経済知識』第9巻第2号、インフレ反動警戒他、後藤登喜男編、経済知識社、1933年2月、p.11-13
- 中島久萬吉(商工大臣男爵)「インフレ実行期の我財界」『経済知識』第9巻第5号、「インフレ実行期の景气」特集)、後藤登喜男編、経済知識社、1933年5月、p.42-45。(記者との対談)
- 中島久萬吉「貿易制限関税休日問題と日本」『経済知識』第9巻第6号、1933年6月、p.46-53
- 中島久萬吉「経済会議と世界景気の動向」『経済知識』第10巻第1号、1933年7月、p.34-38.
- 中島久萬吉「産業統制に就て」『日本計画経済』第2巻第4号、1933年 特集記事
- 中島久萬吉「世界経済会議に就て」『日満経済』第2巻第6号、1933年
- 中島久萬吉「製鉄合同に関する法案に就て」『産業合理化』第7号、1933年
- 中島久萬吉「本邦輸出工藝の振興に就いて」『新工藝』第1巻第2号、1933年
- 中島久萬吉「為替対策とインフレーションの効用」『サラリーマン』第6巻第1号、1933年、p.13-15.
- 中島久萬吉「世界経済会議に課せられた四つの問題」『サラリーマン』第6巻第5号、1933年、p.26-27.
- 中島久萬吉「最近経済界の諸問題」『国際評論』2(8)、日本外事協会、1933年8月、p.30-43  
(インド関税引上問題、為替問題及世界経済会議に就て、産業統制問題に就て)
- 中島久萬吉氏(商工大臣 男爵)「祝辞」,「揮毫:筆有精神」北陸タイムス社編、『現代名士の揮毫 北陸タイムス二五周年記念』北陸タイムス社、1933年
- 中島久萬吉『製鉄事業の合同と統制経済』(経済倶楽部講演. 32) 東洋経済出版部、1933年 p.22
- 中島久萬吉(商工大臣)『経済的国民主義と工業の田園化』(民衆文庫,第81篇) 社会教育協會、1933年11月2日,p.30
- 中島久萬吉(商工大臣男爵)「国家総動員と産業人の覚悟」, 渡邊茂雄編『熱烈火を吐く時局大熱論集-敢て九千萬同胞に訴ふ』,『現代』第14巻第4号付録』大日本雄弁会講談社、1933年4月、p.227-238
- 中島久萬吉(商工大臣男爵)「國家總動員と産業人の覺悟」大日本雄弁会講談社編『現代名家大演説集』大日本雄弁会講談社、1933年所収、p.74-84 (『現代』第14巻付録『熱烈火を吐く時局大熱論集 敢て九千萬同胞に訴ふ』 所載と同一の文章)
- 中島久萬吉(商工大臣男爵)「国防と工業」(堤耕作編『国防第一主義は工業界にどう響くか』 1933年12月、日刊工業新聞社、p.13-14)(官軍側10余名、工業各部門会社側70余名、その他「国防と工業を語る」座談会(大企業15氏))
- 中島久萬吉閣下(商工大臣男爵)題字「市民常所貨 昭和癸酉八年夏 竹潭中島久萬吉」,



西村徳蔵編、大阪乾物商同業組合『大阪乾物商誌』1933年所載

#### 昭和9(1934)年

中島久萬吉「インフレーションとデフレーション上、中、下の1、下の2」『東京朝日新聞』  
1934年 1月1日、5日、10日、11日

中島久萬吉(商工大臣)「現下に於ける国際情勢と我対外貿易」『ワット』7(1), ワット社,  
1934年1月, p.40-41.

中島久萬吉(商工大臣男爵)「永遠の策を樹立し自力更生の時—国民経済の健全なる発達に  
は財界各方面協調の精神が必要」『工業評論』20(1), 大坂:工業評論社, 1934年1月,  
p.6

中島久萬吉(商工大臣)「田園の工業化」『日本化学工業新聞』第18年(1), 日本化学工  
業新聞社, 1934年1月 p.2-3

中島久萬吉「工業の田園化を提唱す」『現代』1934年正月号

中島久萬吉(前商工大臣)「全面的な統制経済へ残るは金融の分野」『工業評論』20(2), 大坂:  
工業評論社, 1934年2月, p.45-46

中島久萬吉(前商工大臣 男爵)「『日本の田熊翁』序文」(昭和8年12月), 河村直編『超科  
学发明家日本の田熊翁』发明興業館所収, 1934年, p.3-4.

中島久萬吉(商工大臣)「輸出統制急務」『経済知識』第11卷2月号, («輸出統制か自由放  
任か朝野両論に分る我貿易景气確立策」(財界大学))1934年, p.10-11.

中島久馬吉(前商工大臣)「論説 第二産業革命の特徴」, 帝国地理歴史協会編『地理と歴  
史』6卷5号, 64号, 正光社出版部, 1934年 p.1-3

#### 昭和11(1936)年

中島久万吉閣下(商工大臣)「来賓祝辞—時代の要求に適合す」(1934年2月4日)電球硝  
子産業協力委員会『我国中小工業の経営と産業協力運動』1936年, p.26

中島久萬吉(貴族院議員男爵)「経済的国家主義の台頭と輸出振興の諸施設」(浜田徳太郎  
編『日本貿易協会五十年史』1936年, p.360-366) [序言1935年, 10月, 本文1932年7  
月11日, 日本貿易協会講演会]

#### 昭和15(1940)年

中島久萬吉(男爵)「日本醤油の焼跡買収」大林芳五郎傳編纂會『大林芳五郎伝』1940年

#### 昭和16(1941)年

中嶋久萬吉(社団法人日本貿易協会会長 男爵)「就任のことば」『貿易』第41卷第2号,  
1941年2月 (台湾研究古籍史料庫)

中嶋久萬吉「蕉翁蹤跡雜吟」『貿易』第41卷第3号, 1941年3月 (台湾研究古籍史料庫)

## 昭和 17 (1942) 年

中島久万吉 (男爵) 「磯村さんを憶ふて」北海道炭鉄汽船株式会社編『磯村豊太郎伝』1942年 p.32-36

## 昭和 18 (1943) 年

中島久萬吉 (大東京緑地協会会長男爵) 「防空空地と大東京緑地協会の使命」『公園緑地』第7巻第4号, 1943年6月号, p.4-5

## 5. 中島久万吉の戦後の著作 (経済・企業・その他)

中島久万吉 「炉辺放談 日本経済を救う道」『実業之日本』1948年2月, 第51巻第4号, p.14-16

中島久万吉 「貿易管見 アメリカに望むもの」『実業之日本』1948年10月, 第51巻第19号, p.13

中島久万吉 (貿易会会長) 談 「日本貿易界に与う」『読売新聞』1948年4月27日, 朝刊2面

中嶋久萬吉 「日本経済の建直し」『丸』1(7), 潮書房, 1948年9月, p.20-23

(半病人の日本経済、外貨による輸血が必要、政治的ストは外貨導入を疎害、日本は平和的工業立国)

中島久万吉 (前商工大臣) 「国際経済の前途」『先見経済』(22), 1948年12月, p.2-5

中嶋久萬吉 (社団法人日本貿易会会長) 「ばつ文」(1949年8月15日) 通商産業省編『通商白書昭和24年』, p.87 (貿易再開2周年目)

中嶋久万吉 (日本貿易会々長) 「財界放談」『証券』第1巻第1号, 第3号, 1950年1月, p.43-45  
K. Nakashima (President: Japan Trade Society), "A Short History of Japanese Foreign Trade," 日本貿易博覧会『貿易と産業: Japan foreign trade fair Yokohama. 1949』日本貿易博覧会, 1950, p.A27-A40.

中島久万吉 (日本貿易会会長) 「日本貿易小史」日本貿易博覧会『貿易と産業: Japan foreign trade fair Yokohama. 1949』日本貿易博覧会, 1950, p.B15-B24

中島久萬吉 「世界貿易の基調を正せ」『経営者』第6巻第4号 日本経営者団体連盟出版部, 1952年4月, p.28-30

中島久万吉・長崎英造・飯田清三 「日本経済とデモクラシー(鼎談)」『パブリックリレーションズ』第3巻第11号, 1952年1月, p.8-12

中島久万吉 「日本再建の道」『経済時代』第18巻第1号, 1953年1月, p.40-43

中島久万吉 「我が国貿易の前途」『産業と経済』第7巻第5号, 1953年5月, p.12-15

中島久萬吉 序文 (柴垣隆『世界は一つ』日本経済新聞, 1955年, p.4-8)

中嶋久萬吉 (社団法人ライフ・エクステンション倶楽部 名誉会長) 「高齢医学の発刊に際

して』『高齢医学』第1巻第1号, 1957年, p.1.

中島久萬吉「序 一茂野君のことども一」(『茂野吉之助』茂野吉之助伝刊行会, 1957年3月, p.1-5) (世界友の会のことなど)

中島久萬吉ほか「座談会～第一線の高齢者に聞く一私達の日常生活: 中嶋久万吉; 下村宏; 一松定吉; 安藤画一; 倉内喜久雄; 村江則忠」『高齢医学』1(2), 1957年4月, ライフ・エクステンション研究所, p.48-53 (昭和32年3月13日午後2時から5時, 永寿病院会議室)

中島久万吉「産業合理化における三大基調」, 森川英正 [解説] 『別冊中央公論, 経営問題』第4巻第1号, 1965年3月, 中央公論社

(故) 中嶋久萬吉「老いることは難し」『永寿病院十年の歩み』永寿総合病院, 1966年, p.6 (昭和32年1月発行のLEC月報の投稿から転載)

## 6. 全日本中学校長会の機関誌『中学校』の中島の著作・関連記事

中島久万吉「教育に望むもの」『中学校』2, 1953年3月号, p.2-10 (2/20 工業倶楽部で牛山栄治が中島から聞きとった前後4時間の談話を筆記したもの)

中島久万吉(日本青年連盟会長)「新しい精神文明の建設と教育者」『中学校』10, 1954年1月号, p.2-13 (53年末新潟県互尊社、54年新宿区西戸山中学校での中島の講演の大意)

牛山栄治「千利休」『中学校』1954年6月号, p.30-35 (中島から聞いた話として、楽焼茶椀と利休の死について)

中島久万吉「この世界を何と見る」『中学校』23, 1955年2月号, p.2-15 (仏舎利塔の写真あり、54年11月19日秋田県庁での講演録)

牛山栄治「高尾山の仏舎利塔」『中学校』35, 1956年2月号, p.2-15

中島久萬吉(日本工業倶楽部評議会会長・世界仏心連盟会長、日本青年連盟会長、世界友の会会長)「宗教教育の振興に待つのみ」『中学校』42, 1956年9月号, p.2-9

中島久万吉(日本工業倶楽部評議会会長)「人間生活の行き詰りと新教育の道」『中学校』49, 1957年5月号, p.2-7

中島久万吉「新春清語」『中学校』65・66号, 1959年1月, p.2-5 (1月4日の牛山が中島邸を訪問して聞き取った内容。)

## 7. 日本青年連盟の機関誌『Nippon 青年』の中島の著作・関連記事

1953 (昭和28) 年

中島久万吉ほか「中島会長を囲んで・若き日の思い出をきく」『につぼん青年』第1巻第1号, 1953年3月15日, p.2-3 (植林事業＝青年指導)

中島久万吉ほか「青年と政治を語る座談会」『につぼん青年』第1巻第2号, 1953年4月15日, p.2-5

中島久万吉「青年と語る」(秋田県本荘町協議会での講演要旨) 『につぼん青年』第1巻第3

号、1953年5月15日、p.2-3

中島久萬吉「唐人お吉の話」『につぼん青年』第1巻第4号、1953年6月15日、p.3

中島久萬吉「祖国愛」『につぼん青年』第1巻第5号、1953年7月15日、p.1

中島久萬吉「ヒューマティック」『につぼん青年』第1巻第5号、1953年7月15日、p.3

大川周明「欣喜無上」同号、(中島会長の5月号の記事を読んでの手紙)

中島久萬吉「わたしの登山」『につぼん青年』第1巻第6号、1953年9月1日、p.5

中島久萬吉「金原明善翁のこと」(40年前に天龍運輸会社に関係したこと)『につぼん青年』第1巻第7号、1953年10月1日、p.5

中島久萬吉「澄んだ鐘の音」(近江兄弟社、一燈園で一泊、久しぶりに西田天香さんに会う)『につぼん青年』第1巻第8号、1953年11月1日、p.3

中島久萬吉「陶庵公の肚」(西園寺公が歌舞伎俳優を招いたこと)『につぼん青年』第1巻第9号、1953年12月1日、p.3

#### 1954 (昭和29) 年

中島久萬吉「青年は何を学ぶべきか-世界情勢から-日本青年連盟会長中嶋久萬吉先生にきく」『につぼん青年』第2巻第1号、1954年1月1日、p.2-3

「碧巖録出版記念会の記」(1953年12月26日、小倉正恒、河合良成、安岡正篤、朝比奈宗源らがお祝いの言葉)同号、1954年1月1日、p.10

中島久萬吉「出世の手鉢—徒歩旅行の思い出—」『につぼん青年』第2巻第2号、1954年2月1日、p.3

前田典夫(53年に京都大学卒、京都で連盟主催の指導者協議会に出席)「中島先生の世界史の完成を期待す」同号、p.5

「中島会長の告辞」(1月8日山形県にて)同号、p.6

中島久萬吉「青年は何をなすべきか」(写真いり)『Nippon 青年』第2巻第3号、1954年3月1日、p.2-3

中島久萬・新木栄吉(駐米大使)「対談 議会に祈る心、あめりか土産話」

中島久萬吉「死の灰を前にして」(写真いり)『Nippon 青年』第2巻、4・5月合併号、1954年5月1日、p.2-3

中嶋久萬吉「世界政府の建設」(写真いり、座って)『Nippon 青年』第2巻、6月号、1954年6月1日、p.2-3

中嶋久萬吉「檜の精」(林学博士本多静六について)『Nippon 青年』第2巻、6月号、1954年6月1日、p.13

中嶋久萬吉「わが回想」(秘書官の時、明治35年)『Nippon 青年』第2巻、7月号、1954年7月1日、p.2-3

中嶋久萬吉「日露戦争と伊藤公の肚—わが回想(二)—」(秘書官の時、明治35年こと)『Nippon 青年』第2巻、8月号、1954年8月1日、p.12-13

中嶋久萬吉「日本海海戦の勝利—わが回想（3）—」（秘書官の時）『Nippon 青年』第2巻、9月号、1954年9月1日、p.6-8

中嶋久萬吉「—わが回想（4）—」（秘書官の時）『Nippon 青年』第2巻、10月号、1954年10月1日、p.18-20

中嶋久萬吉「焼津青年の横顔—世界の眼があつまる—中嶋会長を囲む座談会」（1954年9月4日、焼津市東小学校）『Nippon 青年』第2巻、10月号、1954年10月1日、p.30-35

#### 1955（昭和30）年

中嶋久萬吉「新しい年を迎えて」『Nippon 青年』第3巻第1号、1955年1月号、p.2-3

中嶋久萬吉「わが回想（6）小村全権をめぐる秘話」『Nippon 青年』第3巻第1号、1955年1月号、p.16-17

中嶋華水「俳行脚記-大湖二日旅」『Nippon 青年』第3巻第1号、1955年1月号、p.30-31

中嶋久萬吉「わが回想（7）西園寺公の片影」『Nippon 青年』第3巻第2号、1955年2月号、p.20-21

中嶋久萬吉「新しい課題への前進」『Nippon 青年』第3巻第2号、1955年2月号、p.31  
（ブレイトン・ウィルバー宛の中島の英文レターの翻訳、仏舎利塔にあわせて青年仏教会、日本青年連盟は表裏一体的であること）

中嶋華水「俳行脚記-房総の旅」『Nippon 青年』第3巻第2号、1955年2月号、p.32-33

中嶋久萬吉「わが回想（8）幽霊の出る古城」『Nippon 青年』第3巻第3号、1955年3月号、p.20-21

中嶋久萬吉「わが回想（9）思い出の産業合理化」『Nippon 青年』第3巻第4号、1955年4・5月合併号、p.26-27

中嶋久萬吉「大人と青年（巻頭言）」『Nippon 青年』第3巻第5号、1955年6月号、p.1

中嶋久萬吉「青年に与える言葉」同号、p.2-3

中嶋久萬吉「わが回想（10）マライ進出の頃」『Nippon 青年』第3巻第5号、1955年6月号、p.20-21

中嶋久萬吉「十五歳の卓見…橋本左内の「啓発録」に就て」『Nippon 青年』第3巻第6号、1955年7月号、p.2-3

中嶋久萬吉「わが回想（11）岩下神父の思い出」『Nippon 青年』第3巻第6号、1955年7月号、p.14-15

中嶋久萬吉「さらに新しい出発の日…敗戦後十年、八月十五日を迎う…」『Nippon 青年』第3巻第7号、1955年8月号、p.2-3

中嶋久萬吉「わが回想（12）八日会のこと」『Nippon 青年』第3巻第7号、1955年8月号、p.24-25

中嶋久萬吉「苦悩と努力—新生活運動によせて—」『Nippon 青年』第3巻第8号、1955年9月号、p.2-3（←徳川幹子夫人の手記から、文化も教育も根なし草）

中嶋久萬吉「わが回想（13）日露不戦同盟のこと」『Nippon 青年』第3巻第8号、1955年9月号、p.40-41

中嶋久萬吉「批判に終るな…「暴力教室を中心として」…」『Nippon 青年』第3巻第9号、1955年10月号、p.2-3

中嶋久萬吉「わが回想（14）政民両党の連携」『Nippon 青年』第3巻第9号、1955年10月号、p.26-27

中嶋久萬吉「因習弊風の刷新 - 東北の一青年からの通信によせる - 」『Nippon 青年』第3巻第10号、1955年12月号、p.2-3

中嶋久萬吉「わが回想（15）私の「足利尊氏」問題」『Nippon 青年』第3巻第10号、1955年12月号、p.24-26

#### 日本青年連盟発行の中嶋会長のパンフレット

中嶋久萬吉『新しい精神文明の建設と日本青年』日本青年連盟、1953年

『日本国民が世界に学ぶべきもの』

『文明国家の直面する教育の欠陥』

『最近の世界情勢展望』

『世界政治と世界政府』

『斯の世界を何と見る』

『斯の社会を何と見る』

#### 1956（昭和31）年

中嶋久萬吉「新春に思う」『Nippon 青年』第4巻第1号、1956年1月号、p.2-3

中嶋久萬吉「わが回想（16）私の大厄」『Nippon 青年』第4巻第1号、1956年1月号、p.24-25

中嶋久萬吉「精神的支柱の確立-世界仏心連盟の発足に当たりて-」『Nippon 青年』第4巻第3号、1956年3月号、p.2-5（新たな精神文明がおこる）

中嶋久萬吉「わが回想（17）母湘烟」『Nippon 青年』第4巻第3号、1956年3月号、p.22-24

中嶋久萬吉「わが回想（18）ある青年指導者」『Nippon 青年』第4巻第7号、1956年8月号、p.16-17

中嶋久萬吉「わが回想（19）幼年時代」『Nippon 青年』第4巻第8号、1956年9月号、p.26-27

中嶋久萬吉「わが回想（20）『葦草』の人人」『Nippon 青年』第4巻第9号、1956年11月号、p.16-17

#### 1957（昭和32）年

中嶋久萬吉「未来を支配するもの」『Nippon 青年』第5巻第1号、1957年1月号、p.3-4

中嶋久萬吉「わが回想（21）野球の思い出」『Nippon 青年』第5巻第1号、1956年1月号、p.26-27

- 中嶋久萬吉「仕事をする心」『Nippon 青年』第 5 卷第 2 号、1957 年 3 月号、p. 1
- 中嶋久萬吉「人間生活の生き詰りと新意義」『Nippon 青年』第 5 卷第 2 号、1957 年 3 月号、  
p.2-19
- 中嶋久萬吉「内に求めよ」『Nippon 青年』第 5 卷第 3 号、1957 年 4 月号、p.4-5
- 中嶋久萬吉「いたたましい出来事に思う一教える人の態度一」『Nippon 青年』第 5 卷第 7  
号、1957 年 8 月号、p.4-5
- 中嶋久萬吉「わが回想 (22) 芝居の義経」 p.14-15
- 中嶋久萬吉ほか「特集：国際親善の構想をめぐって-多摩至道会について」その他『Nippon  
青年』、第 5 卷第 8 号、1957 年 11 月号
- 中嶋久萬吉「わが回想 (23) 探露の話」『Nippon 青年』第 5 卷第 8 号、1957 年 11 月号、  
p.20-21

#### 1958 (昭和 33) 年

- 「二つの青年像」『Nippon 青年』第 6 卷第 1 号、1958 年 1 月号、p.1
- 中嶋久萬吉「国を愛する一票」『Nippon 青年』第 6 卷第 4 号、1958 年 5 月号、p.4-5
- 中嶋久萬吉「わが回想 (25) ロシア公使館のポブレヴィスキー」『Nippon 青年』第 6 卷第  
4 号、1958 年 5 月号、p.26-27
- 中嶋久萬吉「人類最大の課題」『Nippon 青年』第 6 卷第 7 号、1958 年 8 月号、p.7
- 中嶋久萬吉「想い出の人」第 6 卷第 10 号、1958 年 12 月号、p.12-13

#### 1959 (昭和 34) 年

- 中嶋久萬吉「私の植林事業一年頭のよろこび」『Nippon 青年』第 7 卷第 1 号、1959 年 1 月  
号、p.4-5 (川村清太君と 2 人の盟友 (郡上八幡の紬を復活させた宗広力三、岩手で青年  
団史を書いた高橋九一) について)
- 大川周明「大川周明博士の手紙—中嶋会長に寄せた書信一束—」『Nippon 青年』第 7 卷第  
1 号、1959 年 1 月号 p.2-17
- 中嶋久萬吉ほか「中嶋・鮎川両雄対談—青年を語る」『Nippon 青年』第 7 卷第 3 号、1959  
年、p.4-5
- 中嶋久萬吉ほか「文部大臣と語る」『Nippon 青年』第 7 卷第 7 号、1959 年、p.4-5

#### 1960 (昭和 35) 年

- 中嶋久萬吉「思い出—明治天皇の人間味—」『Nippon 青年』第 8 卷第 1 号、1960 年 1 月号  
「故中嶋久萬吉先生追悼」中嶋久萬吉追悼号『Nippon 青年』第 8 卷第 3 号、1960 年 3 月  
号
- 川畑源之「中嶋課長と菅礼之助」『Nippon 青年』第 8 卷第 4 号 1960 年、p.4-7
- 杉本民三郎「葦草の同人ことども」『Nippon 青年』第 8 卷第 5 号、1960 年 5 月号、p.4-5

(戦時中に戦争をやめるべきと発言)

熊谷辰次郎「ありし日の思い出」『Nippon 青年』第 8 巻第 5 号、1960 年 5 月号

1961 (昭和 36 年)

熊谷辰治郎「中嶋翁の思い出」『Nippon 青年』第 9 巻第 4 号、4 月号

## 8. 中島久万吉の著作 (漢詩、中国古典、仏典、史論、紀行文など)

中島久萬吉『七書評説』1911 年 (和綴本、築地、古河邸で講述したもの、一橋大学蔵)

中島久萬吉「題昼」『大正詩文』4(5), 雅文会, 1917 年 10 月, p.25 1 枚

中島久萬吉「鴨涯客楼」『大正詩文』5(1), 雅文会, 1918 年 1 月, p.13-14 2 枚

中島久萬吉「堺浦楼酔後偶吟」『大正詩文』8(1), 雅文会, 1919 年 7 月, p.27 1 枚

中島華水「詩と禅」『倦鳥』第 12 巻 8 号 1924 年, p.16-21

中島華水「学道時代の道元禅師」『倦鳥』第 12 巻 10 号 1924 年, p.21-26

中島華水「永平寺詣」『倦鳥』第 12 巻 12 号 1924 年, p.16-20 (10/31-11/1)

中島華水「鶏助集 - 其一 無情説法」『倦鳥』第 13 巻 1 号 1925 年, p.12-14

中島華水「鶏助集 - 其二 修証一如」『倦鳥』第 13 巻 1 号 1925 年, p.13-16

中島華水「鶏助集 - 其三 足利尊氏」『倦鳥』第 13 巻 2 号 1925 年, p.18-21

(昭和 9 年に『現代』2 月号に再度掲載され、1934 年の議会で攻撃された)

中島華水「鶏助集 - 其四 応無所住而生其心」『倦鳥』第 13 巻 4 号 1925 年, p.20-23

中島華水「鶏助集 - 其五 武蔵野」『倦鳥』第 13 巻 5 号 1925 年, p.15-18

中島華水「鶏助集 - 其六 這箇何者」『倦鳥』第 13 巻 6 号 1925 年, p.2-5

中島華水「鶏助集 - 其八 王陽明 (下)」『倦鳥』第 15 巻 1 号 1926 年, p.27-39

中島華水「湘南一日」『倦鳥』第 15 巻 1 号 1926 年, p.43-45 (11/21-22)

中島華水「ナポレオンの芸術的一面 (上)」『倦鳥』第 15 巻 1 号 1926 年, p.46-47

中島華水「鶏助集 - 其九 正坐」『倦鳥』第 15 巻 2 号 1926 年, p.29-33

中島華水「祇園一日」『倦鳥』第 15 巻 2 号 1926 年, p.29-33 (1/1-2)

中島華水「ナポレオンの芸術的一面 (中)」『倦鳥』第 15 巻 2 号 1926 年, p.99-102

中島華水「始皇帝」『倦鳥』第 15 巻 3 号 1926 年, p.40-43

中島華水「ナポレオンの芸術的一面 (下)」『倦鳥』第 15 巻 3 号 1926 年, p.95-99

華水中島久萬吉「杜甫 (一)」『倦鳥』第 15 巻 4 号 1926 年, p. 35-49

中島華水「早春の多摩」『倦鳥』第 15 巻 4 号 1926 年, p.71 (2/11, 2/14, 2/21, 3/7)

華水中島久萬吉「杜甫 (二)」『倦鳥』第 15 巻 5 号 1926 年, p.2-18

華水中島久萬吉「杜甫 (三)」『倦鳥』第 15 巻 6 号 1926 年, p.6-30 (佐和田稼蔵、「杜甫」の詩の読方, p.28-30)

中島華水「潮来行」『倦鳥』第 15 巻 6 号 1926 年, p.104-106 (5 月 23 日訪問)

中島華水「香取より鹿島へ」『倦鳥』第 15 巻 7 号 1926 年, p.29-34



- 華水中島久萬吉「杜甫（四）」『倦鳥』第15卷7号1926年, p.36-54
- 華水中島久萬吉「杜甫（五）」『倦鳥』第15卷8号1926年 p. 20-37
- 華水中島久萬吉「杜甫（六）」『倦鳥』第15卷9号1926年, p.33-57
- 華水中島久萬吉「杜甫（七）」『倦鳥』第15卷10号1926年, p.14-23
- 華水中島久萬吉「杜甫（八）」『倦鳥』第15卷11号1926年, p.7-17(付、詩の読方)
- 中島華水「落西と江西」『倦鳥』第15卷11号1926年, p.53-54 (9月25日に京都へ)
- 華水中島久萬吉「杜甫（九）」『倦鳥』第15卷1月号1926年, p.21-35
- 中島華水「奥秩父」『倦鳥』第15卷12号1926年, p.69-71 (10月末に諸井恒平の招待で長瀬へ)
- 華水中島久萬吉「杜甫（十）」『倦鳥』第16卷1号1927年, p.31-40
- 中島華水「北鈴鹿越」『倦鳥』第16卷1号1927年, p.71-71 (11/12-13 北鈴鹿山脈治田村へ)
- 華水中島久萬吉「杜甫（十一）」『倦鳥』第16卷2号1927年, p.96-99
- 中島華水「南伊豆」『倦鳥』第16卷2号1927年, p. 36-38
- 華水中島久萬吉「杜甫（十二）」『倦鳥』第16卷3号1927年, p.33-45
- 中島華水「句作と読書修養」『倦鳥』第16卷3号1927年, p.68-70 (1921年から俳句はじめた、平素かなり多忙)
- 華水中島久萬吉「杜甫（十三）」『倦鳥』第16卷4号1927年, p.33-45
- 中島華水「房総の旅」『倦鳥』第16卷4月号1927年, p.72-74 (2/5-7 鹿野山、九十九谷、佐貫、鋸山)
- 中島華水「岳麓一夜」『倦鳥』第16卷6月号1927年, p.18-19 (河口湖、西湖、精進湖など)
- 中島華水「最後の挨拶」(天春静堂追悼号)『倦鳥』第16卷10号1927年, p.60-61 (静堂が亡くなる直前の中島宛ての手紙、辞世の俳句も)
- 華水中島久萬吉「杜甫（十四）」『倦鳥』第17卷3号1928年, p.15-20
- 華水中島久萬吉「杜甫（十五）」『倦鳥』第17卷4号1928年, p.15-20
- 華水中島久萬吉「杜甫（十六）」『倦鳥』第17卷5号1928年, p.19-22
- 中島華水ら「京堅田」『倦鳥』第17卷 (2/11-12)
- 中島華水「伊豆大島」『倦鳥』第17卷5号1928年, p.46-48 (4月1日～3日東京湾汽船会社のたちばな丸の初就航)
- 中島華水「筑波山十句」
- 華水中島久萬吉「杜甫（十七）」『倦鳥』第17卷6号1928年, p.22-26
- 華水中島久萬吉「杜甫（十八）」『倦鳥』第17卷7号1928年, p.39-44
- 華水中島久萬吉「杜甫（十九）」『倦鳥』第17卷8号1928年, p.11-15
- 華水中島久萬吉「杜甫（二十）」『倦鳥』第17卷10号1928年, p.27-33
- 華水中島久萬吉「杜甫（二十一）」『倦鳥』第17卷11号1928年, p.25-32

- 華水中島久萬吉「杜甫（二十二）」『倦鳥』第17巻12号1928年, p.11-16
- 中島華水「伊豆南端巡り」『倦鳥』第17巻12号1928年, p.38-40（11月13日～14日の旅行）
- 華水中島久萬吉「杜甫（二十三）」『倦鳥』第18巻1号1929年, p.8-15
- 中島華水「伊豆船原温泉雑詠十句」『倦鳥』第18巻1号1929年, p.45-46
- 中島華水ら「雑華欄 上州赤城登山」『倦鳥』第18巻8号1929年, p.38（俳句七句）
- 中島華水「立山登山」『倦鳥』第18巻9号1929年, p.39-42（7/25-8/1）
- 中島華水「嗚呼青々先生」『倦鳥』第26巻3号1937年, p.11-16（18年前から俳句を始める）
- 追悼俳句会、出席者名簿『倦鳥』第26巻3号1937年（大阪にて、2月7日、華水が漢詩、名簿の筆頭）
- 中島華水ら「京洛半日」『倦鳥』第26巻4号1937年, p.10-13（俳句の連作 3/28）
- 中島久萬吉「杜甫（1） - （15）」『龍門雑誌』455号～476号, 1926年～1928年
- 中島華水「奥秩父」『龍門雑誌』460号, 1927年
- 中島久萬吉「日英同盟の前夜一桂公を手古摺らせた伊藤公の親露熱」『その頃を語る』1928年、朝日新聞社、p.192-198
- 中島久萬吉「ナポレオンの藝術的側面」『中央公論』1933年、9月
- 中島久萬吉「足利尊氏論」『現代』1934年2月
- 中島久萬吉「那翁のクーデター」『文藝春秋』1934年2月
- 中嶋久萬吉「田島勝太郎君訃至、有感干懷、賦長律一篇」『山と溪谷』55号, 1939年5月, p.109
- 中島久萬吉『碧巖録講話. 第一集』素修会、1943年7月
- 中島久萬吉『碧巖録講話. 第二集』素修会、1943年10月
- 中島久萬吉『碧巖録講話. 第三集』素修会、1944年6月
- 中島久萬吉『碧巖録講話. 第四集』素修会、1945年3月
- 中島久萬吉他「座談会一回顧五十年一日本の運命（1）一日露戦争前後一」（長谷川如是閑・中島久萬吉・荒畑寒村・丸山眞男・安倍能成・大内兵衛・長与善郎・鶴見祐輔）」『世界』2月号 岩波書店、1950年2月1日（7人の対話録）
- 中嶋久萬吉著『般若心經講話』師友会、1952年8月
- 中島久萬吉「開国百年記念『港めぐり』に寄せて」（鈴木清次編・発行人『東をどり』東京新橋組合、1953年11月）
- 中嶋久萬吉著『碧巖録. 上巻』青山書院、1953年
- 中嶋久萬吉著『碧巖録. 下巻』青山書院、1954年
- 中島久萬吉「正法眼蔵の話」『大法輪』、1954年1月号
- 中島久萬吉「過去と未来」（耕治人編『白金文学』第1号、1956年2月）
- 中島久萬吉「正法眼蔵に参究して」『大法輪』1956年7月

中嶋久万吉『禅苑拾翠』明德出版社、1956年（『金剛経』『般若心経』『信心銘』の講義、「自然堂独語」）（財団法人仏舎利奉安会、印刷明德出版で1.30発行の非売品、さらに同年2.20明德出版発行にて販売。）

中嶋久萬吉「足利尊氏と私-『逆賊』にされた思ひ出-」『文藝春秋』34(6) 1956年6月, p.152-157

中嶋久萬吉「民主政治家・原敬」『人物往来』1956年8月, p.38-47

中嶋久萬吉「日露戦争の舞台裏」『人物往来』1956年9月, p.32-39

中嶋久萬吉（沢木興道・山田三良・林武・尾崎士郎・安藤鶴夫・河井醉茗夫妻・平沼亮三らと）「涼心」『大法輪』1958年9月号（杖をついた写真と言葉「ものところ」「世界の動きをみて感ずることは、もう物質の部面だけで、ものごとを押し進めようとしてもどうにもならぬ段階にきていることです。日本の指導者も早くその方向を知って、利害打算を超えた精神の優位を確信して行動されたいものです。」）

## 9. 安岡正篤主宰の『師友』に掲載された中島の著作

中嶋久萬吉「竹潭清話（一） 碧巖録について」『師友』1号 1949年10月, p.19-22

中嶋久萬吉「竹潭清話（二） 不識」『師友』2号 1949年11月, p.26-30

竹潭中嶋久萬吉「近詠 近懐一律寄次郎丸国手」『師友』1号 1949年11月, p.32

中嶋久萬吉「竹潭清話（三） 雨滴声」『師友』3号 1949年12月, p.22-26

中嶋久萬吉「竹潭清話（四） 国老の真面目」『師友』4号 1950年2月, p.30-36

中嶋久萬吉「竹潭清話（五） 菫草」『師友』5号 1950年3月, p.17-22

中嶋久萬吉「竹潭清話（六） 至公の苦心」『師友』6号 1950年4月, p.22-27

中嶋久萬吉「竹潭清話（七） 葉山の霊夢, (八)古人の腹藝」『師友』7号 1950年5月, p.22-28

中嶋久萬吉「竹潭清話(八)人類愛の行者アルバート・シュワイツェル」『師友』8号 1950年6月, p.22-28

中嶋久萬吉「竹潭清話(九) 聖雄ガンジー（上）」『師友』11号 1950年9月, p.32-34

中嶋久萬吉「竹潭清話(十) 聖雄ガンジー（下）」『師友』12号 1950年10月, p.32-34

中嶋久萬吉「竹潭清話(十一) 武蔵野」『師友』14号 1950年12月, p.36-39

中嶋久萬吉「王陽明（上）-竹潭清話十二」『師友』15号 1951年1月, p.31-37

中嶋久萬吉「王陽明（下）-竹潭清話十三」『師友』17号 1951年3月, p.36-40

中嶋久萬吉「ナポレオンの芸術的一面-上」『師友』18号 1951年4月, p.10-14

中嶋久萬吉「ナポレオンの芸術的一面-中」『師友』19号 1951年5月, p.34-40

中嶋久萬吉「ナポレオンの芸術的一面-下」『師友』20号 1951年6月, p.32-34

中嶋久萬吉「学道時代の道元禅師-竹潭清話十七」『師友』22号 1951年8月, p.30-35

中嶋久萬吉「静坐-竹潭清話十八」『師友』23号 1951年9月, p.33-37

中嶋久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心経講話-[1]-竹潭清話」『師友』24号 1951年10月, p.34-40

中嶋久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心経講話-[2]-竹潭清話」『師友』25号 1951年11月, p.26-31

中島久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心經講話-〔3〕-竹潭清話」『師友』26号 1951年12月, p.19-25  
 中島久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心經講話-〔4〕-竹潭清話」『師友』27号 1952年1月, p.32-37  
 中島華水「俳行脚記 大湖二日旅」『師友』28号 1952年2月, p.42-44  
 中島久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心經講話-〔5〕-竹潭清話」『師友』29号 1952年3月, p.39-45  
 中島久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心經講話-〔6〕-竹潭清話」『師友』30号 1952年4月, p.36-43  
 中島華水「俳行脚記 南伊豆」『師友』30号 1952年4月  
 中島久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心經講話-〔7〕-竹潭清話」『師友』31号 1952年5月, p.37-41  
 中島久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心經講話-〔8〕-竹潭清話」『師友』32号 1952年6月, p.41-47  
 中島久萬吉「摩訶般若波羅蜜多心經講話-〔9〕-竹潭清話」『師友』33号 1952年7月, p.41-47  
 中島久萬吉「三祖僧〔サン〕大師信心銘講述-〔1〕-」『師友』34号 1952年8月, p.41-47  
 中島久萬吉「三祖僧〔サン〕大師信心銘講述-〔2〕-」『師友』35号 1952年9月, p.39-49  
 中島久萬吉「三祖僧〔サン〕大師信心銘講述-〔3〕-」『師友』36号 1952年10月, p.49-55  
 中島久萬吉「明治天皇のこと」『師友』37号 1952年11月, p.42-47  
 中島久萬吉「日本青年連盟の結成に就て一明治天皇御降誕百年記念國民大会に臨みて一」  
 『師友』38号、1952年12月, p.38-45  
 中島久萬吉「詩と禪」『師友』40号 1953年2月, p.44-48

## 10. 世界仏心連盟刊行の中島のパンフレット

中嶋久萬吉『碧巖録と道元禪師』世界仏心連盟（日本工業倶楽部内）、1956年11月  
 中嶋久萬吉『世界仏心連盟』  
 中嶋久萬吉『人間生活の行き詰りと新意義』  
 中嶋久萬吉『宗教々育の振興』  
 中嶋久萬吉『社会革命時代』

## 11. 中島久萬吉の書簡、中島宛の書簡

【Library of Congress, Washington DC, Container 7】

George Kennan から Nakashima 宛の手紙, 1905年5月4日

(長田彰文「ジョージ・ケナンと日米関係(2・完) -韓国問題との関連について」『上智史学』41, 1995.11.25 所載)

【原敬宛て中島久萬吉の書簡 1907年-1910年】(原敬文書研究会『原敬関係文書第二卷』日本放送出版協会, 1984年所載) 10通 (米欧に渡航し古河虎之助のこと、横浜電線製造会社の件など)

【大川周明宛て中島久萬吉の書簡(1943年~1956年)】(大川周明関係文書刊行委員会編『大川周明関係文書』芙蓉書房出版, 1998年所載) 41通

【中島久萬吉宛て大川周明の書簡(1945年~1956年)】(大川周明関係文書刊行委員会編『大川周明関係文書』芙蓉書房出版, 1998年所載) 12通

- 【都立図書館 渡辺刀水旧蔵諸家書簡文庫】 2通  
 杉山令吉宛 1通 土肥宛 1通
- 【国会図書館 憲政資料室・都筑馨六関係文書】 2通  
 大正8年10月14日 横浜電線株処置  
 年1月9日 御承引ヲ得古河満足ナラン
- 【国会図書館 憲政資料室・桂太郎関係文書】 桂太郎略歴の英文（中嶋筆）
- 【国会図書館 憲政資料室・大江卓文書】 5点 原文 2点複写
- 【国会図書館 憲政資料室・井上馨文書】 2点  
 明治40年10月12日 伯林より 古河虎之助帰朝について  
 明治43年8月24日 日英水電事業
- 【国会図書館 憲政資料室・斉藤実文書】 5点  
 古河虎之助の結婚  
 昭和7年5月8日 玉木（三井合名）御引見賜りたく 団男爵伝について  
 三井熊太郎からの手紙（中嶋はリベート問題に詳しいから商工大臣に最適）  
 丸山鶴吉からの手紙  
 守屋英夫からの手紙
- 【国会図書館 憲政資料室・明治政財界名士書翰】 1点  
 資料133-43 添田寿一宛
- 【国会図書館 憲政資料室・木村小左衛門文書】  
 中島より 昭和10年6月25日
- 【アジア歴史資料センター】  
 明治43年4月6日 外務省宛  
 対外電信政策関係書類 古河電工社長 中島から など
- 【早稲田大学 堤康次郎受信書簡】 2点  
 4058 「中島より 1月1日 売邸の件尽力お願い」（永野護関連）  
 4057 「昭和28年5月21日 開国百年記念式典臨席お願い」（衆議院議長堤様へ）
- 【GCOE-渋沢プロジェクトで購入】 2点  
 ・台湾銀行/今西兼二（横浜正金銀行）宛 中島/赤坂区青山北町4-106  
 ・秋元俊吉宛（中島・牛込区薬王寺町四十三番地より）
- 【神奈川工科大学 図書館データベース】  
 『山口左七郎関係簡易目録(河内・滝本・福田・野崎). 山口家文書の紹介(その4)』所載の  
 山口左七郎【宛】の中島久万吉の書簡—5点（PDFあり）  
 「小作米代勘定方法を知りたい」：明治34年7月11日 [1901-07-11]  
 「小作米代送金依頼」：明治34年7月20日 [1901-07-20]  
 「土地売戻しの件伊達氏にも話した」：明治34年12月4日 [1901-12-04]  
 「地所処分は財産統一が主眼 日本銀行に関する依頼一条承知した」：明治[34]年11月14

日 [1901-11-14]

「米売却代金領収 比々多村地所は先代よりの関係で厄介になっている」：明治[34]年 11月 19日 [1901-11-19]

【アイゼンハワー大統領図書館－国会図書館憲政資料】

#### Dodge Subject Series

- ・Dodge 宛、Kumakichi Nakashima 書簡 1955(昭和 30)年 2 月 5 日 (1951 年に面会した件、日本経済再建への御礼、東京－神戸間の高速道路建設計画、日本の地理の説明書)
- ・Nakashima 宛、Dodge 書簡 1955(昭和 30)年 2 月 8 日
- ・Dodge 宛、Kumakichi Nakashima 書簡 1955(昭和 30)年 10 月 31 日 (ソ連の経済支援がアジア・アフリカで広がる中で、米国の外交政策について意見)

#### Confidential U.S. diplomatic post records, office of the Political Advisor for Japan, Tokyo, Japan, 1945-1952; pt.1-pt.2, LexisNexis, 2003 2004.

Political Affairs: Japan, July-Dec. 1950. Y. Takeno and Kumakichi Nakashima view of Japan and Asia

- ・米国大使館第一秘書官 John P. Gardiner 宛、Kumakichi Nakashima 書簡 1950 年 12 月 6 日 (1. 日本の民主化・・鎌倉幕府の意義など歴史的視点から解説し上からの民主化が困難なこと 2. 日本の再軍備化 3. アジアの Point Four Program) (日本貿易協会の英文レター用紙、会長、熱海より)
- ・1950 年 12 月 29 日 内部文書 (秘密)、(中島の手紙を解説、保守的人物、対外政策観を紹介)

#### 1 2. 中島久万吉の肉声テープ (日本工業倶楽部所有)

「日本工業倶楽部史 中島久万吉氏談 (1)」1956 年 2 月 8 日

「日本工業倶楽部史 中島久万吉氏殿 (2)」1956 年 3 月 27 日

#### 1 3. 一次資料 (故中嶋信光氏所蔵、本稿では備忘録と称した)

・**ねづみ色のダイアリー** (昭和 24－26 年頃の使用の備忘録：日程、株、講演テーマ、ボーイスカウト事業会社の計画、日本放送株式会社事業計画、国際宣伝広告会社の計画、ボーイスカウト全国バザール計画、黒船協会貸借対照表、国際会館株売上勘定、お見舞い送付先、国立病院経費、昭和 26 年 7 月現在の所持株 (函館船渠、日活会館、三井船舶、川崎競馬、山叶証券、川嶋織物、漫画映画、大阪商船) 国連社事業計画、昭和 23 年と昭和 24 年の函館船渠株式、アメリカ人の住所多数、など)

・**緑色のダイアリー** (昭和 30－31 年頃の使用の備忘録：日程表、国連社理事会、碧眼会、国土計画顧問会、日本外政学会理事会、仏舎利奉安会、亜細亜大学卒業式、金翠学院卒業式、高木睦郎と会食、ライフ・エクステンション理事会、山叶証券重役会、電気興業重役会、文化放送協会内容、橋本左内先生のこと、母湘煙女史のこと、婦人問題、師友

会、講演資料 - 教育・計画社会・社会化教育、結縁会勧誘 - 16 社の社名、英文で世界経済・政治・文明に関して、仏舎利奉安会の収支、国土開発縦貫自動車道建設法、世界友の会、永寿病院理事会、アメリカ人の住所、講演先で会った人達の人名・肩書き、など)

- ・自作の漢詩集
- ・手書きの漢籍帳

#### 1 4. 中島の墨跡

- ・「無為」 神奈川県中郡大磯町大運寺
- ・「土魂商才 中嶋久書」(<http://kambun.jp/iboku/nakajima-kumakichi.htm>)
- ・「為富田賢兄 明 訓 誠 久万吉」  
金沢市立玉川図書館近世史料館，富田文庫「中島久万吉書」(23.7-68)
- ・漢詩の掛け軸 2点 村山所有
- ・俳句 2点 村山所有